

石川県鹿島郡中島町

かんまち

# 上町カイダ遺跡

農免農道整備事業(中島北部地区)

に係る緊急発掘調査報告書



1991

石川県立埋蔵文化財センター



石川県鹿島郡中島町

かんまち

# 上町カイダ遺跡

農免農道整備事業(中島北部地区)

に係る緊急発掘調査報告書



1991

石川県立埋蔵文化財センター



# 例 言

1. 本書は石川県鹿島郡中島町大字上町小字カイドかんまちに所在する上町カイド遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の発掘調査は石川県農林水産部耕地建設課施行の農免農道整備事業（中島北部地区）に係るもので、同課の依頼を受けて石川県立埋蔵文化財センターが行った。
3. 発掘調査期間および調査担当者は下記の通りである。

期間 昭和63(1988)年6月15日～12月24日 面積約2,500㎡

担当者 木立雅朗（石川県立埋蔵文化財センター嘱託）

調査補助 浦元英俊・広岡吉紀（当センター調査員）、中村繁和

立会い調査 平成元(1989)年6月19日 面積約80㎡

担当者 平田天秋（当センター専門員）、木立（当センター主事）

調査補助 宮下栄仁（当センター調査員）
4. 出土品の整理は木立が担当し、平成元(1989)年度に社団法人石川県埋蔵文化財整理協会に委託して行った。
5. 本書の編集は木立が担当し、伊藤志津子、越田純子が補助した。

執筆者名は目次、および文末に記した。なお、鈴木三男、平尾良光、平川南の諸先生から玉校を頂くことができた。記して感謝の意を表したい。
6. 発掘調査から本書の刊行にいたるまでのあいだ、次の方々および機関のご援助・ご協力を得た。記して感謝の意を表したい。

石川県農林水産部耕地建設課、石川県七尾土地改良事務所、中島町、中島町教育委員会、鈴木三男、平尾良光、南木睦彦、吉岡康暢、平川南、秋山進午、宇野隆夫、岡内三真、菱田哲郎、唐川明史、四柳嘉章、善端直、細口喜則、市川秀和、藤田邦雄、垣内光次郎
7. 発掘調査で得られた上町カイド遺跡の出土遺物、および遺構・遺物の実測図・写真などの資料は石川県立埋蔵文化財センターが一括して保管している。

# 目次

第1章 上町カイダ遺跡の環境 .....	1
第1節 位置	
第2節 周辺の遺跡	
第2章 発掘調査に至る経緯と経過 .....	5
第1節 発掘調査に至る経緯	
第2節 経過	
第3章 遺構 .....	8
第1節 地区割りと層位	
第2節 土坑	
第3節 墓	
第4節 掘立柱建物	
第5節 溝	
第6節 その他	
第4章 遺物 .....	33
第1節 遺物の分布傾向と種類・量比について	
第2節 土器	
第3節 金属器	
第4節 石製品	
第5節 縄紋土器（沢辺利明）	
第6節 木製品	
第5章 自然科学的分析 .....	124
第1節 樹種同定（鈴木三男）	
第2節 五銖銭の化学組成（平尾良光）	
第6章 SD31出土木簡について（平川南） .....	146
第7章 まとめにかえて .....	149
写真図版	
付図（上町カイダ遺跡全体図）	

# 第1章 遺跡の環境

## 第1節 位置

上町カイダ遺跡は、石川県鹿島郡中島町大字上町小字カイダ地内に位置する。中島町は能登半島の中央部、いわゆる「中能登地方」に位置する、人口約8,500人、面積約100km<sup>2</sup>の町である。町域の大半は丘陵で占められ、東南方向に流れる熊木川、東方向に流れる日用川によって形成される沖積地がもっとも広い平地である。これらの河川は七尾西湾に注ぐが、現在の海岸線は河川の沖積作用と水田造成によって作られたもので、以前はもっと内陸側まで海岸線が迫り、かつ現在よりも複雑に入り組んでいたと推定されている。明治以降に水田造成のための海面埋立工事がとくに盛行したらしい（斎藤1966）。

熊木川は北西から南西方向へ流れて沖積平野を形成しているが、元禄の『郷村名義抄』によると、下流域の中島地区では熊木川が二筋に別れて島を成しており、それが「中島」の地名の由来であると言われている。また、河口も中島地区にあり、船舶が上町の舟山の麓まで上がったと伝えられている（若林1966）。恐らく海岸線が中島地区のすぐ南まで迫り、その河口に三角州が形成されていたのであろう。現在、熊木川は二筋に別れていないが、中島地区の住宅密集範囲が、かつての「中島」の形の名残を残していると推定される。

発掘調査地点は「カイダ（貝田）の谷」と呼ばれる谷の南西部分にあたる。この地点は通称「オミド」と呼ばれ、地元ではその由来について、かつて「大御堂」があったがなまって「オミド」と呼ばれるようになった、と伝えられている。「カイダの谷」は最大幅約250m、開墾部分の奥行き約200mを測る小規模な谷で、標高2.5～9mを測るなだらかな傾斜を持っている。谷の奥からは現在、上町地区の水道源となっている豊かな谷水が流れている。この谷水は清く、真夏でも枯れることがなく、谷全体が潤っている。

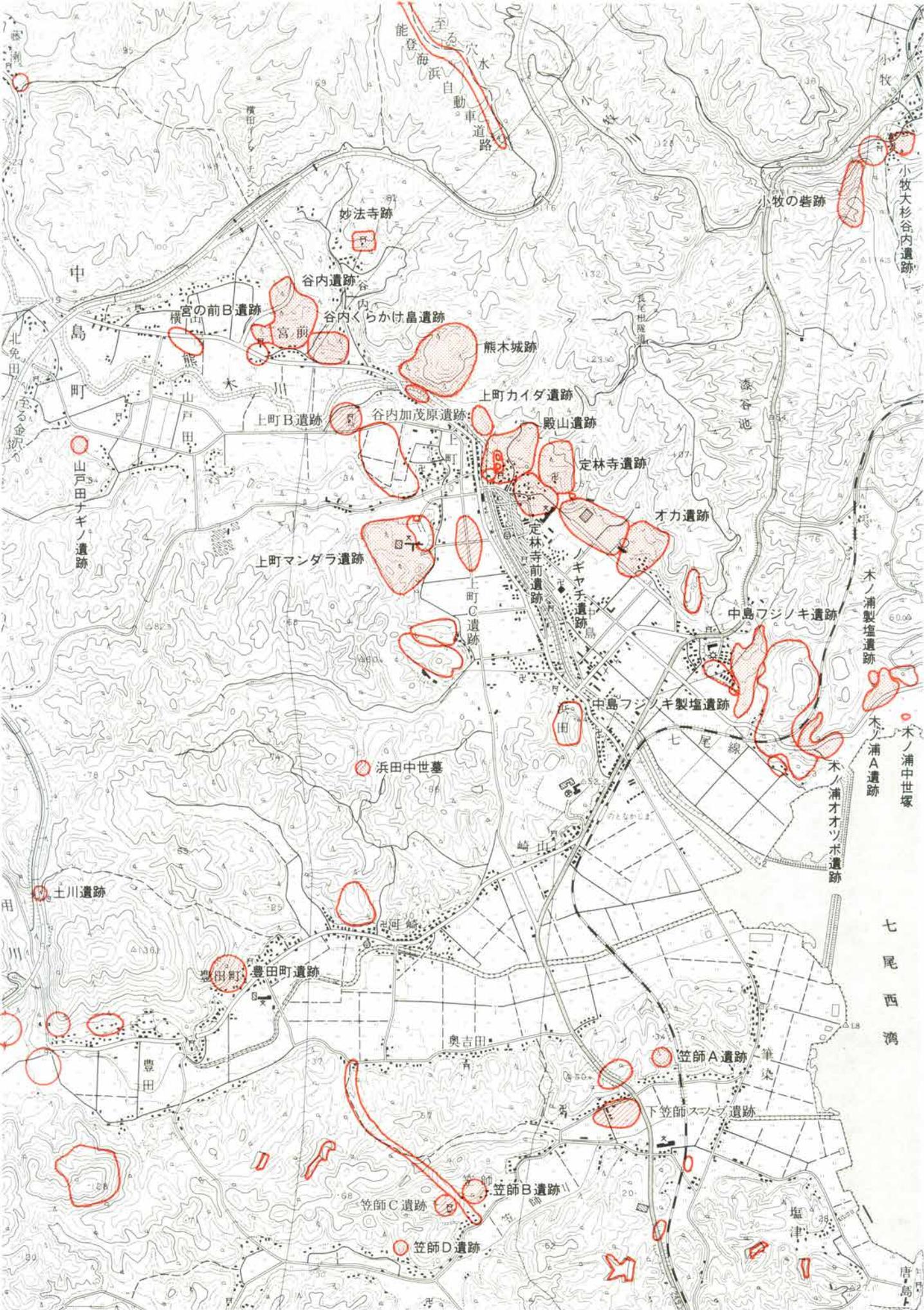
谷の前面は熊木川によって浸食され、河岸段丘状の段状地形を成している。この地点はちょうど、東南方向に流れていた熊木川が南北方向の丘陵（調査地点～先端では断崖状態）にぶつかって南へ流れを変更する地点にあたる。また、この地点は川底が標高0m足らずと低い上に南北両側の丘陵が接して狭くなっているため、大雨の際には天然のダムのようになり、もっともはやくに冠水する地点である。ただし、右岸に対して遺跡の立地する左岸は比高差があり、冠水しにくい。氾濫しやすい熊木川に接するとは言え、洪水に見舞われにくい生活適地と言える。

## 第2節 周辺の遺跡

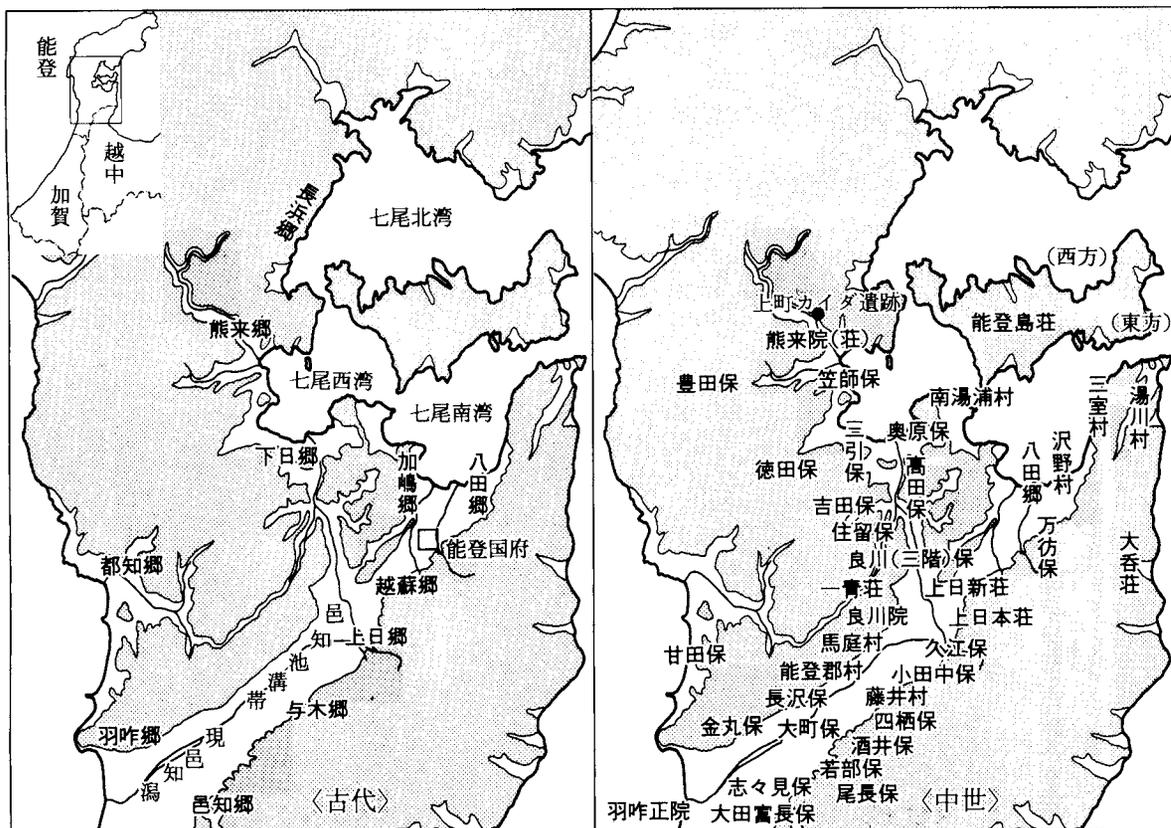
熊木川流域では、1976年に宮前熊甲神社遺跡、1978・79年に上町マンダラ遺跡の発掘調査が行われたのを手始めに、定林寺前遺跡、ノギヤチ遺跡、オカ遺跡、殿山遺跡、横田A遺跡、上町カイダ遺跡の発掘調査が1988年までに行われた。それらのほとんどで中世の遺構・遺物が確認されており、熊木川流域の開発が中世に飛躍的に進んだことが分かる。また、それについて弥生時代中期後半頃の遺物も比較的



第1図 上町カイダ遺跡周辺の地形 (1917年11月30日大日本帝国陸地測量部発行 5万分の1の地形図「七尾」)



第2図 上町カイダ遺跡と周辺の遺跡 (1989年12月1日国土地理院発行2万5000分の1地形図「中島」)



第3図 中能登周辺の行政区分(縮尺40万分の1)

多く確認され、中世ほどではないにせよ、周辺の開発が進んだことが分かる。今のところ熊木川左岸に中世の集落が集中しているが、これはたまたま左岸の緊急発掘調査が多かったことに起因している可能性がある。

熊木川流域は、古代では「能登国能登郡熊木郷」に相当し、中世では「能登国鹿島郡熊木荘(院)」に相当する。第3図に周辺の古代郡名と中世の国衙領を示したが、中世に入って行政単位が細分化、多様化していることが分かる(和島1974)。特に邑知地溝帯と二宮川下流域でその傾向が著しいが、上町カイダ遺跡周辺でも、新たに豊田保、笠師保が設けられている。

[参考文献]

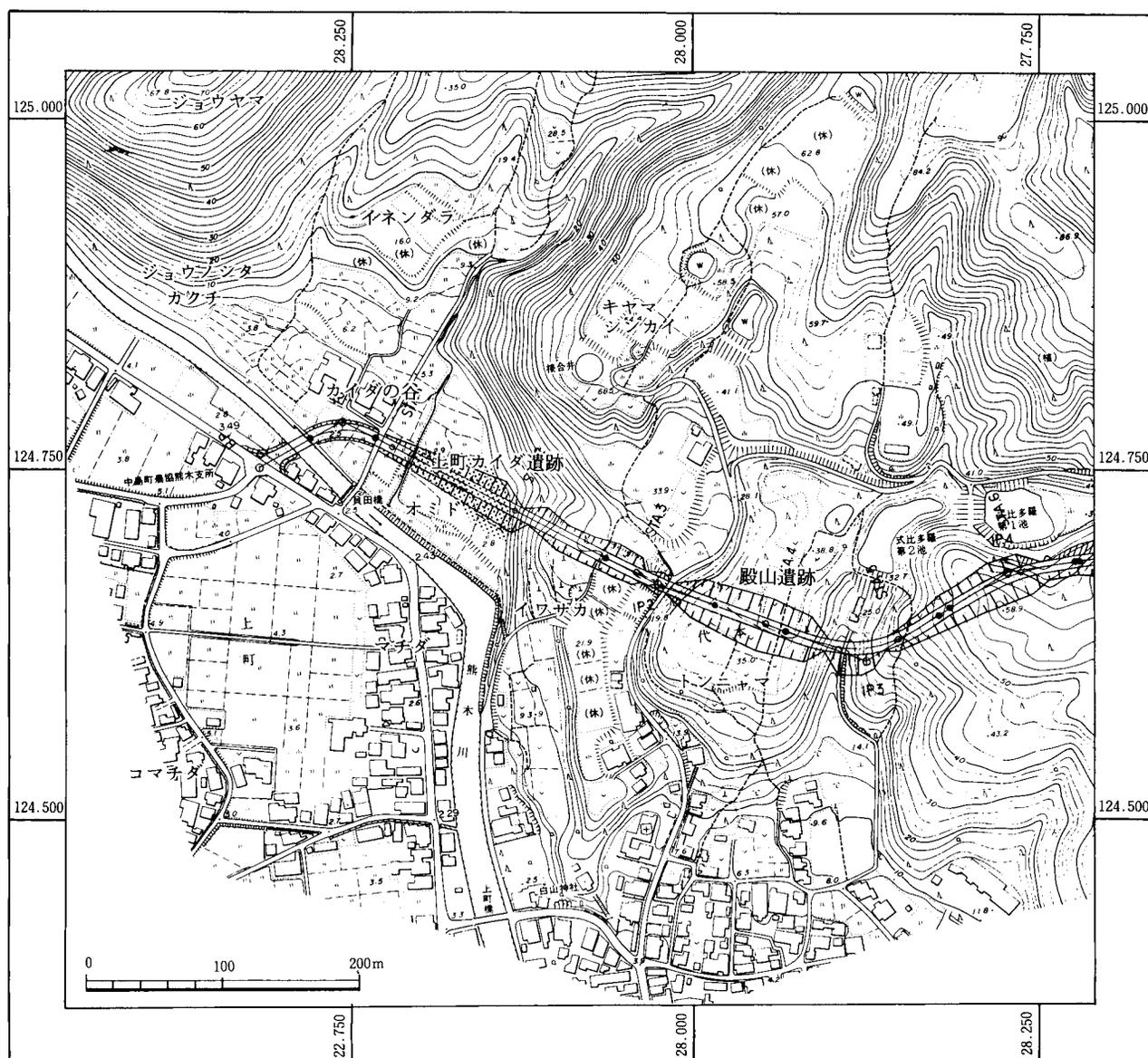
斎藤 晃吉 1966 「中島町の自然」『石川県中島町史(資料編)』  
 若林喜三郎 1966 「部落誌」『石川県中島町史(資料編)』  
 和島 俊二 1974 「中世」『田鶴浜町史』  
 中島町教育委員会 1981 『中島町小牧・外遺跡』  
 石川県立埋蔵文化財センター 1985 『中島町宮前熊甲神社遺跡・土川遺跡』(能登海浜・縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書V)  
 中島町教育委員会 1990 『殿山遺跡』

## 第2章 発掘調査に至る経緯と経過

### 第1節 発掘調査に至る経緯

上町カイダ遺跡の発掘調査は石川県農林水産部耕地建設課が行う農免農道整備事業（中島北部地区）に伴うもので、1988（昭和63）年度に実施した。

当初、当遺跡の存在は知られていなかったが、1986（昭和61）年に行った工事に先立つ試掘調査によって始めて遺跡の存在と範囲が確認された。当年度の試掘調査は、計画路線が熊木川と交差部分から中島町が事業主体となる農道計画路線（新構造農業改善事業）との交差部分までの範囲を行い、その範囲内に上町カイダ遺跡と殿山遺跡の2つの遺跡を確認した。耕地建設課、七尾土地改良事務所、中島町との文化財保護法に基づく協議の結果、工事に先立つ緊急発掘調査は、殿山遺跡については中島町教育委員会に委託して行い、上町カイダ遺跡については石川県立埋蔵文化財センターが行うことになった。



第4図 農免農道整備事業（中島北部地区）の路線と発掘調査位置  
（アミ部分が発掘調査位置。1984年七尾土地改良事務所測量原図。縮尺5000分の1）

に中島町教育委員会の援助を受けて試掘を行った結果、縄文時代の遺物と時代不明の遺構を確認した。発掘調査は中島町教育委員会が1988（昭和63）年6月9日～同年10月3日にかけて行い、すでに報告書が刊行されている（中島町1990）。なお、発掘調査区内では包含層より縄文土器が出土しているが、城関係の遺構は確認されていない。

上町カイダ遺跡は1986年12月16～18日に試掘を行い、良好な遺物包含層と遺構、および多量の土器と木器を確認した。発掘調査は1988（昭和63）年6月15日から同年12月24日にかけて行った。

発掘調査に先立つ1987年、遺跡西側の丘陵部分の道路工事が行われ、切土による大量の土砂を遺跡側から搬出した。七尾土地改良事務所から打診を受けた石川県立埋蔵文化財センターは、遺跡に損傷を与えないことを条件に土砂の搬出工事を了解したが、大量の土砂を丘陵上から落としたこと、地盤が極端に軟弱であったことから、土砂を落とした部分が地盤沈下をおこした。それにもかかわらず工事を強行し、石川県立埋蔵文化財センターには何の連絡もなされなかった。次々に土砂を落としこみ、結果として著しい地形改変をもたらした。発掘調査の結果、地盤沈下はひどいところで3 m近くに達し、その南側では逆に約0.5m隆起していた。

発掘調査が必要な範囲は当初約2,100㎡であったが、発掘調査中に工事の設計変更があり、耕地建設課から軟弱地盤の改良工事を行うために発掘面積追加の依頼があった。そのため、9月に調査区を約655㎡拡張した。調査区中央部が前述のような地盤沈下で十分に調査できなかったため、発掘調査面積はあわせて約2,500㎡となった。また、調査が終了した翌年度にも再度工事の設計変更があり、再びそれに伴う発掘依頼が七尾土地改良事務所からあった。この部分については面積が少なかったことと、昨年の調査の様子では遺跡の周縁部に当たると予想されることから簡易な調査にとどめることとし、1989（平成元）年6月19日に約80㎡の立会い調査を行った。

## 第2節 調査経過

発掘調査は1988年6月15日から同年12月24日まで行った。なお、調査途中の9月28日～10月19日の期間、圃場整備に係る試掘調査のために発掘調査を一時中断している。

重機で表土を掘削したところ、当初想定していた以上に地形改変が大きかったことが判明した。試掘調査の資料で水田面から包含層上面までの深さが判明していたので、その資料に基づいて土量の計算を行ったが、陥没があまりにひどく、予想以上の排土が必要であった。表土掘削中、どれだけ掘っても旧地表面すら表れず、しまいには排土作業の時の鉄板やシートが表れる始末であった。なお、排土は圃場整備の工事現場（崎山）に搬出した。中央部分の陥没があまりに深く、想定以上の土量であったため、陥没の著しい部分については調査を断念せざるを得なかった。ただし、陥没しているとは言え、包含層が確実に残っていることを断ち割り調査で確認した。

大きな地形改変は、包含層のさらに下層の土層が軟弱であったためと思われる。おそらく、岩盤層の上に堆積した腐食土を主体とする柔らかい地層が、上からの排土の力に押され、下の岩盤の形状に沿って移動したのであろう。

表土掘削後、包含層を掘り下げていったが、地形改変によって本来ならば水平堆積するはずの部分で不可思議な状態になったり、攪乱されたりした部分があったことや、それにも係わらず遺構検出が困難なほど大量の遺物が出土したため、遺構面の認定と遺構検出が十分にできなかった。そのため、遺構検出に悩み、結果としてほとんどの部分で基盤となる緑灰色シルト層まで掘り下げて遺構検出を行った。本来はその上面に最低2枚の遺構面があることを調査がかなり進んだ段階で理解した。能力不足であったことを深く反省している。

当初の想定どおり、木製品の残りはよく、しかも大量に出土した。真夏にはできるだけ水をかけて乾燥しないように注意した。膨大な量の自然遺物も出土しており、現地で取捨選択せざるをえないものも多かった。種子類なども肉眼で確認できる大型のものが多量に出土し、極力取りこぼしのないように努めたが、十分に対応できなかった面もある。種子については土壌を水洗選別したものも含め、すべてを流通科学大学の南木陸彦氏に分析依頼した。この結果については都合により本報告書に掲載できなかったので別の機会に譲りたい。

12月の中頃から天候が悪くなったが12月19日には航空測量を行った。小雨の降る中、条件は極めて悪かったが無事終了し、12月24日には現地説明会を行って発掘を終了した。

## 第3章 遺構

### 第1節 地区割りと層位

地区割りは工事杭と基準線を活用しながら、第5図のように任意の5mグリッドを設定した。5mごとに数字とアルファベットをふり、グリッド名はもっとも若い番号をとることにした（北西隅の杭名）。Gラインが工事の基準線にあたる。

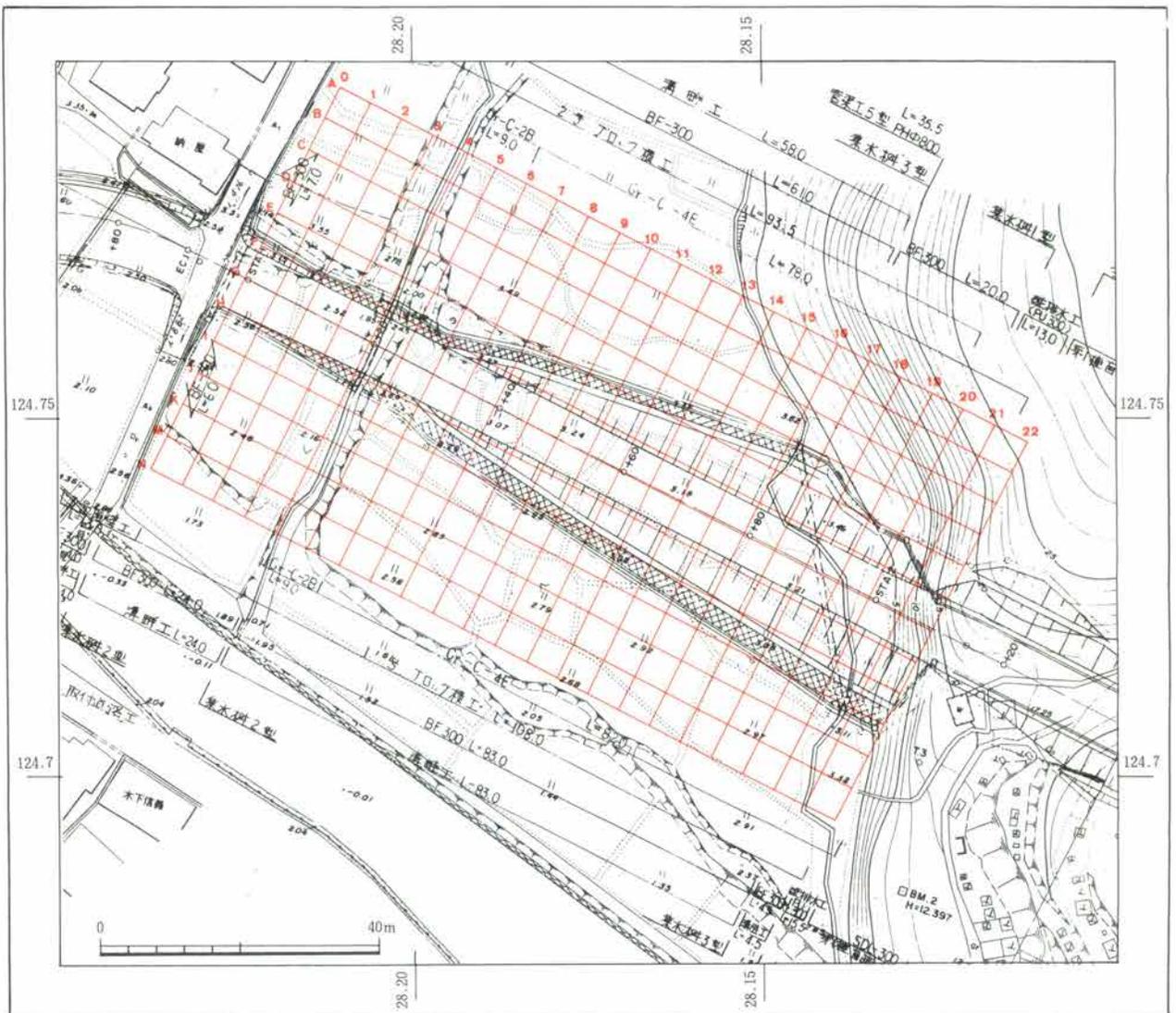
本調査区の基本土層は第6図に模式図で示した通り、①耕作土、②床土、③茶灰色シルト（上層包含層）、④暗灰色シルト（下層包含層）、⑤暗青灰色シルト、⑥緑灰色砂礫またはシルト、⑦腐植土層（⑥・⑦層は地山）である。⑥層と⑦層は互層になっている部分がある。ただし、⑥層は谷上流からの洪水堆積と推定され、調査区の南側では確認されない。

③層からはおおよそ室町時代の遺物・遺構が、④層からは鎌倉時代の遺物・遺構が確認されている。中世の遺構はすべて⑥層を切り込んでおり、中世には基盤層であることがわかる。弥生時代の溝も⑥層を切り込んでいる。⑥層中から縄紋土器が出土している。調査区外の西南地点の試掘調査で⑦層の上面～上位部分でトチの実などを少量確認している。調査区内では⑦層上位に倒木を複数確認している。倒木には加工痕跡が確認できず、自然堆積のものと推定した。縄紋時代にこの地点が熊木川の後背湿地のような状態になっていたのだろう。同様の腐蝕土層は周辺に厚く広がっている。周辺の状況、特に崖の岩盤から判断して腐蝕土層の下には岩盤があるだろう。工事で崖の上から大量の土砂を投棄され地形が変化したのは、この腐蝕土層が岩盤と大量の土砂に挟まれて耐えきれなくなったためだと推定される。工事による地形改変はおそらく下層の岩盤の形に沿った形で引き起こされていると推定される。調査区

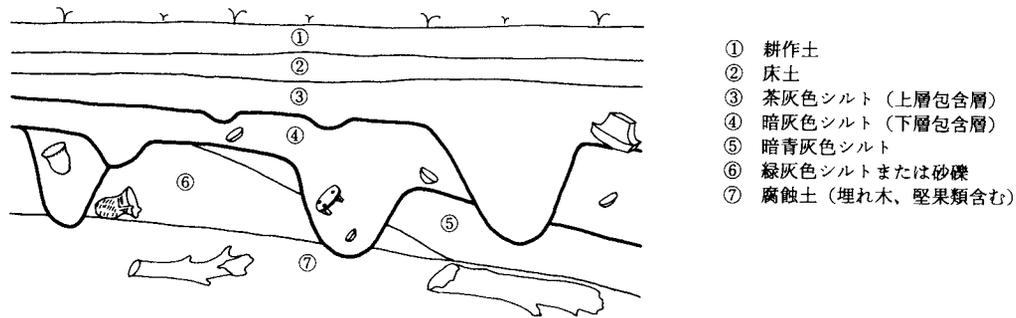
中央部分が大きく窪んだが、その凹みの北側は急な崖状の傾斜であるのに対して、南側は緩やかな傾斜であった。おそらく、現在の熊木川に併行するような崖状の岩盤地形がこの下層にあり、その形を反映しているのだろう。

第7図にF-15・16区調査区北側の断面実測図を示した。1・2・3・4がそれぞれ①・②・③・④層に相当する。6は④の下位部分から⑤層に相当する。⑤層については④よりさらに古い包含層である可能性があるが、地質の関係上踏み込まれて混入した遺物を含む可能性も否定できず、十分に確認できなかった。7は⑥・⑦層に対応する基盤層である。第6図では4層上面(③層下面)、6層上面(④層下面)の2つの遺構面を確認できるが、7層上面(⑤層下面)もさらに古い遺構面であった可能性が残る。

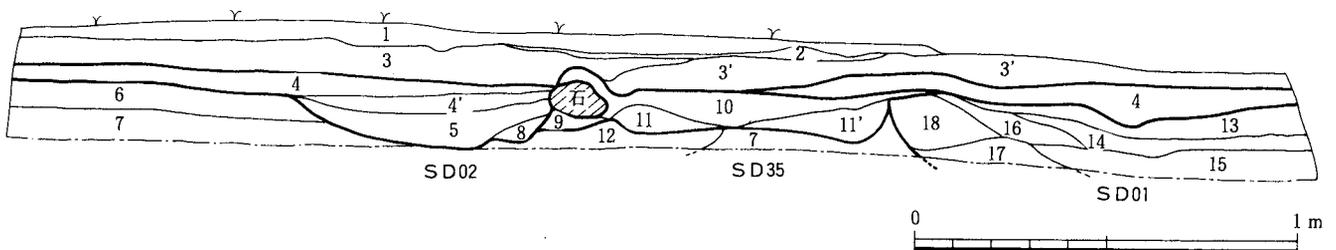
断面図で示した地区では4層の上面に土師器片が集中しており、遺構面であったことがわかる。近辺に人骨が出土しており、それがこの土層に対応している。6層を切り込んでSD02が切り込まれるが、それによってSD35が埋められる。SD01もその東側に存在するが、その前後関係はこの断面図では不明である。別の部分ではSD01がSD35を切り取った可能性が高いことを確認しているので、SD35→SD01→SD02という順番で溝が作りかえられていることがわかる。



第5図 上町カйда遺跡調査範囲とグリッド設定(縮尺1,000分の1)



第6図 上町カイダ遺跡土層模式図



- |                       |                         |
|-----------------------|-------------------------|
| 1、濁茶灰色シルト             | 10、黄色砂（5よりやや暗い）（SD35）   |
| 2、赤褐色シルト（鉄分層）         | 11、青灰色シルト（SD35）         |
| 3、濁茶灰色シルト（1より淡く炭・粒含む） | 11'、暗青灰色シルト（砂多い）（SD35）  |
| 3'、暗濁灰色シルト            | 12、暗青灰色砂礫               |
| 4、暗灰色シルト（炭・土師片多い）     | 13、黒灰色シルト（炭多い）（SD01）    |
| 4'、黄褐色砂まじりの4（SD02）    | 14、暗茶灰色シルト（SD01）        |
| 5、黄褐色砂（SD02）          | 15、黄褐色砂礫（SD01以前の自然流路か？） |
| 6、暗青灰色シルト（土師皿片含む）     | 16、暗青灰色シルト（SD01）        |
| 7、濁茶褐色シルト（ピートと砂の混合土）  | 17、濁緑灰色砂礫（暗灰色シルトまじり）    |
| 8、暗（青）灰色砂質シルト（SD02）   | 18、暗灰色シルト（砂多い）（SD01）    |
| 9、暗（青）灰色シルト質砂         |                         |

第7図 F-15・16区調査区北壁断面実測図（S=1/40）（SD02，SD35，SD01）

③の上層包含層から出土する遺物が少なかったため、調査当初はこれを包含層と認識できず、重機でほとんど大半を削平した。④の下層包含層からは大量の遺物が出土しているおり、その掘り下げから作業を開始しており、④層の上面では遺構検出を行わなかった。また、⑤層上面では遺構の輪郭を捉えることは極めて難しく、部分的に⑤層中に遺物を含むこともあって、最終的に⑥層上面まで掘削した部分が大半であった。そのため、削平してしまった遺構も少なくなかった可能性がある。悪条件がかさなったことも確かであるが、担当者の力量不足で発掘中に土層や遺構面の理解が十分にできなかったため、多くの失敗をおかしていることを反省している。

## 第2節 土坑

SK01（第10・20図） E-17区で検出した一辺約100cm、深さ約50cm、隅丸方形の土坑である。試掘トレンチによって上面の一部が削平されていたので、試掘調査時に出土した遺物の一部は当土坑のものと推定される。土坑内から土器類、木製品が出土している。

SK04（第9・28図） I-19区で検出した長辺約200cm、短辺約110cm、深さ約25cmの長方形の土坑。土坑

内に人頭大の石が多量に出土した。墓壙である可能性があり、そうだとすると墓壙上面に配置した石が落ち込んだのであろう。

SK05 (第10・18・19図) D-11・12区で検出した径約2.2~2.6m、深さ約25cmの卵形の土坑。

SK08 (第10・22図) H-10区で検出した一辺約60cm、深さ約10cmの方形の土坑。SD15をわずかに切り込み、攪乱によって一部が削られている。SD15との切り合い関係は、切り合う部分のごくわずかであったため、やや不確定である。

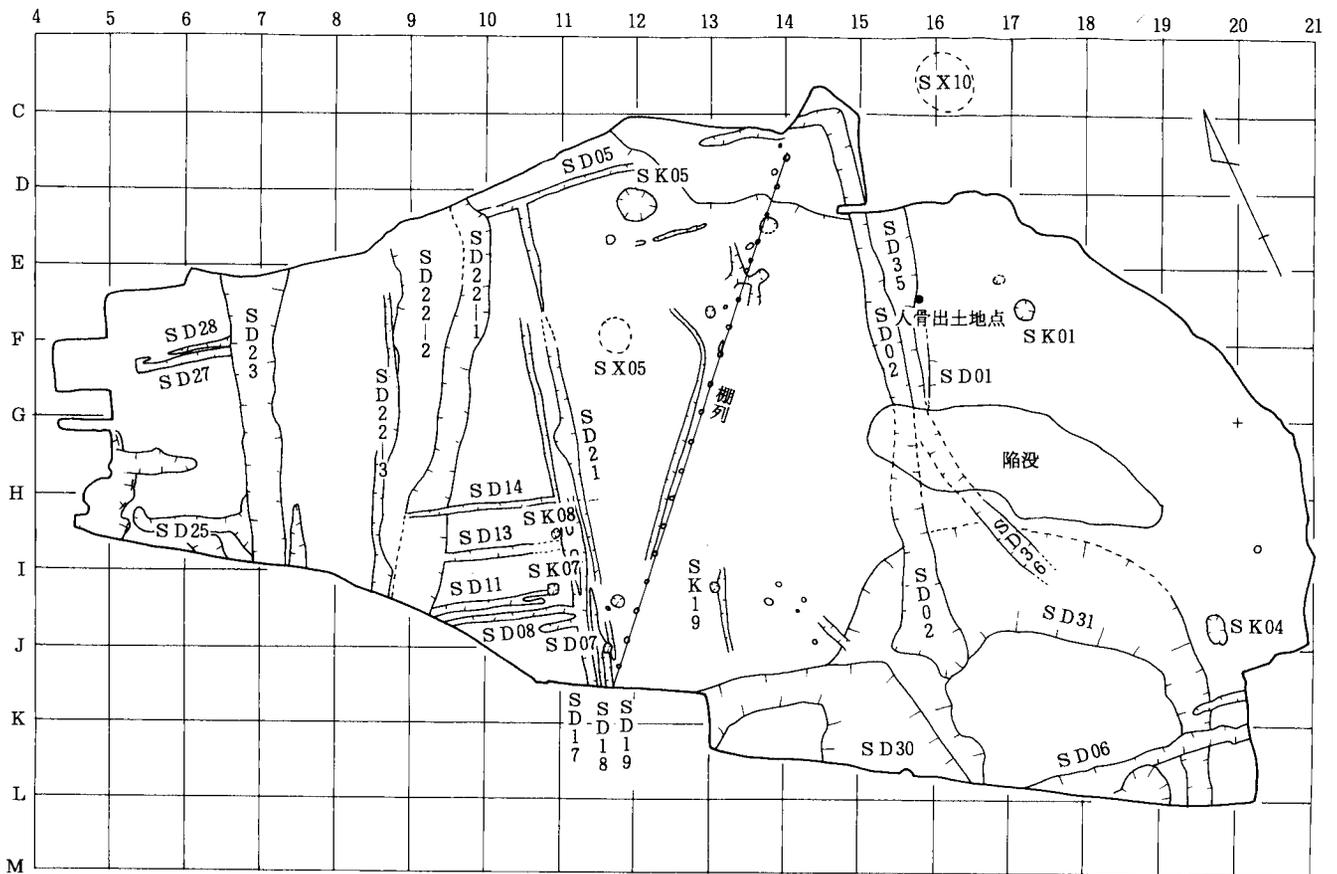
SK19 (第27図) I-13区で検出した径約60cm、深さ約35cmの略円形土坑。小さな溝に切り勝つ。

### 第3節 墓

SK04は墓壙の可能性のあることは前述した。

E-15区人骨出土地点 (第9図) SD01・02を検出する上層に礫敷層があり、その上面に人骨が集中して出土した。その横で北宋銭が集中して出土しており、埋納された可能性が高い。ただし、すでに重機で周囲を掘り下げていたため、墓壙や他の施設を一切確認できなかった。

SX05 (第11図) E-11区で確認された。これも重機である程度削平してしまった。わずかな溝状の遺構を断面で辛うじて検出したが全体の形状は不明である。おそらく周囲に円形、もしくは方形などの溝が巡り、若干の墳丘のような施設をもっていたと推定される。中心部は石を組んで木箱を埋納した部分と

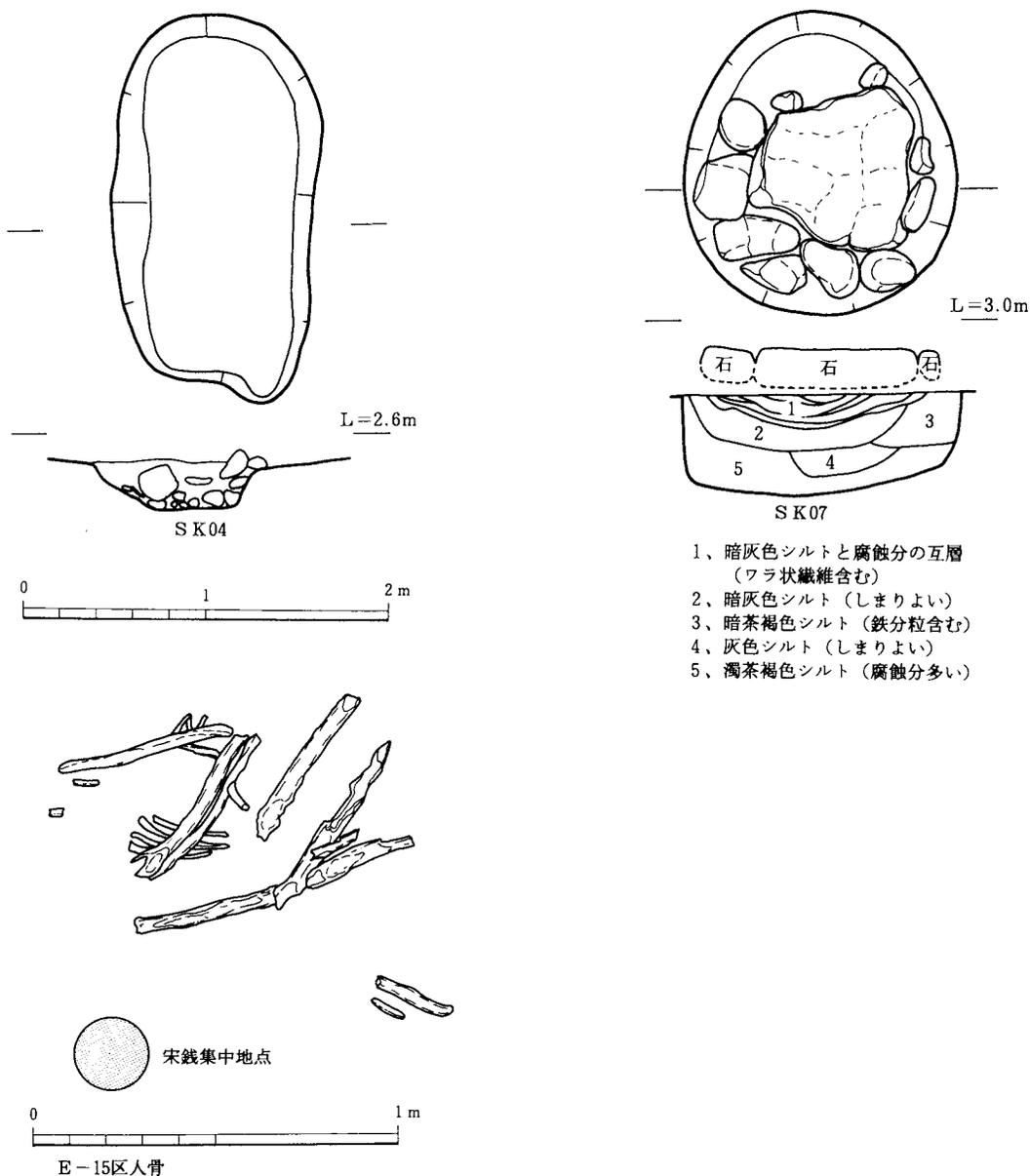


第8図 遺構配置図 (S=1/500)

木炭を充填した部分に分かれる。どちらからも骨を検出できなかった。木炭を詰めた部分はあとで掘られているから、本来の墓壇は石組み部分であろう。

SX07 (第9図) E-11・12区で検出した墓壇。墓壇は大きな板状の石で蓋をし、その石の周囲に拳大程度の石を並べていた。板石の上を何らかの施設で覆っていたか否かは上面を重機で削平してしまったために不明である。墓壇内は途中に腐食土が互層を成しており、有機質のものと土を交互に挟み込んで埋葬したと推定される。人骨等は検出できなかった。この遺構は石があったために検出できたが、なければまず検出できなかっただろう。

SX10 (写真図版7) 調査区北側の崖下に、岩盤がえぐれた部分を利用した岩陰状の部分がある。下部に石垣を積み上げて水田面よりも高い平坦面を作りだしている。今回は開発の対象外であるために調査していないが、地元の方々の話によると、かつては五輪塔が置かれていたことがあったようである。そ



第9図 遺構実測図 (S=1/40。人骨はS=1/20)

のため、この岩陰状の部分の墓遺構と考えてよいだろう。調査段階に簡単な清掃を行った限りでは出土遺物は現代のものがあるだけであった。

上記のように調査区内の墓遺構は重機で上面を削平してしまい、十分な調査を行えなかった。この下層から遺物が大量に出土しているのに対して、墓の面は遺物がほとんど含まれていなかったため、調査方法を誤り、この他の多くの中世墓を削平してしまった可能性がある。五輪塔が出土していることからその可能性が高い。また、SX10の存在から周辺にも様々な形態の中世墓が広がっている可能性が高い。

## 第4節 掘立柱建物

E・F-5・6区は調査区の中でも比較的小高い地点であり、周辺の微地形のなかでは微高地として捉えられる。ここではベース層が比較的明瞭であったため、多くの柱穴を検出できた。また、柱痕が残っていたものもいくつか確認できた。SD27・28は掘立柱建物に伴う雨落溝であろう。ただし、この部分が調査区の端にあたり、排水溝を深く掘ったために主要な柱穴をかなり削平してしまったと思われる。おそらく、数度の立替えがあったと推定されるが、建物プランの復元を十分に行うことができなかった。

## 第5節 柵列

調査区の中央、J-11区～C-14区まで直線的な柵列を確認した。層位的に確認することはできなかったが、検出できたのは調査の終わりに近かったこと、覆土が灰色シルトで他の遺構とは異なることから、その他の多くの遺構よりも古い段階の遺構であると推定される。ただし、柱穴からの出土遺物はほとんどなく、時期を特定できていない。SD01やSD02による区画とは方向を異にすることから、それ以前の地区割りに伴う施設であったと推定される。なお、F～I-12区ではこの柵列に併行する溝を検出している。この溝は途中で曲がっているが、ある時期には柵列に伴っていたと推定される。

## 第6節 溝

本調査で検出された主な遺構は溝である。もっとも古い溝は弥生時代のSD22-2で、8ラインに沿った自然地形の高まり（自然堤防か）にそって流れている。その上をほぼ同じ方向に流れるものをSD22-1、SD22-3とした。SD21も中世の溝であり、これら中世の溝が8ラインの自然堤防を挟んで流れ、さらにその上面に礫石を敷きつめて道状の遺構を作りだしたと推定される。

もっとも大量の遺物が出土したのはSD02・SD01・SD35など調査区の東半側の溝である。これらの溝は若干東に傾くが、基本的にはほぼ南北方向である。SD02に接続するSD05は90度曲がってほぼ東西方向をとる。また、SD07・08・11・13・14・15・17・18・19・21などの溝群（以下「溝群」と呼ぶ）もSD05とほぼ90度曲がりながら接続している。これらの溝は総体として条里的な地割りを推定させる。

また、多くの木製品を出土したSD30・31は「コ」の字状に巡ると推定され、SD02・05や溝群とは異なる地区割りであった可能性が残る。深く幅広い区画溝であることから、溝群やSD02による区画とは性格の異なったものと推定される。調査区外の様子は分からないが、この溝などによって方形の区画が作り

出されていることは間違いないだろう。また、これらの溝から出土した木製品は舟形など祭祀的なものが特に多く、この区画溝の特異性を物語っていると思われる。幅や深さ、方形に巡る可能性があることなどから、SD30・31は「堀」と呼んでも差し支えないかも知れない。

SD06はSD02が延長していれば約90度の角度で交差すると思われるが、出土遺物からみてSD06はやや後出と推定される。すべての溝が同時に存在するわけではないが、同じ方向性、もしくは地区割りを踏襲していると推定される。

SD02は山（崖）側にだけ石積みを行っている。SD01やSD35も部分的に石積みを行っていた可能性がある。このように石を積んだ溝はこれら以外には確認できなかった。

また、SD31は部分的に土留め板で肩部を補強している。後述するように土留め板は他の地点でも確認されており、要所ごとに石積みと板による溝の整備がなされていたことが分かる。

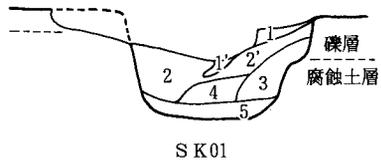
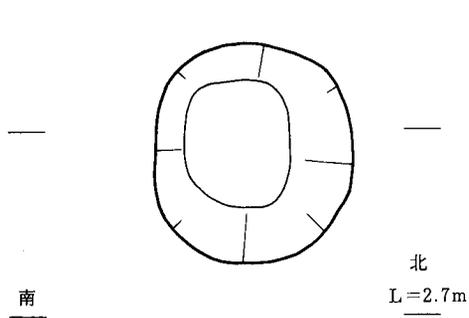
## 第7節 その他

**石敷遺構** C-15区や8ラインでは礫層が確認されており、これを石敷と判断した。時期的には中世でも新しい段階以降に敷かれたものであるが、年代を特定できなかった。近代以降の遺物はこの石敷層の上面から出土している。8ライン上の石敷は先に述べたように、溝に挟まれた自然堤防上を道として利用するためのものと推定される。同じように、C-15区付近のものも、崖際に通路的な施設を設けた可能性があるが、確認できなかった。

**SX06** K-18区で検出した土坑で、石が多量に出土している。自然石を簡単に組んだ可能性もある。周囲にはこうした人頭大の石はほとんど確認されない。その上に現在の地表面には見かけない石質であった。土坑内から多くのモミガラが出土している他、土器類も出土している。モミガラの存在などから「室」状の遺構であったと推定されるが、大半が調査区外に延びており、形状や用途を明らかにできなかった。

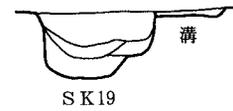
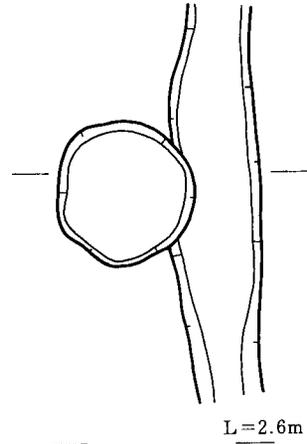
**G-13区土留め板** 溝遺構に伴う土留め板と推定される遺構。溝遺構は確認できなかった。

**E-16区土留め板** G-13区の例と同じように溝遺構を確認できなかった土留め板。溝の内部と思われる部分からは大量の箸状木製品などが出土している。SD01そのもの、もしくは支流的な溝に伴う可能性があるが、確認できなかった。

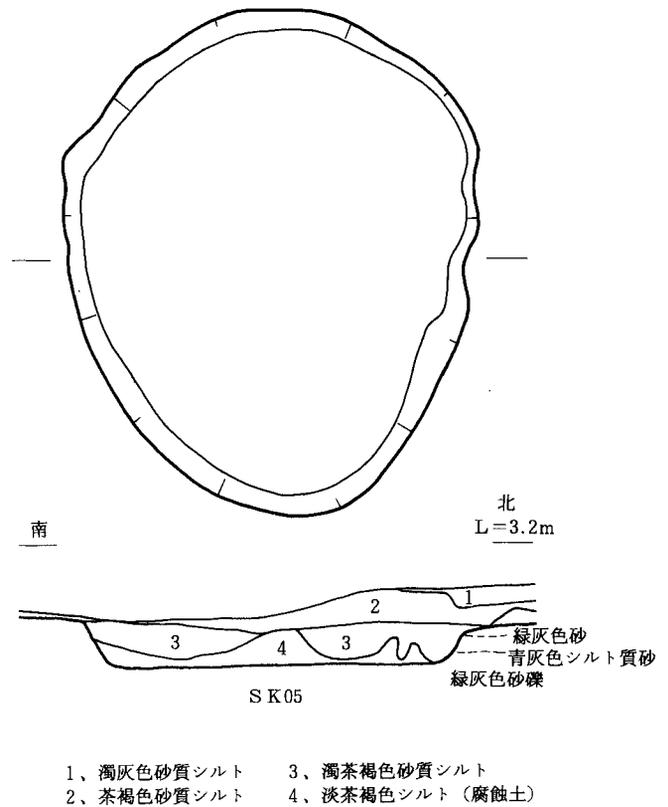
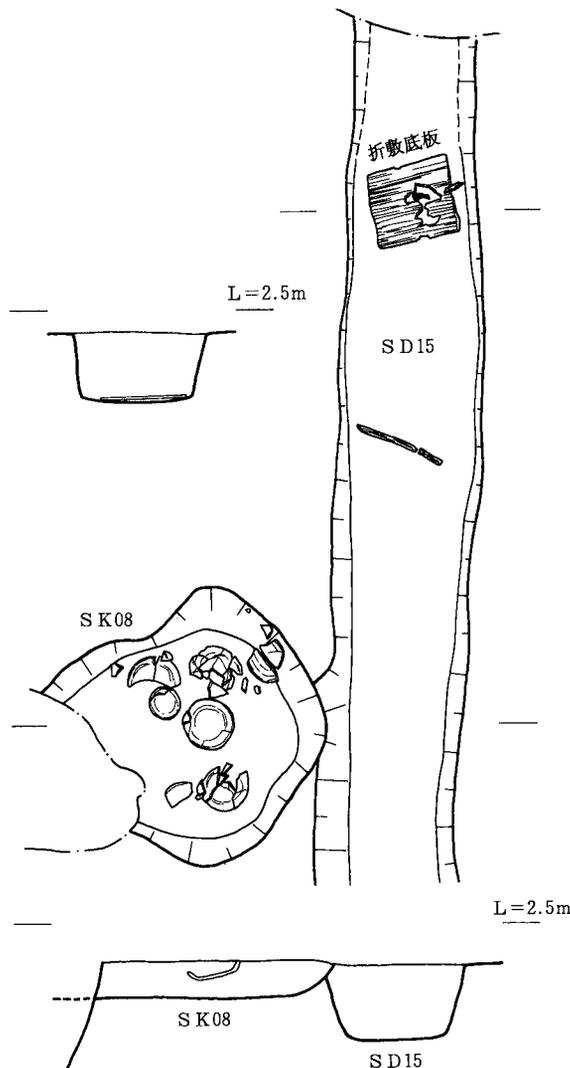


SK01

- |                      |             |
|----------------------|-------------|
| 1、黑色シルト              | 3、(暗)茶灰色シルト |
| 1'、黒灰色シルト (ハン状木製品多い) | 4、黒灰色シルト    |
| 2、茶灰色砂質シルト           | 5、淡黒色シルト    |
| 2'、茶灰色シルト            |             |

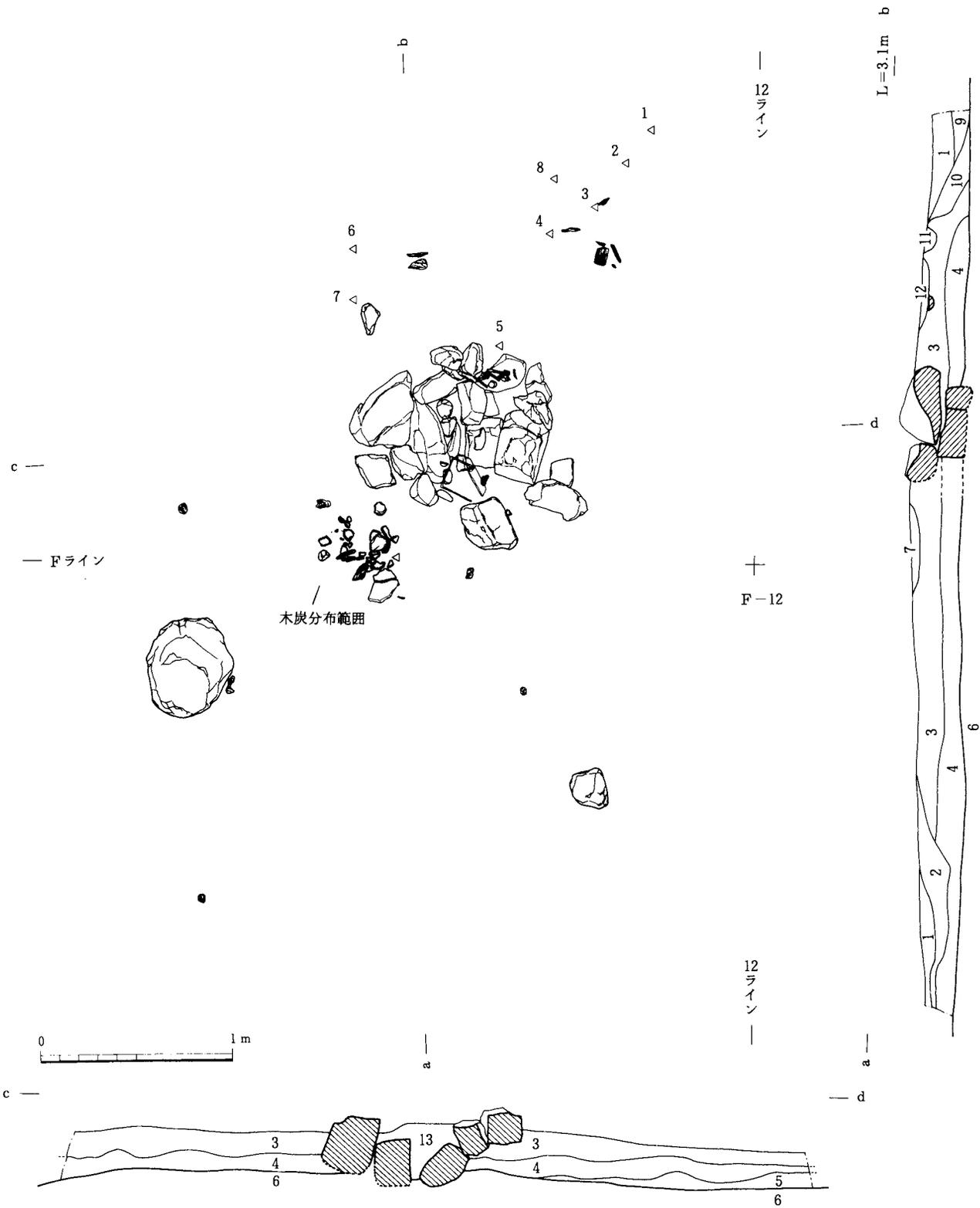


SK19



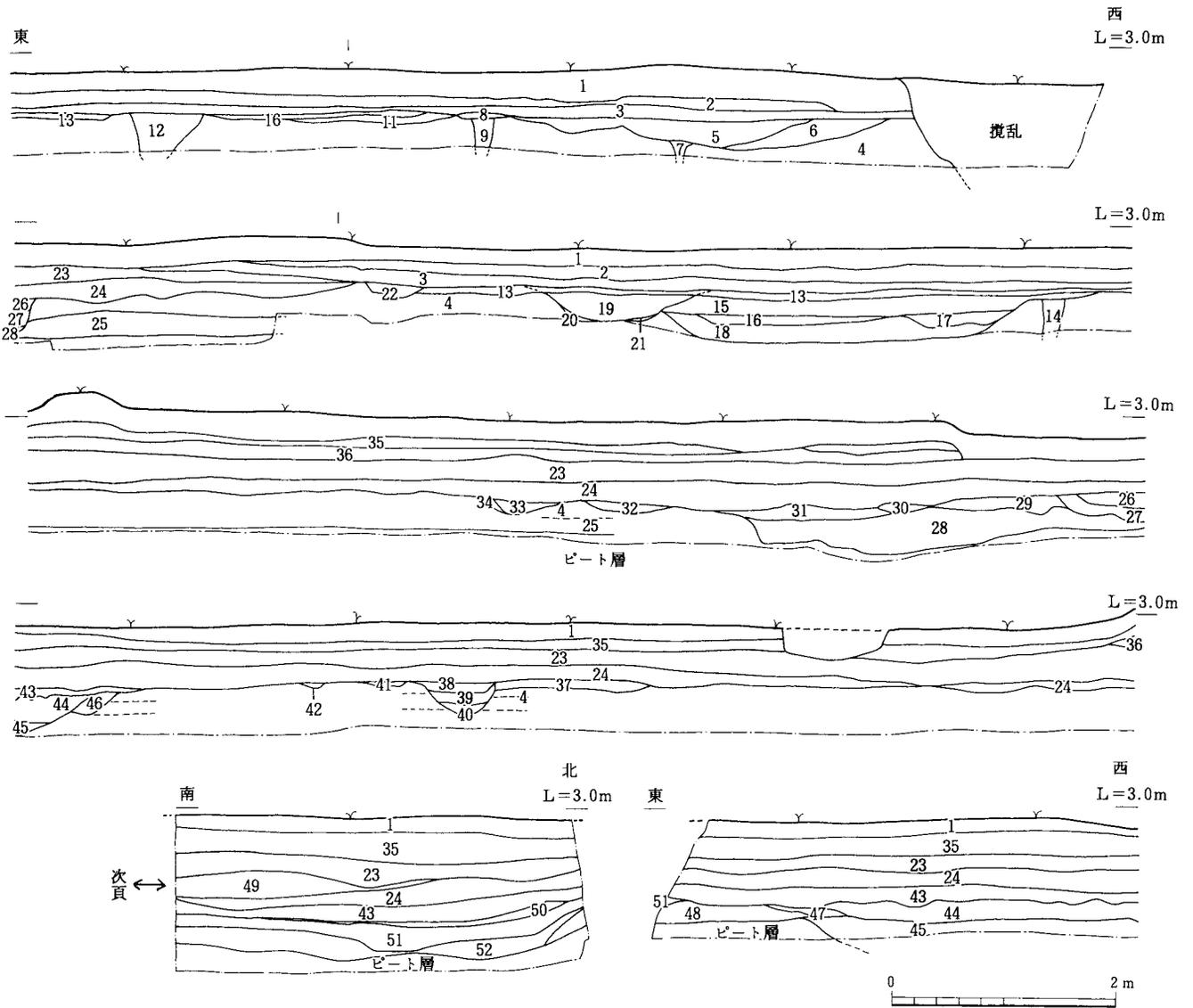
- |            |                 |
|------------|-----------------|
| 1、濁灰色砂質シルト | 3、濁茶褐色砂質シルト     |
| 2、茶褐色砂質シルト | 4、淡茶褐色シルト (腐蝕土) |

第10図 遺構実測図 (S=1/40. SK08・SD15のみS=1/20)



- |  |  |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>1、濁青灰色シルト (包含層、もしくは床土。酸化進み赤褐色化する)</li> <li>2、暗(青)灰色シルト (3より砂粒多い。SX05の周囲を画する溝か。)</li> <li>3、暗(青)灰色シルト (粘性強い)</li> <li>4、濁暗茶褐色シルト (腐蝕土。砂気含む。中世基盤層。)</li> <li>5、暗灰色シルト</li> <li>6、緑灰色砂礫層 (弥生以降の明瞭な基盤層)</li> <li>7、黒色炭層 (下面のみ0.5~1cm程純粋な炭堆積。上位は暗灰色シルト)</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>8、濁暗青灰色シルト (3と4がまじったような土)</li> <li>9、暗灰色砂質シルト</li> <li>10、暗青灰砂質シルト</li> <li>11、3よりやや暗い暗灰色シルト</li> <li>12、暗灰色砂質シルト</li> <li>13、暗青灰色砂質シルト</li> </ul> <p>(△は釘等の金属製品)</p> |
|--|--|

第11図 SX05実測図 (S=1/30)

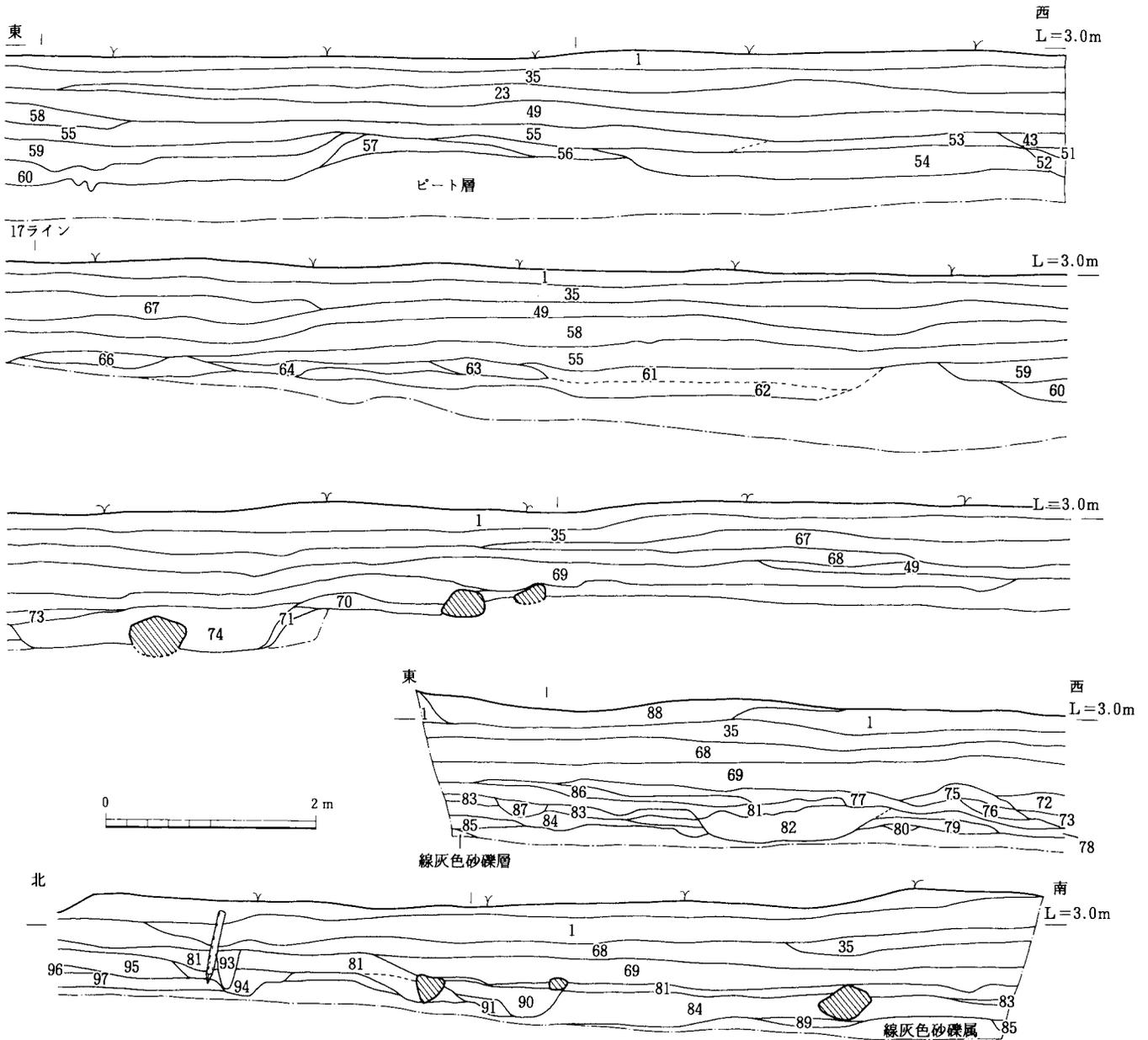


南壁セクション土層名

- 1、濁暗(茶)灰色シルト (縮まり悪い。耕作土)
- 2、濁暗茶灰色シルト (鉄分やや多い。床土)
- 3、濁暗茶褐色シルト (2より暗い。下面に鉄分層強くオレンジ色の筋が入る。旧耕作土、もしくは床土か)
- 4、黄灰色シルト質砂礫 (上位が砂層で下位が礫層)
- 5、暗青灰色シルト (縮まりよい。炭多い)
- 6、4混じりの5層
- 7、暗青灰色強シルト (5よりやわらかい)
- 8、乳色がかかった暗灰色シルト (9よりやわらかく、粘性強い)
- 9、暗灰色シルト
- 10、軟石少量混じり暗灰色シルト
- 11、暗灰色シルト混じり黄褐色(砂)礫
- 12、4の礫混じり暗灰色シルト
- 13、(暗)青灰色シルト
- 14、暗(青)灰色シルト
- 15、(暗)灰色シルト (炭含む) SD23
- 16、青灰色砂質シルト SD23
- 17、青灰色砂質シルト (16より砂粗い) SD23
- 18、青灰色シルト混じり砂礫 (軟石〜軟石含む) SD23
- 19、暗青灰色シルト (茶色ピート混じり) SD24
- 20、青灰色シルト SD24
- 21、青灰色シルト SD24
- 22、黒灰色強シルト (青みがかかる。調査区の外に逃げる遺構)
- 23、濁灰色シルト
- 24、暗灰色シルト (土器等包含層。炭含む。ややまだらな層)
- 25、茶色ピート混じり黄褐色砂礫
- 26、淡灰色シルト SD22-3

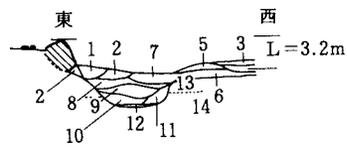
- 27、暗(青)灰色シルト (ピート含む。炭含む) SD22-3
- 28、青灰色砂礫 SD22-2
- 29、暗灰色シルト SD22-2
- 30、青灰色砂質シルト SD22-1
- 31、黄褐色軟石層 SD22-1
- 32、(青)灰色砂質シルト SD11
- 33、黄褐色砂含む暗(青)灰色砂質シルト SD08
- 34、灰色シルト SD08
- 35、濁褐灰色シルト (鉄分多い)
- 36、濁茶灰色シルト (鉄分多い)
- 37、(暗)青灰色強シルト
- 38、青灰色シルト SD17
- 39、濁青灰色シルト (茶色ピート混じり) SD17
- 40、緑灰色強シルト SD17
- 41、(暗)青灰色シルト SD18
- 42、(暗)青灰色シルト SD19
- 43、(乳)灰色シルト
- 44、(乳)茶灰色シルト
- 45、暗(乳)茶灰色シルト (51に対応か) SD31の蛇行か
- 46、淡(乳)茶灰色シルト (52に対応か) SD31の蛇行か
- 47、茶色ピート
- 48、乳茶灰色砂質シルト
- 49、濁灰色砂質シルト (黄褐色軟石砂含む)
- 50、植物遺体層 (「コッサ」層。木製品・枝・葉など集積層。通常のピート層よりも遺体の残りよく大量に含む) SD31
- 51、(乳)茶灰色シルト (中央付近で灰色シルト混じる) SD31
- 52、(淡乳)茶灰色シルト (5より淡く乳灰色強い) SD31

第12図 調査区南壁セクション (S=1/60)



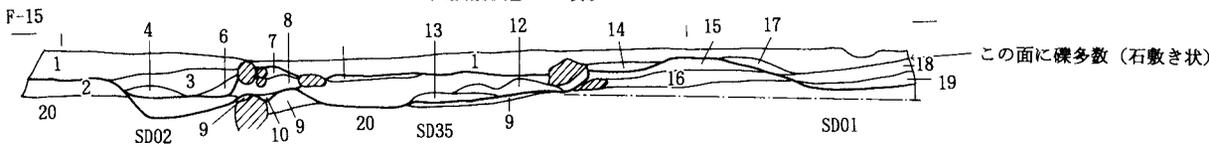
- |                               |       |                                |       |
|-------------------------------|-------|--------------------------------|-------|
| 53、(乳)明青灰色シルト                 |       | 76、乳茶灰色砂質シルト (細砂多い)            |       |
| 54、(乳)茶灰色シルト                  |       | 77、暗灰色砂質シルト (灰色混じり)            |       |
| 55、49と同じ                      |       | 78、茶灰色砂質シルト                    |       |
| 56、乳茶灰色シルト (畦状)               |       | 79、緑灰色砂礫                       |       |
| 57、濃茶灰色シルト                    |       | 79'、79混じり暗い茶灰色シルト              |       |
| 58、55の砂質シルト                   |       | 80、暗灰色砂質シルト (ピット状)             |       |
| 59、乳茶~灰色シルト                   | SD31か | 81、(青)黒灰色砂質シルト (炭が多い暗灰色砂質シルト)  |       |
| 60、(乳)茶灰色シルト                  | SD31か | 良好な包含層、もしくは周辺で茶毘?              |       |
| 61、茶灰色シルト                     | SD30か | 82、濃茶灰色シルト                     |       |
| 62、乳茶灰色シルト (61より乳灰色強い)        | SD30か | 83、茶灰色砂質シルト (細砂多い)             |       |
| 63、茶灰色シルト砂質                   | SD30か | 84、暗灰色砂質シルト (炭含む)              |       |
| 64、茶灰色砂質シルト                   | SD30か | 85、79混じり暗灰色シルト (茶色シルト混じり)      |       |
| 65、緑灰色砂混じり茶色ピート               |       | 86、乳灰色シルト                      |       |
| 66、(濁)青灰色シルト                  |       | 87、暗茶灰色砂質シルト (炭多い)             |       |
| 67、記入漏れ                       |       | 88、暗茶灰色シルトブロック土                |       |
| 68、濁緑灰色シルト (やや砂質)             |       | 89、暗(緑)灰色砂質シルト                 |       |
| 69、緑灰色砂質シルト                   | SD06  | 90、茶灰色砂質シルト                    | SD06  |
| 69'、(緑)灰色シルト (69より砂少なく灰色強くなる) |       | 91、緑灰色細砂と茶色シルトの互層              | SD06  |
| 70、緑灰色細砂 (木製品多い)              | SD06か | 92、礫多量混入暗灰色シルト質粗砂              | SD06か |
| 71、茶色シルト混じり70                 |       | 93、(黒)暗灰色シルト                   |       |
| 72、茶シルト混じり緑灰色砂質シルト            |       | 94、暗青灰色細砂                      | SD34  |
| 73、(乳)茶灰色シルト                  |       | 95、緑灰色シルト質粗砂 (礫含む)             |       |
| 74、茶灰色砂質シルト (下面に緑灰色砂)         |       | 96、暗青灰色砂質シルト (96・97層間に箸状木製品多い) |       |
| 75、暗灰色砂質シルト (礫含む。粘り強い)        |       | 97、暗灰色砂質シルト                    |       |

第13図 調査区南壁セクション (S=1/60)



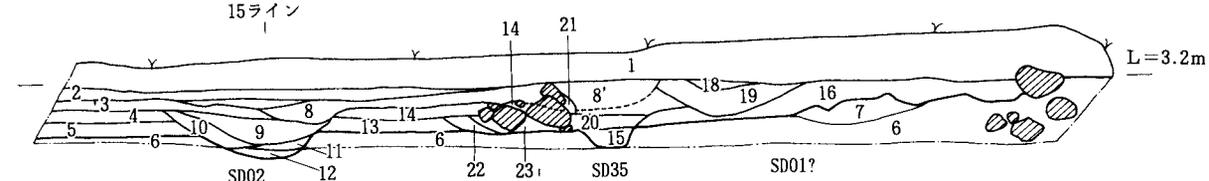
C-14区SD02東西セクション

- |  |                               |
|--|-------------------------------|
| 1、濁青緑灰色シルト (褐色粒やや多い)                   | 8、暗灰色砂質シルト                    |
| 2、青緑灰色シルト (1・2はSD02を埋めて石敷・石列を作るための整地土) | 9、暗(緑)灰色シルト質中砂～粗砂 (淘汰悪い、小石含む) |
| 3、礫混じり青灰色シルト (整地土)                     | 10、暗灰色砂質シルト                   |
| 4、礫混じり緑灰色シルト質砂 (整地土)                   | 11、暗灰色シルト質中砂～粗砂               |
| 5、緑灰色シルト質中砂                            | 12、礫混じり暗灰色粗砂 (淘汰悪い)           |
| 6、暗青灰色シルト                              | 13、緑色砂礫 (砂利層、酸化して黄色っぽくなる)     |
| 7、暗(緑)灰色シルト質砂                          | 14、暗(緑)色灰色シルト                 |



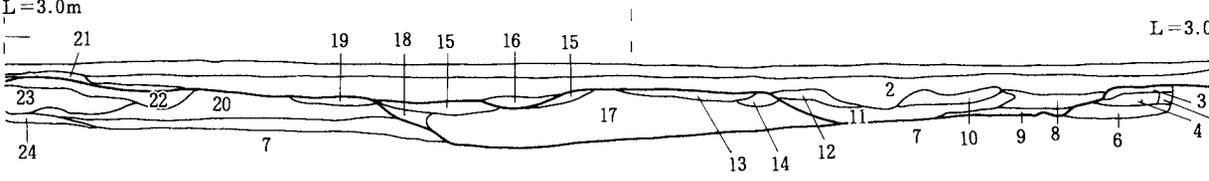
F-15・16区セクション

- |                                 |                                 |      |
|---------------------------------|---------------------------------|------|
| 1、濁灰色シルト (赤褐色がかかる)              | 11、濁灰色シルト質砂 (茶色ビート・緑灰色砂・硬い礫混じり) | SD35 |
| 2、暗灰色シルト                        | 12、淡黒灰色シルト                      | SD35 |
| 3、暗青灰色シルト                       | 13、黒灰色混じり暗灰色シルト                 | SD35 |
| 4、暗灰色砂 (締まりよい。緑灰色砂少量含む)         | 14、黄褐色砂 (軟石の砂)                  |      |
| 5、暗灰色シルト質粗砂～細砂 (締まり・淘汰悪い。4より暗い) | 15、暗灰色シルト (やや緑灰色がかかる)           |      |
| 6、暗灰色シルト                        | 16、暗(茶)灰色シルト (やや茶褐色おびる)         |      |
| 7、暗青灰色シルト (遺物包含層)               | 17、乳黒色シルト (黄褐色粗砂多量含む)           | SD01 |
| 8、暗灰色砂質シルト                      | 18、黒色シルト (黄褐色粗砂少量含む)            | SD01 |
| 9、茶色ビート                         | 19、暗黄褐色シルト質砂                    | SD01 |
| 10、暗灰色シルト質砂 (5に近い)              | 20、緑灰色砂礫                        |      |



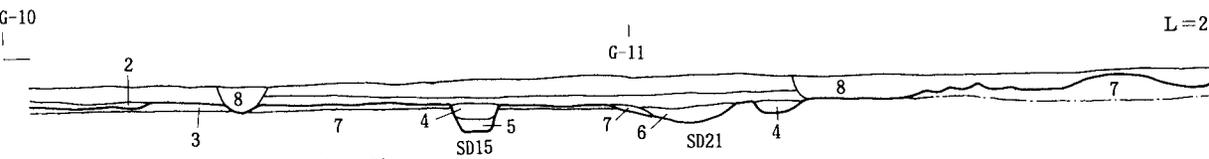
D-14～16区調査区北壁セクション

- |   |                             |
|---|-----------------------------|
| 1、濁茶灰色極細砂質シルト (締まり悪い、耕作土)               | 12、灰色砂 (淘汰悪い。細砂～粗砂)         |
| 2、濁茶灰色砂質シルト (鉄分多く締まりよい。床土)              | 13、暗青灰色砂質シルト (ビート混じり)       |
| 3、茶灰色砂質シルト (黄褐色軟石粒含む。炭含む。下面に礫数面あり)      | 14、青灰色砂質シルト (炭含む)           |
| 4、暗青灰色シルト質砂 (黄褐色砂含む)                    | 15、暗灰色シルト (純粋できれいなシルト。ビット状) |
| 5、濁茶色砂質シルト (締まり悪い。砂混じりのビート。木製品含む。下層包含層) | 16、濁暗青灰色シルト (炭含む)           |
| 6、緑灰色砂礫 (酸化して黄色くなる)                     | 17、(暗)青灰色強シルト               |
| 7、濁茶灰色シルト (1より暗い。下位に鉄分多い)               | 18、濁茶灰色シルト                  |
| 8、(茶)灰色シルト (炭含む。1～3・7より暗く砂気少ない)         | 19、暗灰色シルト質砂                 |
| 8'、砂礫含む8                                | 20、暗青灰色シルト質砂 (黄褐色砂礫含む)      |
| 9、暗(青)灰色砂質シルト (炭・黄色砂含む)                 | 21、(暗)灰色強いシルト               |
| 10、青灰色砂層 (酸化して黄色くなる)                    | 22、青灰色砂 (粗砂～礫)              |
| 11、暗(茶)灰色シルト (ビート混じり。砂気少ない)             | 23、暗青灰色砂質シルト                |
|   | 24、暗青灰色シルト                  |



G-8～10区SD22セクション

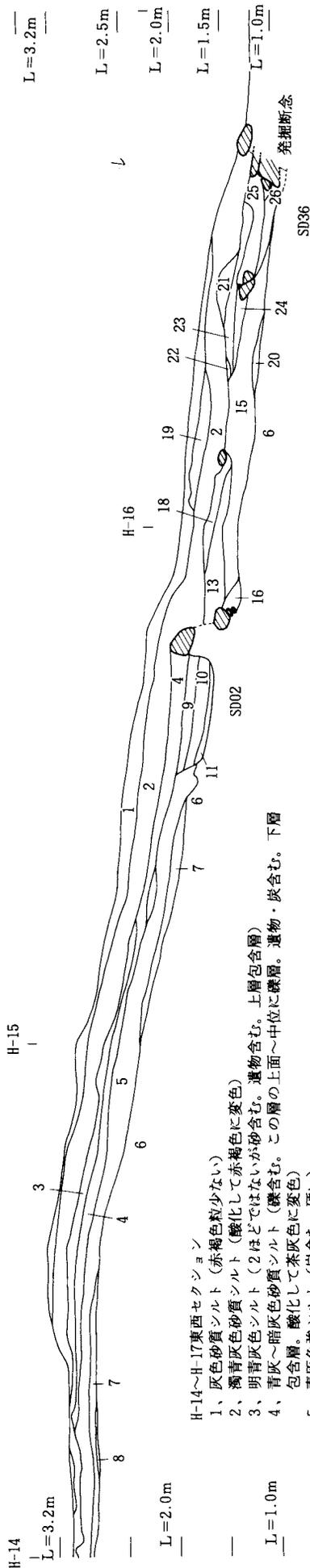
- |                               |                                  |
|-------------------------------|----------------------------------|
| 1、青灰色シルト                      | 13、暗灰色砂質シルト (2よりやや砂っぽい)          |
| 2、暗灰色シルト (2よりやや淡い。遺物包含層)      | 14、暗青灰色シルト質砂                     |
| 3、緑灰色シルト質砂                    | 15、暗青灰色砂 (ややシルト質で細かい。炭含む)        |
| 4、青灰色シルト                      | 16、暗灰色シルト (炭含む。2よりやや青く暗い) SD22-3 |
| 5、緑灰色砂礫 (軟石)                  | 17、暗灰色砂礫 (硬い礫・軟石が混在) SD22-2下層    |
| 6、濁茶色ビート (7と4の混合土。水田耕作土状)     | 18、暗青灰色砂質シルト (締まりよい)             |
| 7、暗茶色ビート                      | 19、青灰色砂質シルト (締まりよい)              |
| 8、暗暗灰色シルト (炭含む) SD22-1        | 20、明青灰色シルト (酸化して直ぐ緑色になる)         |
| 9、青灰色砂礫 SD22-1                | 21、暗青灰色シルト                       |
| 10、黄褐色軟石の細粒 SD22-1            | 22、青灰色シルト質砂 (締まりよい。19に近い)        |
| 11、暗青灰色シルト質砂 SD22-1           | 23、黄褐色砂礫 (軟石がほとんど)               |
| 12、暗灰色砂質シルト (黄褐色軟石粒多い) SD22-1 | 24、青灰色砂質シルト                      |
- 19・20・22・23は自然堤防の土か。



G-10～14区セクション

- |                   |                              |
|-------------------|------------------------------|
| 1、記入漏れ            | 5、暗青灰色シルト (SD15)             |
| 2、記入漏れ            | 6、暗青灰色シルト (SD21-1)           |
| 3、黄褐色軟石粒混じり青灰色シルト | 7、青灰色シルト (酸化して白灰色シルト。SD21-2) |
| 4、暗灰色シルト (SD15)   | 8、攪乱                         |

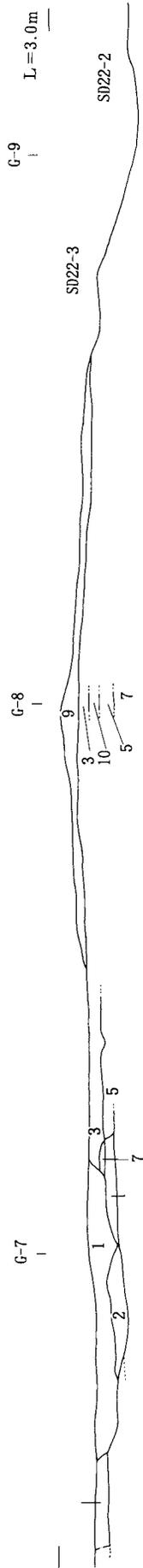
第14図 溝セクション(1) (S=1/60)



H-14~H-17東西セクション  
 1、灰色砂質シルト(赤褐色粒少ない)  
 2、濁青灰色砂質シルト(酸化して赤褐色に変色)  
 3、明青灰色シルト(2ほどではないが砂含む。遺物含む。上層包含層)  
 4、青灰~暗灰色砂質シルト(礫含む。この層の上面~中位に礫層。遺物・炭含む。下層包含層。酸化して茶灰色に変色)  
 5、青灰色強シルト(炭含む。硬い)  
 6、緑灰色強~砂礫  
 7、茶褐色シルト混じり5(粘り強く硬い)  
 8、茶褐色シルト(粘り少ない)  
 9、青灰色シルト混じり(淡)茶色シルト(10より砂質強い) SD02  
 10、(淡)茶色シルト(淡いピート層) SD02  
 11、灰色砂(礫含む) SD02  
 12、茶色ピート  
 13、礫混じり(暗)青灰色強シルト  
 14、暗青灰色砂質シルト(炭含む)  
 15、茶色ピート混じり(青)灰色強シルト  
 16、暗(青)灰色シルト混じり礫層

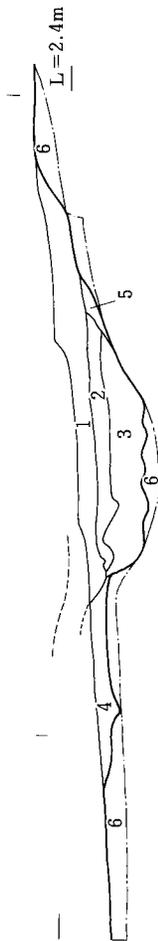
17、暗灰色シルト質砂  
 18、暗青灰色砂質シルト(14より淡く砂気やや弱い。炭・礫含む)  
 19、暗がかかった灰色シルト(1とはほぼ同じでやや極細砂質強い。1より暗く2より緑色強い)  
 20、茶色ピート  
 21~27、崩落などのため記載できず。  
 25・26、SD36埋土(SD35、もしくはSD01の延長)

第15図 横セクション(2) (S=1/60)



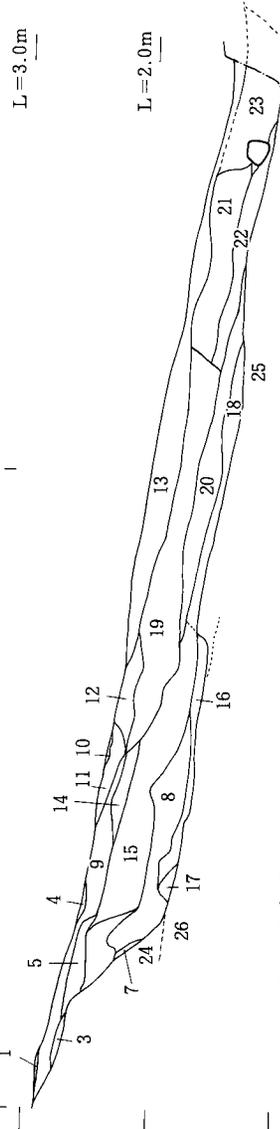
G-7~10区セクション  
 1、暗灰色シルト  
 2、濁灰色砂(やや黄色味混じる)  
 3、緑灰色軟粒砂(酸化して黄褐色になる)  
 4、暗灰色シルト  
 5、濁(緑)灰色シルト(炭含む。ピートブロック多い)  
 6、緑灰色粗砂(細紋土器包含層。酸化してやや黄色味帯びる。3より粗い)  
 7、茶色ピート SD20  
 8、黒褐色シルト  
 9、礫敷  
 10、緑灰色砂礫

J-13区SD31セクション



- 1、濁茶灰色砂質シルト (この下面が「コッサ」層。木の枝・木製品などが2~3cm堆積)
- 2、淡青灰色シルト (やや柔らかくシルト強い腐植土。木製品多い)
- 3、淡茶褐色シルト (やや柔らかくシルト強い腐植土。木製品多い)
- 4、濁白灰色シルト (茶褐色シルト)
- 5、青灰色シルト (2より青くやや明るい)
- 6、茶褐色シルト (3より濃く黒く縮まりよい)

J-17

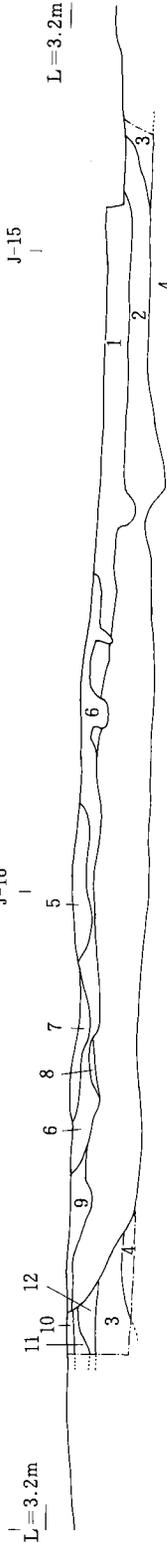


- 7、乳茶灰色混じり砂質シルト (緑灰色砂多い)
- 8、濃茶灰色シルト (酸化して黒に近くなる)
- 9、緑灰色シルト・暗灰色シルトのプロック状混入土 (粘性強い)
- 10、暗灰色シルト (炭含む)
- 11、黄褐色砂
- 12、青灰色砂質シルト
- 13、暗(青)灰色砂質シルト (上面礫層)
- 14、乳茶灰色シルト (緑灰色シルト混じり)
- 15、緑灰色砂混じり (五層?) 茶灰色シルト (軟らかい)
- 16、乳茶灰色シルト (緑灰色礫少量含む)
- 17、緑灰色砂 (礫含まずきれいな細砂)
- 18、濃茶灰色シルト
- 19、暗青灰色砂礫 (淘汰悪い。礫・粗砂~細砂)
- 20、茶色シルト混じり青灰色砂 (中~細砂)
- 21、暗灰色シルト混じり礫 (人頭大~拳大で大きなもの多い)
- 22、乳茶灰色シルト混じり砂礫 (著状木製品など含む)
- 23、茶灰色がかかった暗灰色砂質シルト (この部分やや礫少ない。13とは異なる。炭少量含む)
- 24、緑灰色砂
- 25、緑灰色砂礫
- 26、茶色ピート

J-17~1-17区SD31セクション

- 1、乳灰色シルト
- 2、濁茶灰色砂質シルト
- 3、緑灰色砂 (軟石の砂利多量に含む)
- 4、乳灰色シルト混じり暗灰色シルト
- 5、緑灰色シルトプロック混じり茶灰色砂質シルト
- 6、茶灰色シルト混じり緑灰色シルト (粘り強い)

J-15



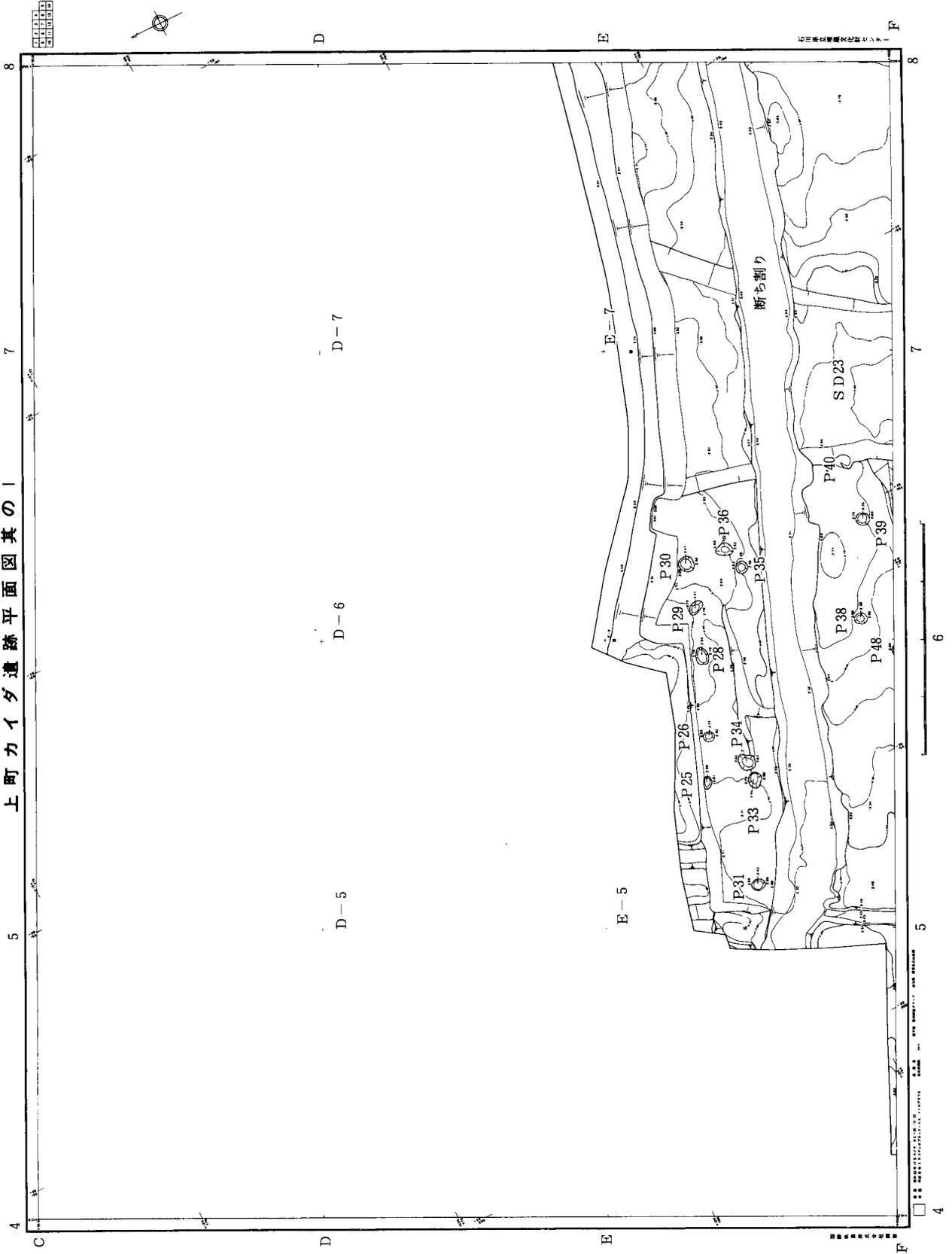
- 9、濁緑灰色砂質シルト SD31上層
- 10、濁灰色砂質シルト
- 11、緑灰色砂礫 (酸化して黄褐色)
- 12、乳灰色混じり濁茶褐色シルト

J-15~17区SD31セクション

- 1、茶褐色砂質シルト (砂混じりピート層)
- 2、緑灰色シルトプロック混じり茶褐色シルト (ピート層) 木製品含む。SD31上層
- 3、暗褐色シルト (縮まりのよいピート層)
- 4、濁緑灰色シルト
- 5、灰色砂質シルト (赤褐色の鉄が多い)
- 6、黄褐色砂互層で混入する暗青灰色砂質シルト (茶褐色ピート混じり)
- 7、暗灰色砂質シルト (5より砂気多く暗い)
- 8、(緑)青灰色シルト (茶褐色ピート混じり)
- SD31上層
- SD31上層
- SD31上層
- SD31上層

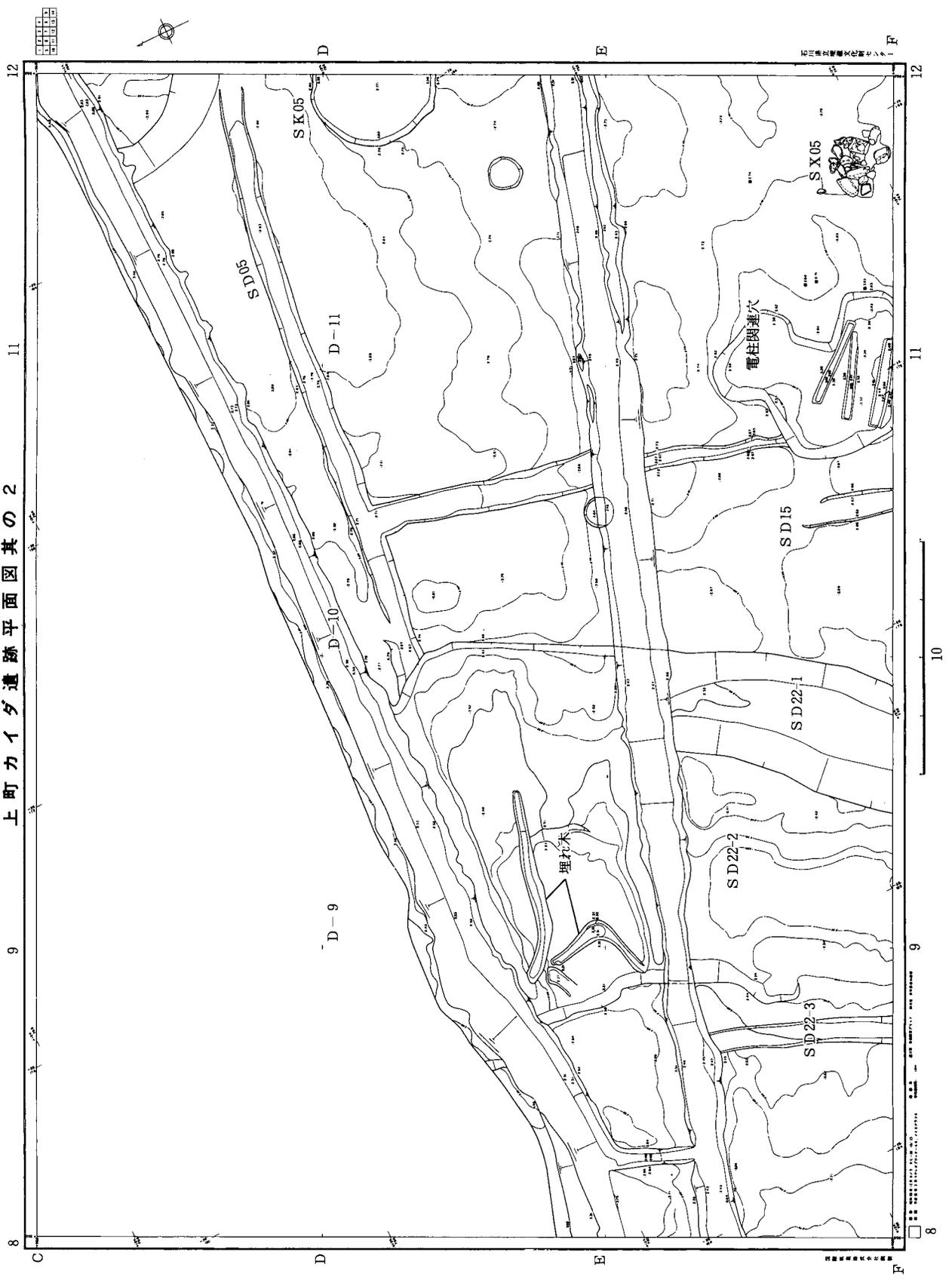
第16図 溝セクション(3) (S=1/60)

6  
上町カイダ遺跡平面図其の1



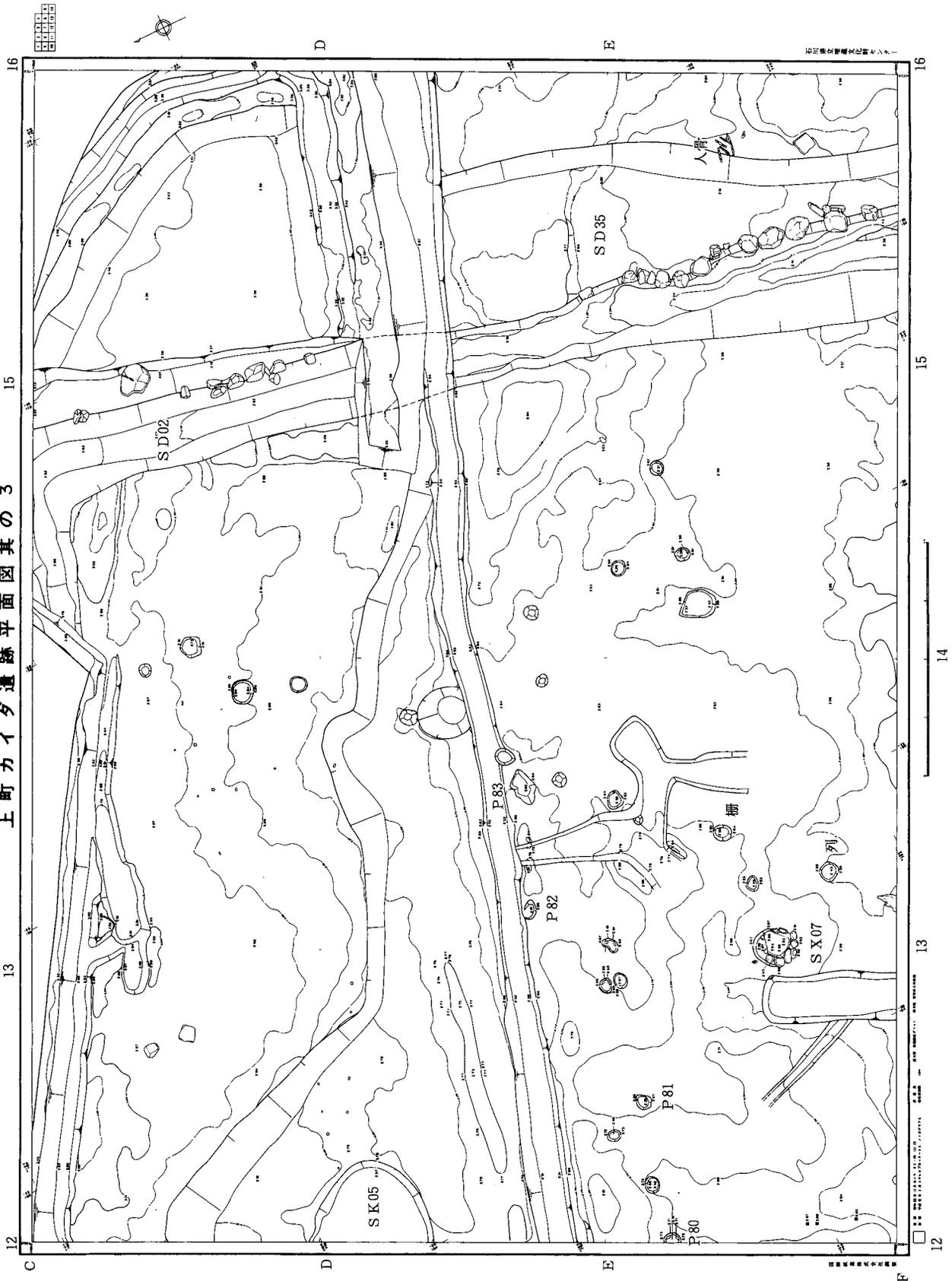
第17図 調査区平面図(1) (S=1/100)

10  
上町カイダ遺跡平面図其の2



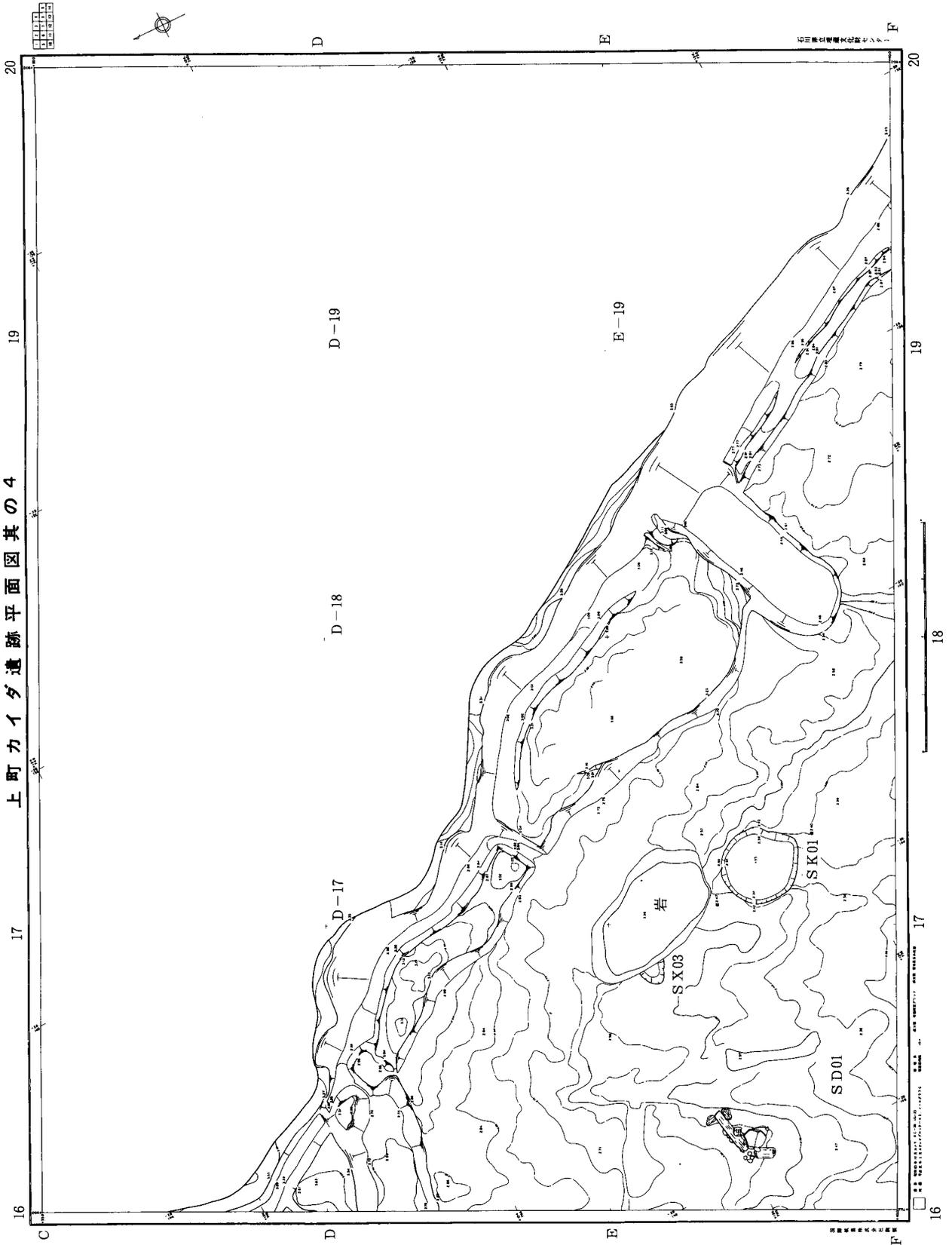
第18図 調査区平面図(2) (S=1/100)

14  
上町カイダ遺跡平面図其の3

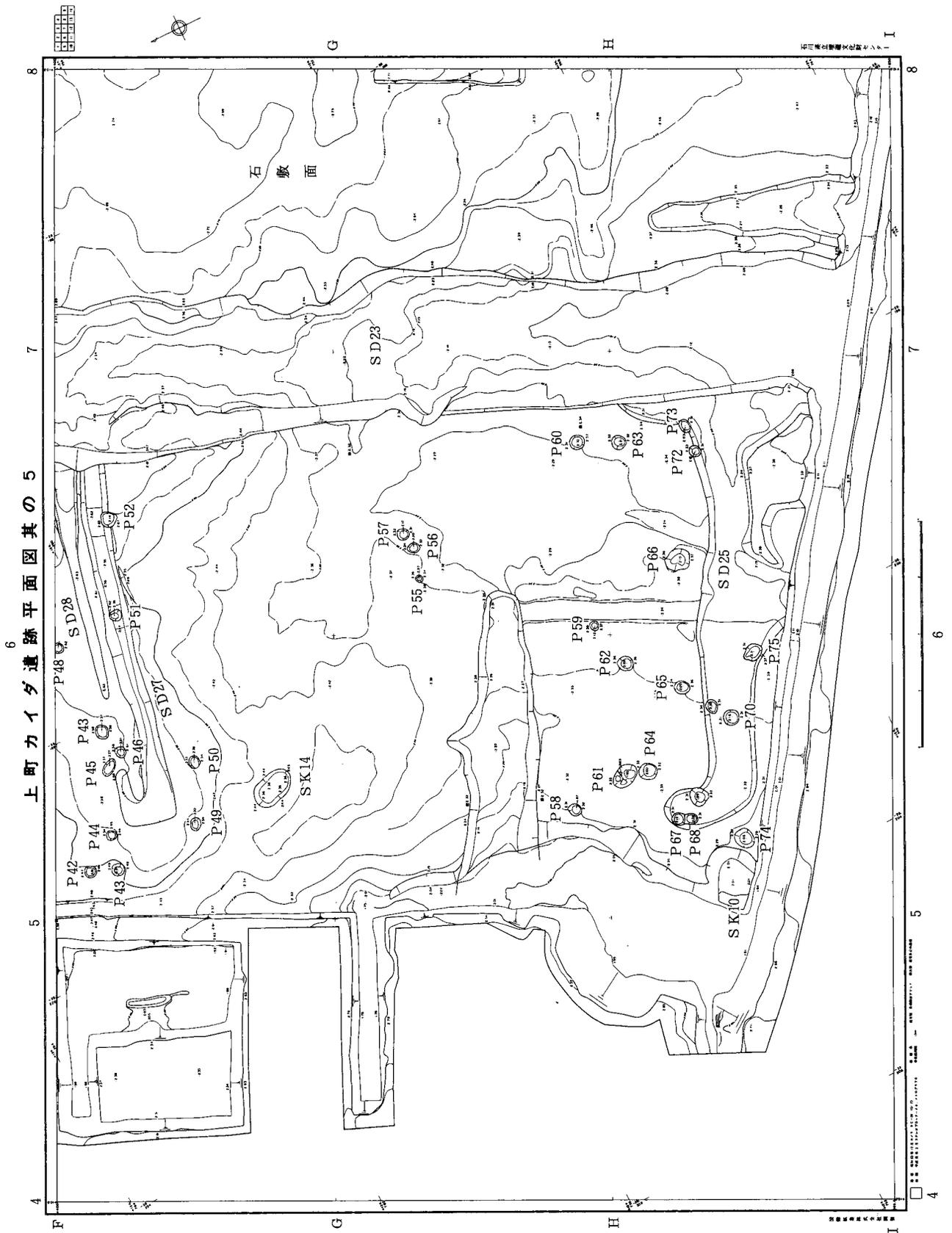


第19図 調査区平面図(3) (S=1/100)

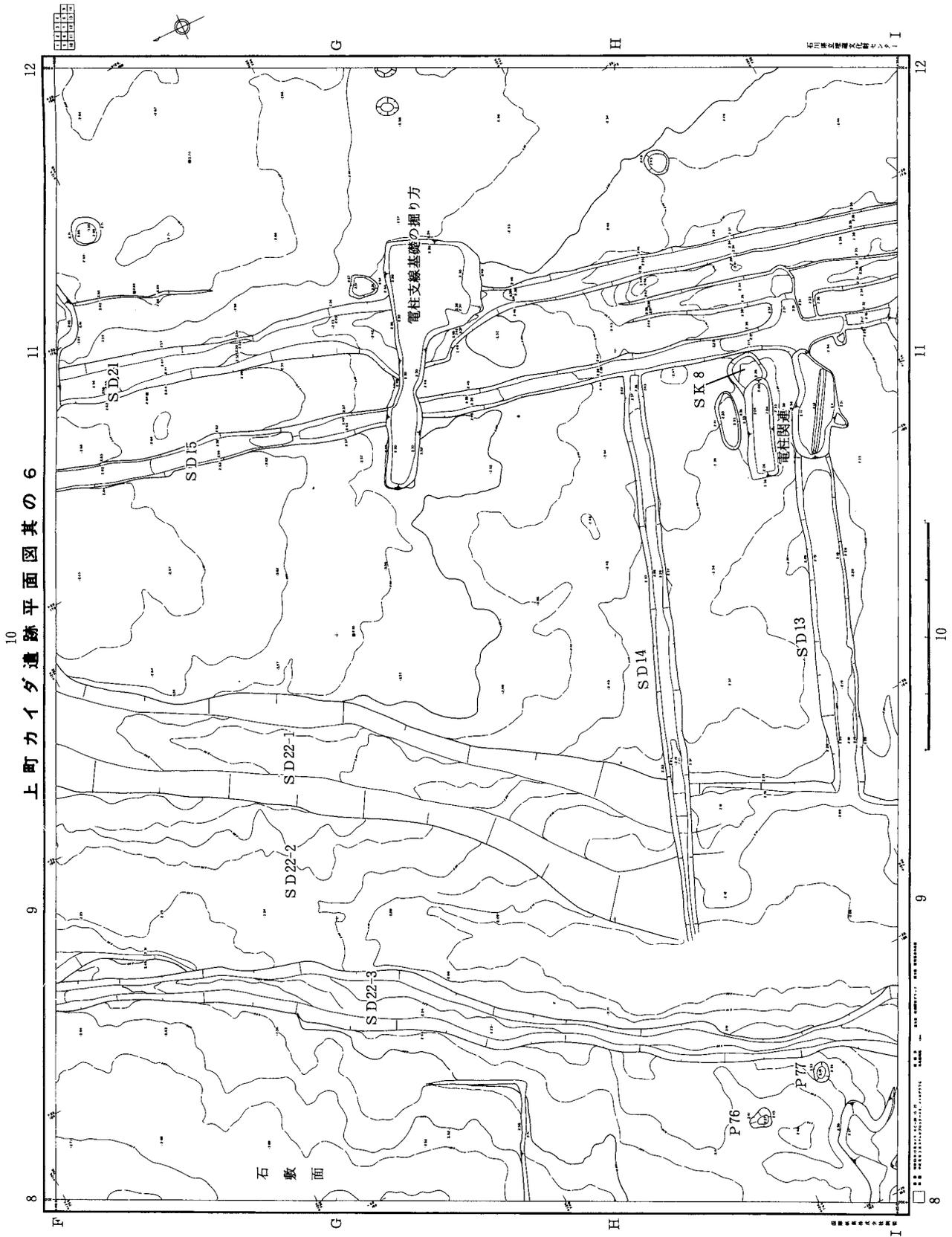
18  
上町カイダ遺跡平面図其の4



第20図 調査区平面図(4) (S=1/100)



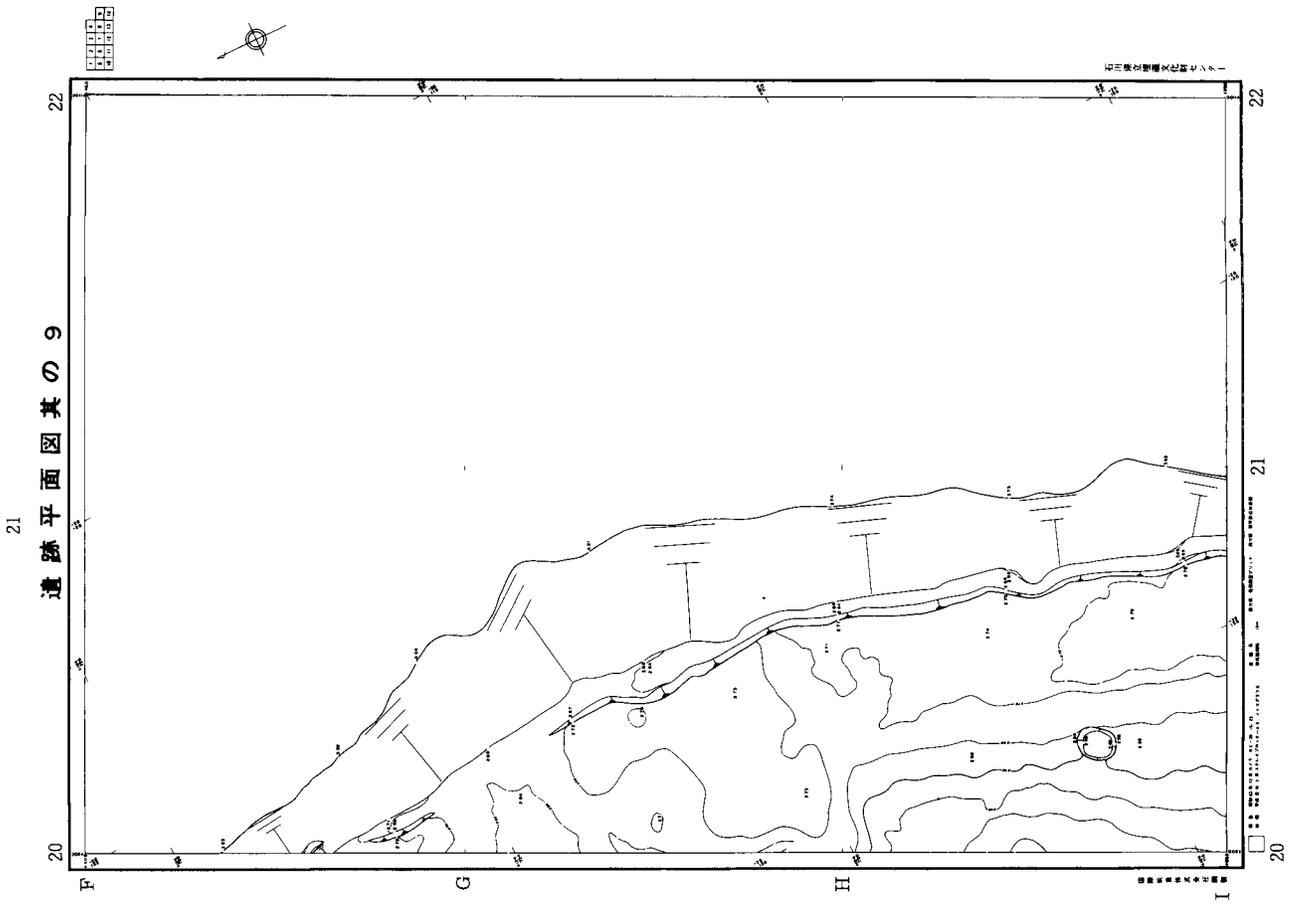
第21図 調査区平面図(5) (S=1/100)



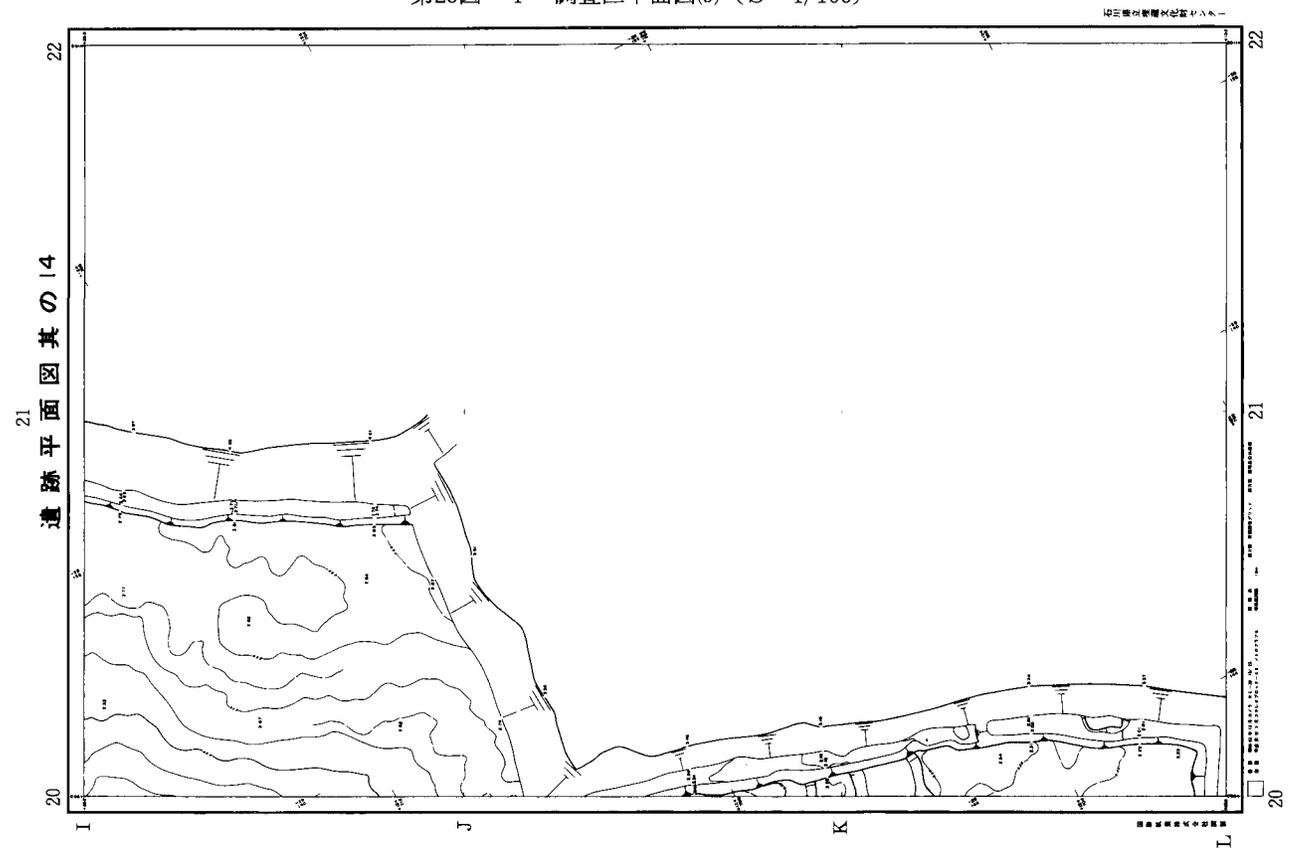
第22図 調査区平面図(6) (S=1/100)



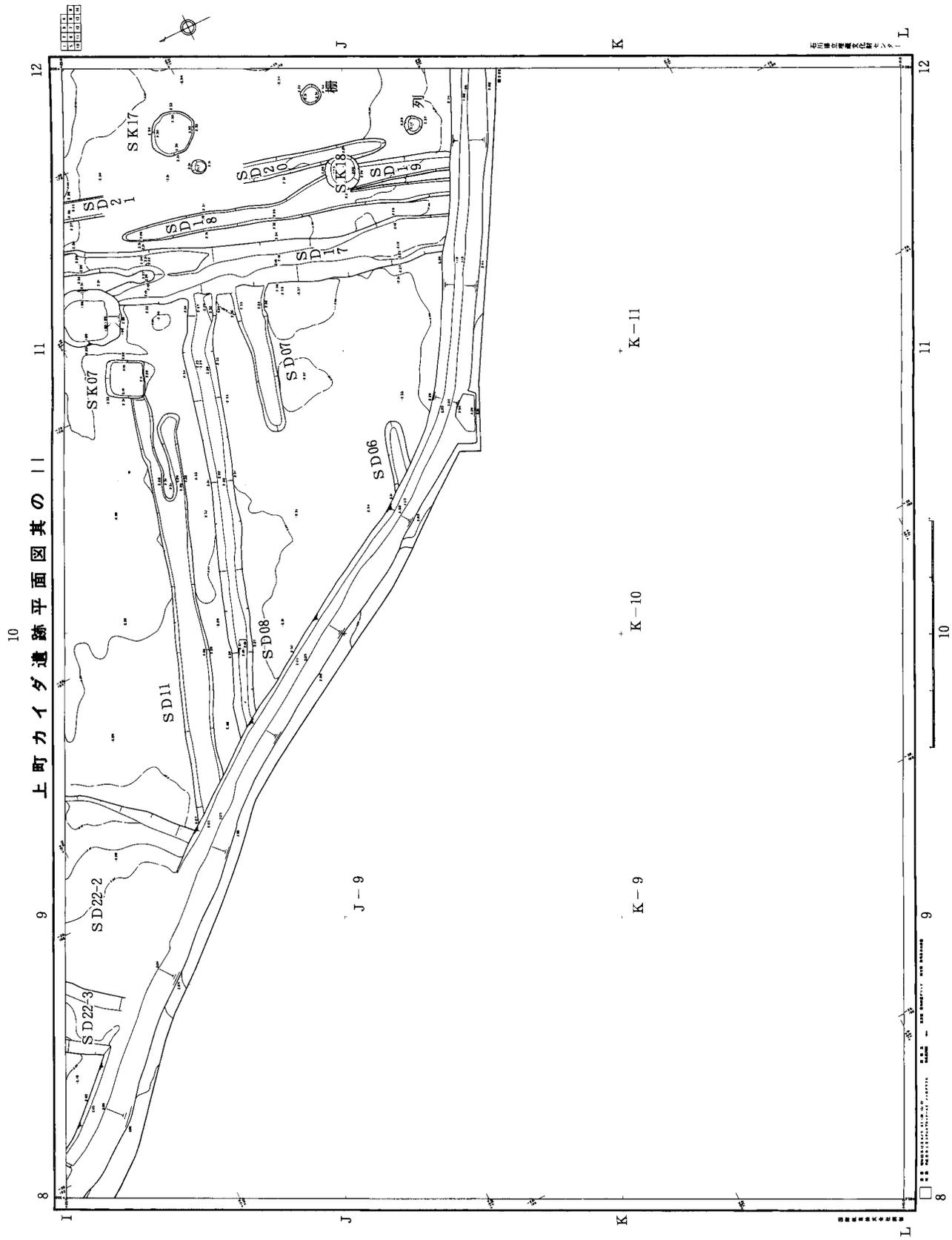




第25図-1 調査区平面図(9) (S=1/100)

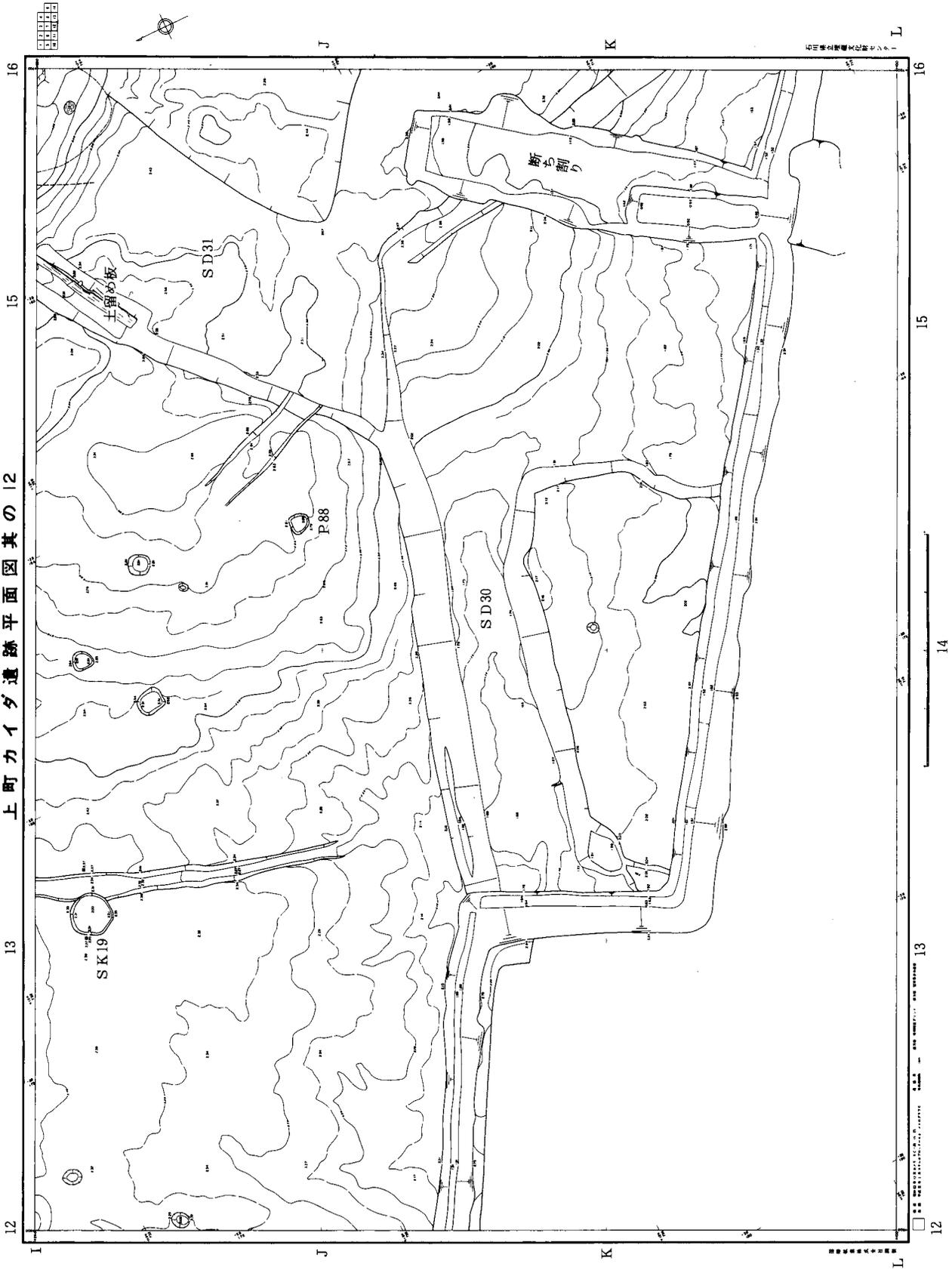


第25図-2 調査区平面図(10) (S=1/100)

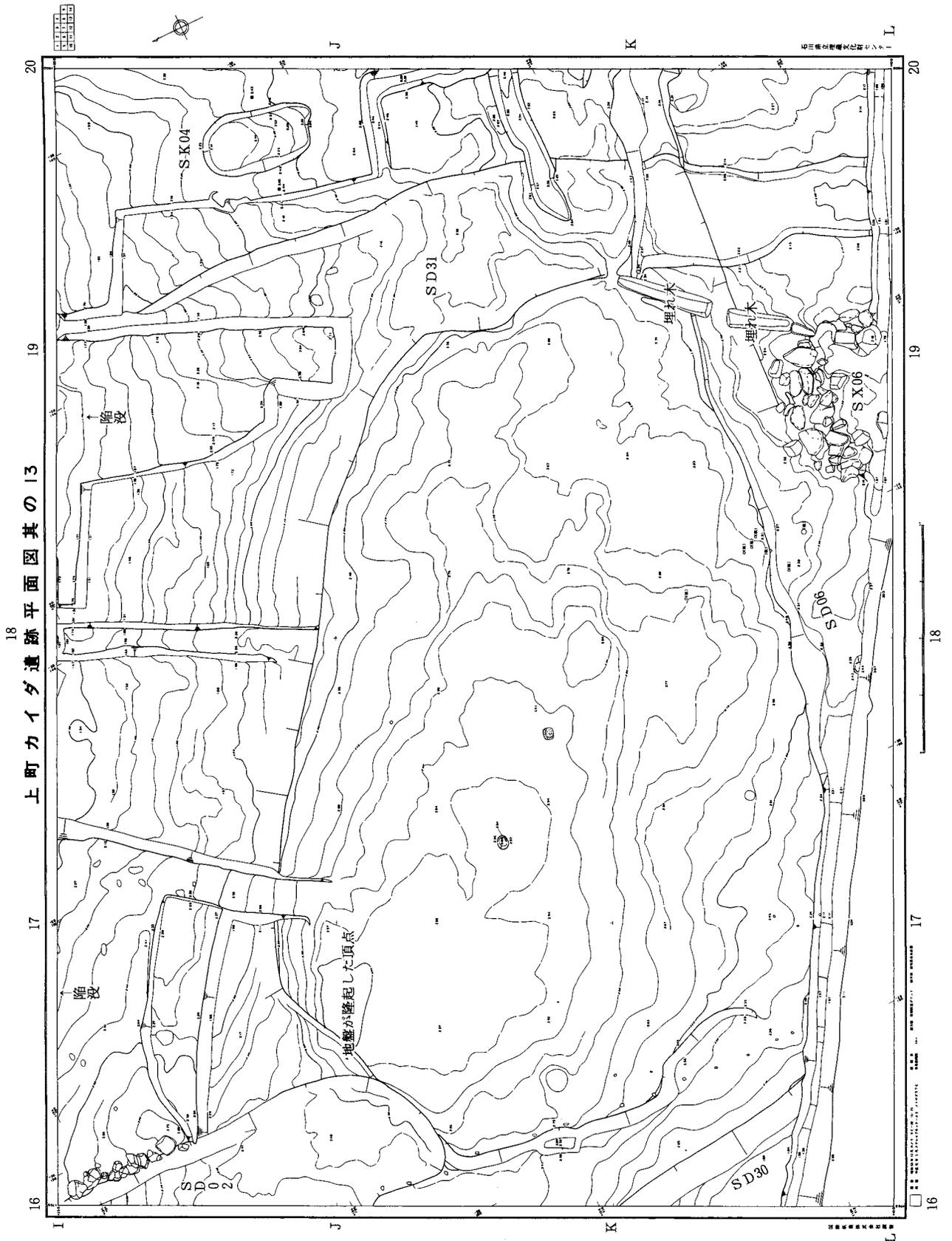


第26図 調査区平面図(11) (S=1/100)

14  
上町カイダ遺跡平面図其の12



第27図 調査区平面図(12) (S=1/100)



第28図 調査区平面図(13) (S=1/100)

## 第4章 遺物

### 第1節 土器

出土した遺物は整理前の段階で、パンケースに土器類約50箱、木器及び加工痕のある木約100箱、金属器1箱足らず、鉄滓1箱程度であった。土器類についてはほぼ全ての破片数と重量を計測した。手違いのため、ごくわずかに計測から漏れた資料もあるが1箱に満たない。計測した土器資料は総数で62,118片、420,085gであった。

**計測の方法** 取り上げた袋ごとにラベル番号を付け、袋ごとにやきものを区別して計測を行った。計測を終えた袋から順番に通常の整理作業を行った。なお、弥生土器と古墳時代土師器は小片では区別できなかったため、一括して「弥生～古墳時代土器」とした。大量にある「かわらけ」はかなり細かく割れているものが多いため、計測の際、親指の爪より小さなものは破片数を計測せず、重量のみ計測した。重量はグラム単位で計測した。量の少ない磁器・陶器類は破片が小さく軽くても極力計測した。また、接合されたものでも接合以前の破片数を計測した。遺構内で分層して取り上げた遺物もあるが、分層せずに取り上げたもののほうが多かったため、ここでは区別しなかった。

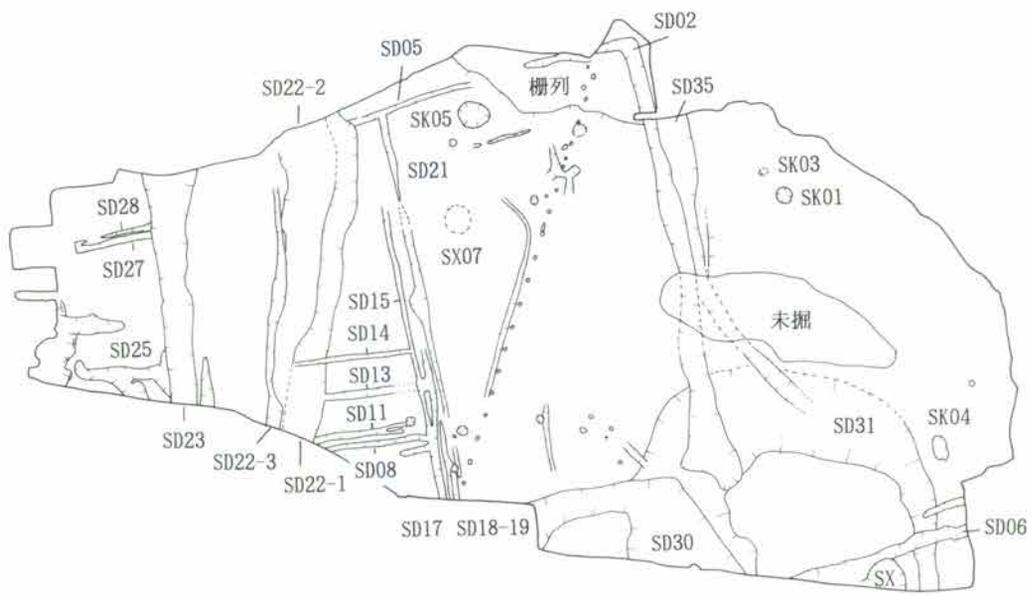
なお、計測は遺物整理とともに社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して行った。計測にかかった時間は、「記名・分類・接合」も含め、4名で約35日間であった。作業時間は1日7時間で、この段階では記名は部分的にしか行っていない。集計は整理終了後、伊藤志津子が手作業で行った。検算も含め、実働約1週間程度を要した。通常の整理作業に比べて、分類・計測の作業にかなり時間を費やしたが、こうした作業を恒常化すれば効率や精度が今後はより向上するであろう。

漆器や木器については、当遺跡では残りが極めてよかったが、遺構や地点、個体ごとによって残り方が様々であった。本来ならば食器の一部として取り扱うべきであろうが、残存率の問題から焼き物と同列に扱うことがためらわれたこと、計測の方法を検討する必要があったことから、この計測には含めていない。

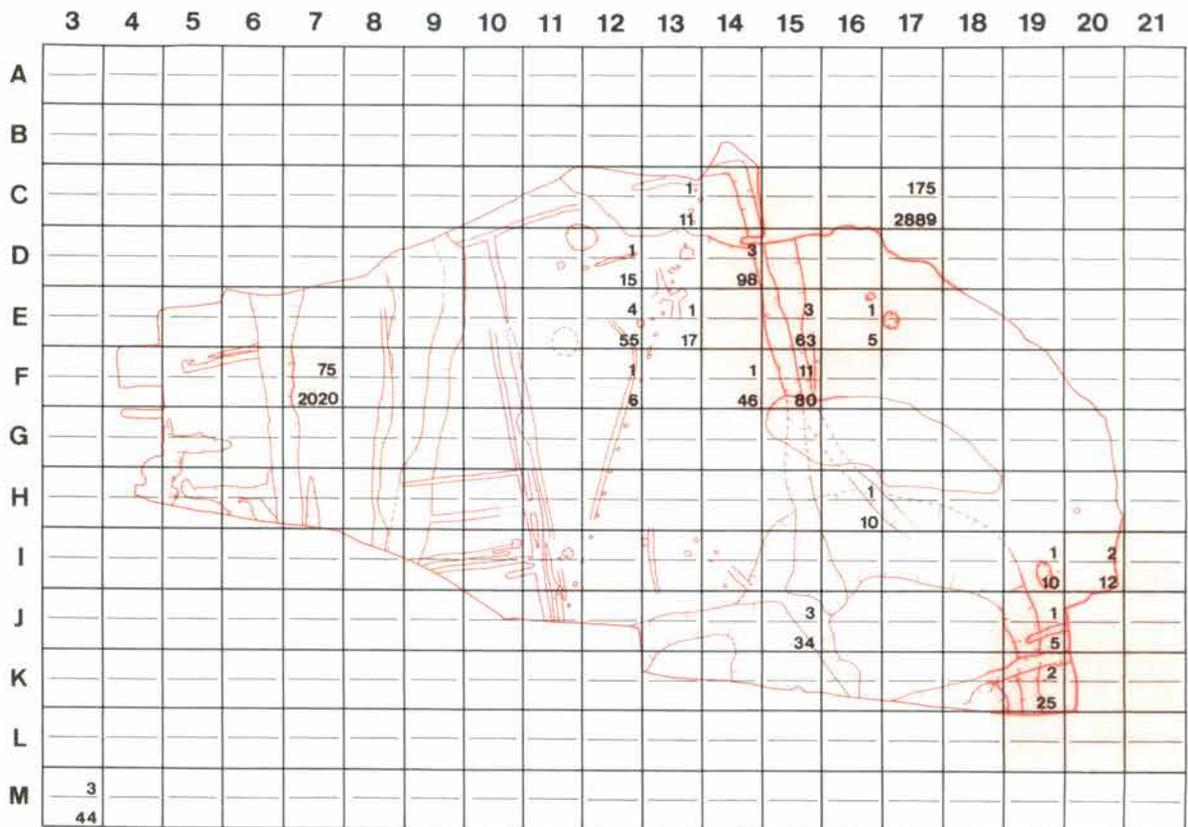
**包含層出土遺物の分布傾向** 第30～38図に包含層出土遺物の分布傾向を図示した。

**縄文土器** 縄文時代の土器は少ないながらもF-7区とC-17区に集中している。F-7区は中世の基盤層（⑥層）から一個体がまとまって出土したもので、C-17区は立会い調査に際して出土したものである。単独で一個体出土したF-7区を除けば全体に調査区東半に遺物が集中しており、C-17区を中心にした調査区北東部分とK-19区を中心にした調査区南東部分の崖沿いに特に集中し、その2箇所には生活の痕跡を読み取ることができる。遺構や排水溝、断ち割りなどの断面観察の結果から、その他の地点については土器の出土を確認できなかった。ただし、全面を縄紋時代の遺構面まで掘りさげたわけではない。

**弥生土器・古墳時代土師器** 基本的には調査区全体に遺物が分布するが、縄文時代に遺物の集中した崖沿いの部分は逆に分布が少ない。8・9区に遺物が集中するのは当期の溝であるSD22-2が流れるためである。遺構は確認できなかったが、C～H-12～18区にも遺物が集中する傾向が伺える。

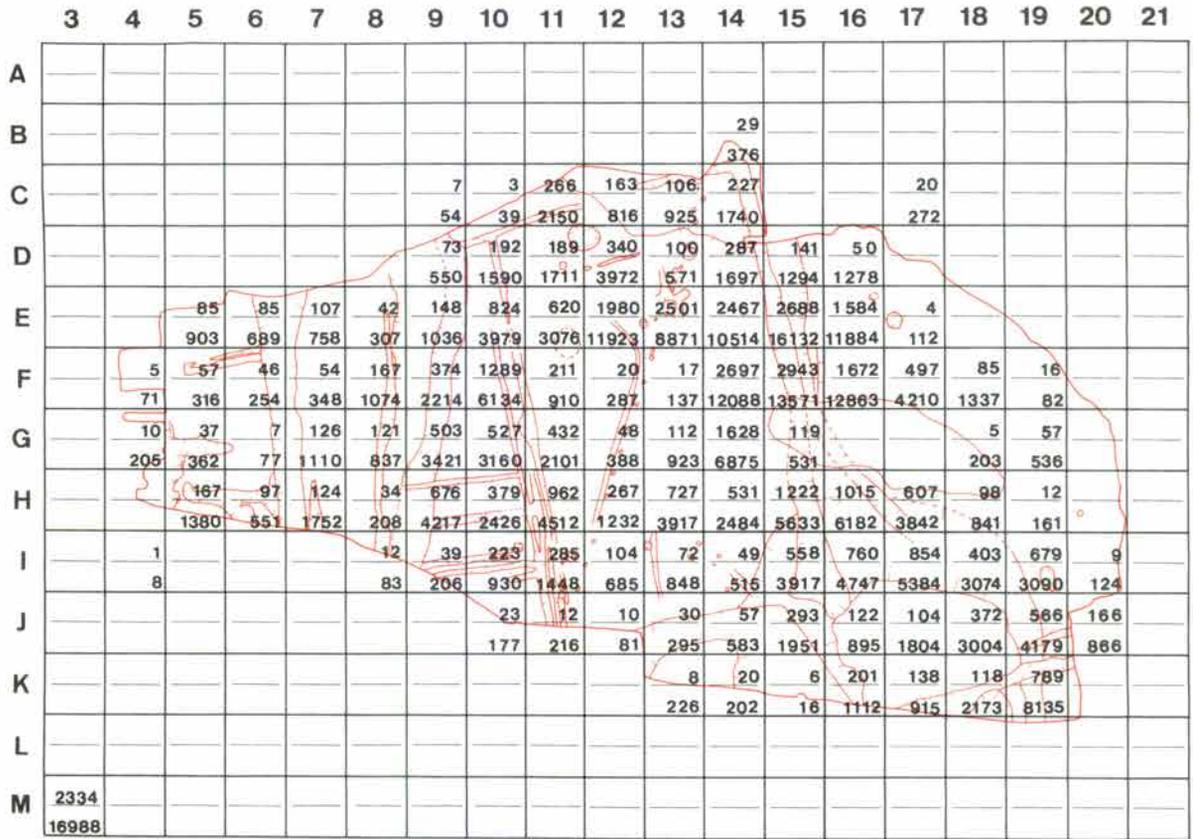


第29図 主要遺構概略図

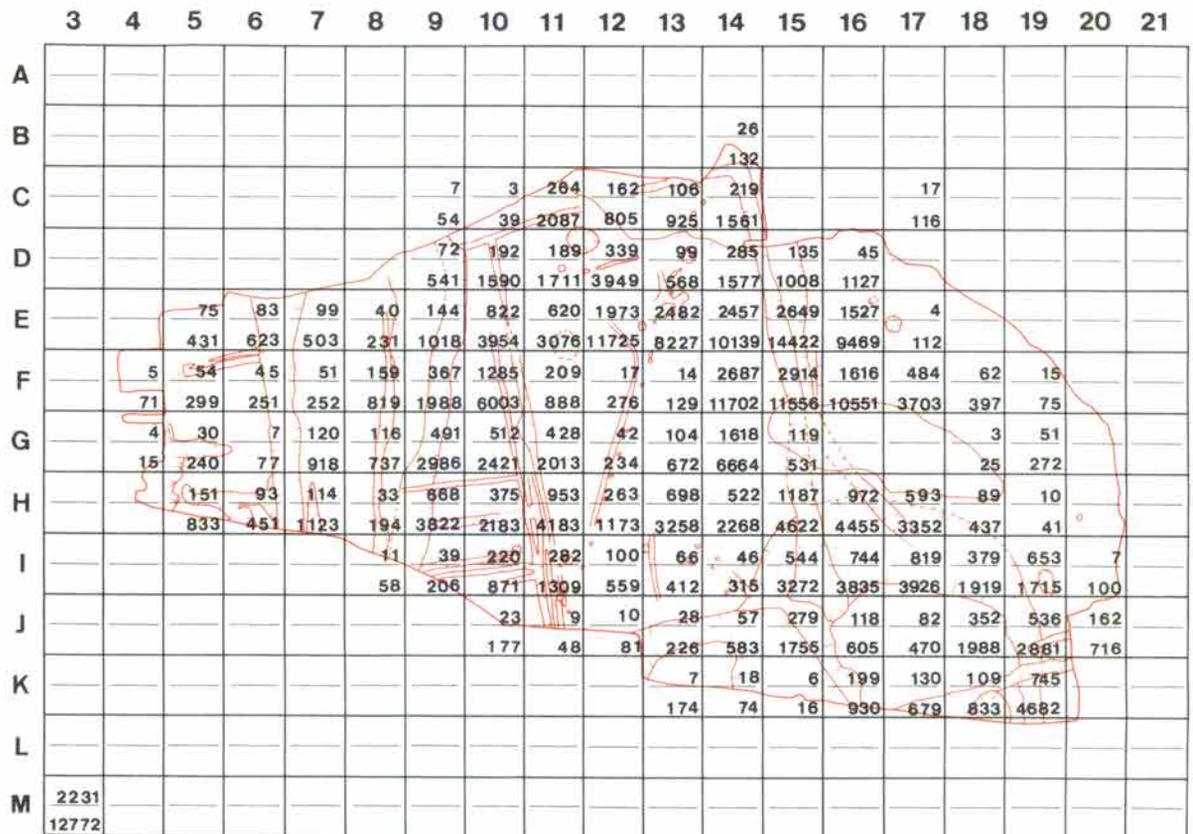


第30図 包含層出土縄文土器分布図





第33図 包含層出土中世やきもの分布図



第34図 包含層出土中世土師器分布図





表1 遺構出土やきもの計測表(1) 破片数(片)

番号	遺構名	合計	かわらけ	珠洲	越加	瀬美	白磁	青磁	青白	灰釉	染付	唐津	伊万	瓦器	信楽	羽釜	土鐘	不明	縄文	弥古	須恵	土師	不明	
1	SK01	40	37	2																			1	
2	SK02	1																					1	
3	SK03	6	6																					
4	SK04	61	60					1																
5	SK05	42	39																2		1			
6	SK07	1	1																					
7	SK08	53	53																					
8	SK09	20	19																				1	
9	SK10	18	18																					
10	SK11	4	4																					
11	SK12	4	4																					
12	SK13	6	3																				3	
13	SK16	1	1																					
14	SK20	10	3																				7	
15	SX01	187	174	11			1	1																
16	SX02	172	166	5																			1	
17	SX03	16	13																				3	
18	SX05	200	192		2																		6	
19	SX06	200	196	2																			2	
20	SX07	14	12																1		1			
21	SX08	60	57	3																				
22	SD01	1262	1191	41			6	5												15	3	1		
23	SD02	2317	2245	16	1		2	4											4	45				
24	SD03	1	1																					
25	SD35	1467	1411	21			1	4											1	29				
26	SD05	47	44																	3				
27	SD06	102	93	3																5	1			
28	SD07	6	6																					
29	SD08	32	32																					
30	SD11	11	11																					
31	SD14	191	185																		6			
32	SD15	289	286																		3			
33	SD16	219	219																					
34	SD17	191	189	1																	1			
35	SD18	1	1																					
36	SD20	46	45																		1			
37	SD22	1761	1387	3			1											1	18	351				
41	SD21	1135	1127	2																	6			
42	SD23	1316	1224	35			4	6		1									4	41			1	
46	SD24	1	1																					
47	SD25	384	369	5			1	2										1		6				
48	SD26	0																						
49	SD27	34	32																		2			
50	SD28	5	5																					
51	SD30	311	301	4			1	2	1												2			
52	SD31	2820	2716	55	1		8	13		1							1		6	17	1		1	
53	SD32	10	9																		1			
54	SD33	3	3																					
55	SD34	4	4																					
56	pit	66	56	3			1														6			
	総合計	15148	14251	212	4	1	27	37	0	0	2	0	0	0	0	0	0	1	2	36	567	5	1	2

38	SD22-1	194	179																	3	12			
39	SD22-2	162	27																	2	133			
40	SD22-3	21	5																		16			
	小計	377	211	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	161	0	0	0	
43	SD23上	620	586	16			1	4											2	11				
44	SD23中	23	22	1																				
45	SD23下	465	423	14			1	2											2	22			1	

表2 遺構出土やきもの計測表(2) 重量(グラム)

番号	遺構名	合計	かわらけ	珠洲	越加瀬	美白磁	青磁	青白灰	釉染付	唐津	伊万	瓦器	信楽	羽釜	土鍾	不明	縄文	弥古	須恵	土師	不明	
1	SK01	669	518	142																	9	
2	SK02	3																			3	
3	SK03	32	32																			
4	SK04	813	813				5															
5	SK05	454	396														44	14				
6	SK07	2	2																			
7	SK08	583	583																			
8	SK09	169	164																	5		
9	SK10	85	85																			
10	SK11	21	21																			
11	SK12	20	20																			
12	SK13	16	9																	7		
13	SK16	4	4																			
14	SK20	7	5																	2		
15	SX01	2535	2082	426			4	23														
16	SX02	2137	1761	222																	154	
17	SX03	159	130																		29	
18	SX05	1738	1065	619																	54	
19	SX06	1258	1134	107																	17	
20	SX07	92	50														34	8				
21	SX08	1732	321	1411																		
22	SD01	13869	11031	2584			45	44											107	7	51	
23	SD02	16359	15112	737	67		20	26									64	333				
24	SD03	6	6																			
25	SD35	9985	8630	1110			5	29											17	194		
26	SD05	401	381																		20	
27	SD06	978	787	150																33	8	
28	SD07	19	19																			
29	SD08	118	118																			
30	SD11	28	28																			
31	SD14	852	822																		30	
32	SD15	1516	1469																		47	
33	SD16	841	841																			
34	SD17	737	686	50																	1	
35	SD18	4	4																			
36	SD20	172	166																		6	
37	SD22	16252	10662	217			4									8	4564	905				
41	SD21	5304	5071	84																	149	
42	SD23	12667	9234	2959			13	141		1									35	279	5	
46	SD24	7	7																			
47	SD25	2668	2052	528			8	18								25				37		
48	SD26	0																				
49	SD27	192	184																		8	
50	SD28	17	17																			
51	SD30	4090	3702	313		4	28	5													38	
52	SD31	29497	24102	4447	60		59	130		3					146				35	164	347	4
53	SD32	40	35																		5	
54	SD33	66	66																			
55	SD34	55	55																			
56	pit	953	386	474			49														44	
	総合計	130227	104868	15961	746	4	235	421	0	0	4	0	0	0	0	146	33	6856	702	362	51	9

38	SD22-1	1781	1532																		19	230	
39	SD22-2	2010	204																			40	1766
40	SD22-3	203	38																			165	
	小計	3994	1774	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	59	2161
43	SD23上	4954	3767	986			1	114														17	69
44	SD23中	341	184	157																			
45	SD23下	5123	3796	1090			3	27														18	184

**須恵器** 出土量は少ないながらも、14区より東側の調査区東半部分に遺物が集中する傾向が伺える。図示しなかったが、灰釉陶器と古代の土師器は須恵器以上に出土量が少なく分布傾向を把握できなかった。須恵器の集中地区とも必ずしも重ならなかった。

**かわらけ** もっとも大量に出土しており、調査区全体に分布している。しかし、まんべんなく分布しているわけではなく、とくに集中するかたよった部分がいくつかある。E, F-16区に集中しているのはSD01や盛土層を認識できずに包含層として取り上げてしまったためと思われるが、遺構と重ならないE, F, G-14区には検出できなかった遺構が存在したか、土器溜まりが存在した可能性が高い。

**珠洲焼** 調査区全体から出土するが、調査区東半にやや集中する傾向が認められる。

**越前・加賀焼** 出土量は少なく、分布傾向は把握できない。なお、越前焼と加賀焼を一括して扱ったが、ほとんどが越前焼で加賀焼は含まれていないと考えられる。時期的にも室町期に限られるだろう。

**青磁・白磁** 出土量は少なく、分布傾向を把握できない。青磁は調査区の中央、10～14区には少なくその両側に分布する傾向があるが、規模の大きな溝に伴っている可能性が高い。白磁についてはそうした傾向すら認めがたい。

上記のように各遺物の分布傾向を紹介したが、縄文土器、弥生土器及び古墳時代土師器、須恵器については調査区内にそれぞれ集中地区を認めることができた。中世の遺物については調査区全体に分布し、規模の大きな溝の付近に集中する傾向も一部に認められる。中世の包含層は確実に2面存在し、本来上層と下層に分けて分布傾向を探るべきであるが、分層できずに取り上げた地区も多かったため、ここでは両者を一緒にした。そのため、本来あらわれるべき特徴がならされてしまった可能性も否定できないが上層の遺物は極めて少ないため、ほぼ下層の状況を示していると想定される。

**出土遺物の量比** 計測した比率を表3・4に示した。比率を比べる場合、それぞれのやきものの特性が問題となる。「かわらけ」のように小さく軽く割れやすいものや、磁器のようにやや小さいが「かわらけ」よりも重くて割れにくいもの、珠洲焼等の中世陶器の甕のように極めて大きく重いものなどがあり、それぞれ遺物の割れ具合が異なる。「かわらけ」は一個体の重さがもっとも軽いため、重量比では著しく低い比率しか示さない。それに比べ、珠洲焼の甕は一個体の重さが極めて重いため、「かわらけ」に比べて重量比が著しく高くなる。また、小さいものは大きいものに比べて、同じ程度割れても破片の数が少ないのが一般的である。また、小さいものは破片も当然小さく、発掘現場で取り上げられずに終わるものも多いと推定される。そのため、破片数計測法と重量計測法では実体に比べて小さなやきものの比率が低く、大きなやきものの比率が高くなると想定できる。特に、破片数比以上に重量比では大きな格差がでると推定される。そのため、破片数比と重量比では本来の比率と一致しない可能性が高い。こうした欠点を補うためには、個体識別法や口縁部計測法など異なる計測法と比較する必要があるが、果たせなかった。ここで示す計測値は、そうした限界をもった大まかな比率と全体的な傾向を知る上での目安にすぎない。

総合計のうち、中世のやきものと考えられるものは、破片数で96.655%、重量で94.286%を占める。中世以外のものは僅かだが、弥生土器～古墳時代土師器が破片数2.634%、重量3.729%と次に多く、縄

表3 上町カイダ遺跡出土やきもの計測表1 (全時代)

	総合計	かわらけ	珠洲焼	越前焼	青磁	白磁	青白磁	瀬戸美濃	羽釜	瓦器	土錘	中世不明
破片数	62,118	58,747	981	30	139	94	1	27	1	1	1	19
(%)	100.000	94.573	1.579	0.048	0.224	0.151	0.002	0.043	0.002	0.002	0.002	0.031
重量g	420,085	333,935	56,875	2,569	1,418	665	9	274	27	6	146	151
(%)	100.000	79.492	13.539	0.612	0.338	0.158	0.002	0.065	0.006	0.001	0.035	0.036

	縄文	弥～古	須恵器	土師器	灰釉	染付	唐津	伊万里	信楽	不明
破片数	327	1,636	59	7	6	24	8	1	1	8
(%)	0.526	0.264	0.095	0.011	0.010	0.039	0.013	0.002	0.002	0.001
重量g	6,184	15,665	1,508	199	26	164	181	9	23	51
(%)	1.472	3.729	0.359	0.047	0.006	0.039	0.043	0.002	0.005	0.012

表4 上町カイダ遺跡出土やきもの計測表2 (中世)

	中世合計	かわらけ	珠洲焼	越前焼	青磁	白磁	青白磁	瀬戸美濃	羽釜	瓦器	土錘	中世不明
破片数	60,041	58,747	981	30	139	94	1	27	1	1	1	19
(%)	100.000	97.845	1.634	0.050	0.232	0.157	0.002	0.045	0.002	0.002	0.002	0.032
重量g	396,075	333,935	56,875	2,569	1,418	665	9	274	27	6	146	151
(%)	100.000	84.311	14.360	0.649	0.358	0.168	0.002	0.069	0.007	0.002	0.037	0.038

文土器が破片数0.526%、重量1.472%でそれに続く。それ以下は極めて僅かにしか確認できない。古代は須恵器・土師器・灰釉を合わせて破片数0.116%、重量0.412%にすぎない。

中世のやきものでは、「かわらけ」の比率が著しく高い。中世だけの比率では、破片数で97.845%、重量で84.311%を占める。それにつぐのは珠洲焼で総合計の破片数で1.634%、重量で14.360%を占める。「かわらけ」との格差が著しいが、その他のやきものほとんどが破片数、重量とも1%未満であることからすれば、かなりの割合を占めていると考えてよいだろう。珠洲焼の次は極めて微量であるが、破片数では青磁、白磁、越前焼、瀬戸美濃焼とつづく。重量では越前焼、青磁、白磁、瀬戸美濃焼とつづく。それ以下は極々微量に存在する。越前焼は中世でも新しい段階の墓やその関連遺構に伴うものと考えられる。少なくとも古い遺構であるSD31やSD02からの出土は確認していない。瀬戸美濃焼も同様である可能性がある。

中世の焼物比率は、当遺跡の存続幅内のものを平均化したものとは言え、そのほとんどが13世紀に限定される。こうした「かわらけ」の9割を越える著しい高比率は北陸のなかでも極めて特異な存在である。計測値が公表された例のなかでは最高比率であると思われる。特殊な木製品の多さも含めて当遺跡の性格を雄弁に物語っているものと考えられる。

## 第2節 金属器

951～968は扉等の金具でC・B-14区の礫敷層の上面から出土した。近代以降のものであろう。

969～982は遺構に伴う鉄製品である。969はSD31、970はSD21の東側テラス、971はE-6区のピット35、972・974はSD23、973はSD14、975～982はSX05から出土しており、中世に逆上る遺物であることは明確である。SX05から出土した975～977は楔状の鉄製品であり、975以外はほぼ完形である。E-11・12区の包含層出土品（1014～1017）も本来ならばSX05に伴うものと推定される。少なくとも8個以上集中しており、複数で使用するものであることが分かる。板材の側面同志を接合するために用いるのであろうか。この他に使用状態で出土した例は確認できなかったし、木製品の使用痕などを検討できなかったため、用途は不明である。しかし、SX05という墓遺構に伴うことから棺やその他の墓遺構に伴うものと推定される。

983～1049は包含層などから出土しており、1003や1023などの新しい時代のものが若干混入しているが、ほとんどが中世に含まれると推定される。

985・986・1002・1003は青銅製だが、それ以外はすべて鉄製品である。985（I-12区出土）は把手状のもので側面に穴が開けられている。986（I-12区出土）は金属加工もしくは火災等のさいに歪んだものであろうか。1002（G-14区出土）は鍵であろう。1003（F-8区出土）は煙管の吸い口部分であろう。

984（F-8区石敷層上層出土）は鉄線を撚ったもので、表面は錆、もしくは顔料のため、赤い。

釘には緩やかに曲がるもの、90度に折れ曲がるもの、180度に完全に折り曲げてしまうものなど様々である。それらはいずれも頭部が潰れており、打ちつけられたことが明確である。また1039や1040のようにもともと頭部が作られておらず両端が尖ったものもある。これらは、何らかの使用方法をそれぞれに反映しているのだろう。木目などが観察できず、使用状態を復元することはできなかった。木に打ちつけたまま埋没したのであれば、木目がもう少し残ると思われるが、ほとんど確認できなかった。残りが悪いためかも知れないが、地金として回収されてリサイクル前に埋没した可能性も残るだろう。緩やかに曲がる例などは木材から抜き取る際に曲がったと考えれば理解しやすい。

釘のなかには1047のように頭部が潰れていないもの、すなわち未使用と思われる例もある。992も未使用の可能性がある。鉄滓の出土と合わせて、当遺跡で釘が製作されていた可能性も想定できる。しかし、未使用の釘の量が少ない点が難点である。

出土した金属製品を出土地区ごとに分けると以下のようなになる。

〔5区〕（E-5区）1038 〔6区〕なし 〔7区〕（E-7区）1022 〔8区〕（F-8区）984・990・1003、（G-8区）1047 〔9区〕（F-9区）991・997、（G-9区）988、（H-9区）1005 〔10区〕（F-10区）994、（G-10区）1012 〔11区〕（E-11区）1015・1016・1017、（F-11区）1029、（H-11区）1026 〔12区〕（C-12区）1008、（E-12区）1014、（I-12区）985・986・996 〔13区〕（E-13区）1031・（F-13区）987・989・1000・1001・1013、（G-13区）1019、（H-13区）1027・1044・1045、（I-13区）1037 〔14区〕（C-14区）1025・1048、（D-14区）1103、（E-14区）1004・1034・1035・1036、（F-14区）1049、（G-14区）1002・1009、（H-14区）1028 〔15区〕（E-15区）1020、（F-15区）1041、（G-15区）1033、（I-15区）1043、（J-15区）1042 〔16区〕（E-16区）998・1011・1040、（F-16区）983・993・1021・1023、（H-16区）1007 〔17

区] (K-17区) 1006・1039・1046 [18区] (K-18区) 1024 [19区] (F-19区) 992 (出土地区不明) 995・999・1010・1018・1032

以上は図示したものの分布傾向にすぎないが、全体の傾向は大まかに示していると思われる。5～10区までは分布が比較的少ないが、11～16区にかけてはやや多い。調査区の北側に多く、南側に少ない傾向が読み取れる。12～14区は大きな遺構が存在しないにも係わらず釘がやや多い傾向にあることは、15～16区や9～11区とは異なっている。

#### 鉄滓 (1077～1082)

1077～1080はSD23から出土している。1081・1082はSD34から出土している。鉄滓は包含層出土のものもあわせて全部でパン・ケース1箱弱出土している。椀型滓や細かな滓があるが、鍛冶関連の鉄滓と推定される。未使用と思われる釘が出土している点などとあわせて、当遺跡で何らかの建築工事に際して鍛冶が行われたことを推定させる。

### 第3節 古銭

古銭については表5のとおりである。全部で26枚確認され、そのうち3枚の銭名が不明である。五銖銭、開元通宝、永楽通宝を除けば、11・12世紀の北宋銭である。1055・1057・1061・1064・1073はE-15区で検出された人骨に副葬された可能性が高い。遺構を確認できず人骨だけを検出したため、古銭も一部しか共伴を確認できなかった。本来はなんらかの埋葬遺構に伴っていたと思われる。

#### 五銖銭について

SD02から出土した五銖銭は古銭のなかでも注目される。重量は2.1g、直径縦2.46cm、直径横2.47cm、内径縦1.01cm、内径横1.00cmを計る。五銖銭のなかでは薄く、軽い部類に含まれる。そのため、文字も肉が薄く、扁平な印象を与える。

この五銖銭は、岡内三真氏分類のI c類 (B.C.113年頃上林三官の一つで製作したもの) に相当すると考えられる (岡内1982)。しかし、次のように幾つかの問題点が残る。

通常五銖銭が3gあるのにたいして2.1gと軽く、厚さも薄い。文字の彫りも浅い。京都大学文学部所蔵の五銖銭を菱田哲郎氏の御好意で観察させて頂いたところ、このような例は少なかった。一部に薄く、軽いものがあるが、文字の形態が同一のものは確認できなかった。特に、金片の4つの点が長く伸びることは、五銖銭のなかでも新しい傾向と考えられているが、当例はI類としてはかなり長く伸びており、II類に近い。また、穿上横文の五銖銭は金片の頭部が矢尻状になるが、当例は三角形である。三角形になる例はそれ以後の新しいものに認められる。「南京五銖銭」とされる銭范にやや類似した穿上横文の例があるが、出土地が南京というだけで時期については不明確のようである。

このように、厳密に言うならば岡内分類に当てはまらない部分がある。分類を細分化できる資料になる可能性もあるが、今のところ総合的にI c類に分類されるものの、やや特異な例と言わざるを得ない。厳密な分類や位置付けは今後の研究を待ちたい。

渡来時期についても、弥生時代か、中世かという問題がある。中世渡来銭のなかに五銖銭や貨泉が混

表5 上町カイダ遺跡出土古銭の銭貨名と出土位置

番号	銭貨名	初鑄年	出土地区・遺構・層位	備考
1050	五銖銭	B.C.119～	H-15 SD02 灰色砂層	残り極めて良好。
1051	開元通寶	621～	K-19 SX06 (粃殻集中区)	
1052	開元通寶	621～	K-11 SX05 上面	
1053	開元通寶か	621～	H-10	
1054	祥符元寶	1008～	I-17付近礫層上面	周囲欠ける。
1055	天禧通寶	1017～21	E-15 包含層人骨付近	
1056	皇宋通寶	1038～	I, J-14, 15 排土	
1057	皇宋通寶	1038～	E-15 包含層人骨付近	
1058	皇宋通寶	1038～	F-11 SD21	
1059	嘉祐通寶	1056～63	E, F-8, 9, 10 排土	
1060	照寧元寶	1068～	I-8	
1061	元豊通寶	1078～	E-15 包含層人骨付近	
1062	元豊通寶	1078～	I-15 包含層	
1063	元豊通寶	1078～	H-13 包含層	
1064	元祐通寶	1086～	E-15 包含層人骨付近	
1065	元祐通寶	1086～	調査区北側排水溝	
1066	元祐通寶	1086～	G-6 SD32 下層	
1067	聖宋元寶	1101～	J-16 SD32	
1068	聖宋元寶	1101～	調査区南半 排土	
1069	永樂通寶	1408～	I-16 礫層面	
1070	?	?	G-13 包含層上面	判読不可。以上拓本有
1071	?	?	H-15 包含層	判読不可。以上拓本無
1072	皇宋通寶	1038～	J-14 SD30	
1073	天聖元寶	1023～	E-15 包含層人骨付近	
1074	祥符通寶	1008～	H-15 礫層面上層	
1075	?	?	K-18 包含層	判読不可。

入する例はいくつか報告例があるが、そのほとんどが大量の古銭のなかのごく一部にすぎない。例えば、広島県・草戸千軒遺跡では1,659枚のうち、五銖銭5枚、貨泉1枚、あわせても総量の0.36%にすぎない(檀上1981)。徳島県・大里では70,070枚のうち、五銖銭6枚で総量の0.00009%にすぎない(海南町1985)。県内の例では鹿島郡鳥屋町・春木出土の渡来銭がある。約6万枚のうち、2枚(後漢1・梁1)確認されている(高木・小西1955)。この他、京都府・平安京左京八条三坊七町や北海道志海苔などで確認されているが、いずれも何千、何万枚のうちの数枚にすぎない。草戸千軒の例が比較的高い比率であると言えよう。

当遺跡では30枚足らずの古銭しか出土しておらず、しかも極めて残りの良い状態で出土している点の特異であろう。弥生時代の遺物が中世の遺跡に混入した可能性もあるが、弥生時代中期後半～後期の遺物・遺構しか確認されていないため、五銖銭がこの時期に渡来した可能性は低いだろう。

〔参考引用文献〕

岡内三真 1982 「漢代五銖銭の研究」『朝鮮学報』第百二輯

檀上 誠 1981 「草戸千軒遺跡出土の古銭」『草戸千軒』No.92 広島県草戸千軒町遺跡調査研究事務所

徳島県海部郡海南町教育委員会 1985 『大里古銭報告書』

高木 廣・小西英一 1955 「春木出土の中国古銭について」『鳥屋町史』石川県鹿島郡鳥屋町

## 第4節 石製品

砥石（1083～1089・1113～1122） 1083はSD31から、1084・1113はSD35から、1085はピット52から、1089はSD01から、1118はI-19の断ち割りから出土しておりSD31に含まれていた可能性が高い。その他は包含層からの出土である。

1083～1089まではやや大きな砥石であるが、1113～1121は小型で長方形の薄い石材が多い。1122は大きな砥石が割れたものであろうか。

硯（1111・1112） いずれも包含層から出土した。1111は使用のため片面がすり減って大きく窪んでいる。

基石状石（1099～1110） 黒色系統でつやのある石である。明瞭な加工痕は確認できない。これが基石であるとする対になる白色の石も必要となるが全く確認できなかった。周辺の地盤に普通に含まれる石とは思えず、持ち運ばれてきた可能性が高いと推定している。

1100・1102・1106・1109・1110がF-16の包含層から、1103・1107がF-15の包含層から出土しており、この地点に集中して出土している。1101はF-16区のSD01から、1105はI-15区のSD31から、1099はK-18区の包含層から、1108は北側の排水溝から出土している。

このことから、基本的に調査区の東に集中しており、特にF-15・16区には多いことが分かる。

縄紋・弥生時代の石器類（1090～1098）

1090の石鏃はSD22-2から出土し、明らかに弥生時代に属することが分かる。1097はSD02から出土したが中世の溝掘削に際して古い遺構や包含層を削平したのであろう。1091はF-15区、1092はH-15区、1094はK-19区、1096は北側の排水溝、1095はI-13区、1098はF-16区のそれぞれの包含層などから出土している。

五輪塔（1123・1124） いずれも包含層の上層部分から出土した。1123はE-15から、1124はH-17から出土した。発掘中に唐川明史氏に見て頂く機会があり、いずれも室町時代に下がるものであろうとご教示頂いた。中世の上層遺構としてこのような中世墳墓が何らかの形で形成されていたと思われる。

礎石（1125） F-16区のPW-14（柱痕の残っているピットにPW番号をふった）の柱穴の底にひかれていた礎板かわりの石である。

## 第5節 骨

包含層からの出土で時期を特定できないが、イルカと思われる骨が出土している（写真図版27）。かつては熊木川を遡ってイルカが上がってきたという地元の方々の話も伺ったが、出土状況などからみて最近のものである可能性は低く、本来は縄文時代の包含層に含まれていたものであろう。ただし、縄文土器との伴出例や、縄文時代の包含層からの出土は確認できなかった。

## 第6節 縄文土器

### 縄文土器

縄文土器はF-7区より出土した1個体以外は調査区北拡張区(C-17区)における試掘の際に出土したものであり、遺構との関係は不明である。時期は縄文時代前期後葉から中期初頭に位置づけられるものである。その土器の器表面は撚糸を転がす、粘土紐を貼り付ける、あるいは竹管を押し引いたりすることで描出された文様が施されている。以下、器面に対するこれら文様加飾要素により分類を行った。また土器胎土中の砂粒の粒径とその多少、石英、海綿骨片の有無について図化土器を対象に肉眼および30倍のスコープをもちいた観察をあわせて行った。

1類(1130)：器面をナデにより仕上げるもの。器厚7mmを測る焼成堅緻なものであり、内面にはナデを施す。外面はハケ状具によりナデた後、横位に雑なナデを加えるもので、器外面に輪積み痕を残すという前期後葉蜆ヶ森Ⅱ式<sup>①</sup>の特徴を備える。胎土：海綿骨片を含む。

2類(1131~1135)：小径の半載竹管による細半隆起線によって文様を描くもの。2類は1131のように鋸歯状陰刻が途中で途切れるなど、前期後葉福浦上層式の標識的文様である鋸歯状陰刻文が他の細半隆起線に紛れた一文様要素となる段階のものである。底部まで細半隆起線が加えられる福浦上層Ⅱb式期<sup>②</sup>に比定できる。1135は口縁部に指押さえを加えるものである。胎土：いずれも石英を多く含み海綿骨片も全てに観察できる。

3類(1136~1141)：縄文地または無文地上に粘上紐を貼り付け文様を描くもので、縄文時代前期後葉福浦上層式期に位置付けられる<sup>③</sup>文様要素である。その内容は先行する蜆ヶ森式からの流れにあり、福浦上層Ⅰ式ととらえられている結節状浮線文系のa類(1136・1137)と、より後出的な、いわゆる「真脇式」<sup>④</sup>として朝日下層式に続く粘土紐貼付文系土器b類(1138~1141)とに区別できる。1137は内湾する口縁部が波状となるもので器肉が6・7mmと厚く、重量のあるもので淡橙褐色に発色し他と異なる。また、1141は器厚5mm、くの字にくびれる頸部に粘土紐をめぐらしこれを上下よりつまむことでジグザグ文とする。丸みをもつ胴部には羽状縄文を施し、内面には丁寧に磨きを加えており、北白川Ⅲ式類似の鉢形器形を推定させるものである。胎土：3類では1137・1141以外は海綿骨片は含まない。またb類のものは2mm大の砂粒を多く含むという傾向が指摘できる。

4類(1129・1147~1153)：半載竹管による半隆起線により文様を構成するもので中期初頭の新保式期<sup>⑤</sup>に比定できる。器形はいずれも深鉢であるがその口縁部形態はキャリパー状を呈するもの(1147・1153)、外傾させるのみのも(1150・1151)の2種が認められる。1151は波状口縁というよりは平縁に山形の突出部を貼り付けたものとなろう。1129はF-7区SD-23下層から出土したもので口縁部を外傾させ、鼓状の張りのある胴部をもつ。器外面には三角形のヘラ刻みを加えることによって描出された蓮花状文を口縁部・頸部の2段にわたってめぐらし、その間を半隆起線・無文帯で埋める。また、口縁部より半隆起線を胴部中位まで垂下させる。この土器については中期前葉新崎式<sup>⑥</sup>としてとらえられよう。胎土：土器によりばらつきがみられる。

5類：上記文様要素以外のものを一括したのであるが、器厚の違いにより2分できる。a類(1142~

1146) は底部片であり、1・2・3類同様器肉は薄く前期後葉の特徴を持つ。その器形は底部から垂直に胴部へと折れ上がるもので、底部は円板内端に胴部粘土を重ねる。胴部との接着部への内面補強の薄い、いわゆる円板状貼り付け底<sup>7)</sup>であり、これらの土器を倒立して口縁部より製作し最後に底部円板を貼り付けたことが考えられるものである。またb類(1154~1159)は4類と同時期に位置付けられるもので、器肉が厚く、磨耗を強く受けたものであり、木目状捺糸文(1154・1157)、網目状捺糸文(1155・1156・1159)、羽状縄文(1158)を施すものがある。1154および1157は口縁部形態は不明であるが頸部がくの字状に屈曲し鼓状に張る胴部をもつものと推定され、くびれ部に貼り付けた粘土紐上に1154では爪形文を、1157では縦位刻みを加えている。胎土：a類では全てに海綿骨片が認められ、また石英粒を多量に含むものが多いなど色調も含め2類に近い傾向がうかがえる。b類では同様の網目状捺糸文を施す1155と1156においても、1155は砂粒の含みが少なく良好な胎土で海綿骨片を含まないのに対して、1129では海綿骨片および2mm大の砂粒を含み粗い胎土であるなど、文様の特徴と胎土との関係は認められない。他類において文様と胎土との関係が一応指摘できたことから、4・5b類胎土におけるこの器形・文様との不对応については本遺跡の待徴と考えたい。

以上、縄文土器を5類に分類し時間的推移をとらえてきた。1・2・3・5a類土器の器壁は厚さ5~8mmと薄く前期の土器の特徴を示しており、磨耗を受けず堅緻な焼成である。これに対して中期初頭新保式に比定した4・5b類土器は器厚7~10mmと厚いもので、とくに5b類土器においてはその焼成は甘く、磨耗を受けるものが多い。また、本遺跡では縄文時代前期末朝日下層式期<sup>8)</sup>に比定できる土器は検出できなかった。従来より朝日下層式土器を出土する遺跡数・遺物出土量の少なさは指摘されており<sup>9)</sup>、このことについては他の型式に比して朝日下層式期に当てられる時間幅が相対的に短いためではないかと考える。「真脇式」土器の一部は朝日下層式に含まれる<sup>10)</sup>という理解もある。朝日下層式および「真脇式」土器の文様構成・分布域の検討をさらに深め、これに先後する型式との関係を明らかにしていく必要がある。

#### 土器の計測

本遺跡出土土器は大きく縄文時代前期後葉の蜆ヶ森式後半(1類)、福浦上層式土器(2・3・5a類)、中期前葉新保式(4・5b類)にかけての土器に分けられた。次に、これら土器のうちF-7区出土の一個体(1129)を除いた北拡張区出土土器を対象に破片数、および重量の計測を行った。計測の方法として破片数については親指の爪より大きいものを対象にし、重量については全破片数を対象にして、それぞれ各分類毎に集計した。その結果が第6表であり、これを構成比で表したのが第39図である。これによってうかがえる本遺跡の状況を若干記していきたい。

まず総破片数は210片、総重量2688gである。破片数比グラフからは蜆ヶ森式期末に少量、福浦上層式期、新保式期においては点数を増しほぼ同率を占めていることが読み取れる。重量比でも概ねその傾向が指摘できよう。ただ、破片数比に比べ重量比において5a・b類がその割合を増している。これは、5a類とし図化した5点の底部のうち3点が1/2以上残存する遺存良好品であることにより、5b類では厚い器肉をもった大片が多いことによるものであろう。また斜向縄文施文のみのもの及び分類不能

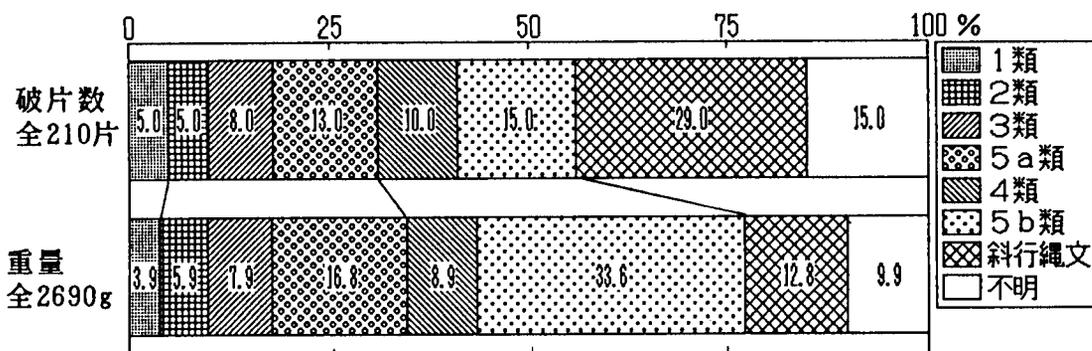
土器は点数の多い割に重量比ではその割合を減じており、細片が多いことが表れている。これらの結果から本遺跡における縄文時代の活動は一時的な滞在としてではなく、前期後葉蛭ヶ森式末に始まり、中期初頭に終息するまでの継続的な定着した生活として営まれたと推測したい。

(注)

- (1) 越坂一也 1986 「第4群土器 蛭ヶ森式期」『石川県能登町真脇遺跡』能登町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
- (2) 小島俊彰 1986 「第5群土器 福浦上層式期」『石川県能登町真脇遺跡』能登町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
- (3) 高堀勝喜 1986 「北陸の縄文土器編年」『石川県能登町真脇遺跡』能登町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
- (4) 小島俊彰 1986 「第6群土器 真脇式期」『石川県能登町真脇遺跡』能登町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
- (5) 加藤三千雄 1986 「第8群土器 新保式期」『石川県能登町真脇遺跡』能登町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
- (6) 山田芳和 1986 「第9群土器 新崎式期」『石川県能登町真脇遺跡』能登町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
- (7) 桜井仁吉 1981 「新崎式土器のパターン認識Ⅱ」『大境』第7号 富山考古学会
- (8) 小島俊彰 1986 「第7群土器 朝日下層式期」『石川県能登町真脇遺跡』能登町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
- (9) 橋本澄夫 1985 「北陸地方における縄文世界の動態に関するノート」『石川考古学研究会々誌』第28号
- (10) 森 秀典 1989 『吉峰遺跡—第6次発掘調査概要—』立山町文化財調査報告書第9冊 立山町教育委員会

第6表 北拡張区出土縄文土器破片数・重量

分類	1類	2類	3類	5a類	4類	5b類	縄文	不明	合計
破片数	10	11	16	28	21	32	61	31	210
%	5	5	8	13	10	15	29	15	100
重量g	110	148	215	455	231	902	351	276	2688
%	4	6	8	17	9	34	13	10	100



第7図 北拡張区出土縄文土器構成比

## 第7節 木製品

多量の木製品、自然遺物が出土した。図示したもの以外にも多くの木製品があるが、十分に図化することができなかった点をご了承いただきたい。

**木簡など** 1160は、H-16区のSD31から出土した。肉眼でもわずかに墨書が確認されるが、その読みについては1164の読みとともに平川南氏の報告を参照して頂きたい。1161はI-18区のSD31から出土したが両面に習書などが何度も行われており、解読できない。1162はI-15区のSD31から出土した。両面に文字が書かれているが、半分に欠けており、判読できない。1163もI-15区のSD31から出土した。曲物の側板のような板片に2文字以上の文字が書かれている。1164はF-16区のSD01から出土した。将棋の駒のような形状をしており、片面のみに文字が書かれている。1165はH-15区のSD31から出土した。側面に木釘が残っている。長方形の形状から、指し物の身の底部、もしくは蓋の天井の可能性が想定される。1166はJ-19区のSD31から出土した板片である。欠けているため判読できない。1167はI-17区のSD31から出土した角材状の木製品である。先端は削られているが側面などは割り取った痕跡がある。文字は不鮮明で判読できなかった。1168はI-16区のSD31から出土した板材である。両面に戯画が描かれている。片面には馬などの脚が描かれ、その裏面には人の腕の一部と不明物が描かれている。1169はI-18区のSD31から出土した人形である。両面とも板面を削り出した痕跡が明瞭に残っており、片面だけに絵を描いている。1170はH-17区のSD31と思われる部分から出土した。曲物の底板の両面に細い線で同心円状の模様が描かれている。1171はI-15区のSD31から出土した。薄い板材で1170より太い同心円状の模様が片面に描かれている。

**漆器** 漆器についてはできる限り図化するように努めたが、漆膜だけが残ったものや碎片化したものが多く、図化に耐えない資料も多かった。残りの悪い資料については発掘現場でも取りこぼしがあったと思われる。比較的残りの良いものだけを図化した。

1172は近代以降の筭で、螺鈿蒔絵や黒漆の残りはよい。水漬け状態にしておくと水が黒くなり、下地が溶けだしているようである。951～968の金具とともにB・C-14・15から出土した。

1173～1185は漆器小皿で、口径は1176のみ14.6cmとやや大きいが12.1～12.8cm程度に集中する。器高は1.3～2.1cm程度で、白木皿である1182だけが2.6cmと高い。1174・1175・1177・1179のように比較的浅い器高1.3～1.5cm程度のものと1173・1176・1180のように器高2.0cm程度の二つの大別できる。形態的には土師器小皿に類似するように思われるが、土師器小皿は口径が7～9.5cm程度で漆器より小さい。器高はよく似ているが全体の形態・寸法は異なっている。口径は、土師器中皿に類似しているが器高は土師器中皿の低い例に近い。

1173以下の漆器は黒漆の上に赤漆で模様を描くものである。1173・1174はF-16区のSD01から出土した黒漆塗り皿である。1175はI-15区のSD31から出土した黒漆塗り皿である。1176はH-15区のSD02から出土した黒漆塗り皿であり、内面に朱漆で記号状の模様が描かれている。1177・1178・1180はI-18区のSD31から出土した黒漆塗り皿である。1180の内面には記号状の模様が描かれている。1179はG-13区の包含層から、1181はE-16区の包含層から出土した黒漆塗り皿である。1182はK-18区の包含層から出土した白木の

皿である。白木の食器はこれが唯一の例である。木地の残りがよく、器壁が厚いこと、外面にロクロ挽きの痕跡を模様のようにして残していることなど、明らかに他の漆器皿とは異なり、漆が剥落したものではないことが分かる。1183～1185は黒漆塗りで、皿の底部と推定される。1183はF-18区の包含層から出土した。1184はI-16区のSD31から出土した。1185はK-15区周辺のSD30から出土した。1186はJ-15区を重機で断ち割っている際に出土したため、遺構・層位は不明である。椀の底部と推定される。1187はF-11区のSD21から出土した黒漆塗りの椀の破片である。1188はSD31から出土した（地区不明）。両面に朱漆で模様を描いた黒漆塗りの椀の破片である。1189はH-18区のSD31から出土した。高台部分が剥落している。1190はH-12区のSD02最下層から出土した黒漆塗りの椀である。口径19.1cm、残存器高7.0cm、高台径10.8cmを計る。土師器椀などに比較してはるかに大型である。1191～1193は同様な黒漆塗りの椀の底部付近の破片と思われる。1191はI-16区のSD02から出土した。1192はI-19区のSD31から出土した。1193はI-19区の断ち割りから出土した。1194は包含層から出土している（地区不明）。

1195はG-13区の包含層から出土した平面が方形の宝珠つまみ状の漆器である。黒漆のみで身が厚いが、蓋とした場合の内面部分は黒漆が塗られてみらず、欠けている可能性がある。本来はもっと厚かったのだろう。

SK01出土木製品（1196～1200） 下駄（1196）、付札状木製品（1197）、箸（1198～1200）などが出土している。下駄は歯の部分が磨耗してすり減っている。付札状木製品は赤外線撮影したが墨書は確認できなかった。

SD01出土木製品（1201～1209、1211～1215） 先端の尖った付札状木製品（1201）、下駄（1202・1203・1215）、杓子（1204）、曲物底板（1205・1209）、箸（1206～1208）、板材（1211）、棒状木製品（1212）、折敷（1214）、えぐり入り木製品（1213）などが出土している。1213は先端のえぐり部分を別材と組み合わせる指し物的な製品であろうか。

SD02出土木製品（1216・1217） 板材（1216）、篋状木製品（1217）などが出土している。

SD03出土木製品（1218） 1218は篋状木製品が欠けたものであろうか。

SD06出土木製品（1219～1225） 祭祀具（1219）、小型角材（1220～1224）、指し物（1225）などが出土している。小型角材は大量に出土しているが用途は不明である。長大な箸、もしくは箸の未製品や小型の木組み材料などと推定される。

SD15出土木製品（1226・1230・1231） 1226は表裏に格子状刻み目を付けた板材で、SD13との交差点でSD15が切り勝った部分から出土した。1230、1231はSD06から出土したものよりかなり長い角材である。何らかの部材になるのであろうか。

SD22出土木製品（1232） 下駄の歯が出土している。

SD23出土木製品（1227～1229・1233～1236） 曲物底板状のもの（1233）、板材（1234）、舟形木製品（1235）、曲物底板（1236）、小型角材（1227～1229）などが出土している。

SD30出土木製品（1237～1267） 下駄の歯（1237・1238）、磨耗した下駄（1239）、舟形の可能性がある板材（1240～1242）、不明木製品（1243～1245）、斜めほぞ入り角材（1246～1248）、曲物底板（1249）、

舟形木製品(1250・1251)、ほぞと穴の付いた角材(1252)、棒状木製品(1253～1258)、箸(1259～1267)など、大量の木製品が出土している。

SD31出土木製品(1268～1348・1380・1381・1484) 当遺跡では比較的類例の少ない歯を削り出した下駄(1268)が目立つ。組み合わせ式のものとは異なり、本体部分が薄い反面、歯が分厚いという特徴をもつ。歯が分厚い分を本体を薄くして重くならないように工夫したのだろうか。前歯が木目に沿って割れており、組み合わせ式のものより耐久力が小さかったと推定される。使用痕として親指の凹みが残っているが、残っている後部の歯は組み合わせ式に比べてすり減りかたが小さい。1275は横櫓で表面は黒っぽく、すり漆をほどこされていると思われる。1274は表面が黒っぽく、木質も他の木製品とは異なる板目材である。漆が剥落した漆器の可能性もある。1269の下駄には歯の接合部分に楔が打ち込まれている。1279～1280は刀形木製品である。1283は何かの柄であろう。1285～1289は舟形木製品に類似するが、確定できない。1079・1317・1318は舟形木製品としてよいであろう。1279は祭祀具、1292は篋状木製品である。1295は側板の遺存した曲物、1296～1308は曲物底板であろう。1304～1307のように円形でない形のもの、1308のように底板に木釘が打ち込まれた意味不明のものなどもある。1309は曲物の側板。1312～1314は同一個体の脚部だろう。木釘などが認められず、どのようにして本体に接合したものか分からなかった。あるいは接合前の資料であろうか。1310・1311・1315は指し物であろう。1319も祭祀具であろうか。1038は片面に彫刻をほどこした板で下部の突起を別のものに差し込んで組み合わせるものであろう。彩色などは確認できなかった。1332は栓であろう。1328・1329は板材で赤外線撮影では墨書を確認できなかった。1331・1340は厚みのある加工木であるが用途不明。未製品にしては表面の調整がやや丁寧なように思われる。1343は柱材を途中で接合したものであろうか。1347・1348は土留板で、木釘で杭に固定した痕跡が残されている。1380は下駄の歯、1381は薄い板材であるが片面の調整が雑なものである。その他、用途不明の加工木が数多く出土している。

SD35出土木製品(1349～1370) 1349は極めて残りのよい木箱である。短辺が一方だけはずれているが、その他は残っている。木釘は2つ一組で打たれており、留め方が良く分かる。1350は片面に包丁等によると推定される傷が認められる。薄い板材であるが、まな板として使用されたのであろうか。1291は杓子の破片である。1352・1353の板には穴が開いているが、穿孔したものではなく根や虫などによって開けられた可能性が高い。1356の下駄の歯には大きな楔が打ち込まれ歯に亀裂が走っている。1359～1364は箸である。1370は曲物の側板である。1369は曲物の底板の可能性はあるが、それを2次加工している可能性がある。その他、用途不明の加工木が数多く出土している。

SX02出土木製品(1371～1379) 1371の下駄には歯を留めるための小さな楔が丁寧に打ち込まれている。1373・1374は板草履の芯材であろう。県内での類例は少ない。1378は篋状木製品である。1376は祭祀具である。

包含層出土木製品(1382～1463) 多種多様な木製品が出土している。1382は下駄であるが、木質が他とは一見して異なり、表面が黒っぽいものである。漆器の漆が剥落したものと推定される。組み合わせ式で歯ははずれている。1383～1393は通常組み合わせ式の下駄の歯である。1394～1396は一木作りの

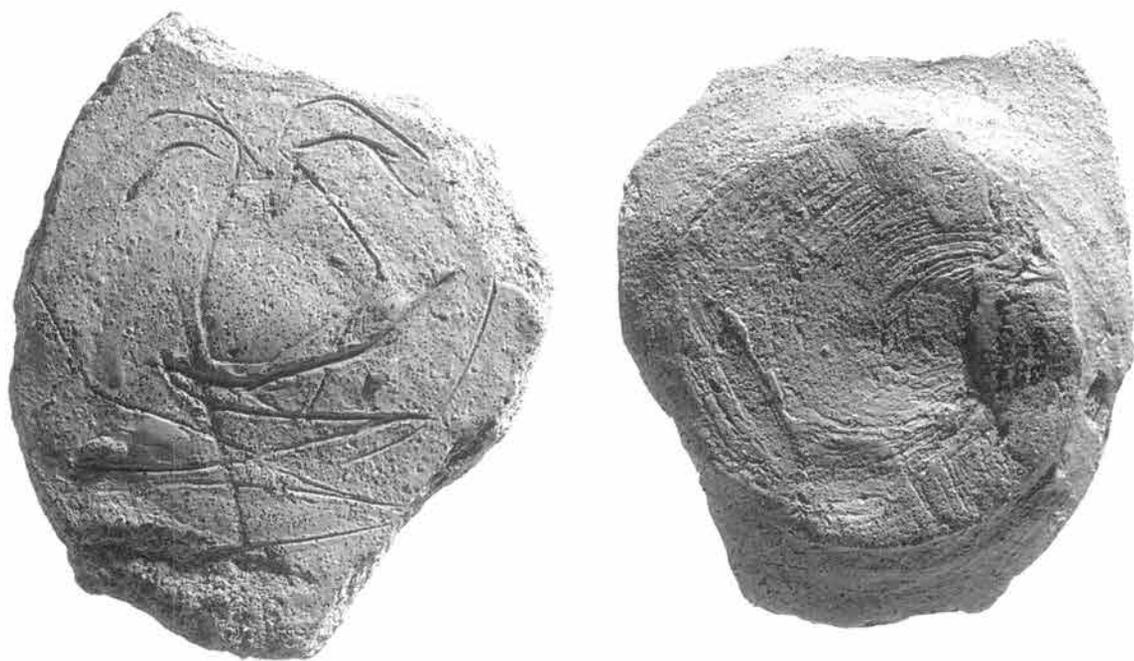
下駄である。1397・1398は板草履の芯であろう。1399は鉄鎌で残りがよい。柄の部分は途中で折れている。400は1399とは明らかに異個体であるが、鎌の柄であろう。1401・1402は舟形木製品である。1403・1404は付札状木製品である。1405・1406は平面が多角形になる指し物である。1409は乾燥したため反っているが本来は真っ直ぐな指し物である。1408は烏帽子を被った男性を形とった人形である。1412は杓子である。1414は駒であるが、木質が非常に新しく、混入品である可能性が高い。H-19付近の遺構がなく、良好な包含層のない部分から出土した。1415は木槌の頭部が半分に欠けたものである。1416～1427は曲物の底板である。1431～1434は中央部に穿孔されている。1435は底板状ではあるが、極めて厚く、別ものである。1428～1430は曲物側板である。1439は弥生時代の有頭棒であろう。1457は大型の杓子状木製品である。最近まで味噌や醤油を作っていたものに類似する。この他数多くの用途不明木製品が確認される。

柱痕・礎板（1464～1483） 柱痕には芯去り材と芯持ち材の両方が認められる。四柳嘉章氏によれば穴水町西川島遺跡群では、12世紀後半～13世紀中頃までは芯去り材が用いられ、14世紀に芯持ち材に変化し、しかも樹種が杉だけから多種多様なものを使用するように変化するという（四柳1987）。当遺跡では柱痕の時代を特定できないため、同様の变化を追証できないが、土師器などは13～14世紀代が多く、類似する可能性がある。特異なのは1467の溝とほぞのある柱痕である。何らかの部材を柱に転用した可能性がある。また、角材が芯去り材で、丸柱はすべて芯持ち材であったことも注意を引く。1470などは柱というよりも杭状のものであり、これを柱とした場合、軟弱地盤の当遺跡にあっては沈下を防ぎ得ないのではないかと推定される。軟弱地盤であるにもかかわらず、多くの柱穴では礎板が確認されず、確認されたのは1475～1480までのごく少数であった。1481はSD31の上層から出土したもので柱痕ではなく、柱材などの部材の転用品である。

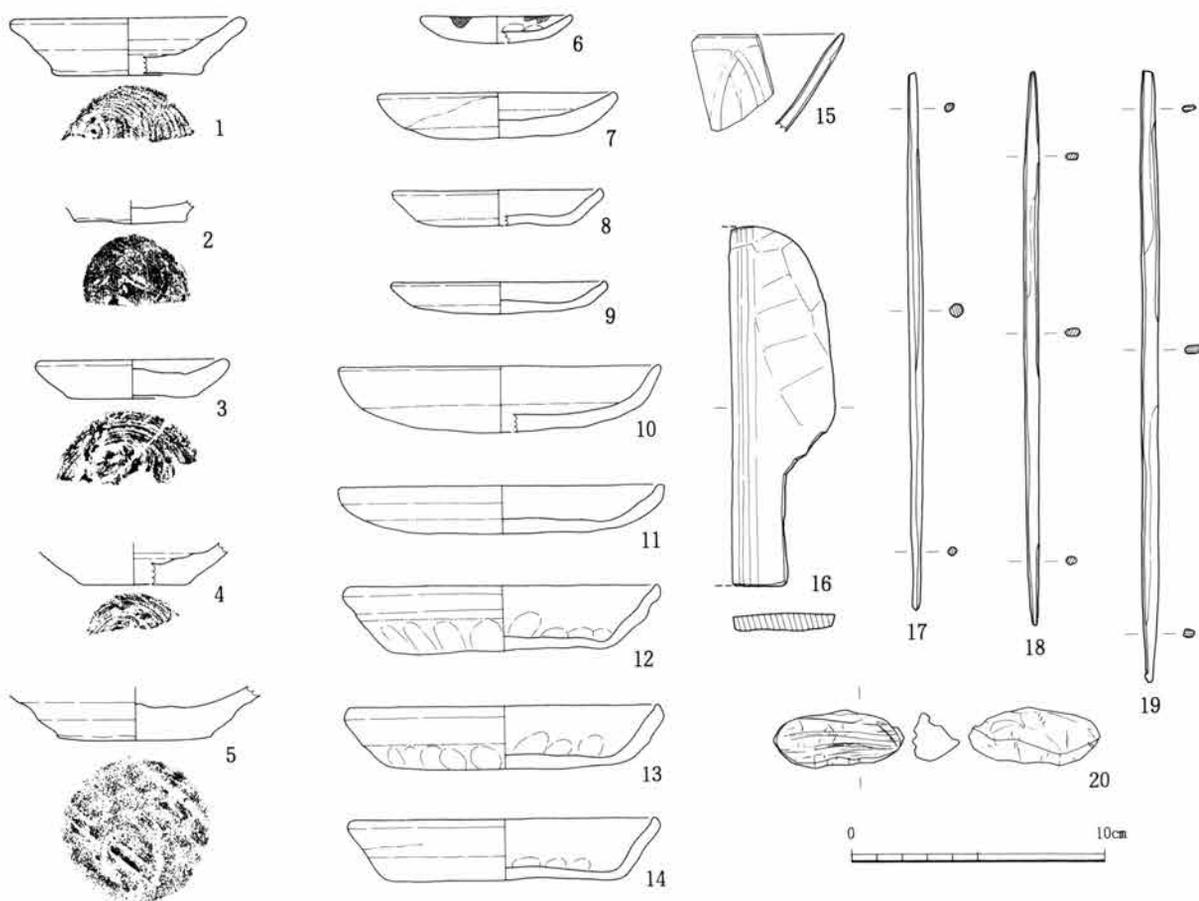
土留め板（1485） 1485は中世上層に伴う溝遺構の土留め板であったと推定される。一息に下層までり下げたため、溝遺構を検出できなかった。出土状態から溝全体ではなく、ごく一部だけ土留めしたらしい。

〔参考・引用文献〕

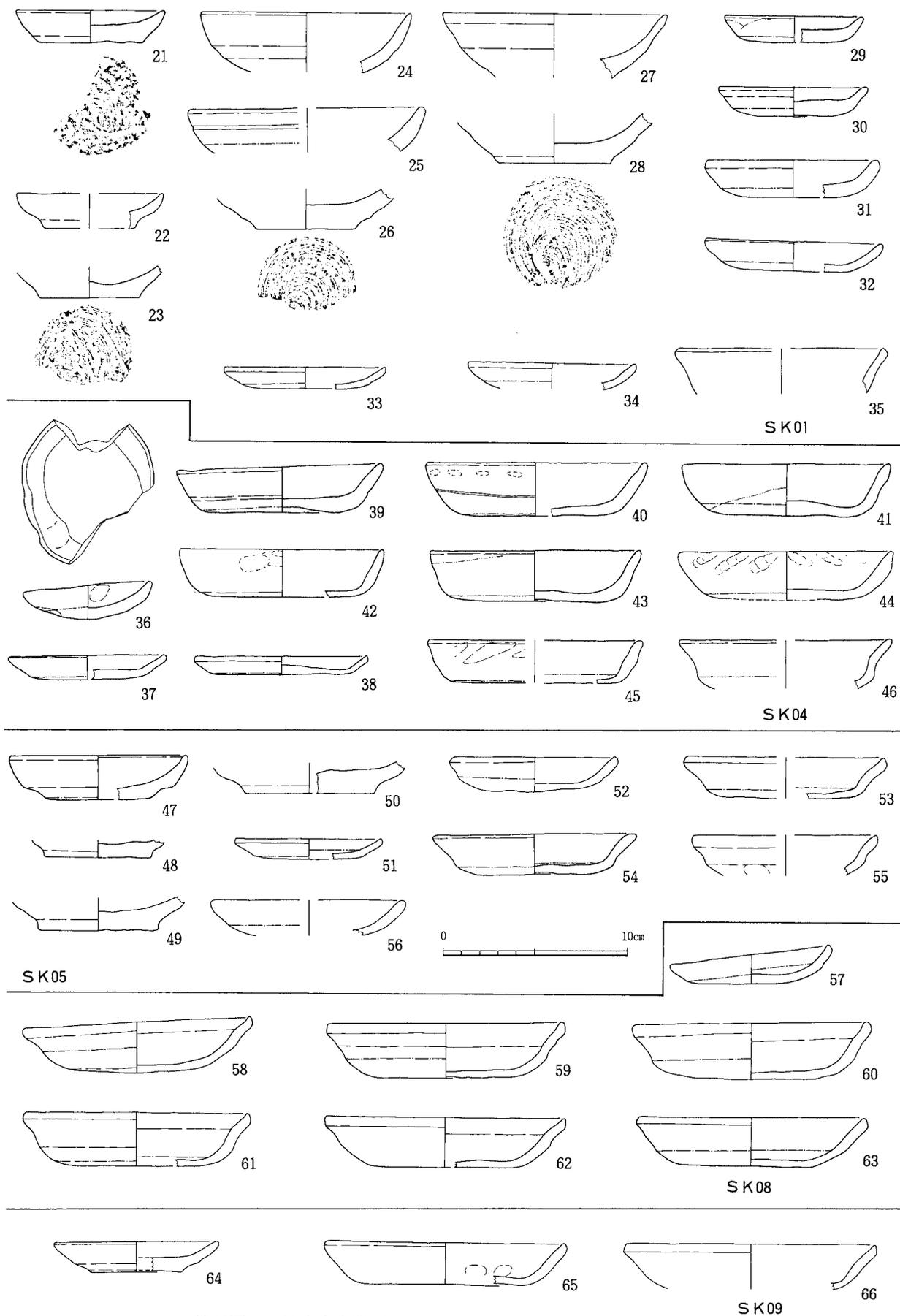
四柳嘉章編 1987 『西川島遺跡群』 石川県穴水町教育委員会



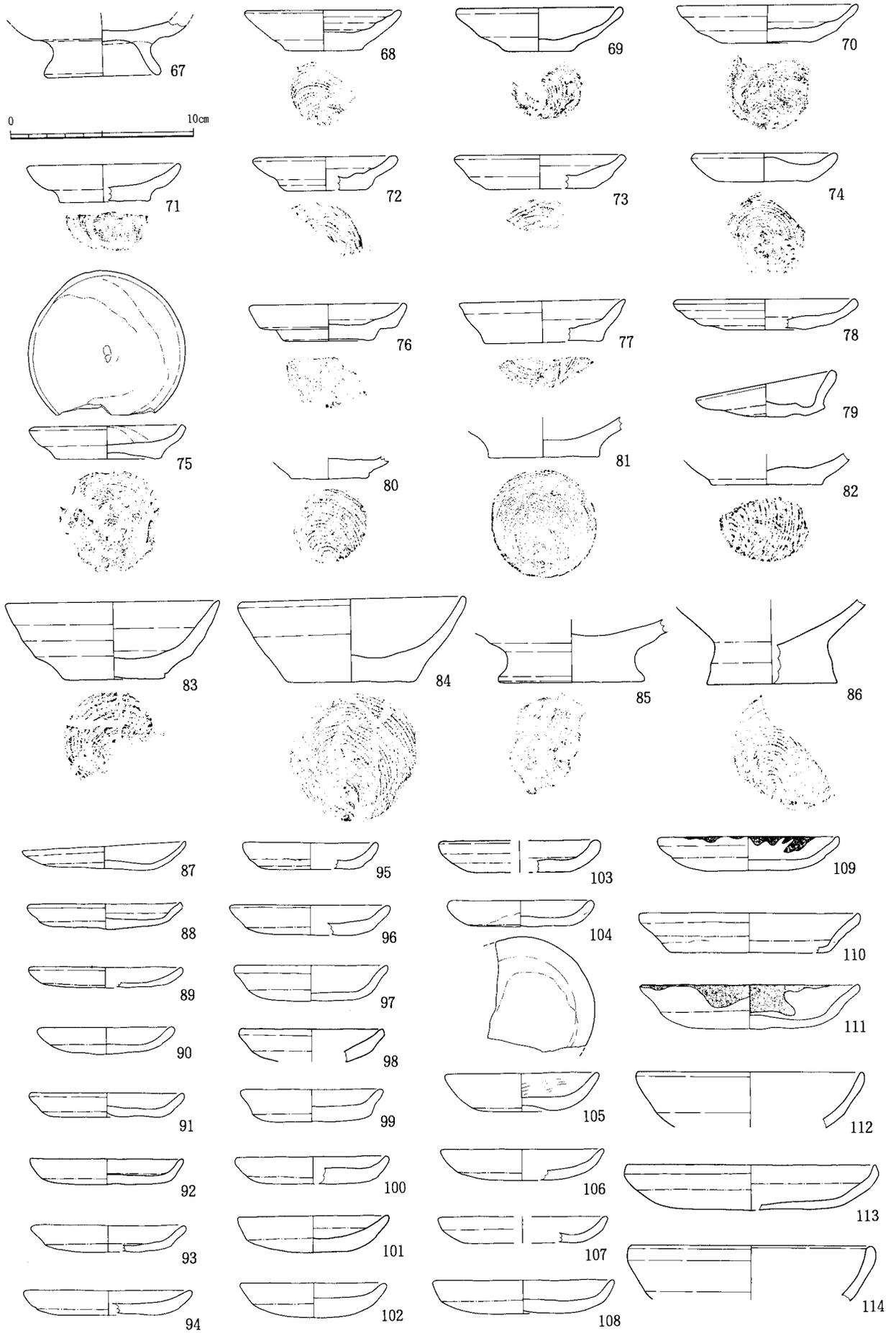
第40図 S D31出土ヘラ書き人面土師器



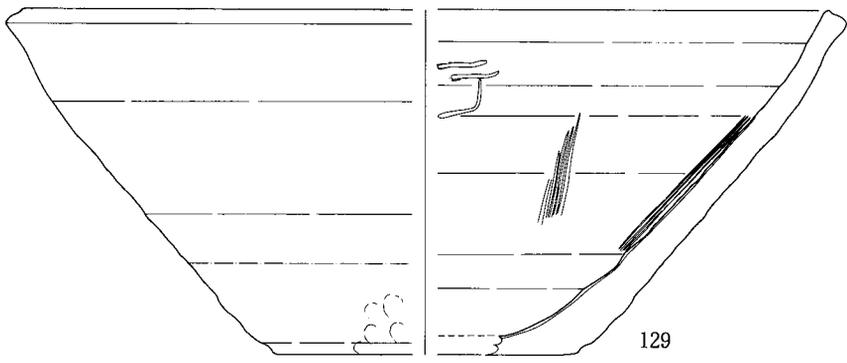
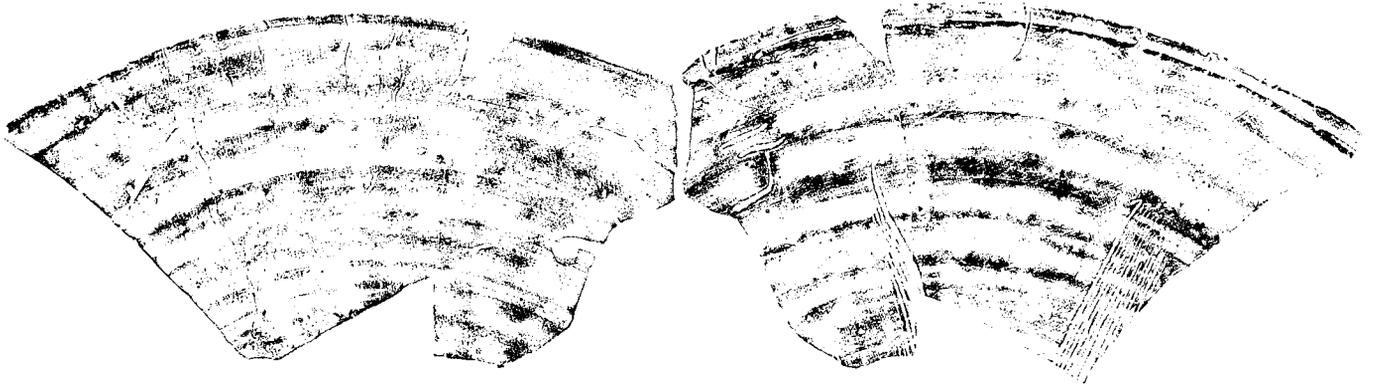
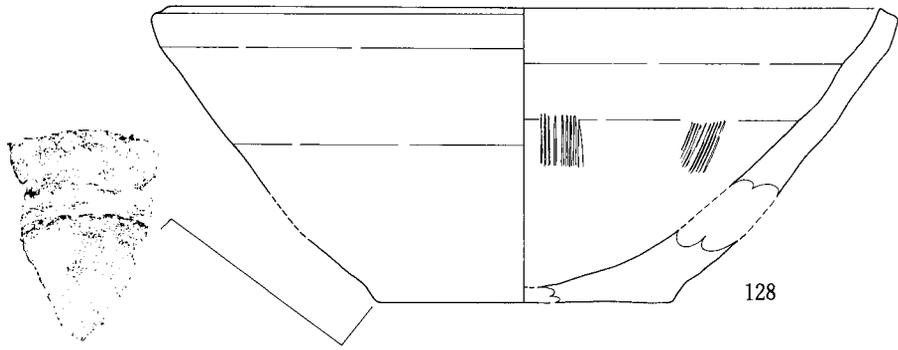
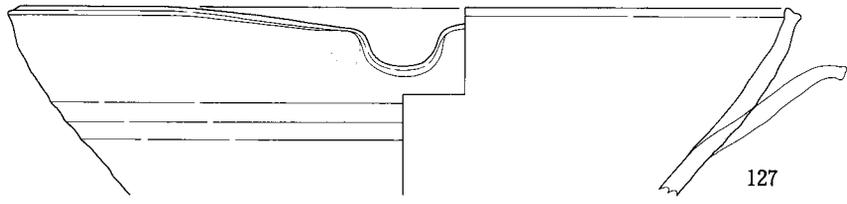
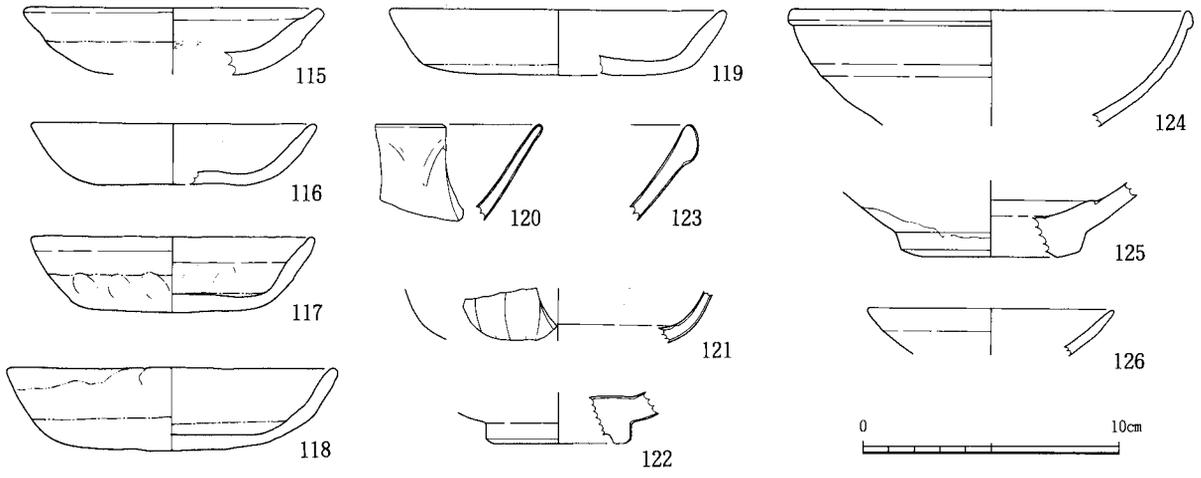
第41図 試掘調査出土遺物 (13トレンチ：1、16トレンチ：2～15、トレンチ不明：17～19。S=1/3)



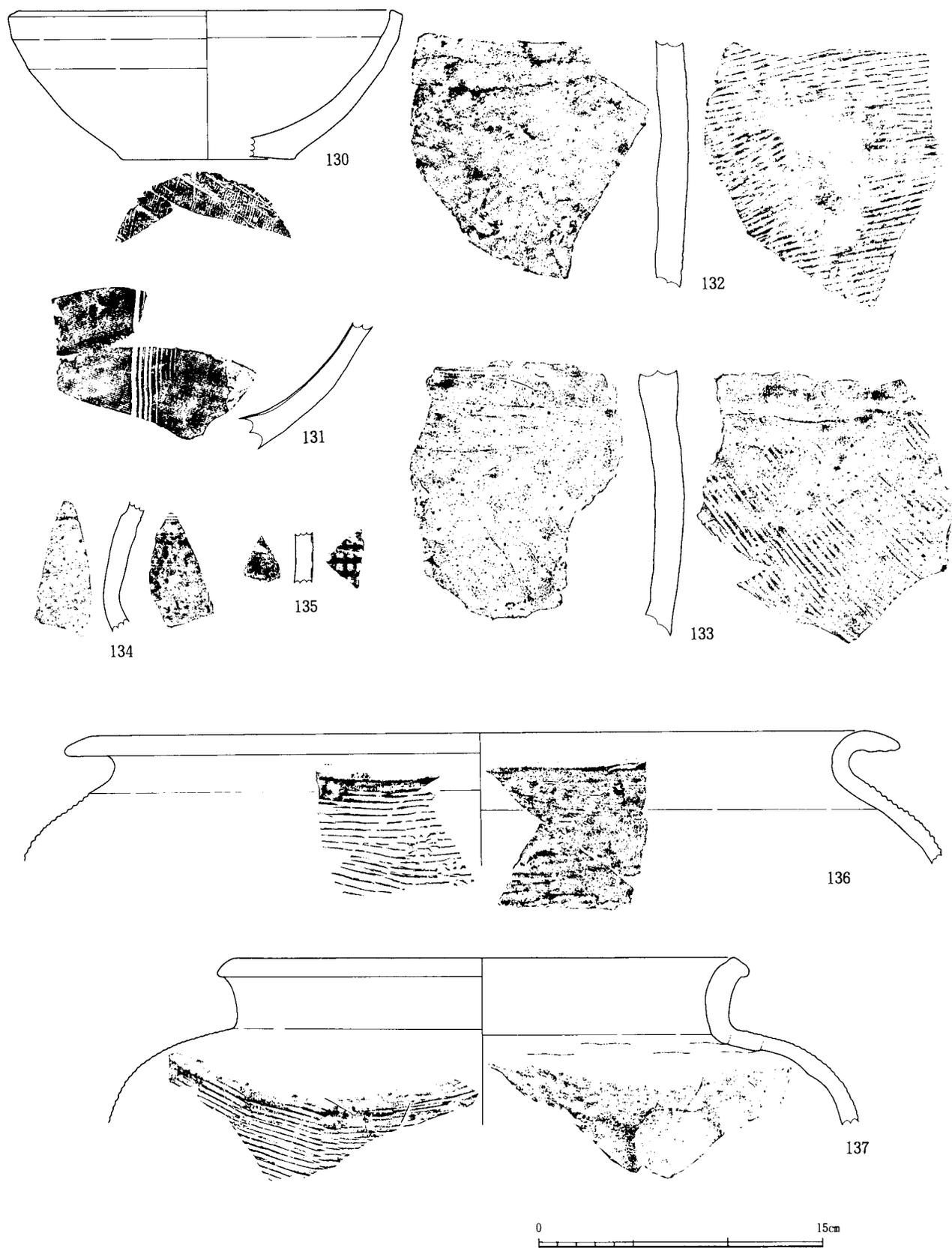
第42图 土坑出土土器 (SK 1 · 4 · 5 · 8 · 9) (S=1/3)



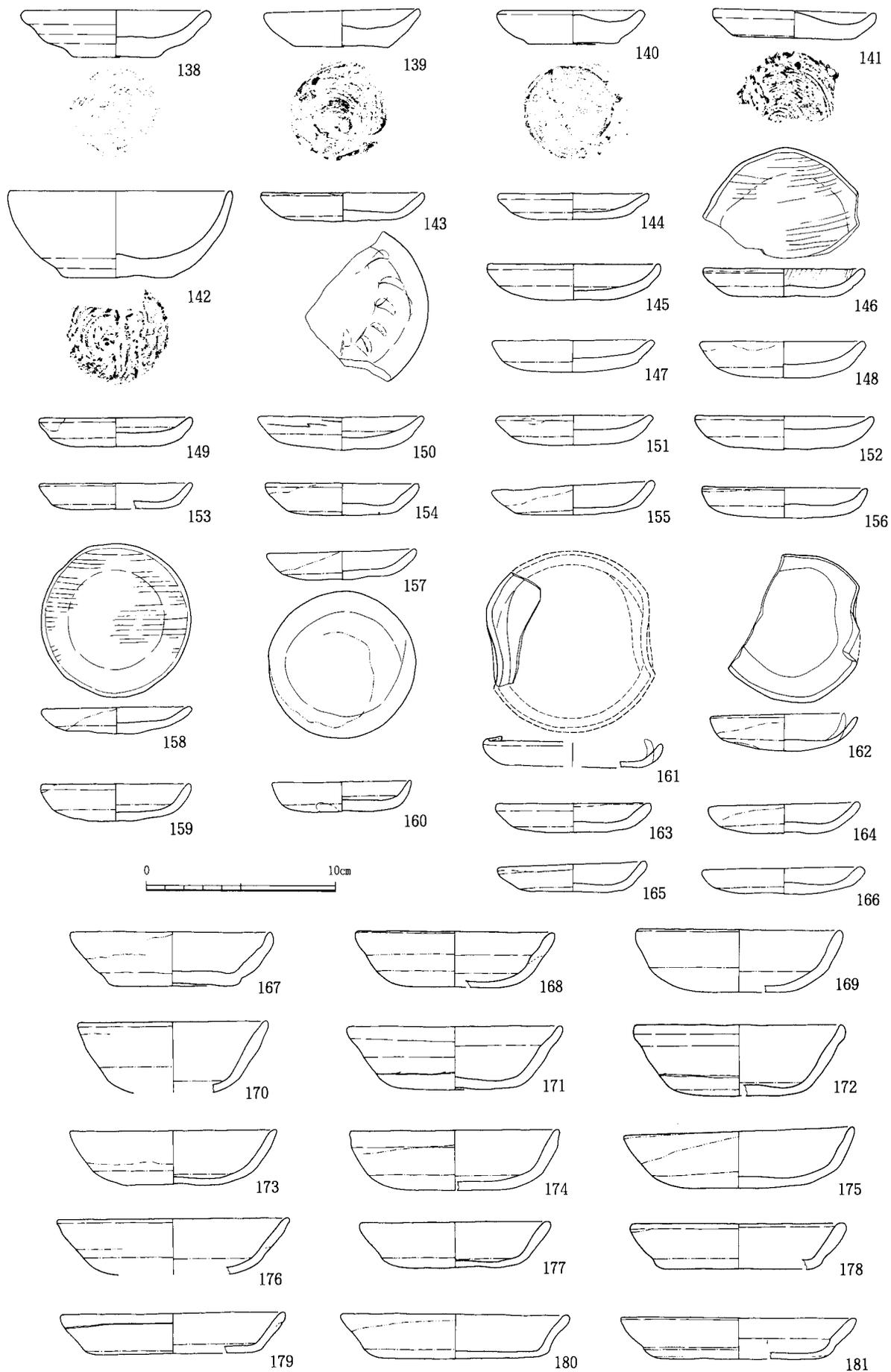
第43图 S D01 出土土器(1) (S=1/3)



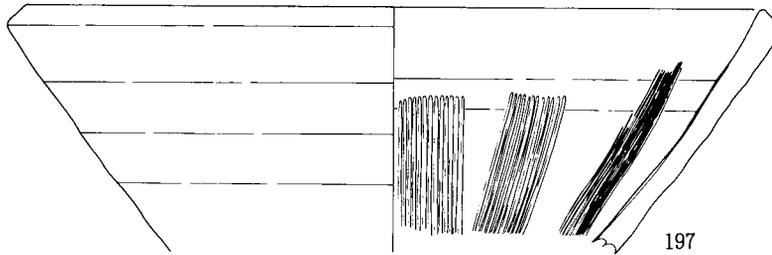
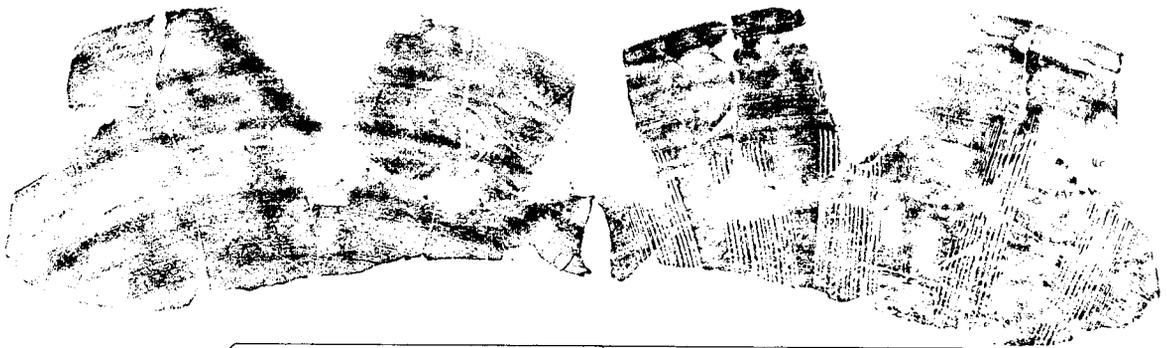
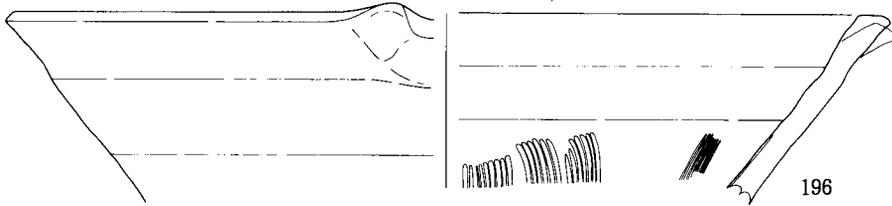
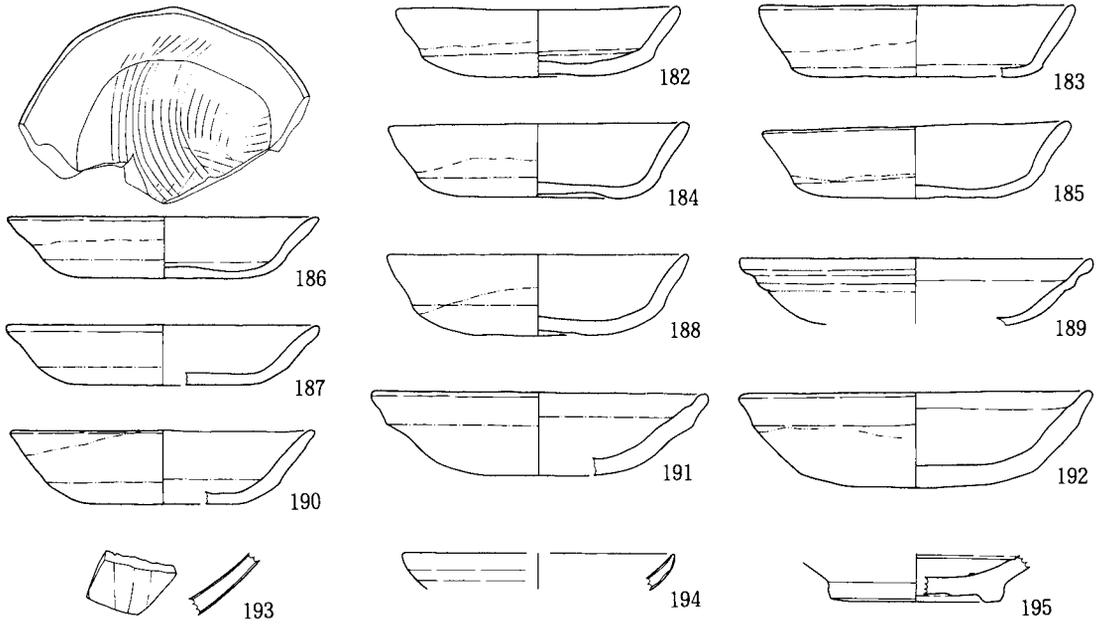
第44图 S D01 出土土器(2) (S=1/3)



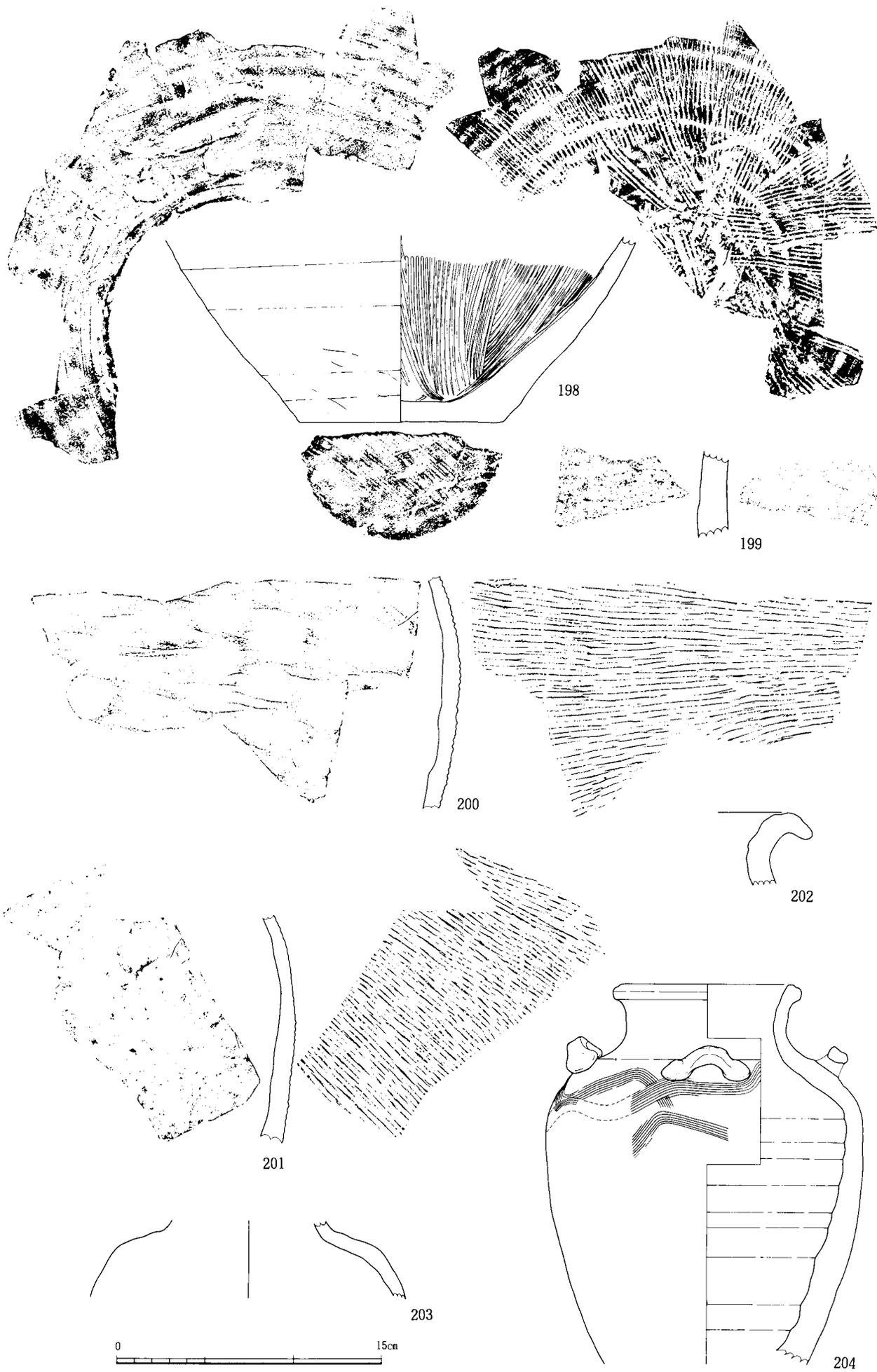
第45図 SD01 出土土器(3) (S=1/3)



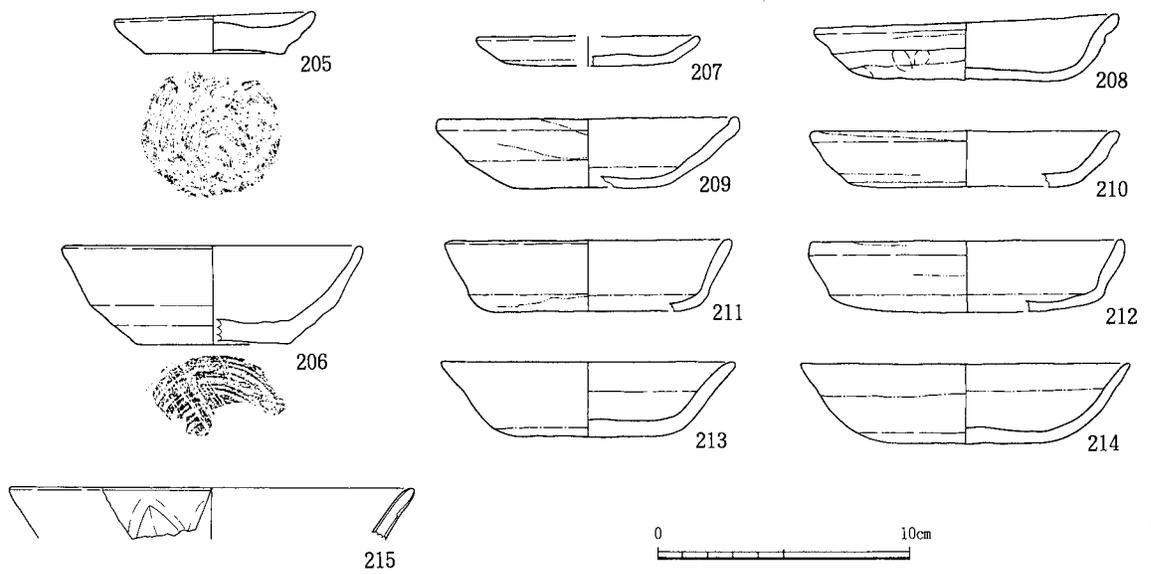
第46图 SD02 出土土器(1) (S=1/3)



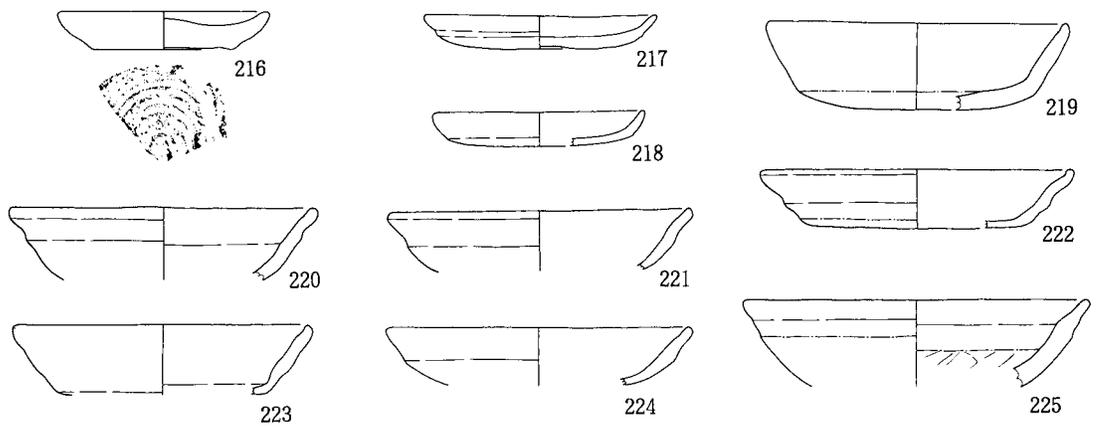
第47图 SD02 出土土器(2) (S=1/3)



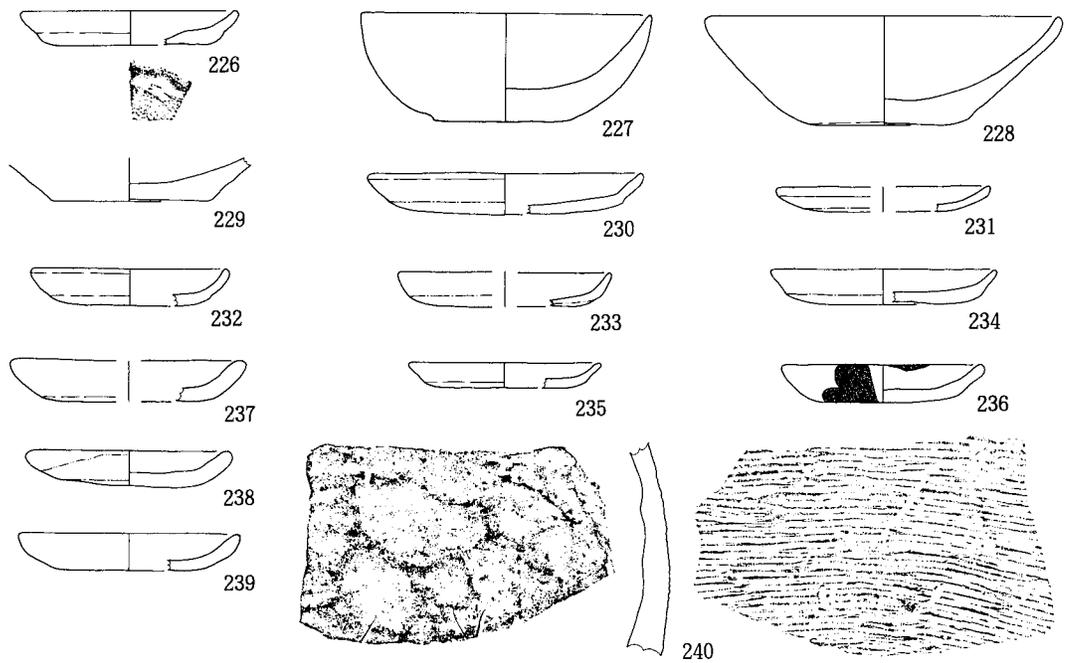
第48图 SD02 出土土器(3) (S=1/3)



SX04 (SD31か)

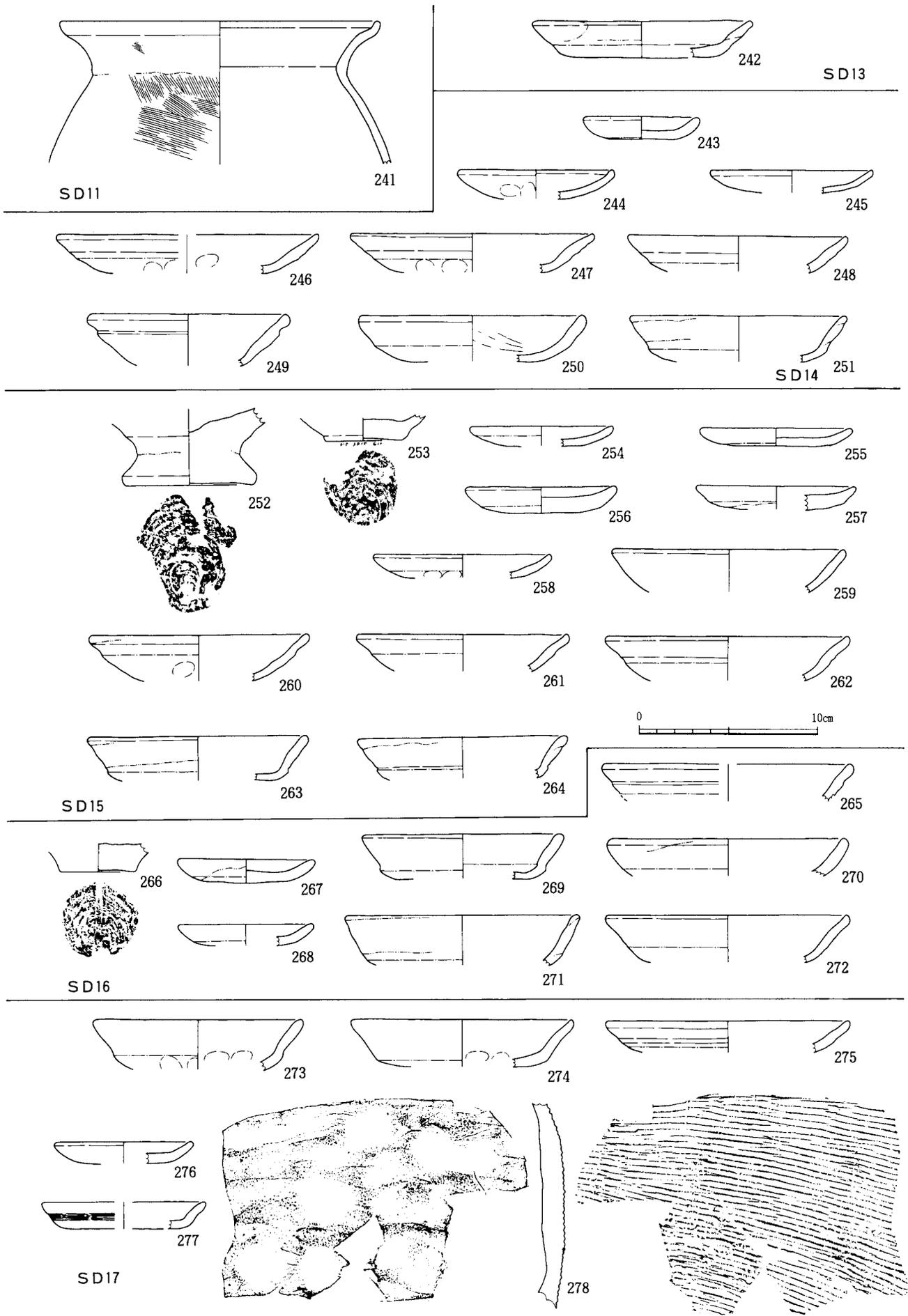


SD05

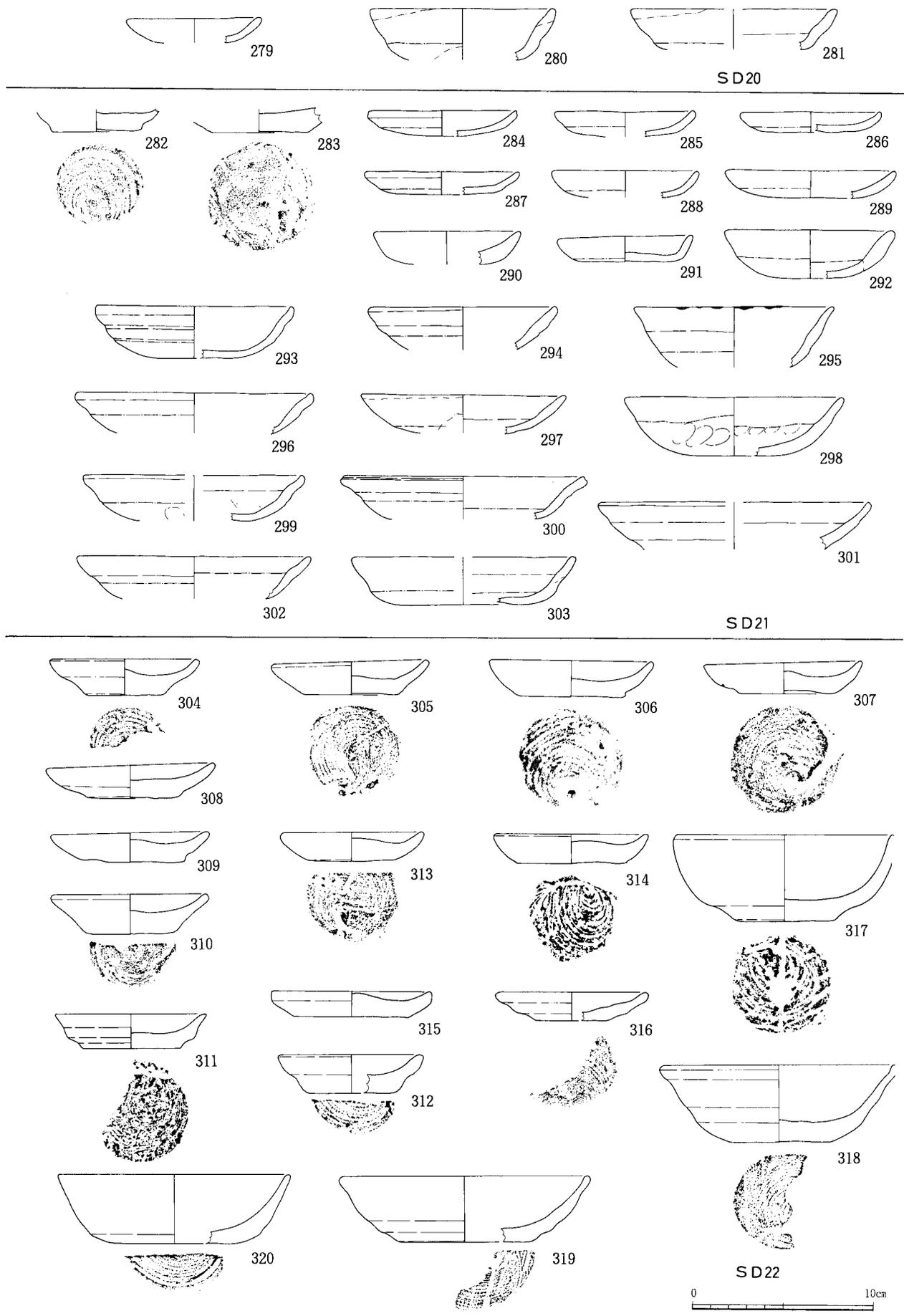


SD06

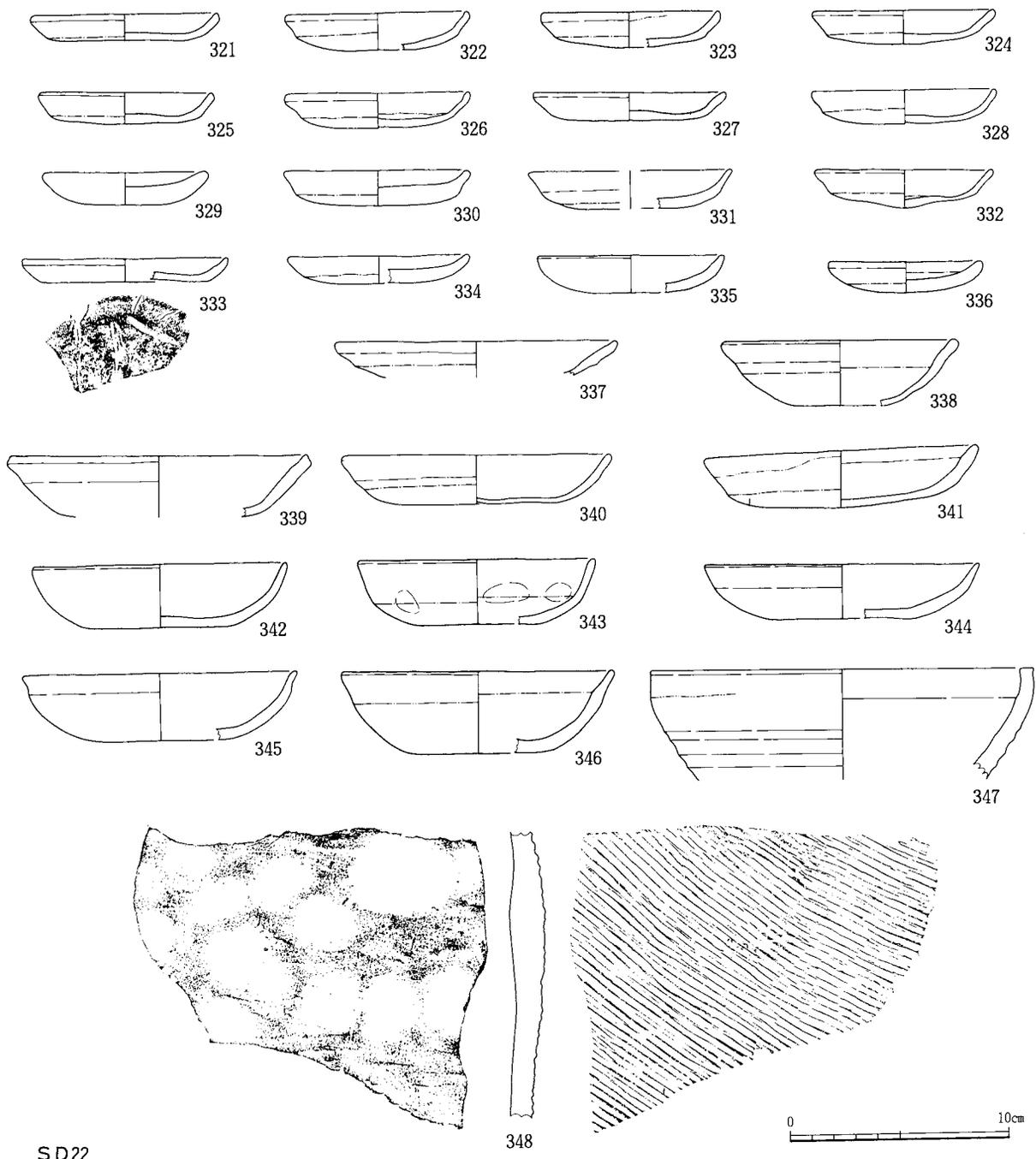
第49図 SX04、SD05、SD06 出土土器 (S=1/3)



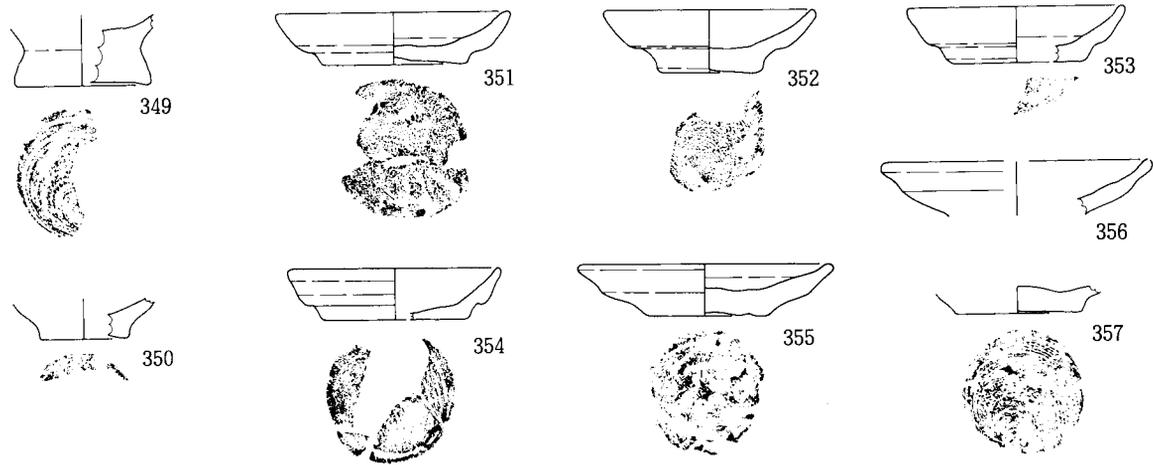
第50图 SD13、14、15、17 出土土器 (S=1/3)



第51図 SD20、21、22 出土土器 (S=1/3)

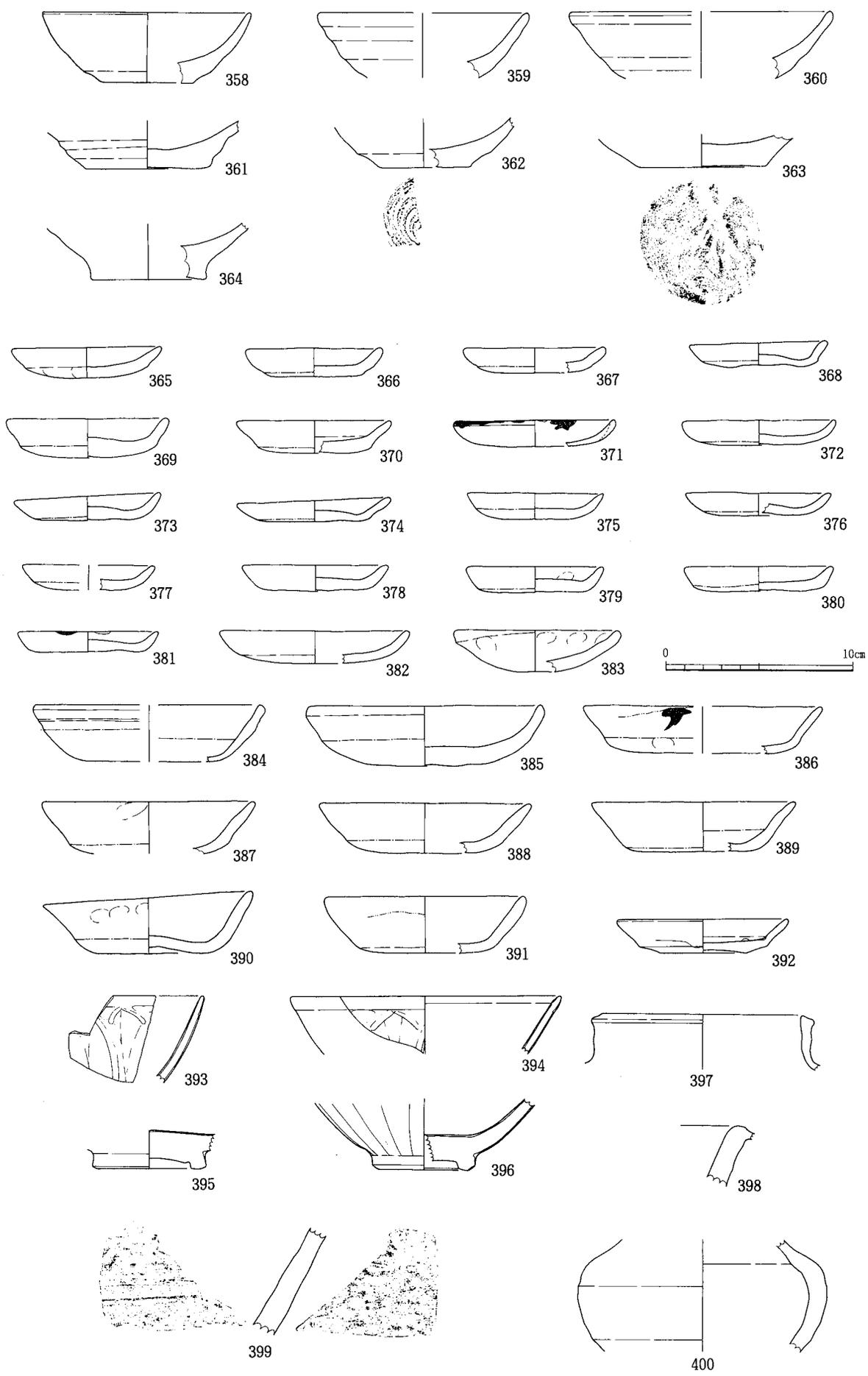


SD22

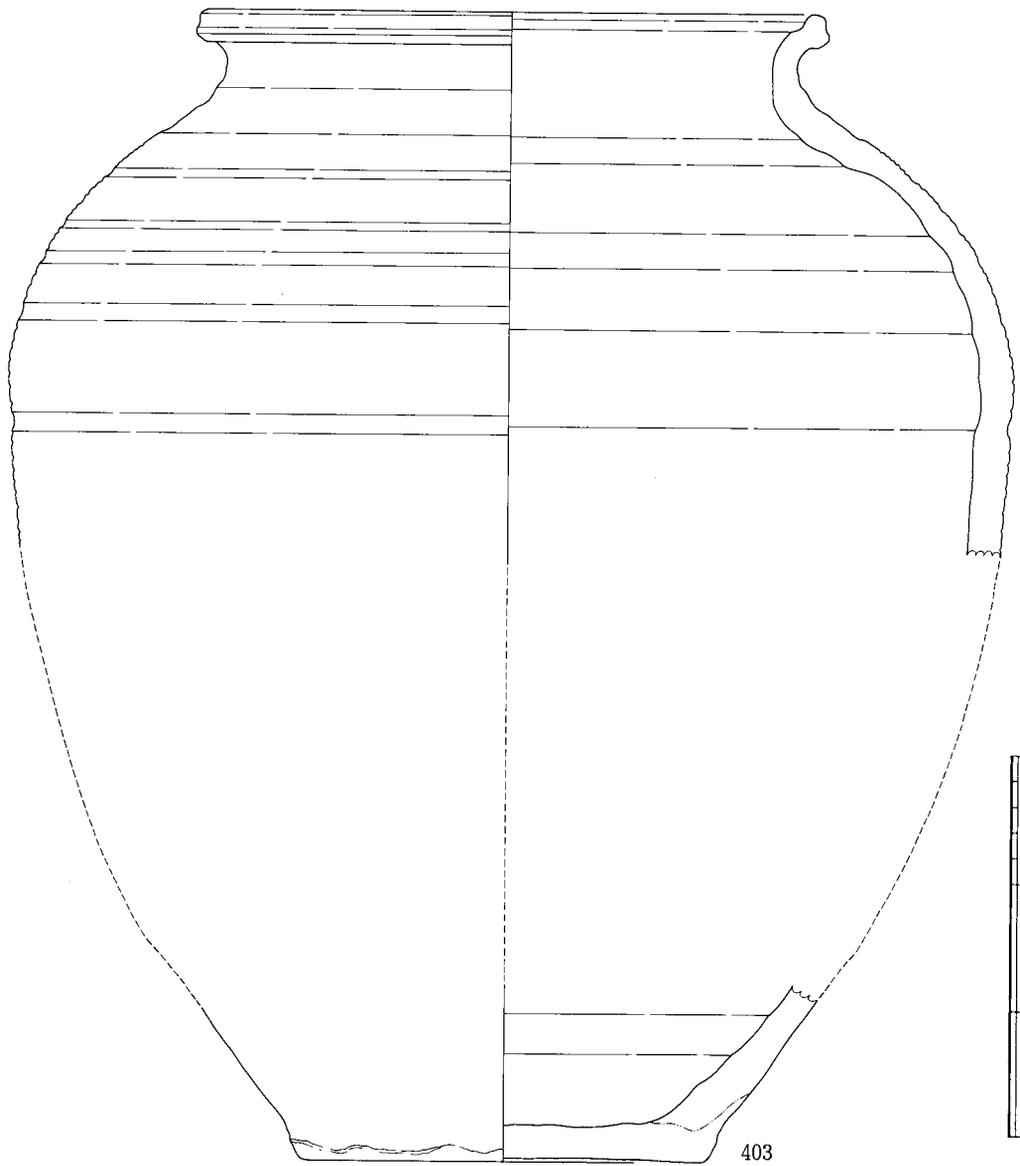
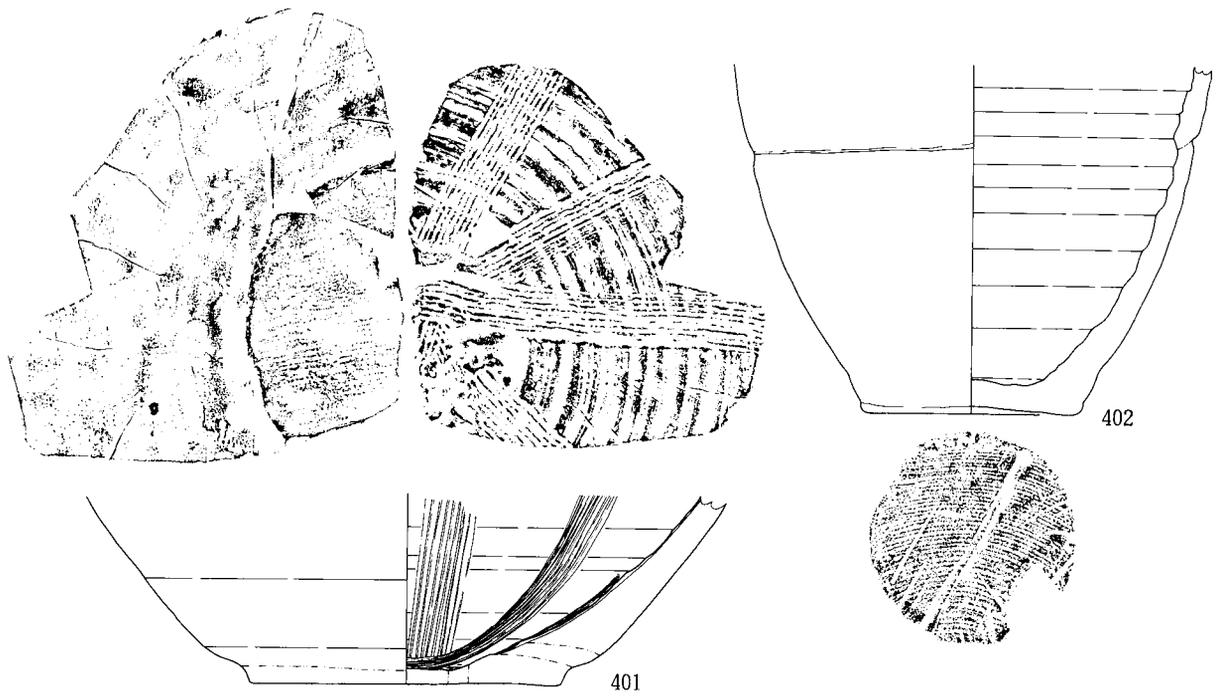


SD23

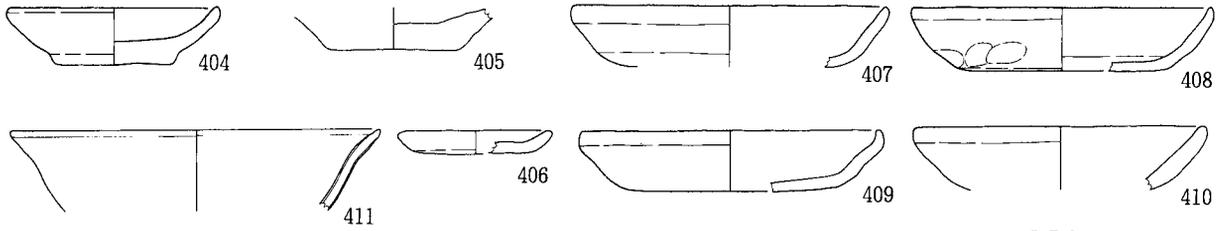
第52図 SD22、23 出土土器 (S=1/3)



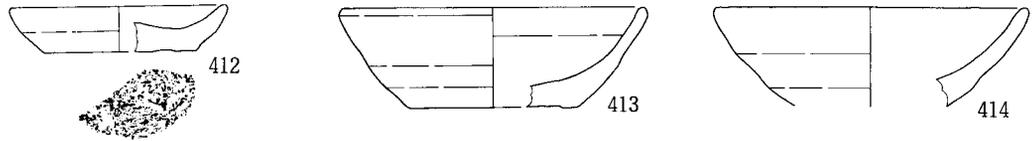
第53图 S D 23 出土土器(2) (S=1/3)



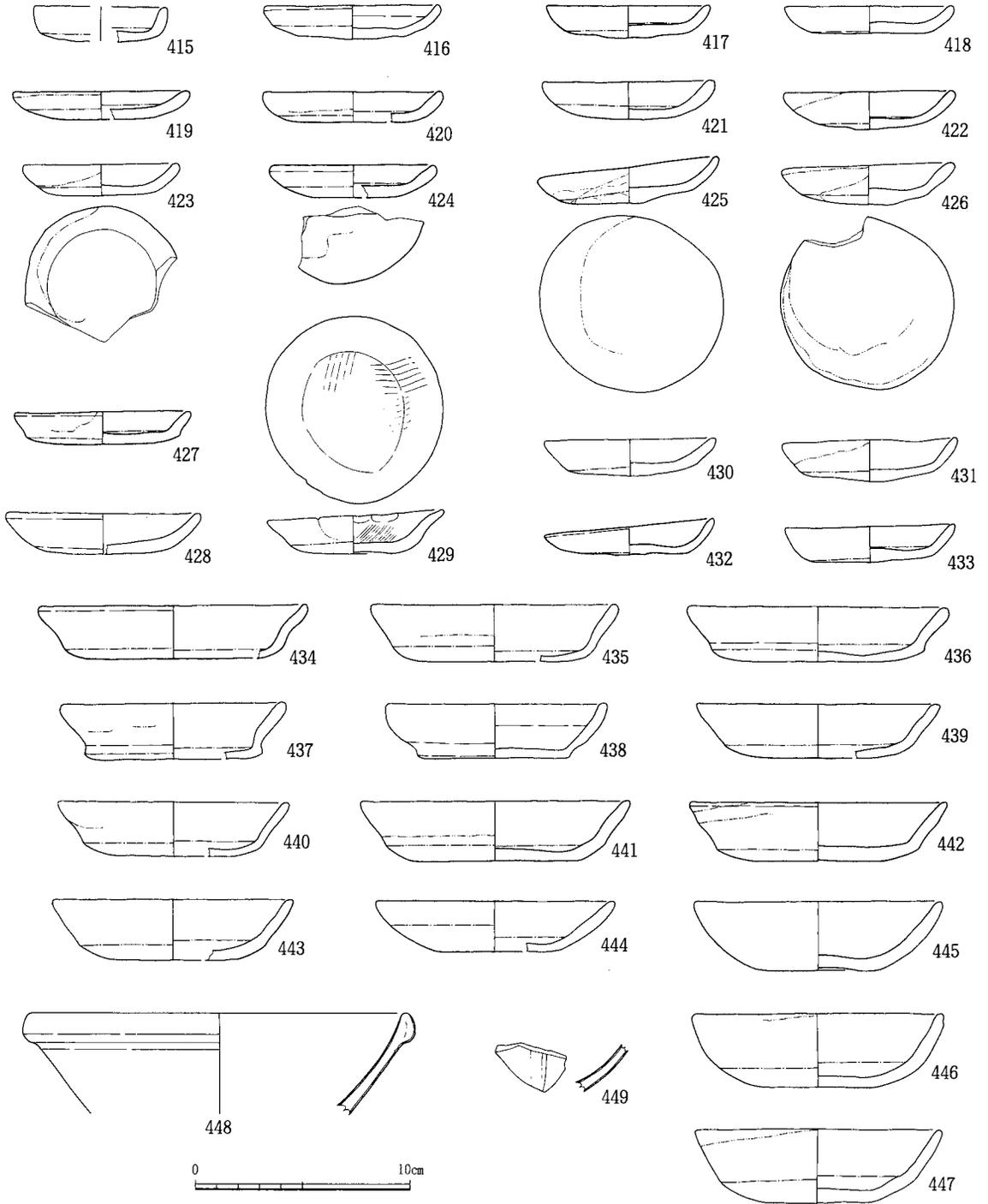
第54图 SD23 出土土器(3) (S=1/3)



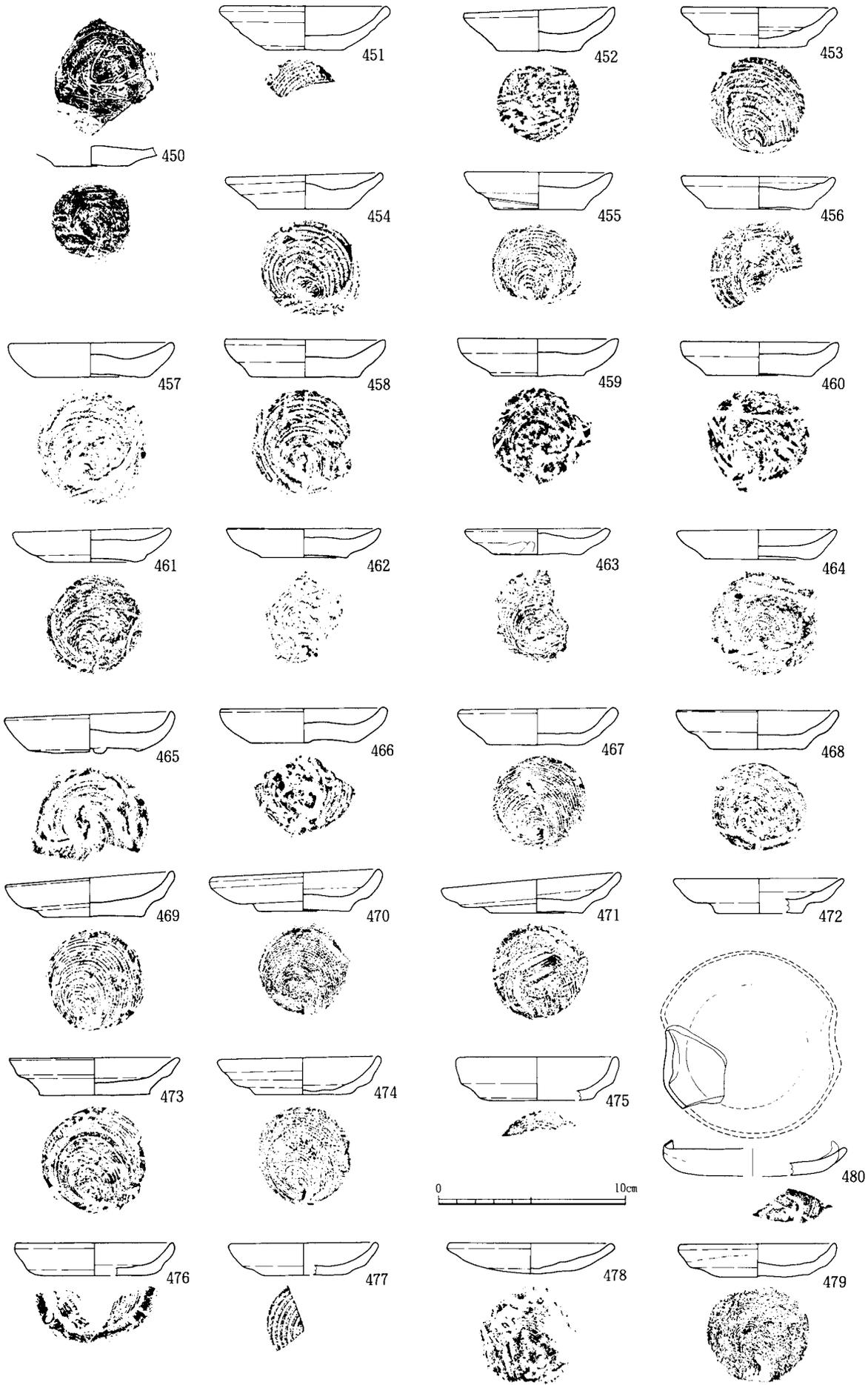
SD25



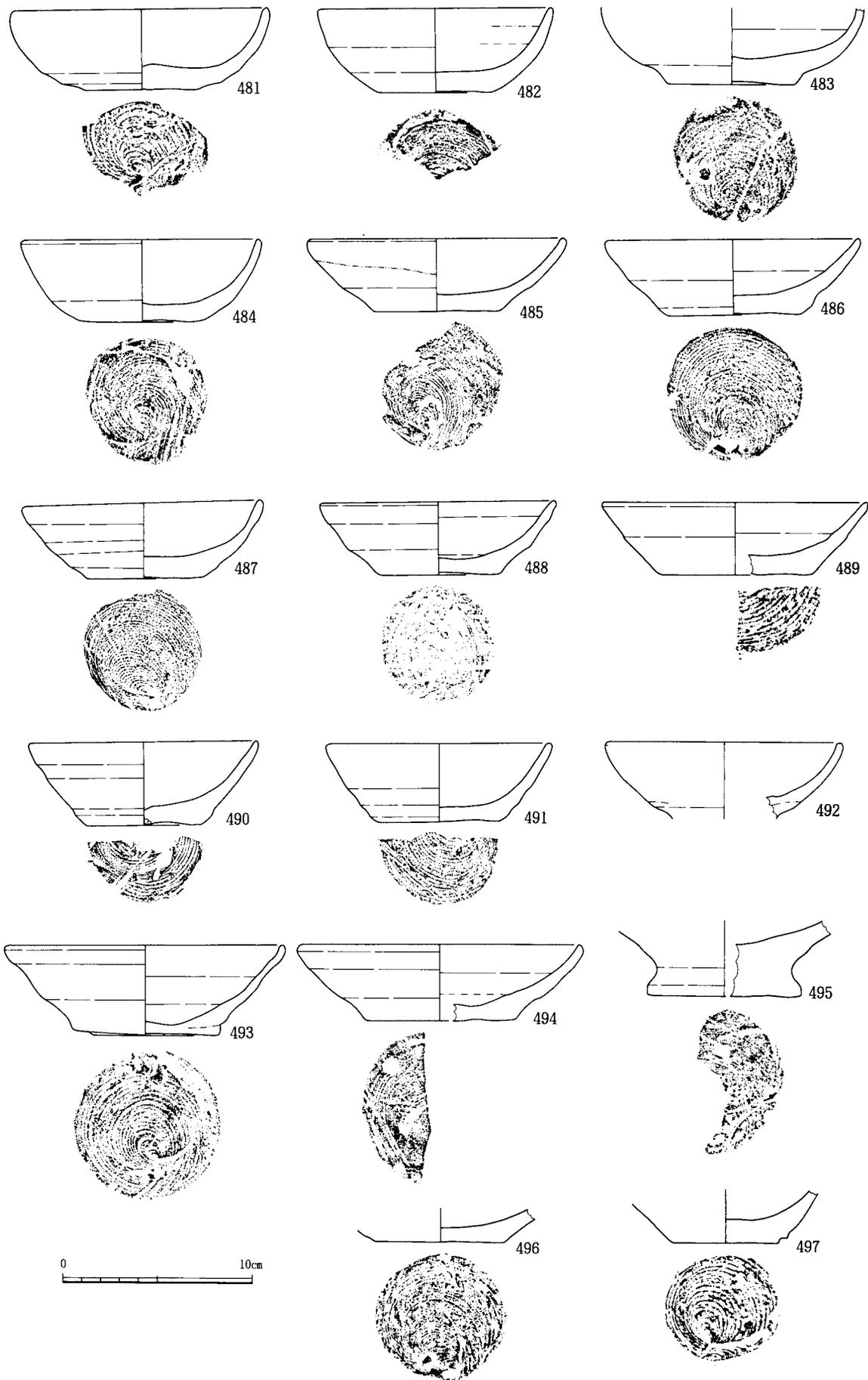
SD30



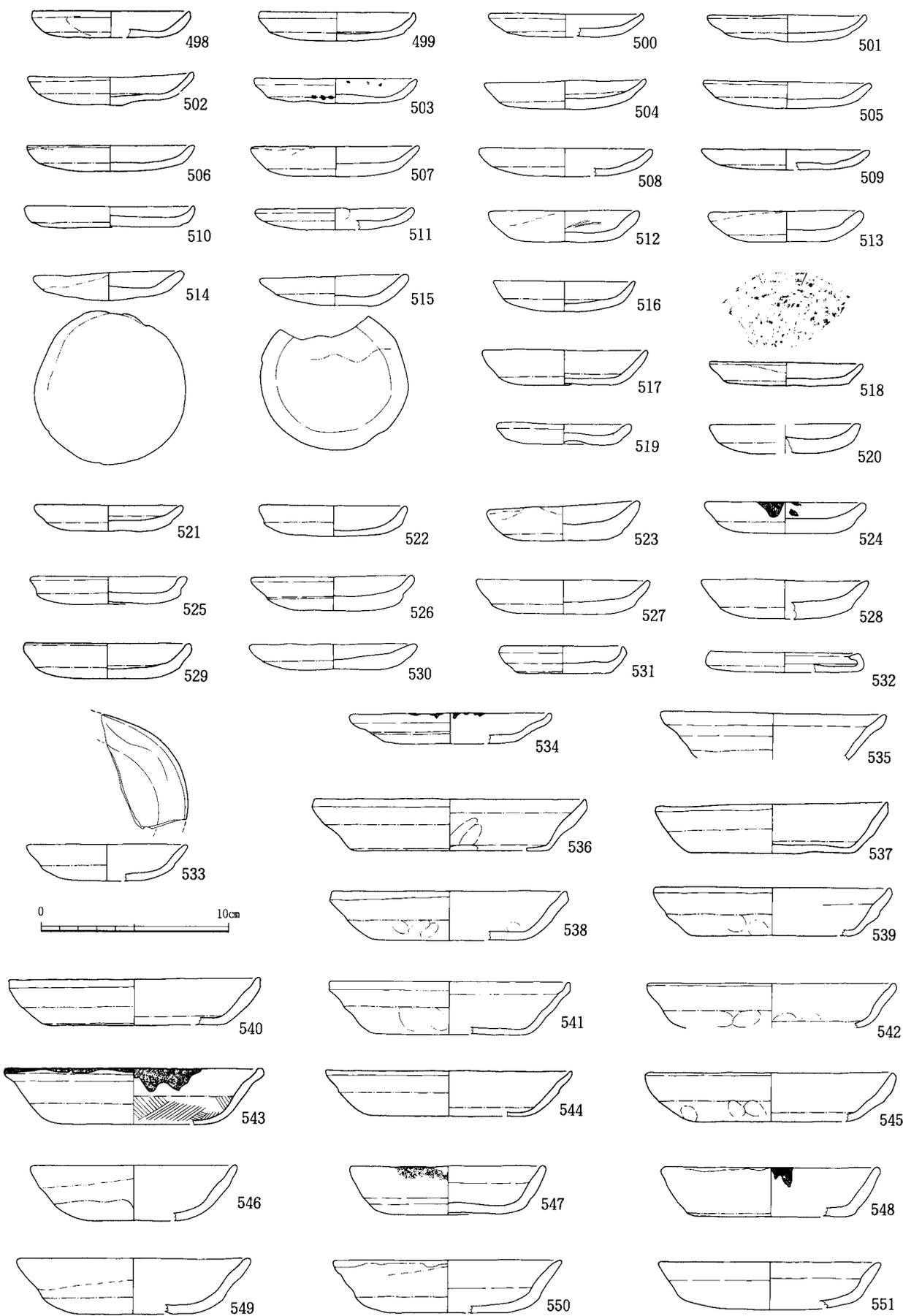
第55图 SD25、30 出土土器 (S=1/3)



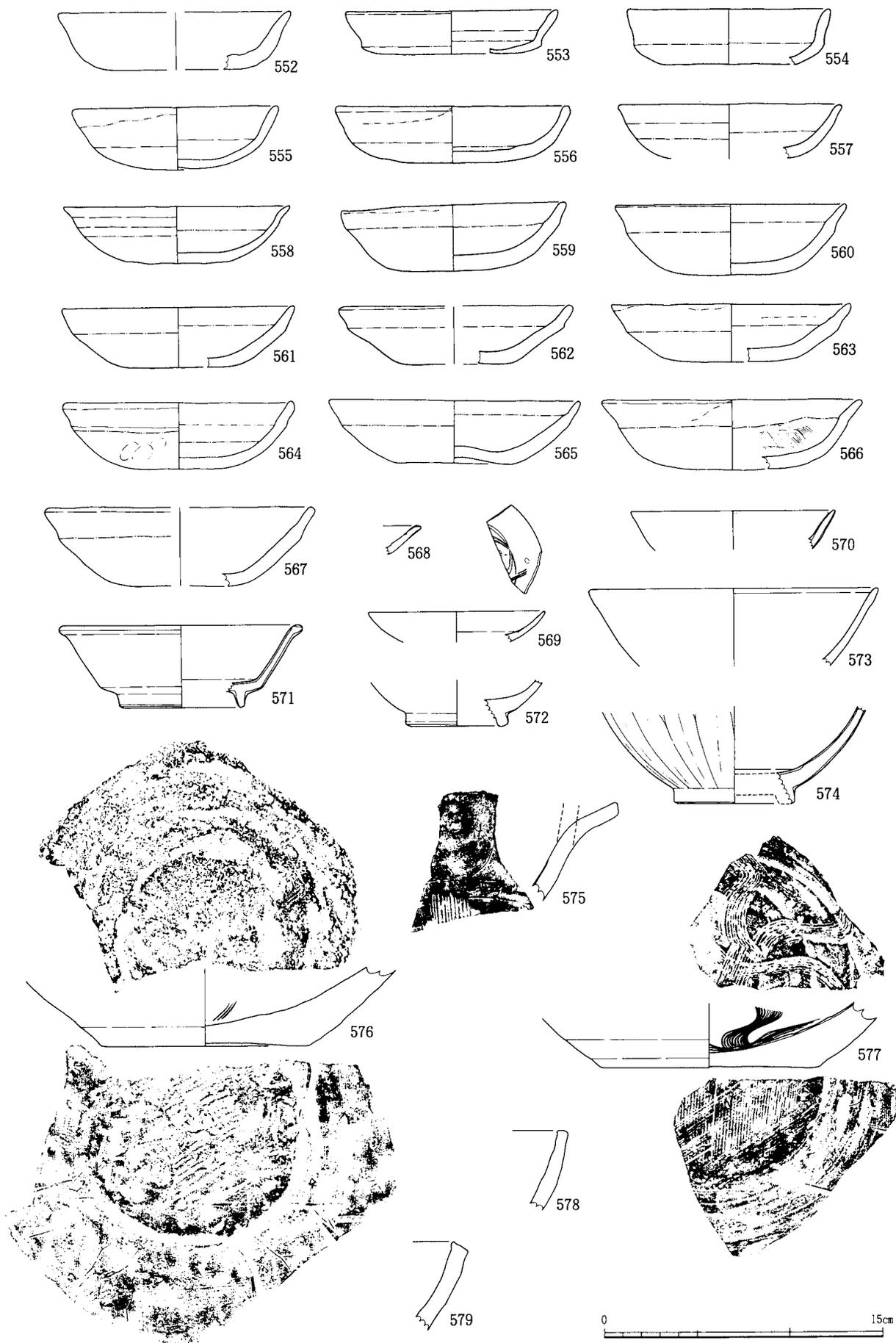
第56图 SD31 出土土器(1) (S=1/3)



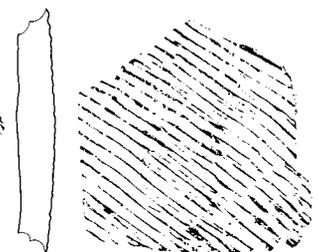
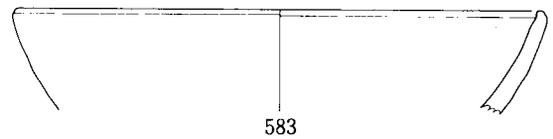
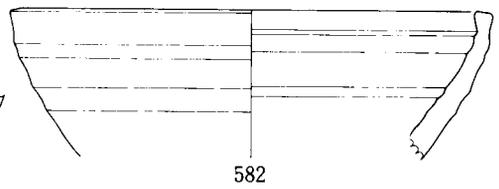
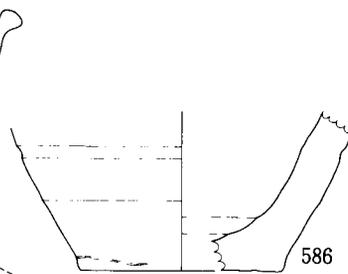
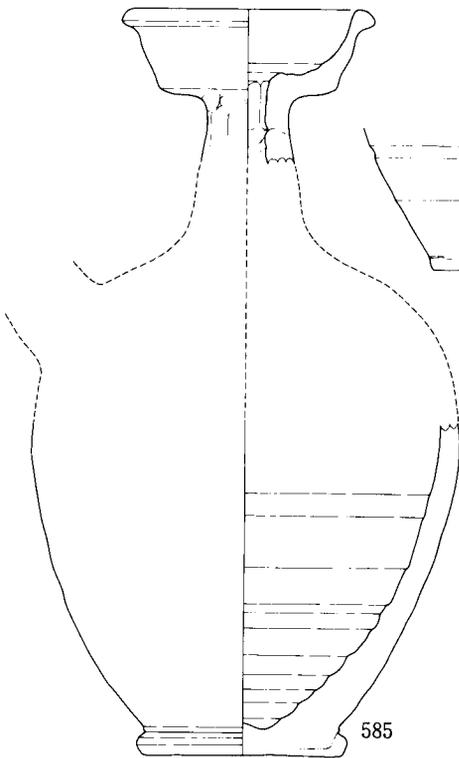
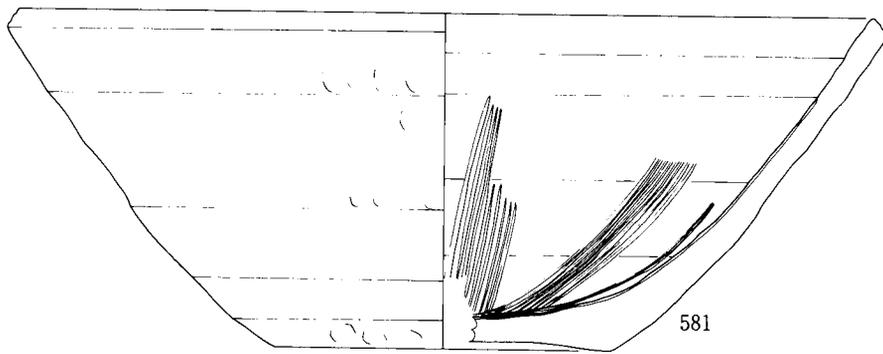
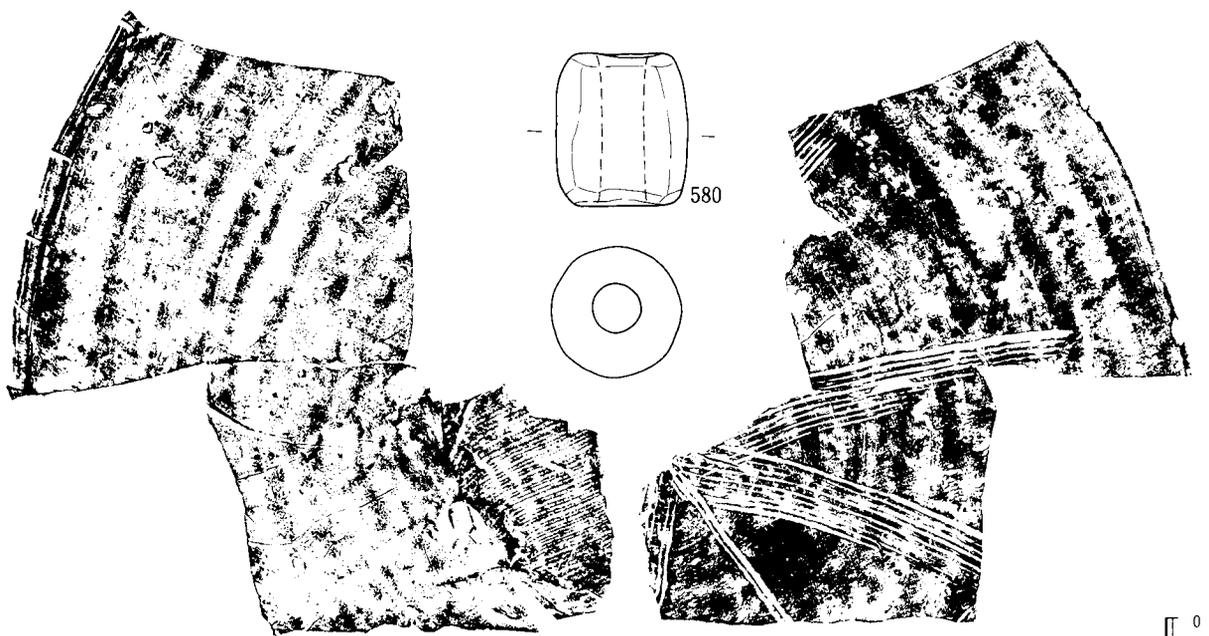
第57图 S D31 出土土器(2) (S=1/3)



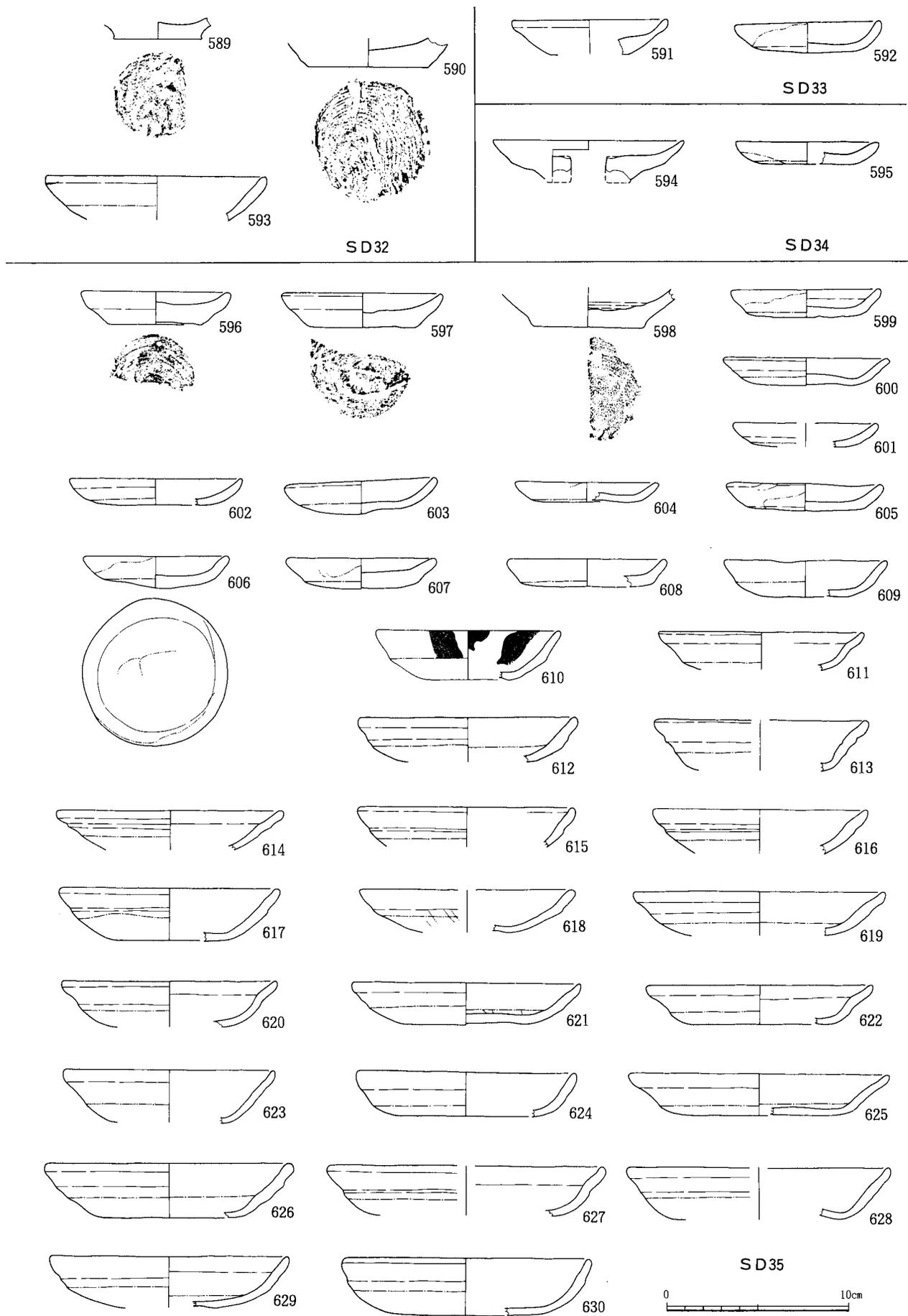
第58図 S D31 出土土器(3) (S=1/3)



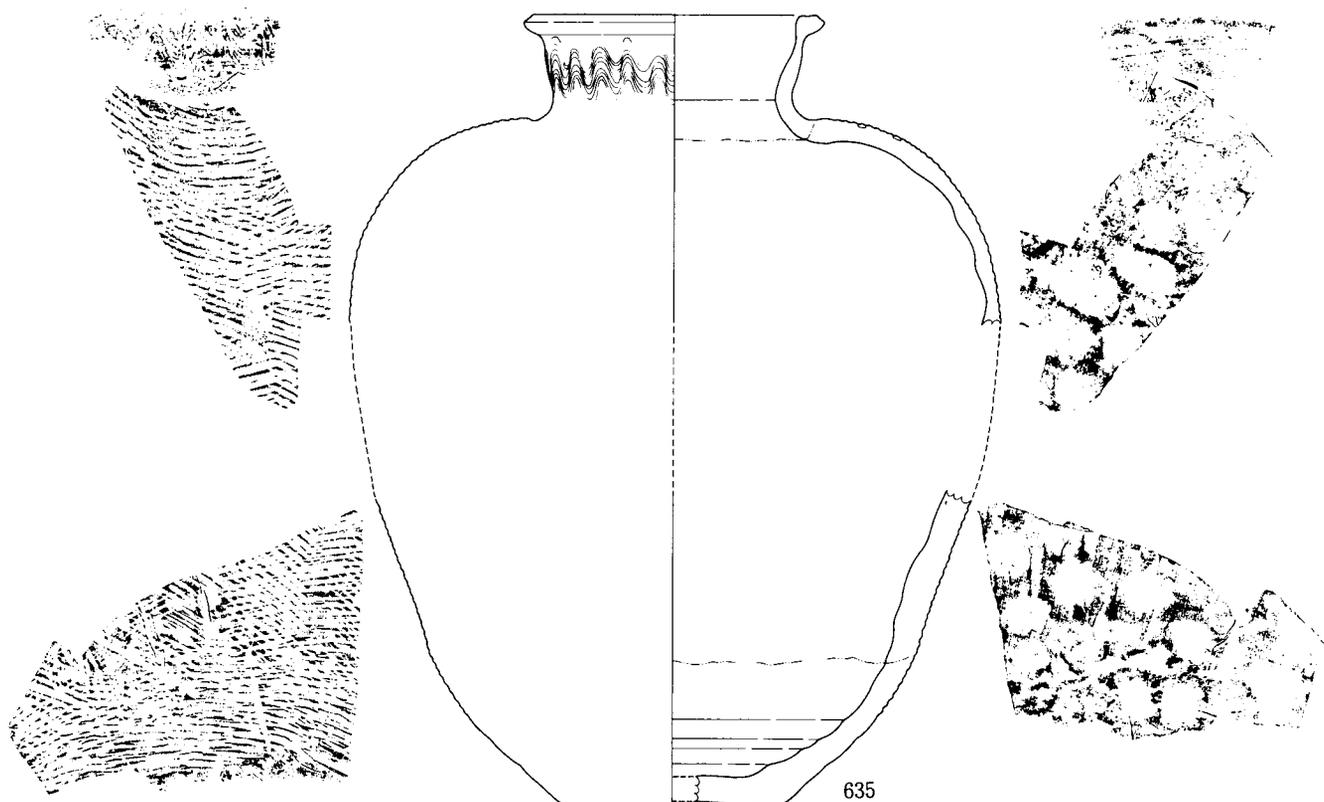
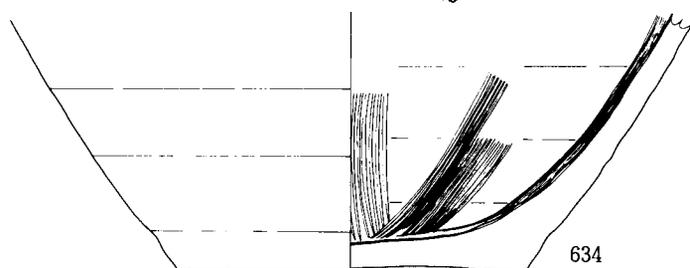
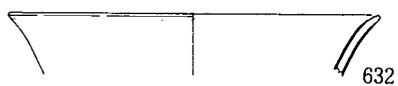
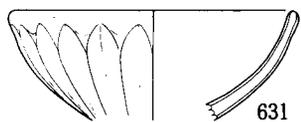
第59图 SD31 出土土器(4) (S=1/3)



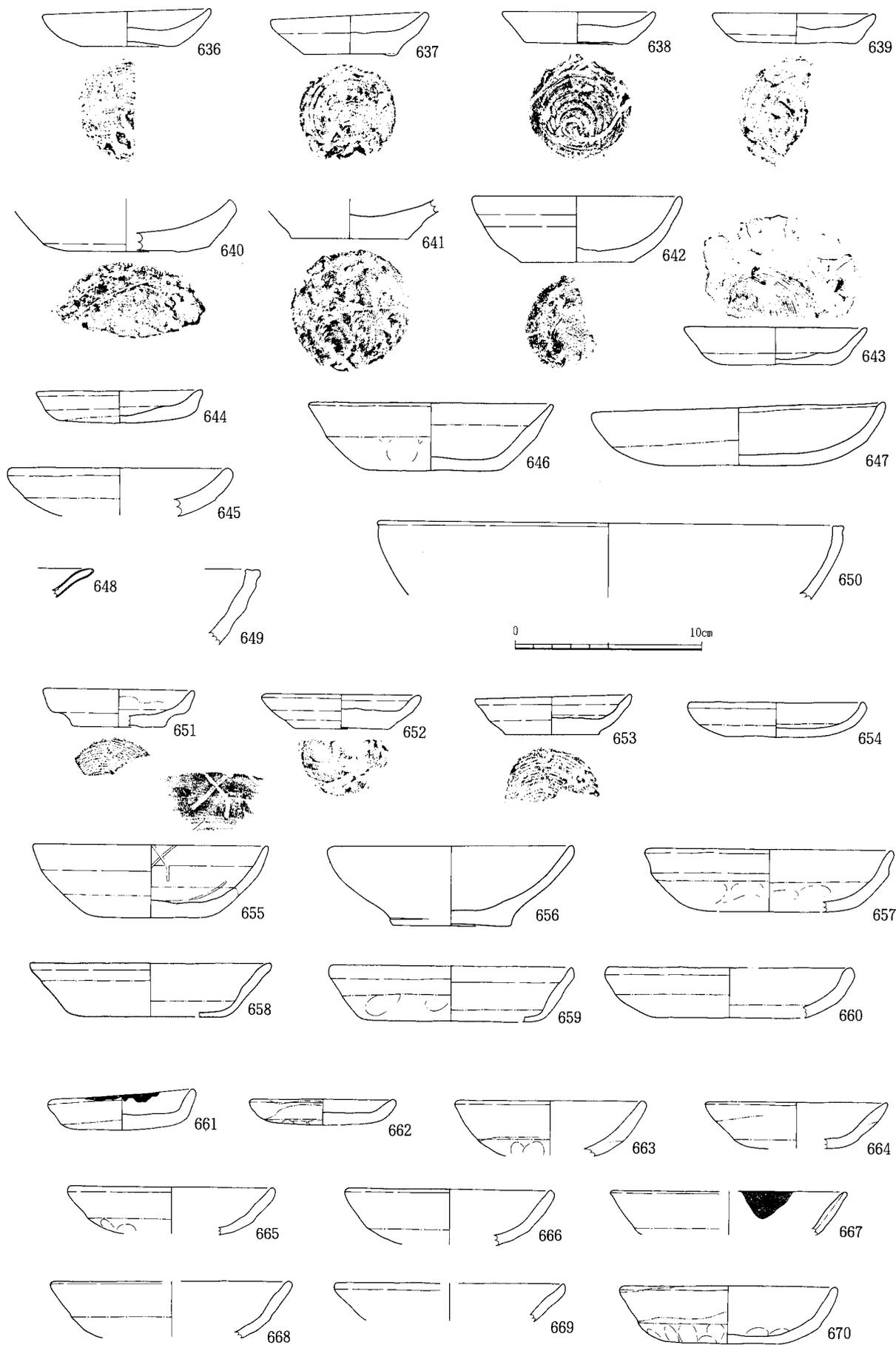
第60图 SD31 出土土器(5) (S=1/3)



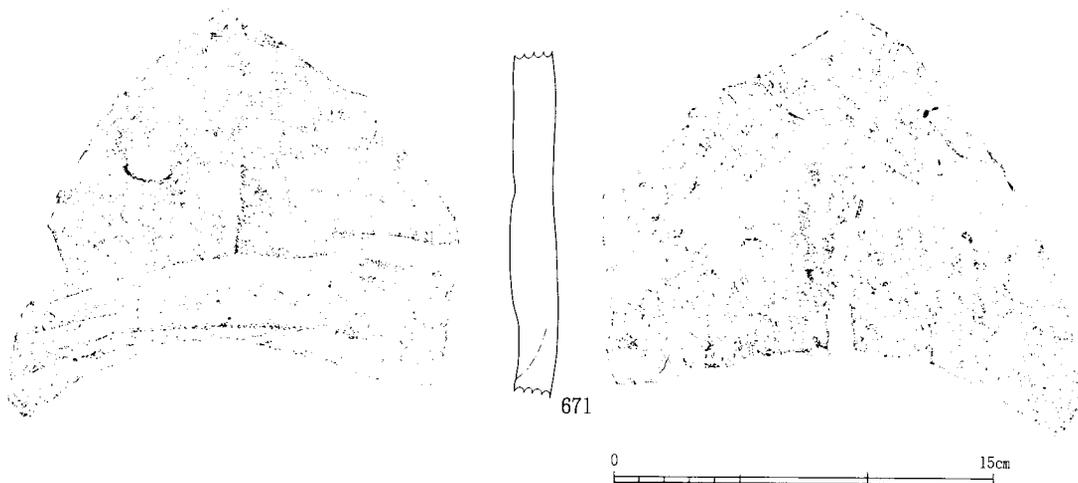
第61图 SD32、33、34、35 出土土器 (S=1/3)



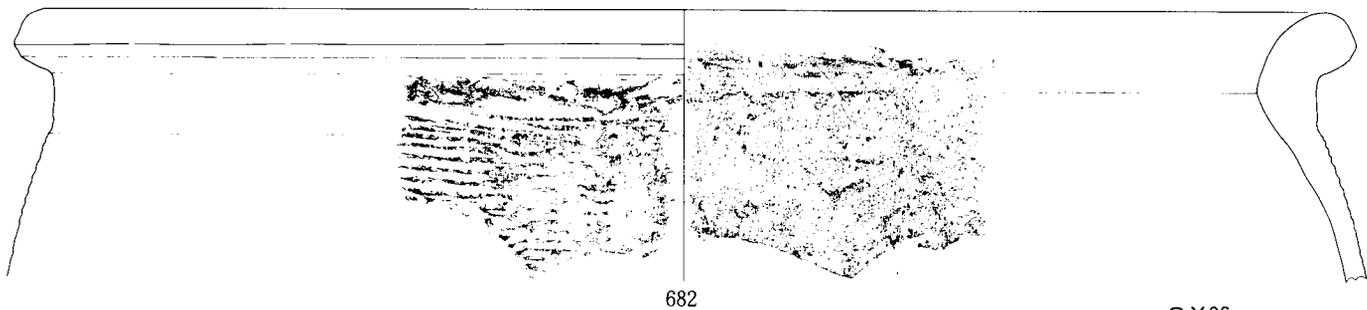
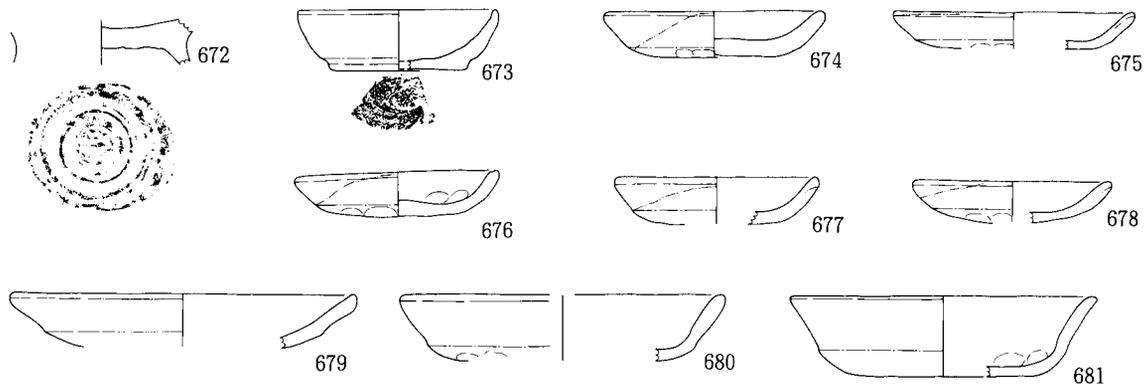
第62図 S D35 出土土器(2) (S=1/3)



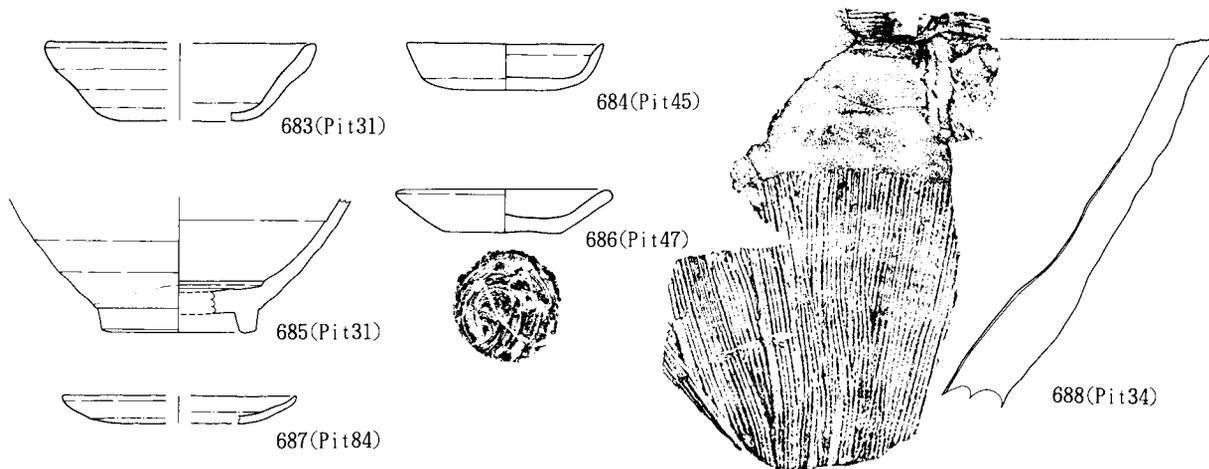
第63图 SX01 出土土器 (S=1/3)



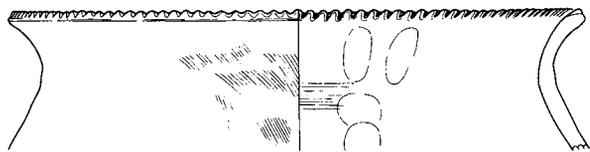
S X05



S X06



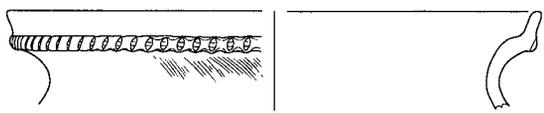
第64図 S X05、06 ピット出土土器 (S=1/3)



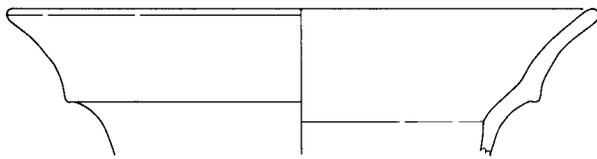
689



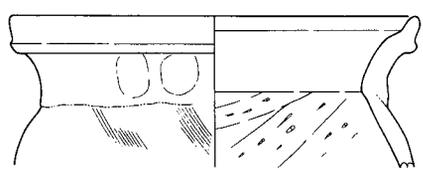
696



690



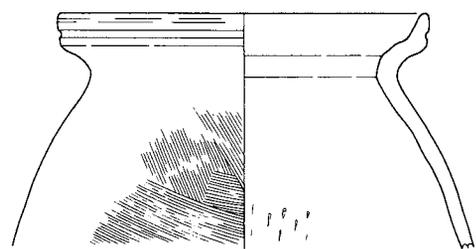
697



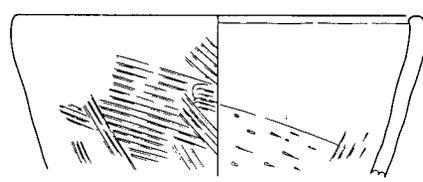
691



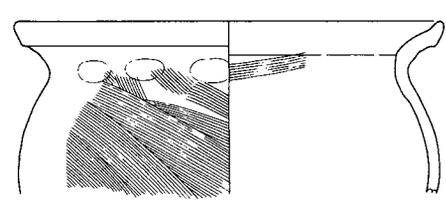
698



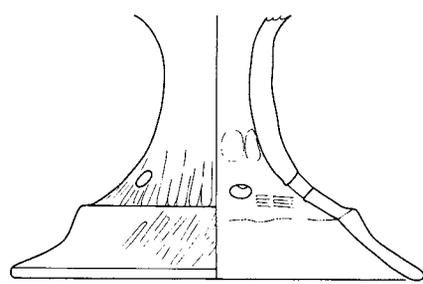
692



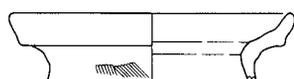
699



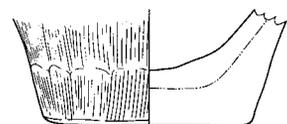
693



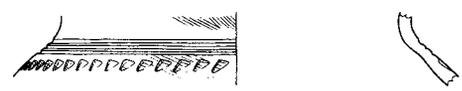
700



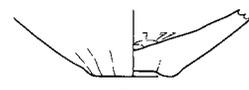
694



701



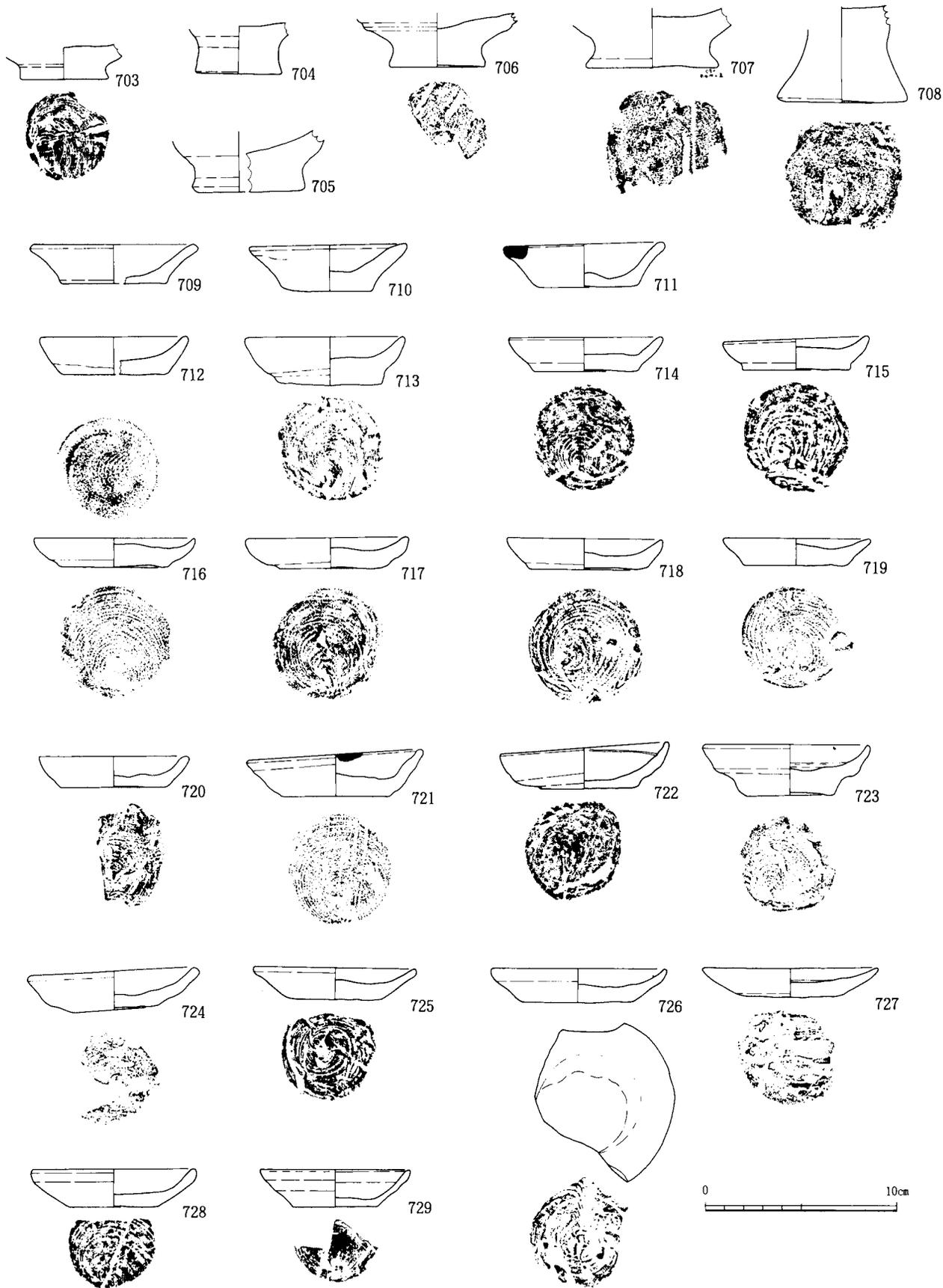
695



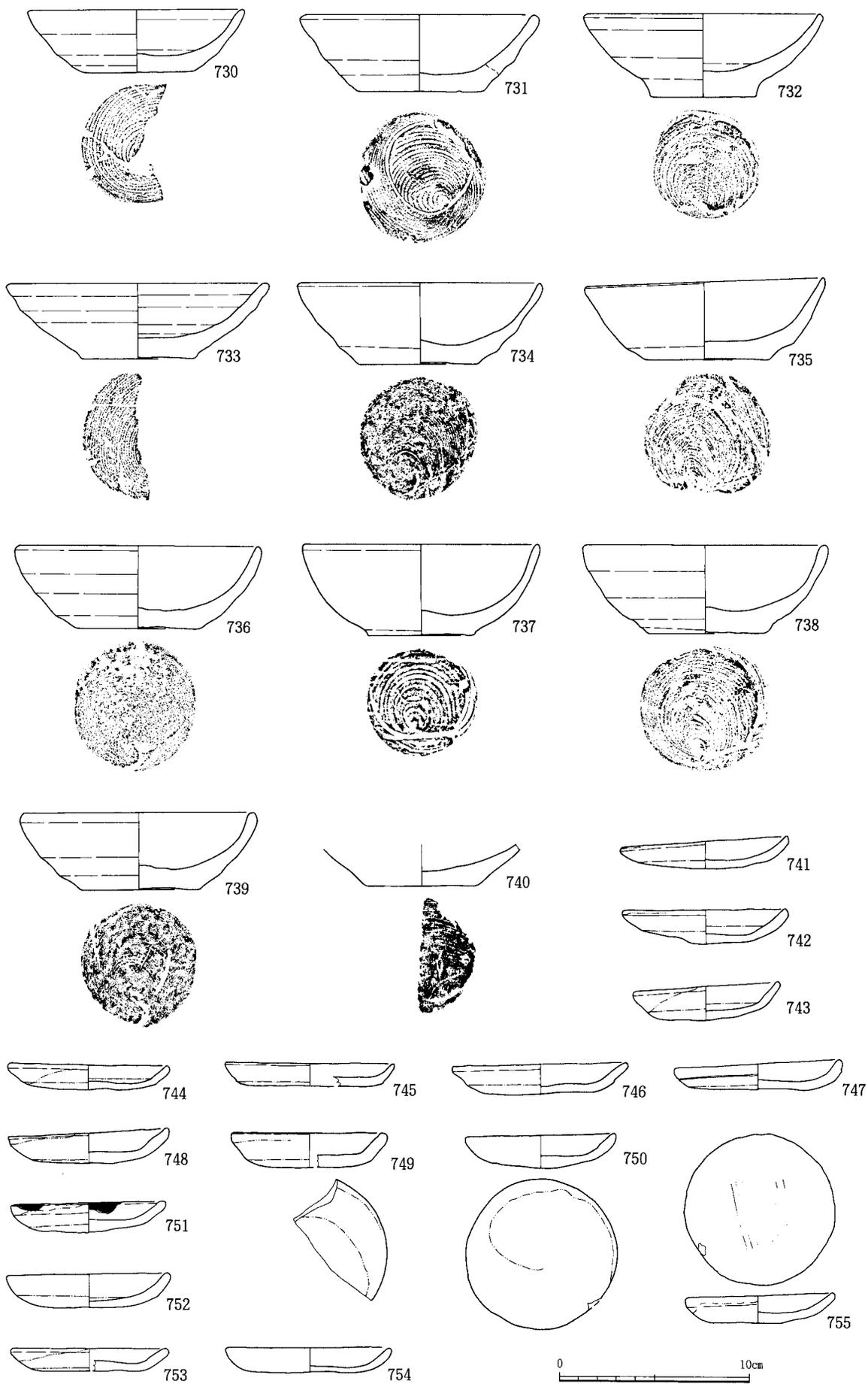
702



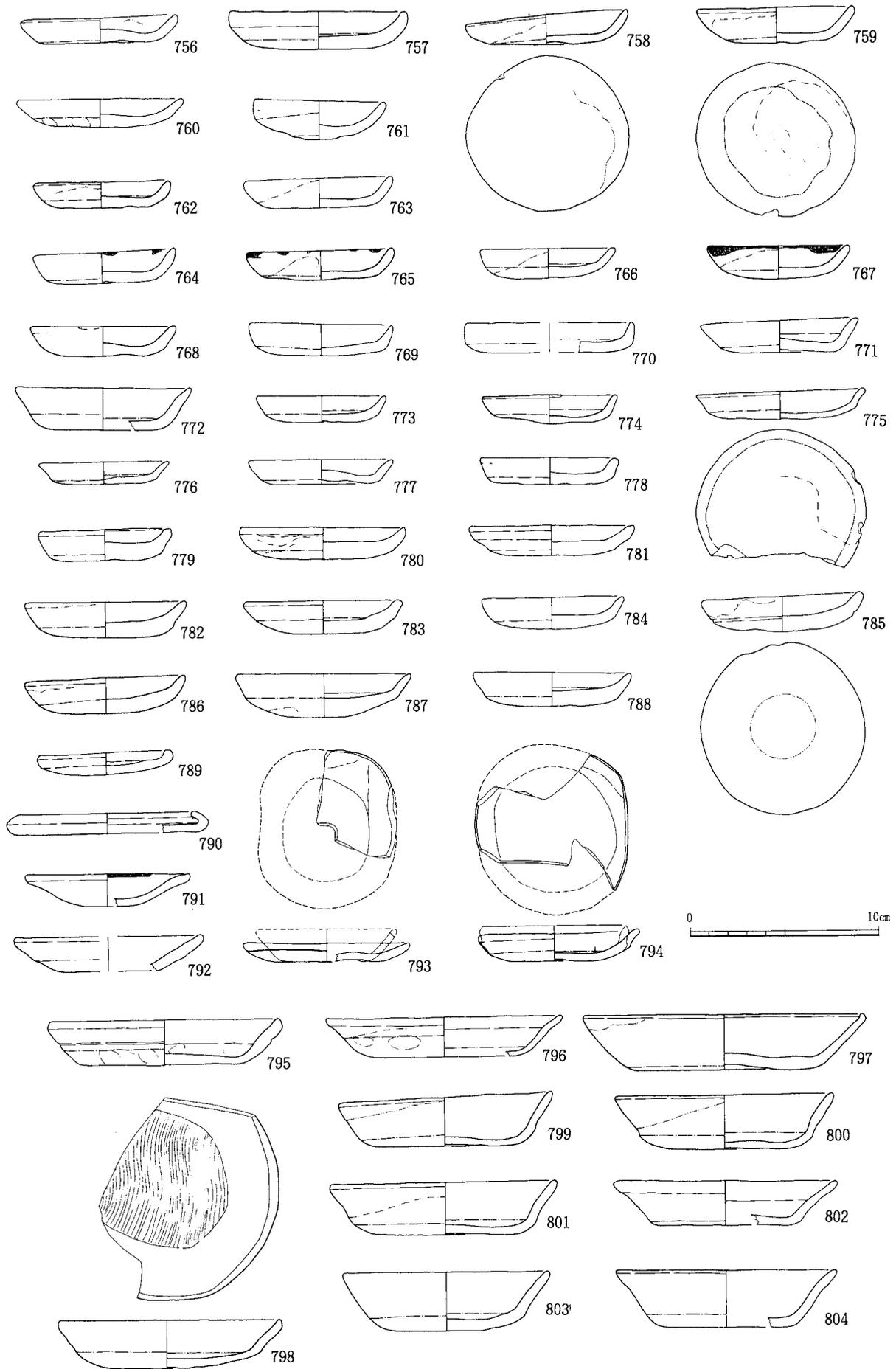
第65图 SD22-2 出土土器 (S=1/3)



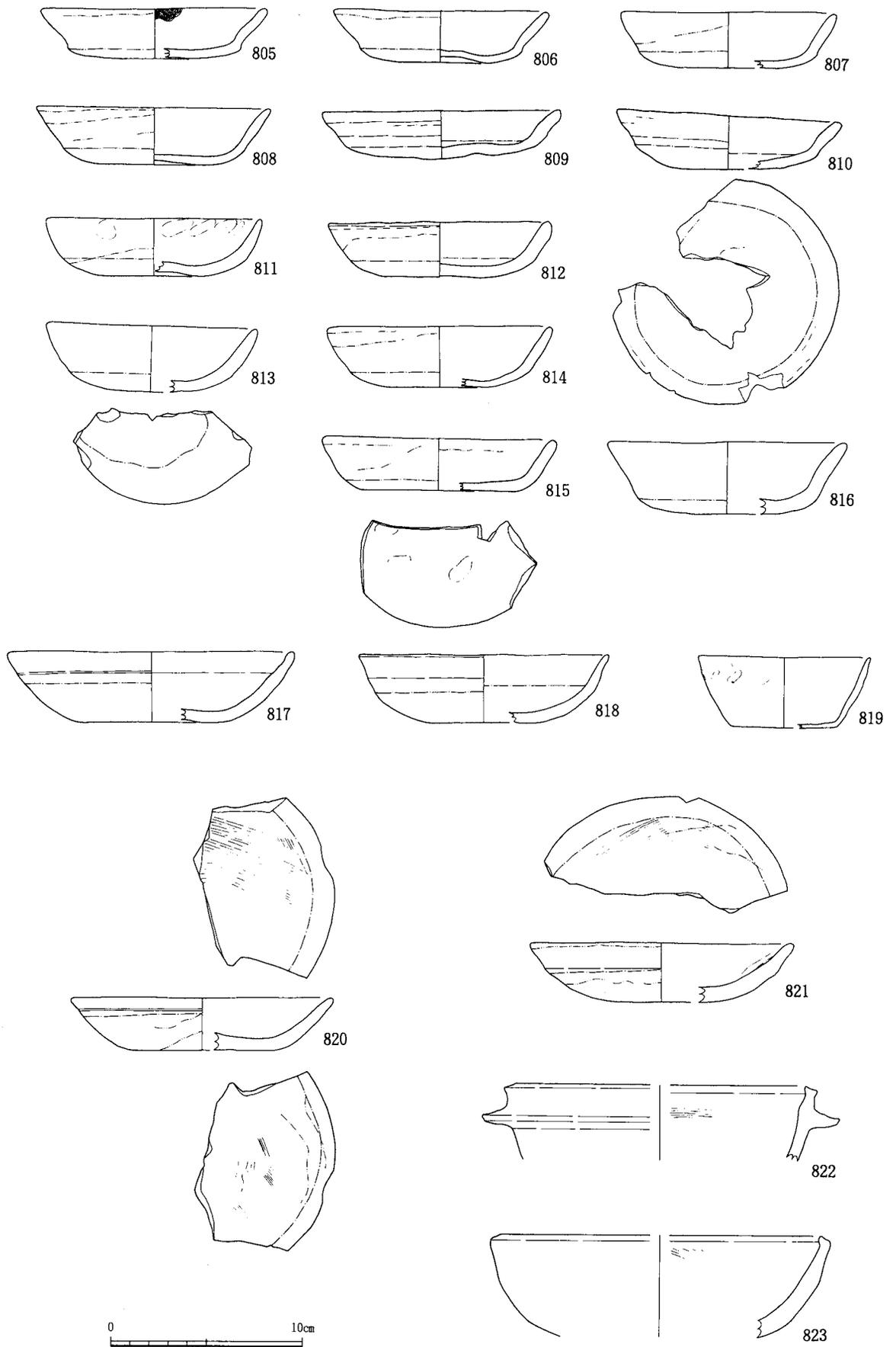
第66图 包含層出土土器(1) (S=1/3)



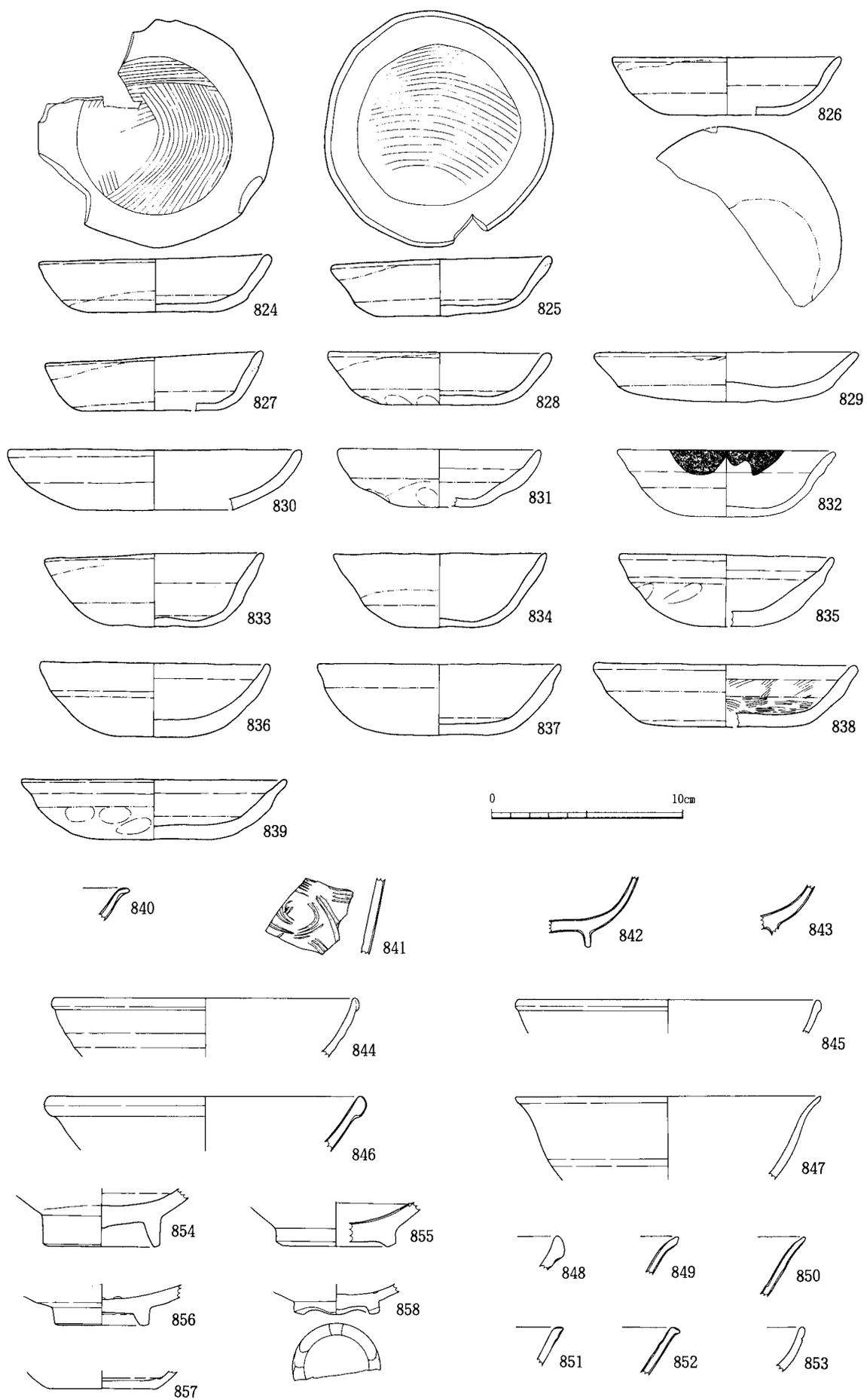
第67图 包含層出土土器(2) (S=1/3)



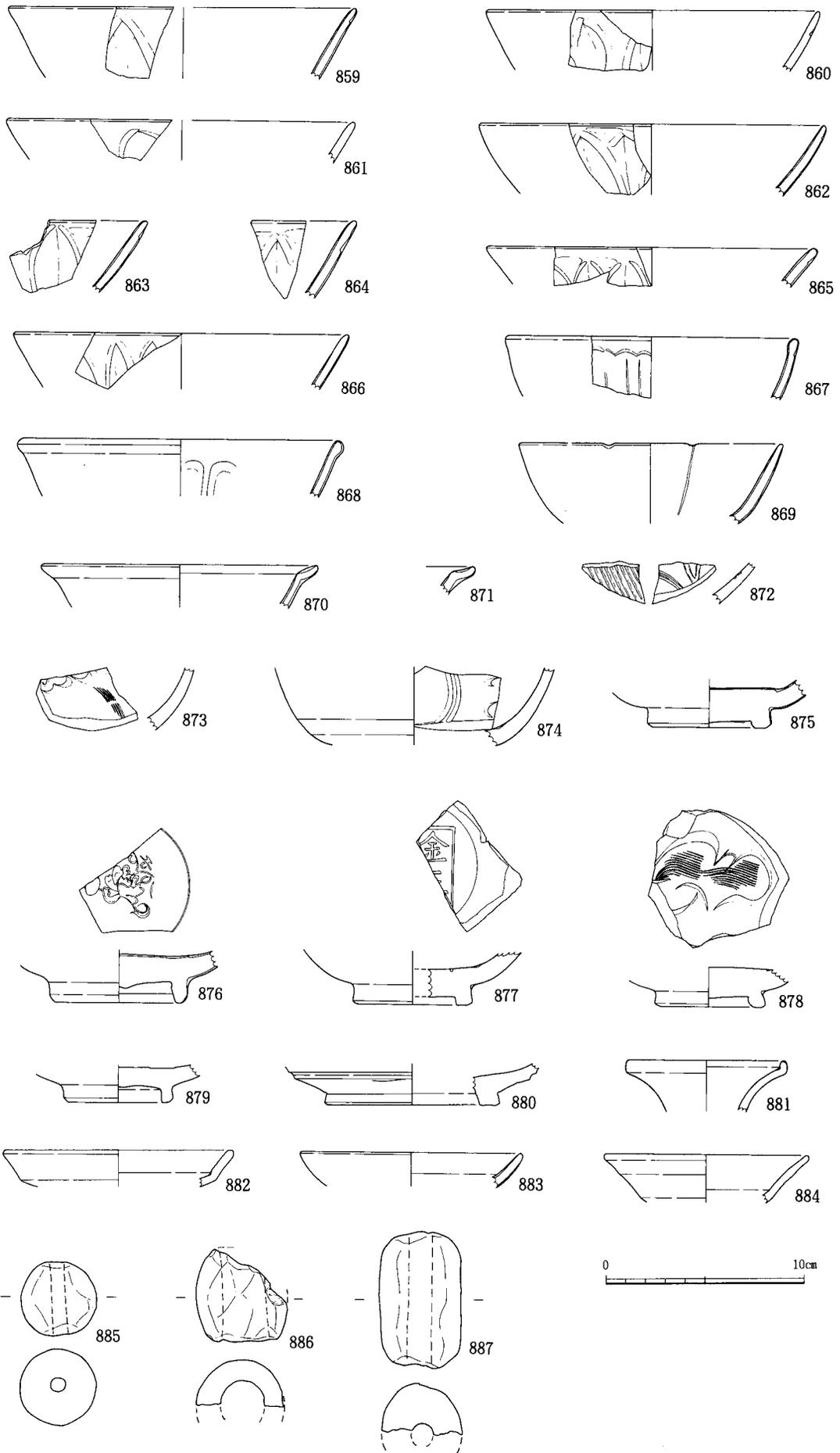
第68图 包含層出土土器(3) (S=1/3)



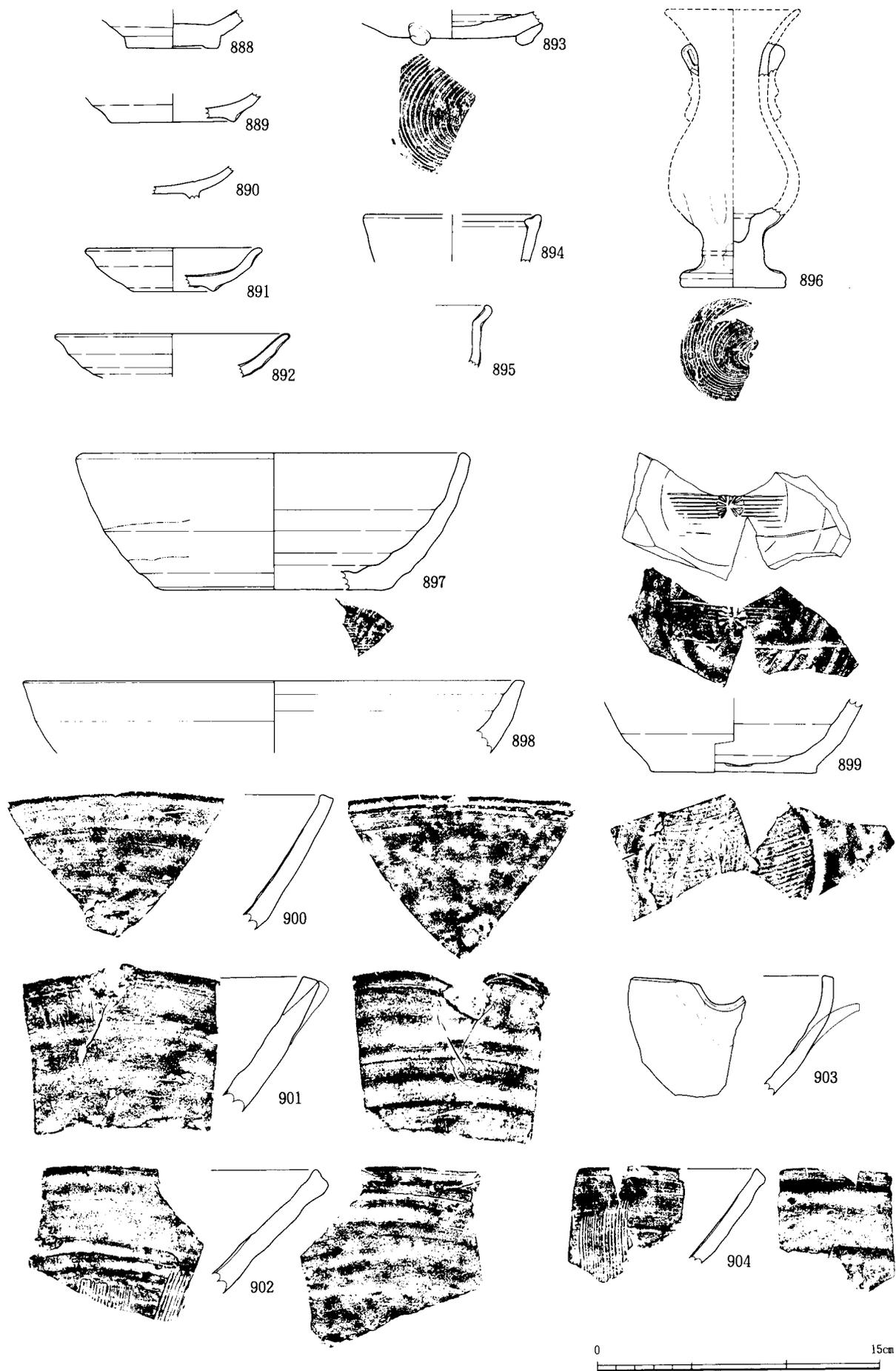
第69图 包含層出土土器(4) (S=1/3)



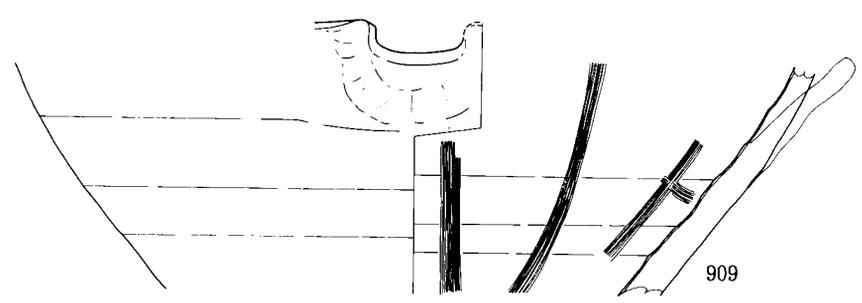
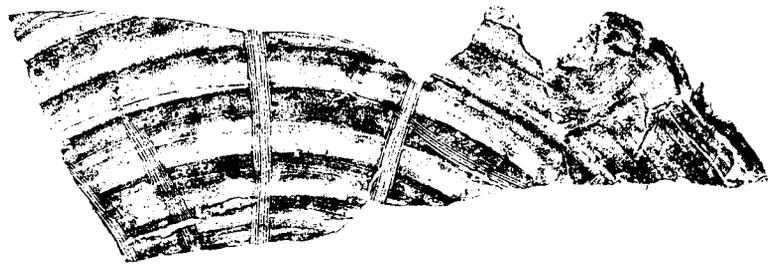
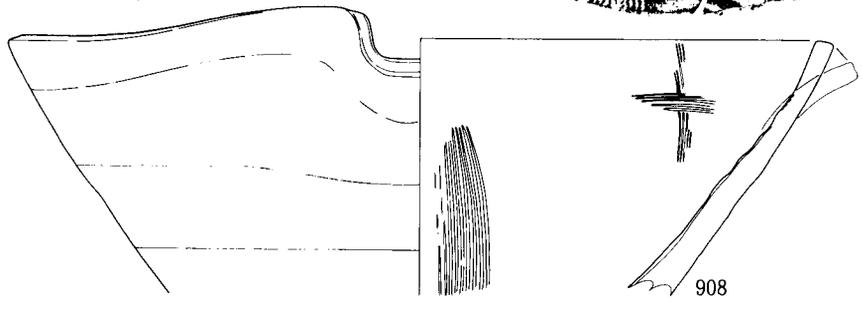
第70図 包含層出土土器(5) (S=1/3)



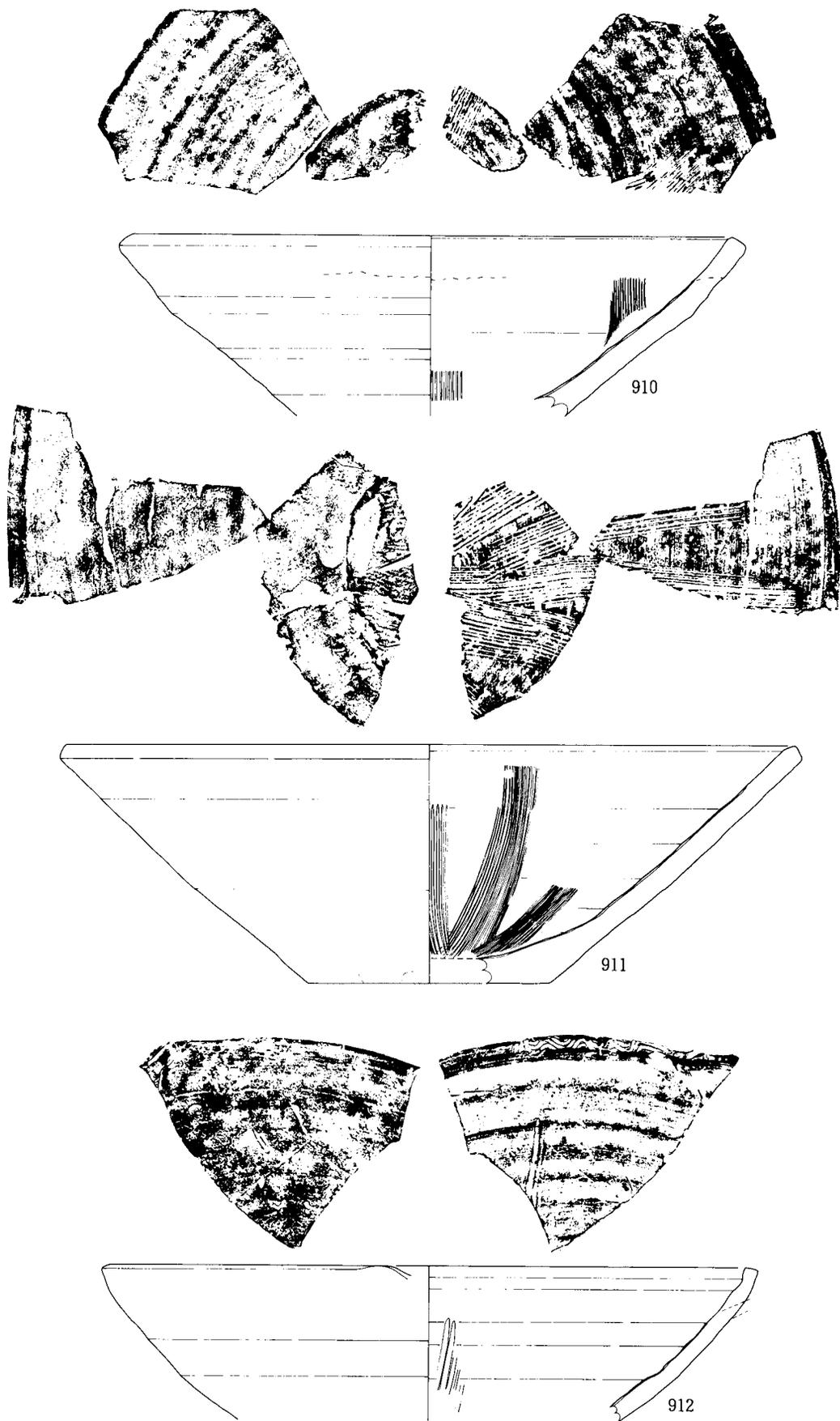
第71图 包含層出土土器(6) (S=1/3)



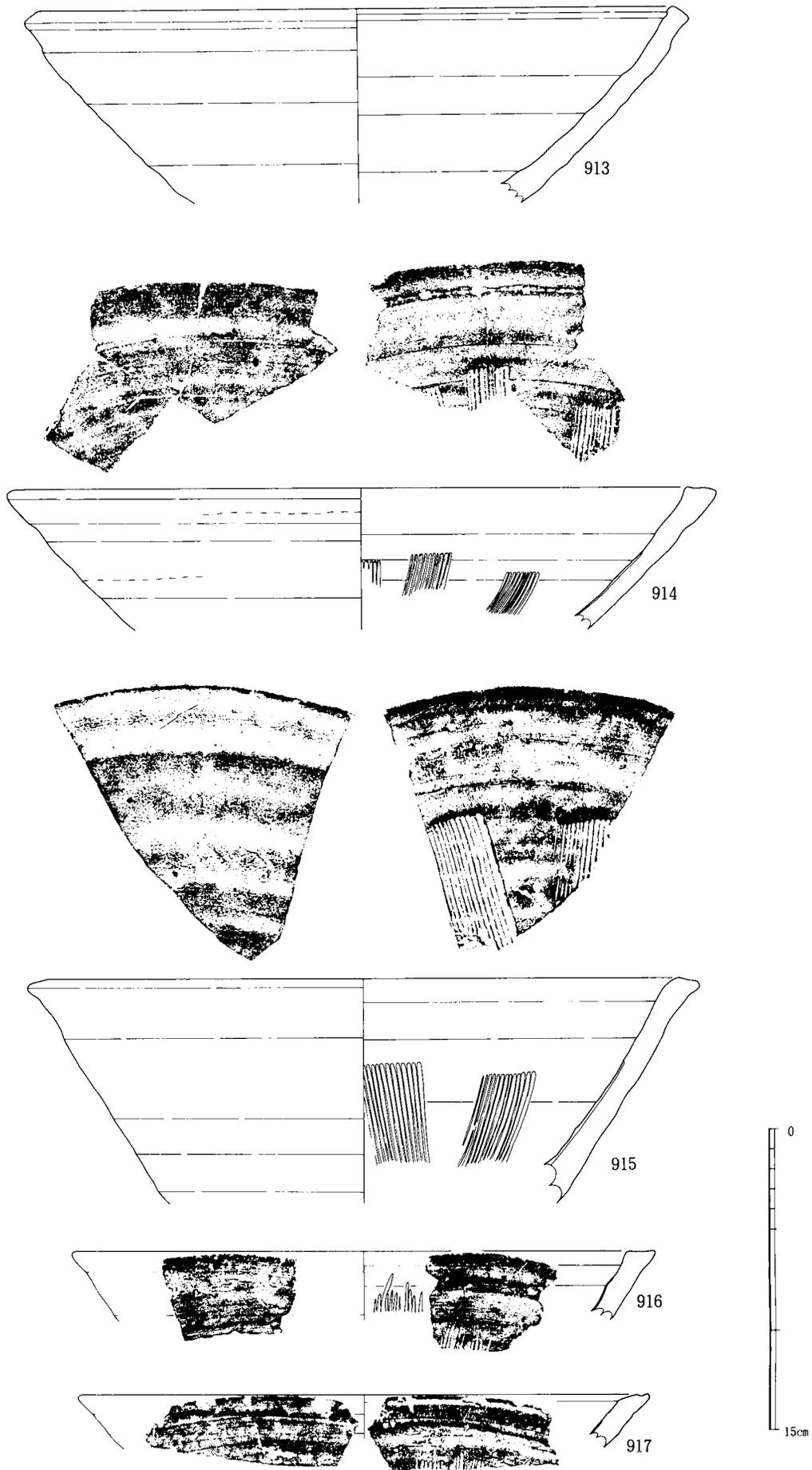
第72図 包含層出土土器(7) (S=1/3)



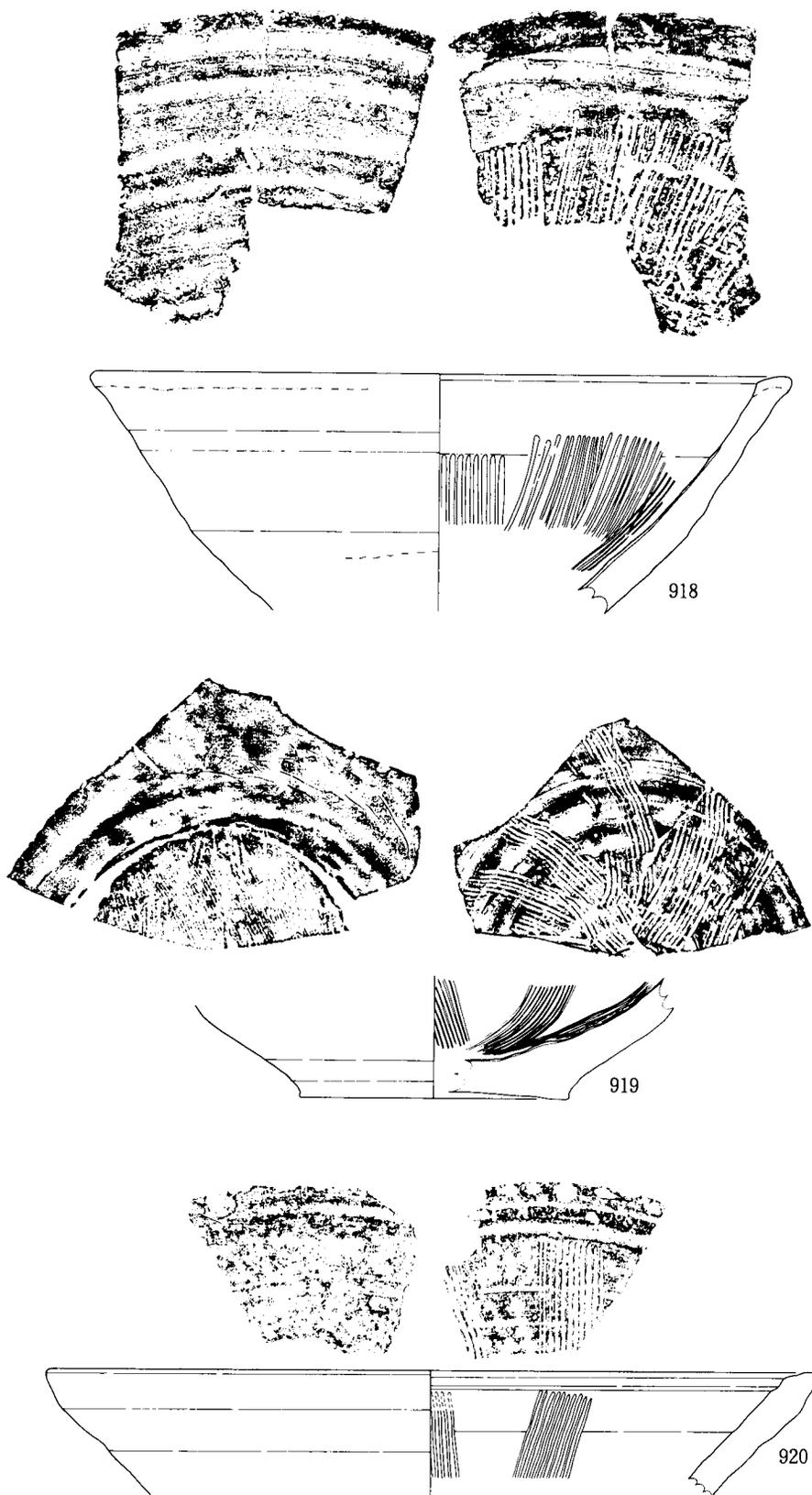
第73图 包含層出土土器(8) (S=1/3)



第74図 包含層出土土器(9) (S=1/3)

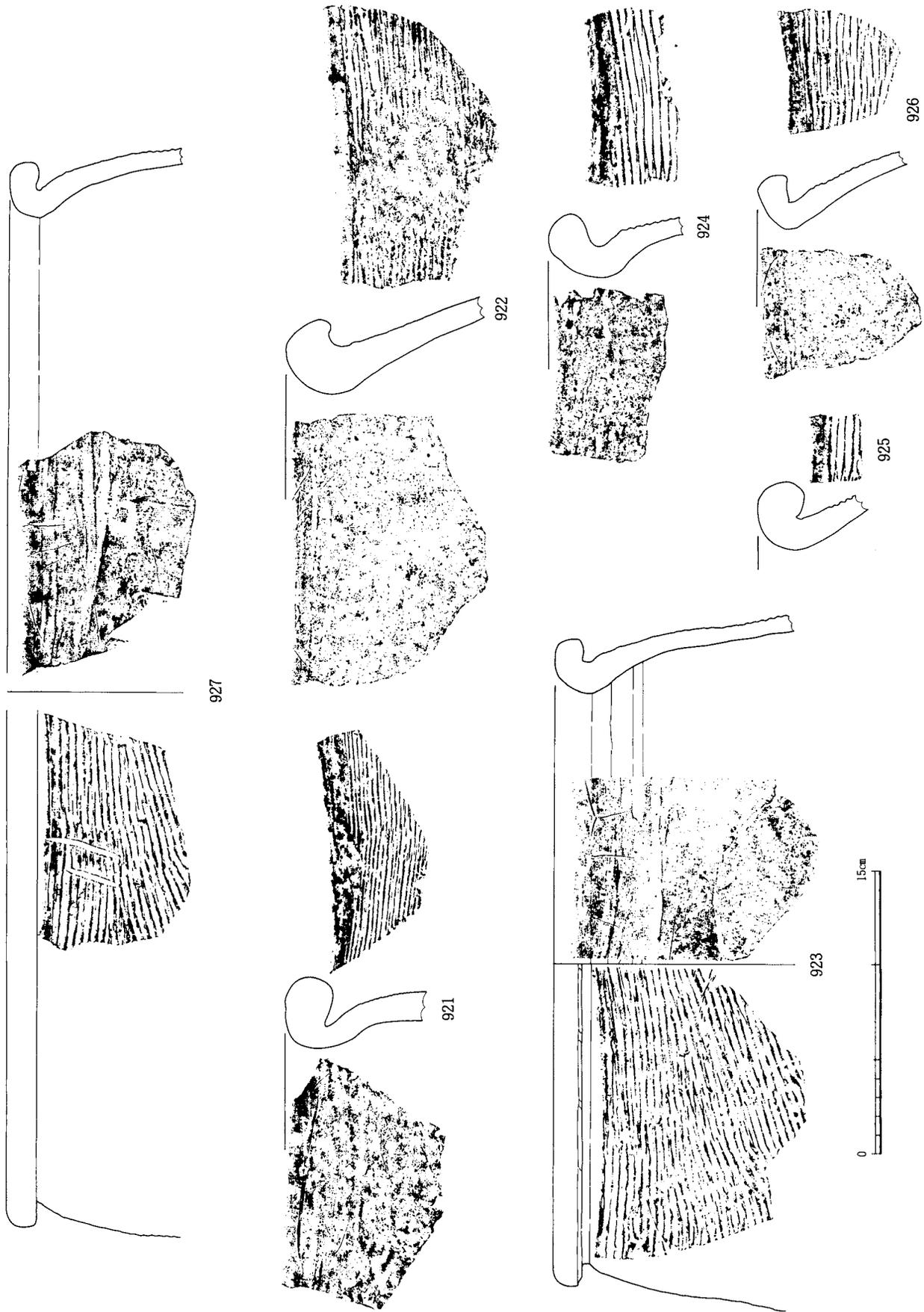


第75図 包含層出土土器(10) (S=1/3)



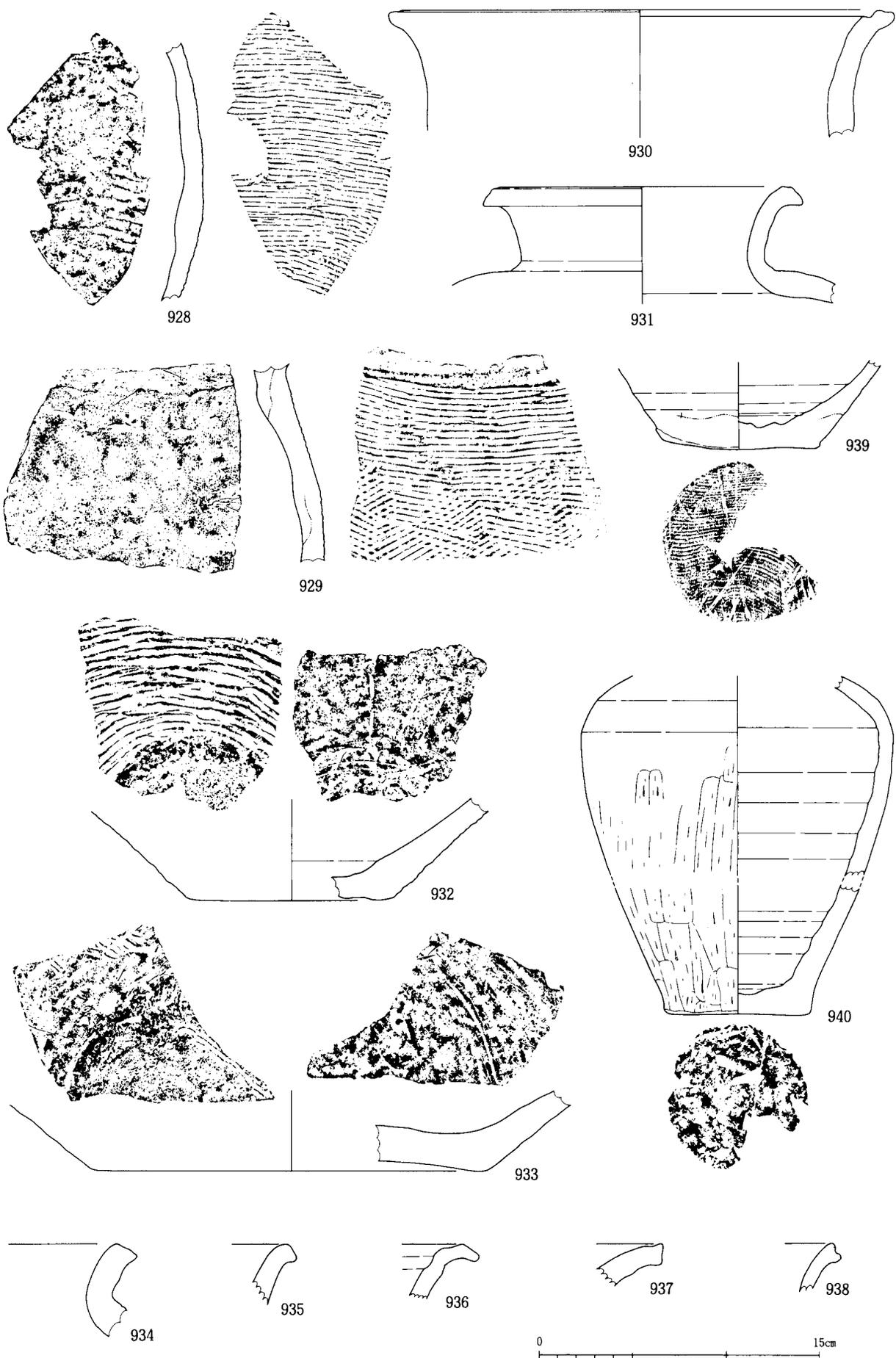
0 15cm

第76图 包含層出土土器(1) (S=1/3)

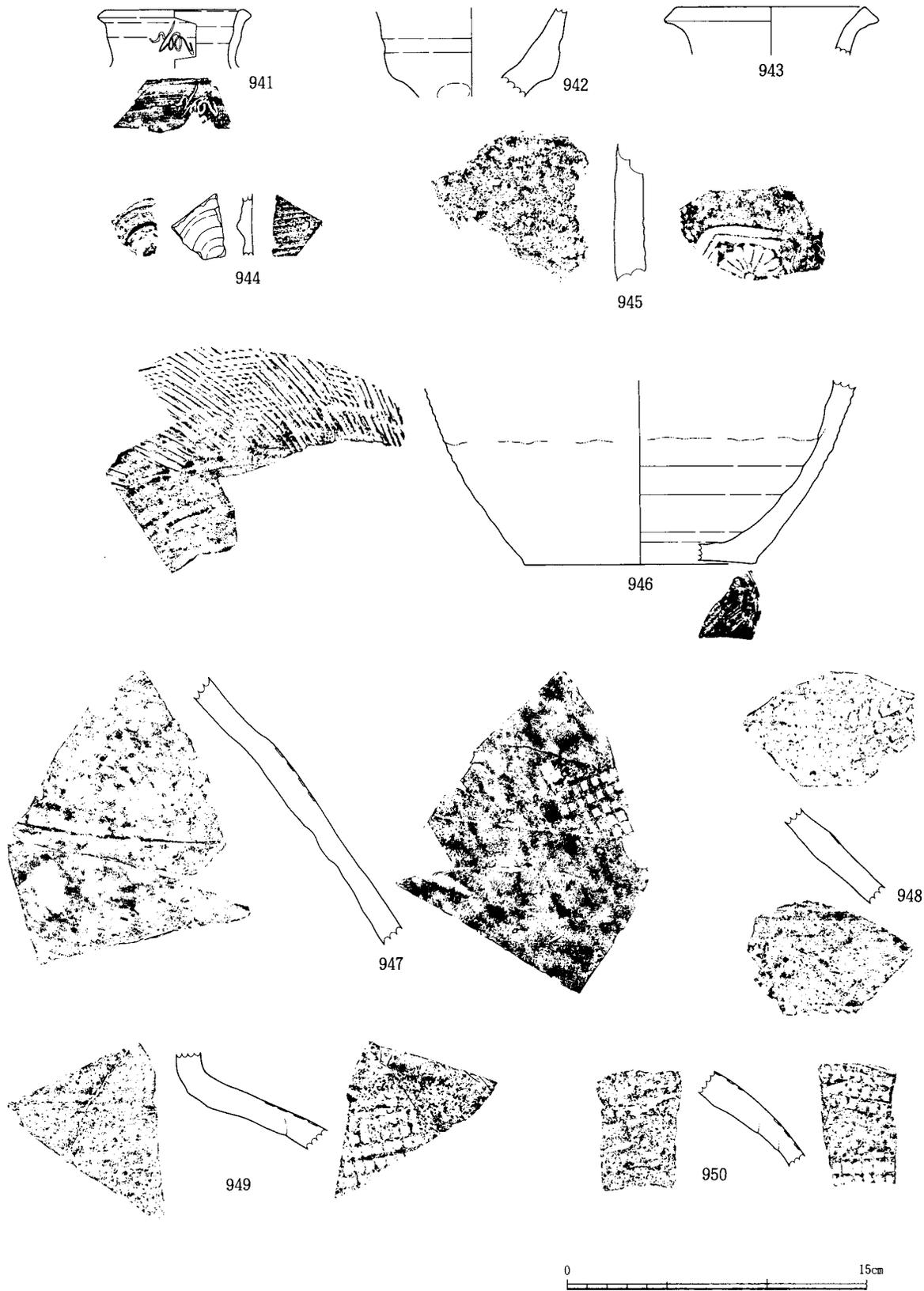


第77図 包含層出土土器(2) (S=1/3)

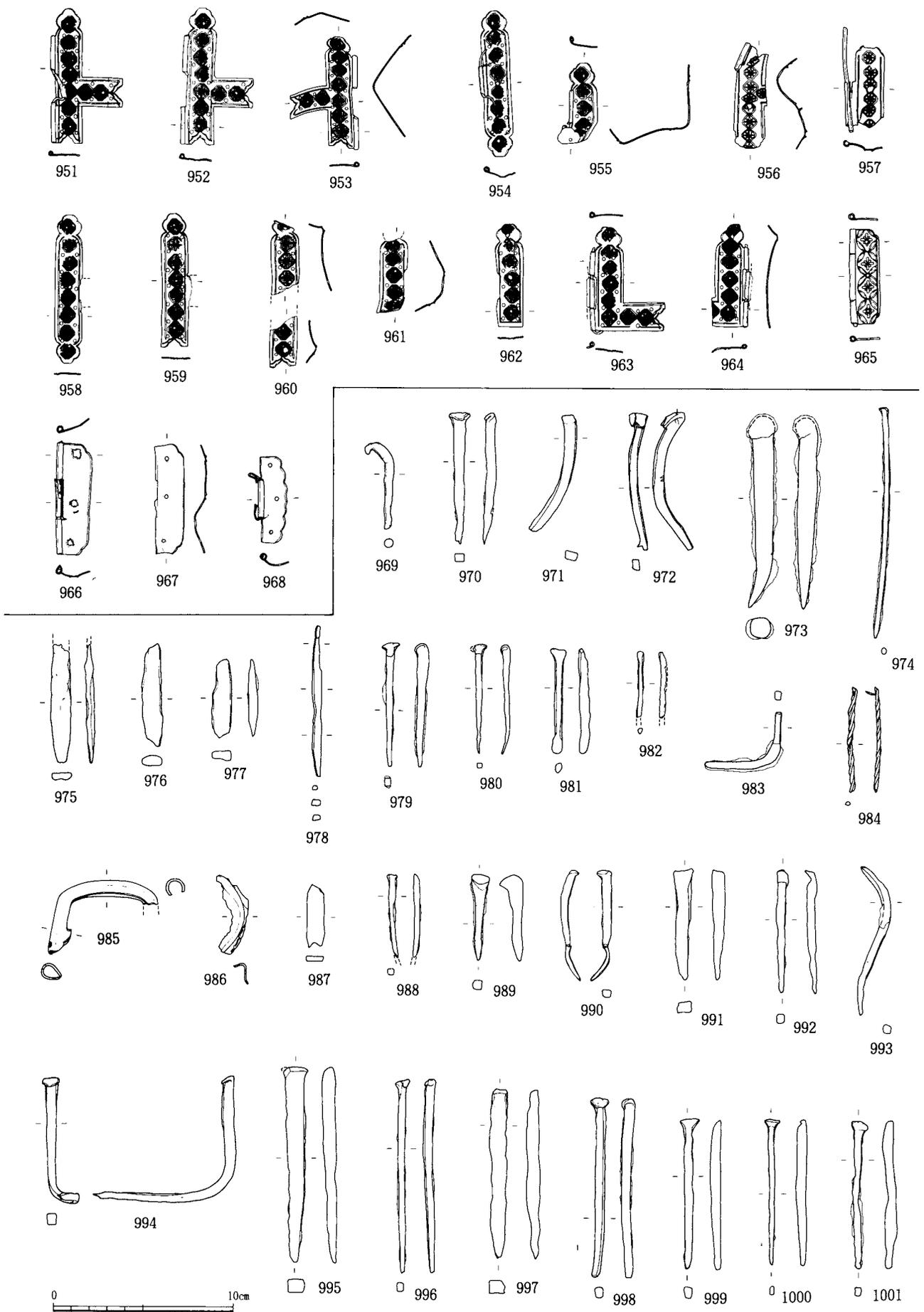
包含層出土土器



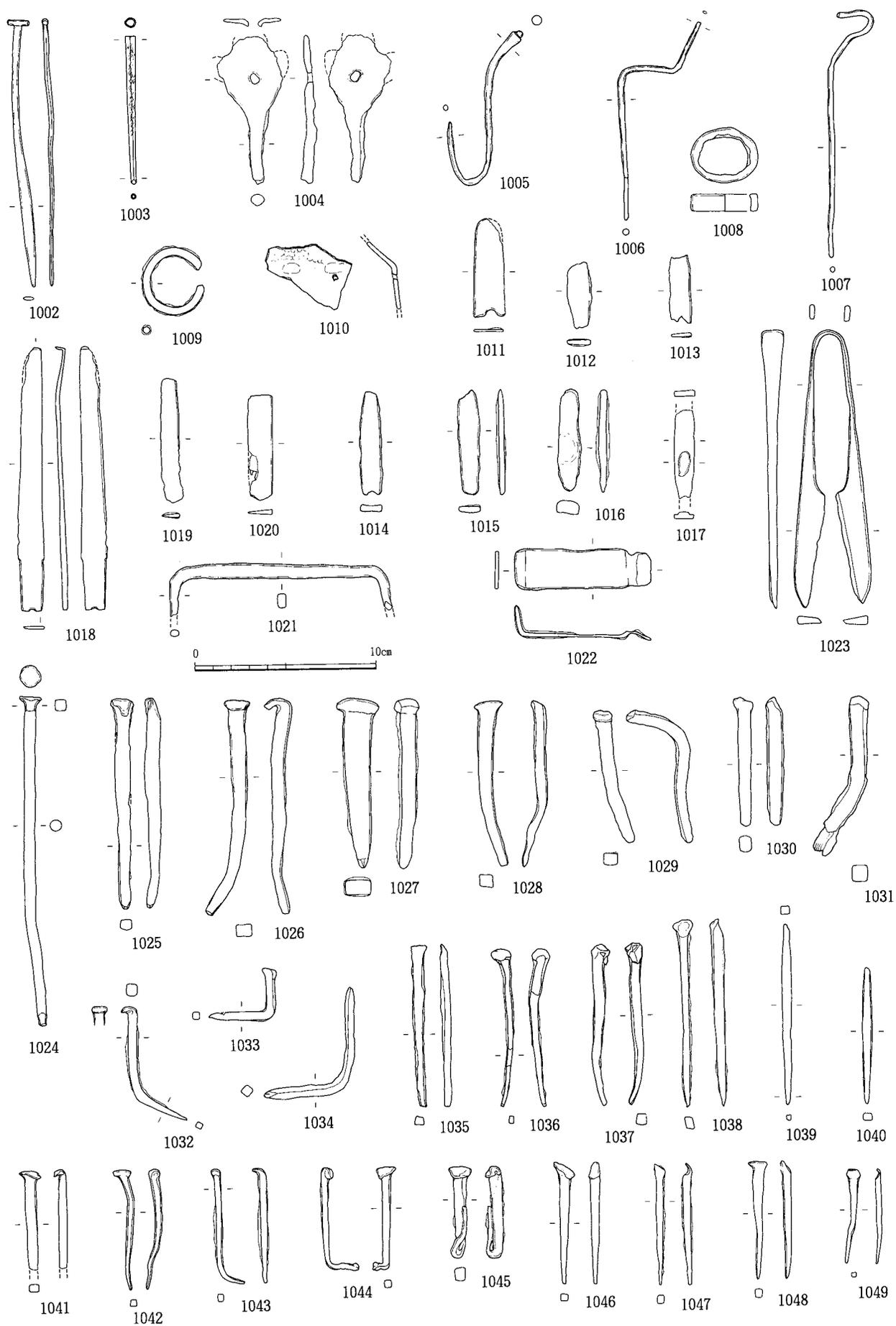
第78図 包含層出土土器(13) (S=1/3)



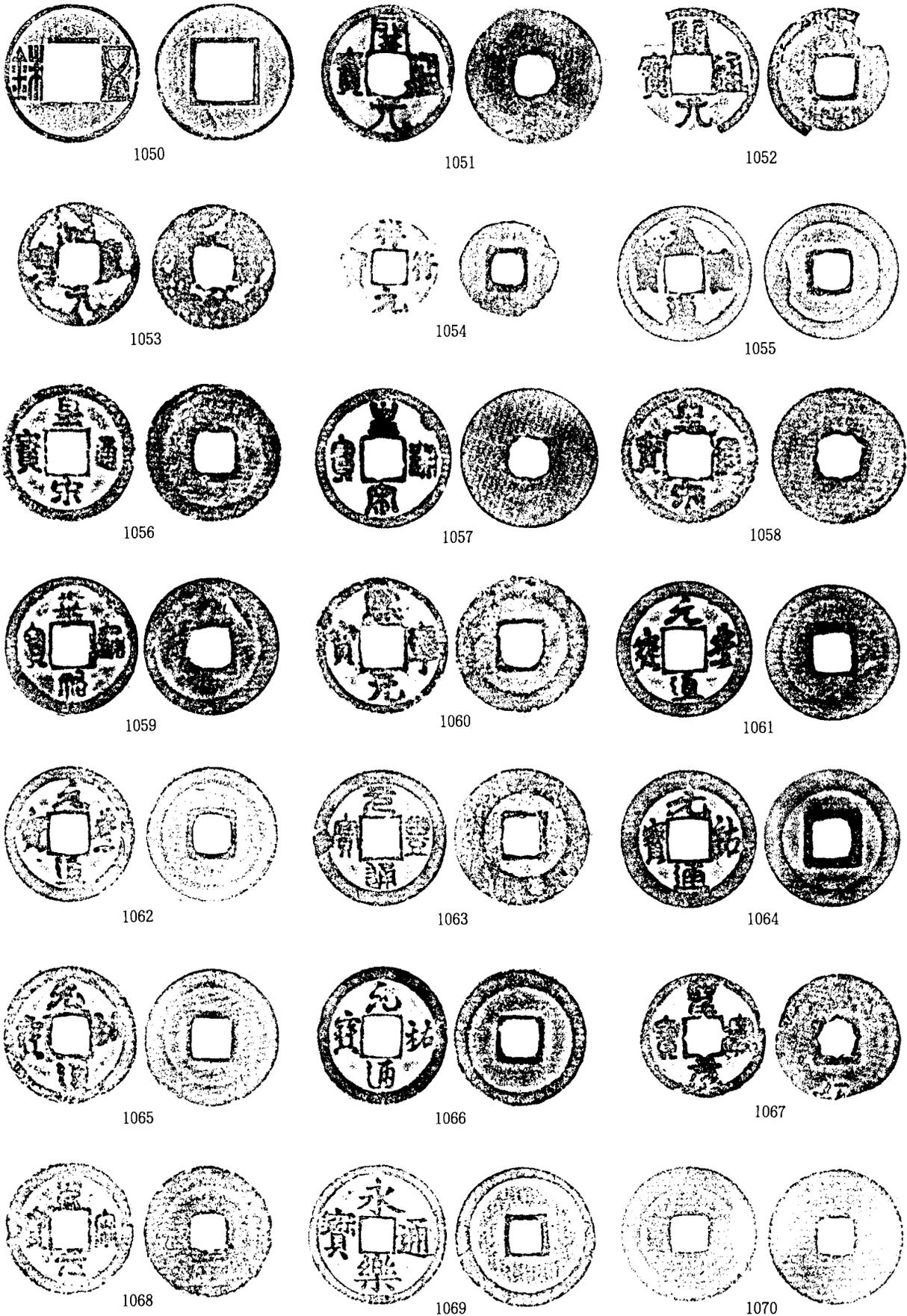
第79图 包含層出土土器(14) (S=1/3)



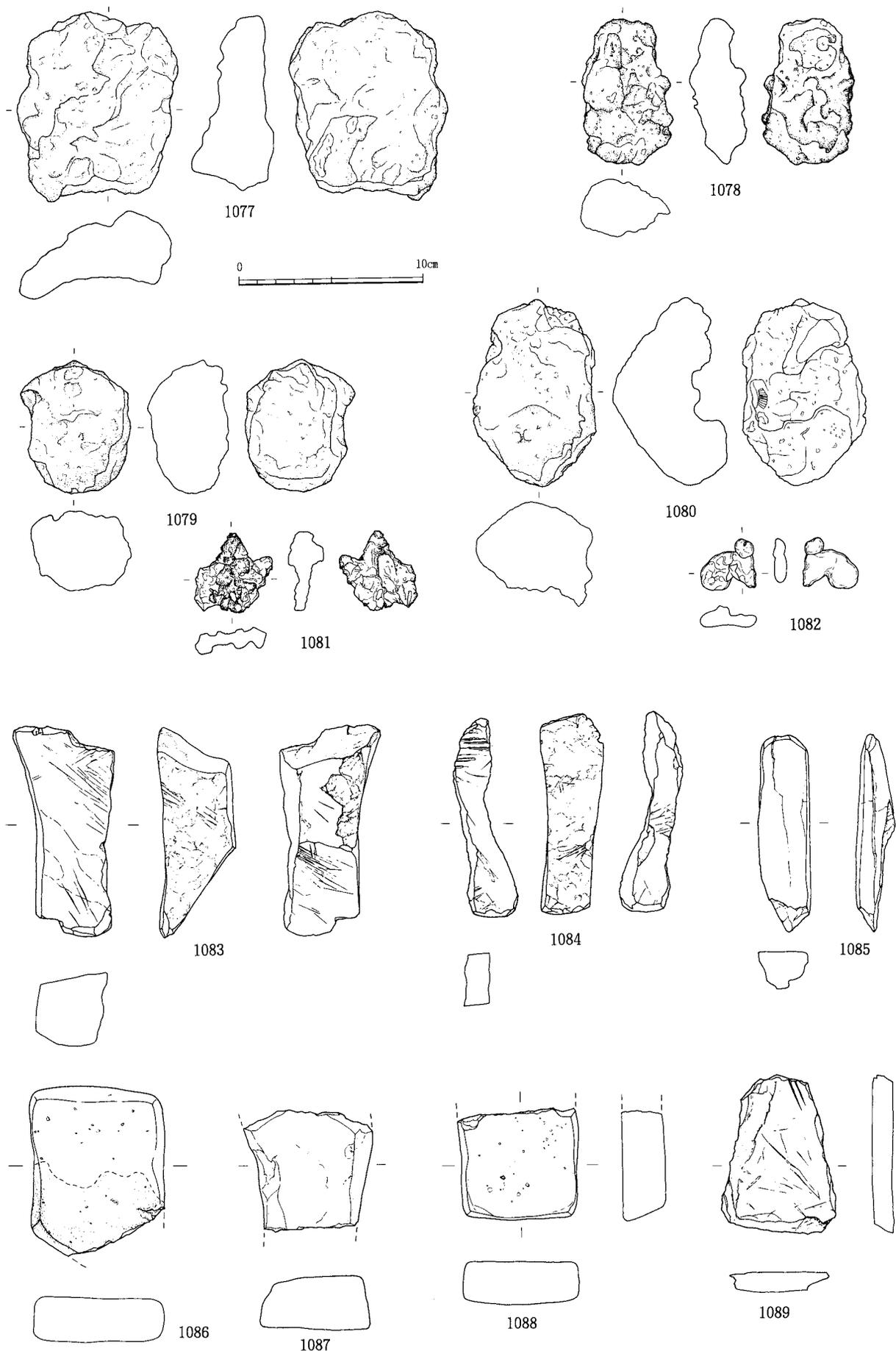
第80图 遺構出土金属製品 (S=1/3)



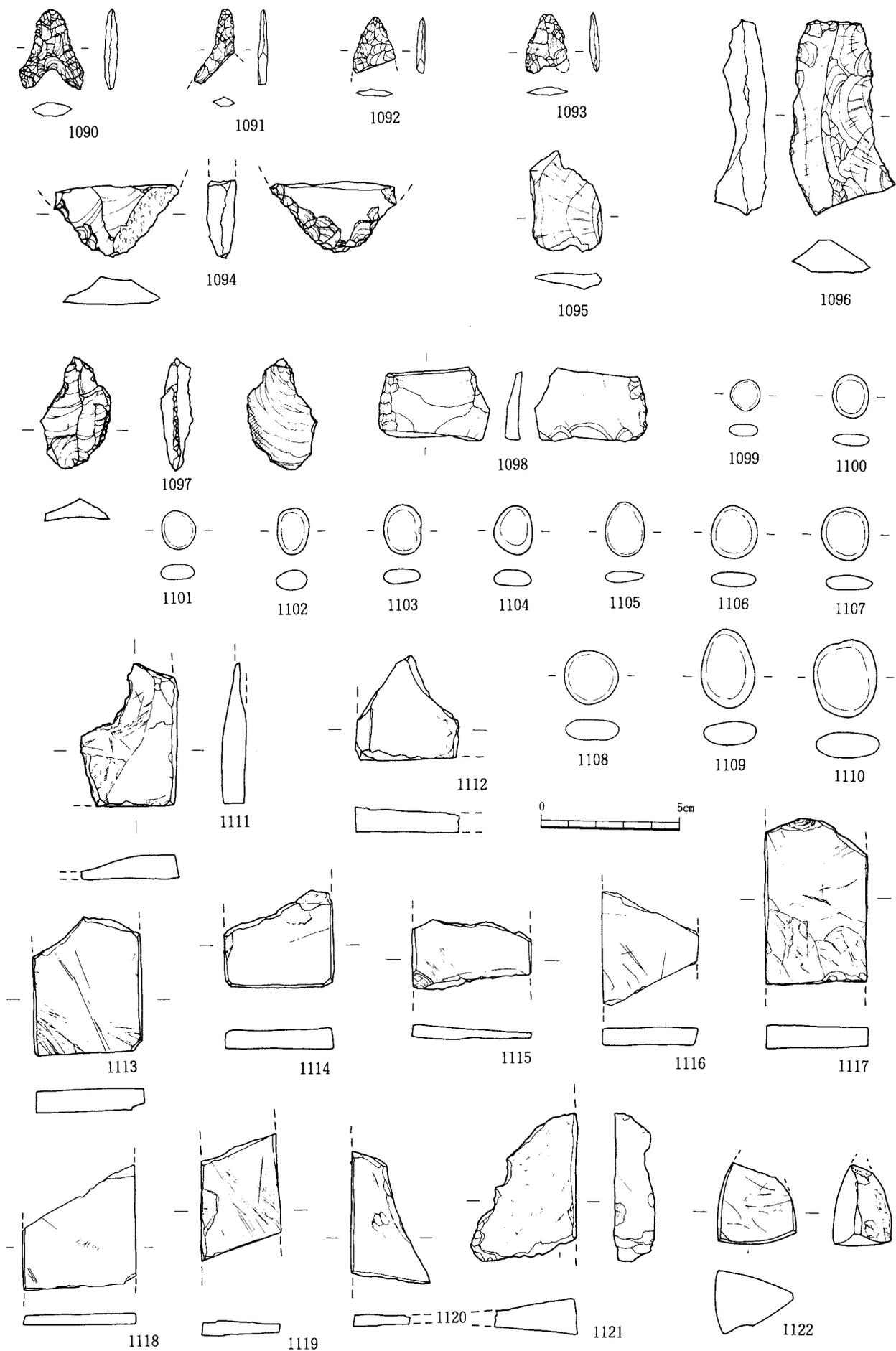
第81图 包含層出土金属製品 (S=1/3)



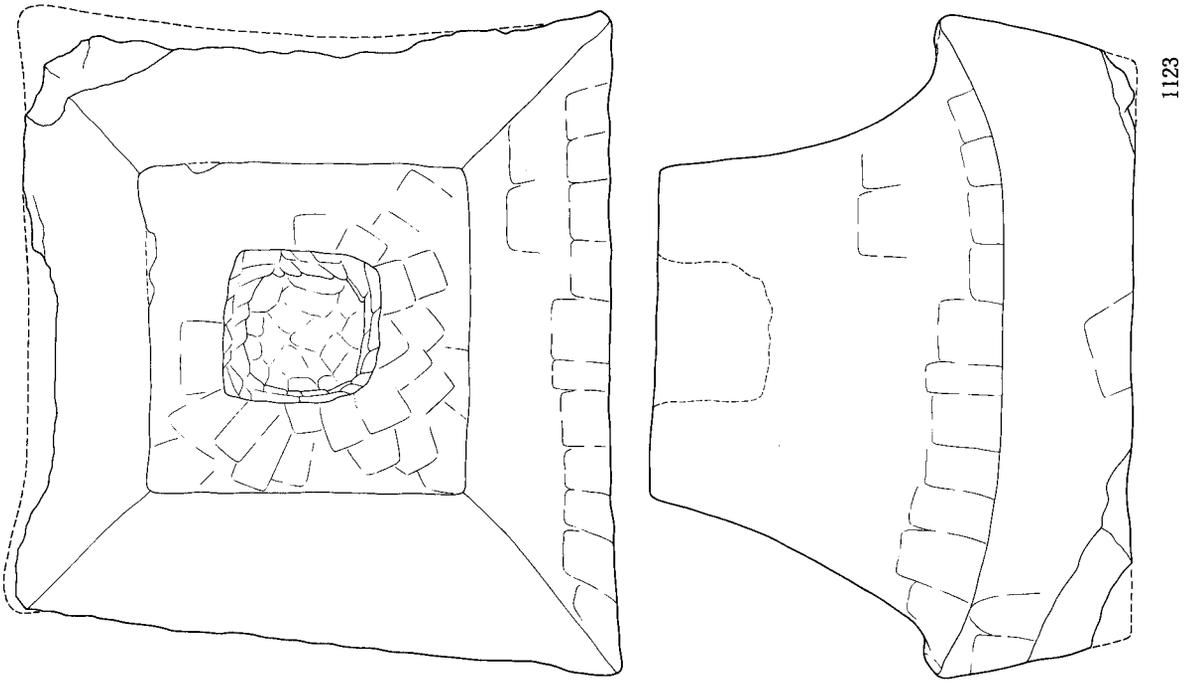
第82図 古銭拓影（原寸、1071～1076は拓本なし）



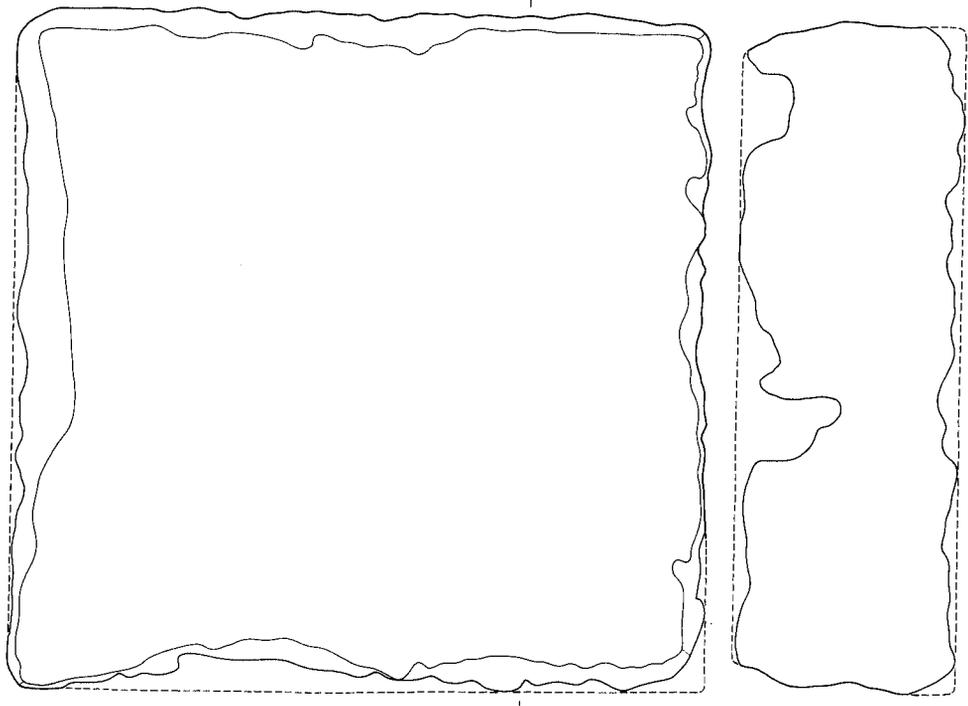
第83図 遺構出土鉄滓、石製品 (S=1/3)



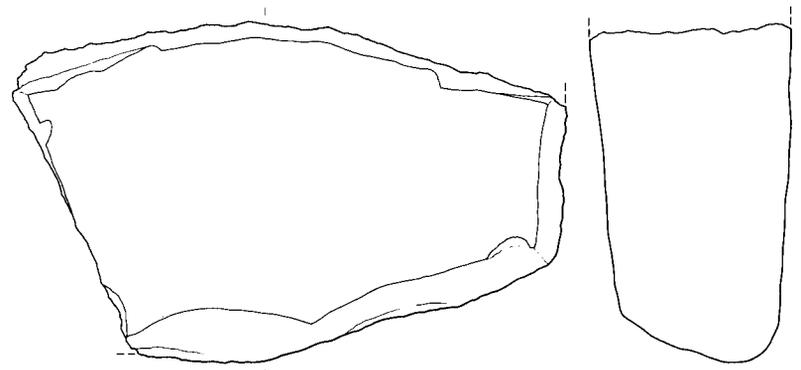
第84图 包含層出土石製品 (S=1/2)



1123



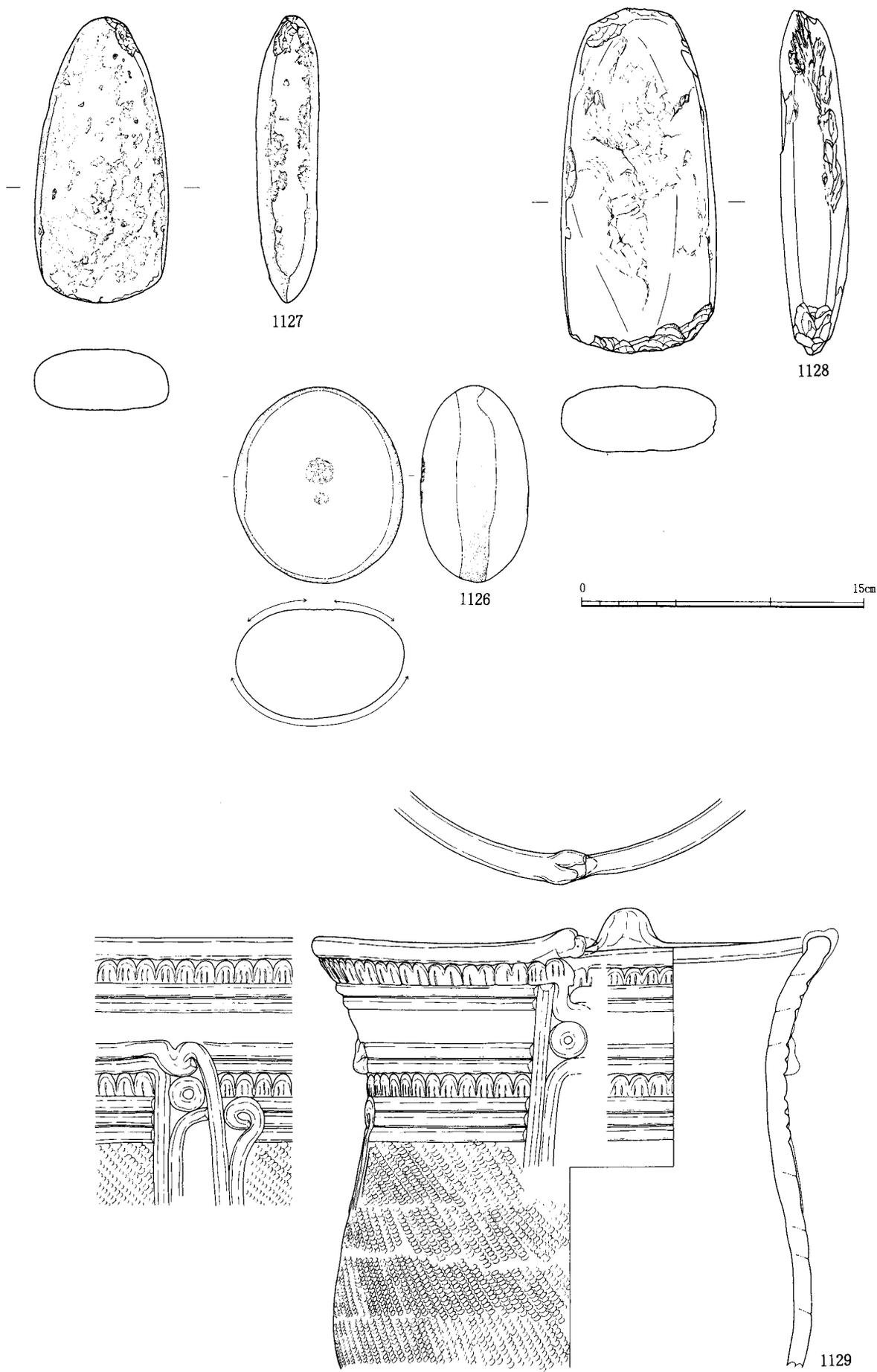
1124



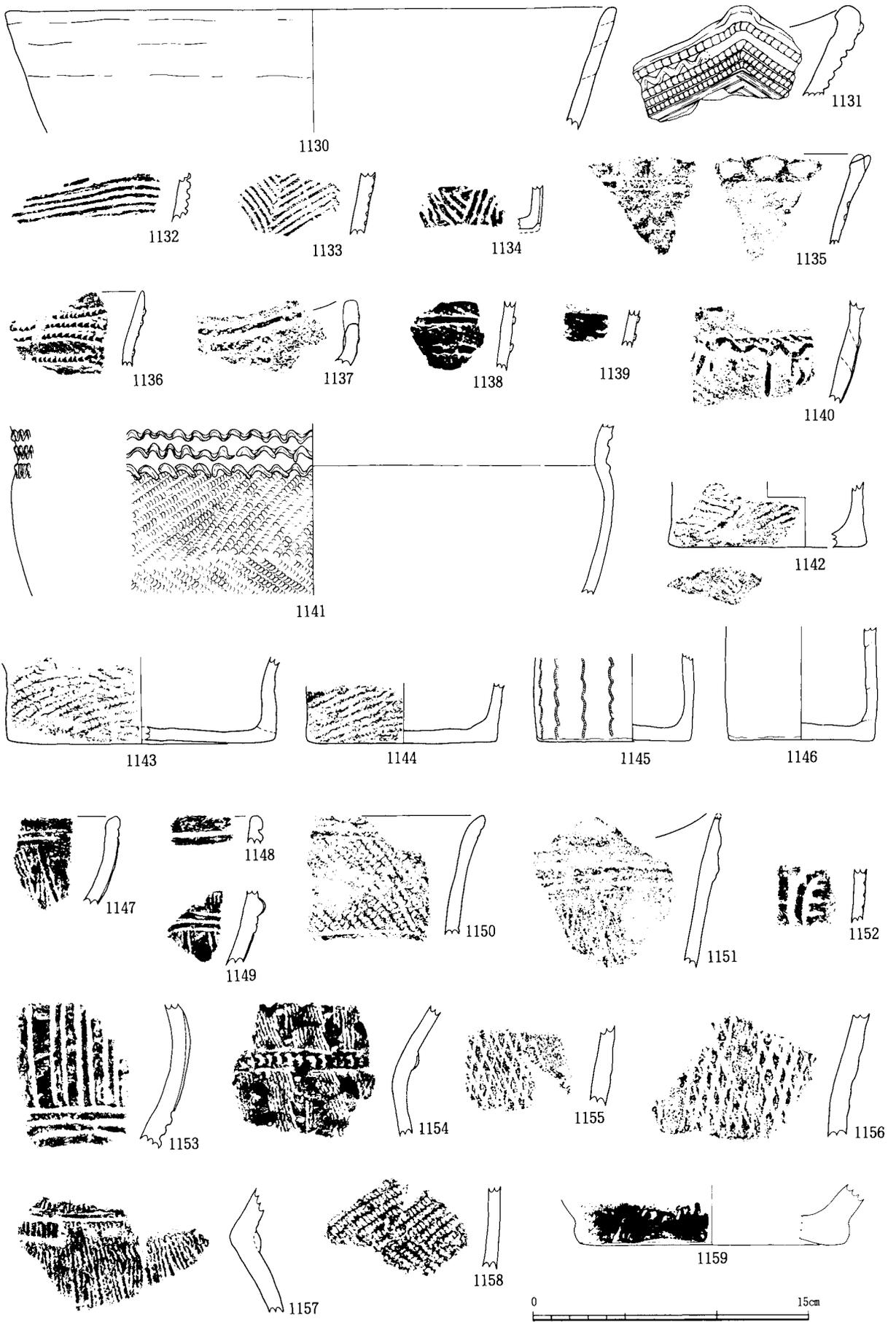
1125



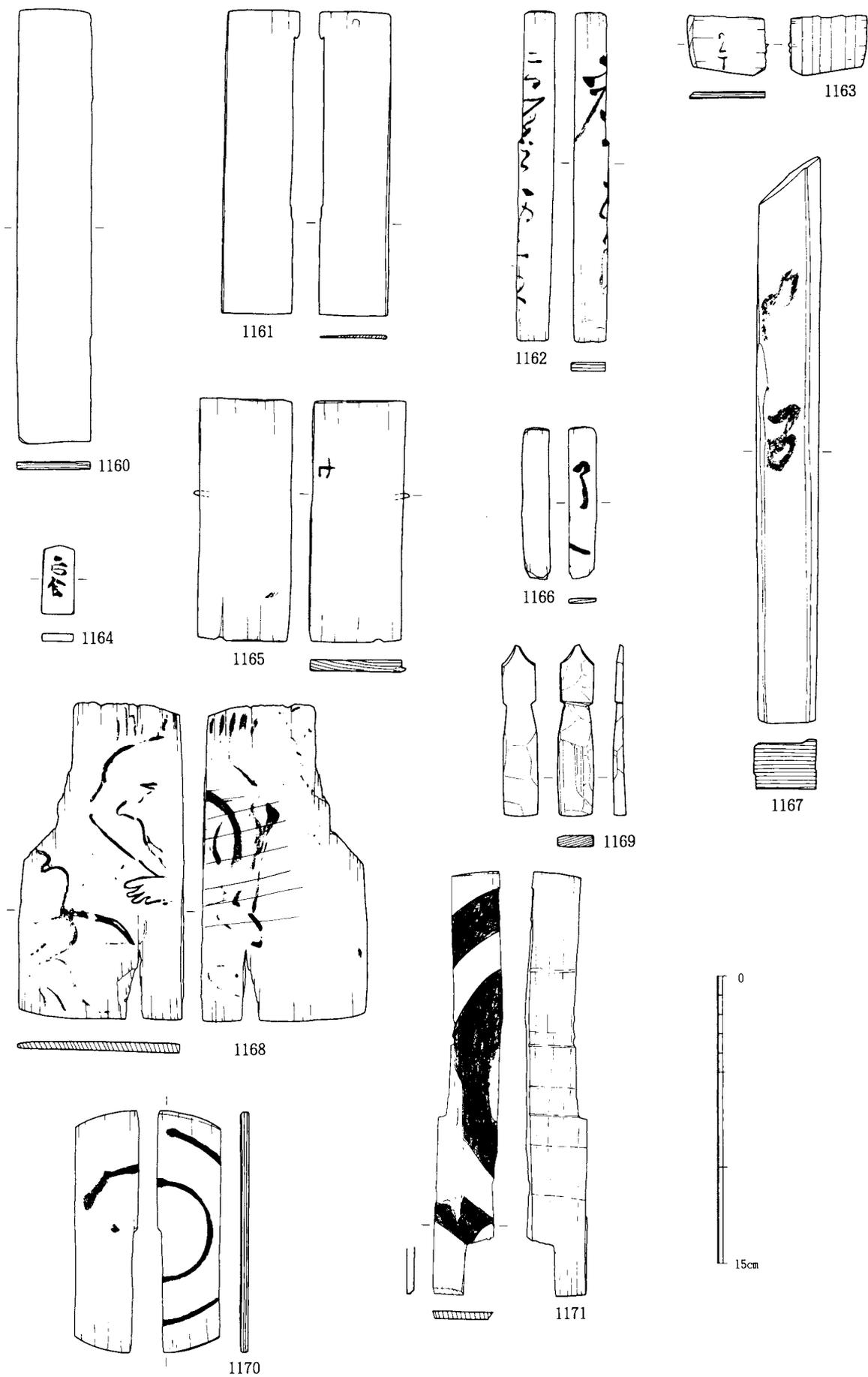
第85図 石製品及び石 (S=1/3)



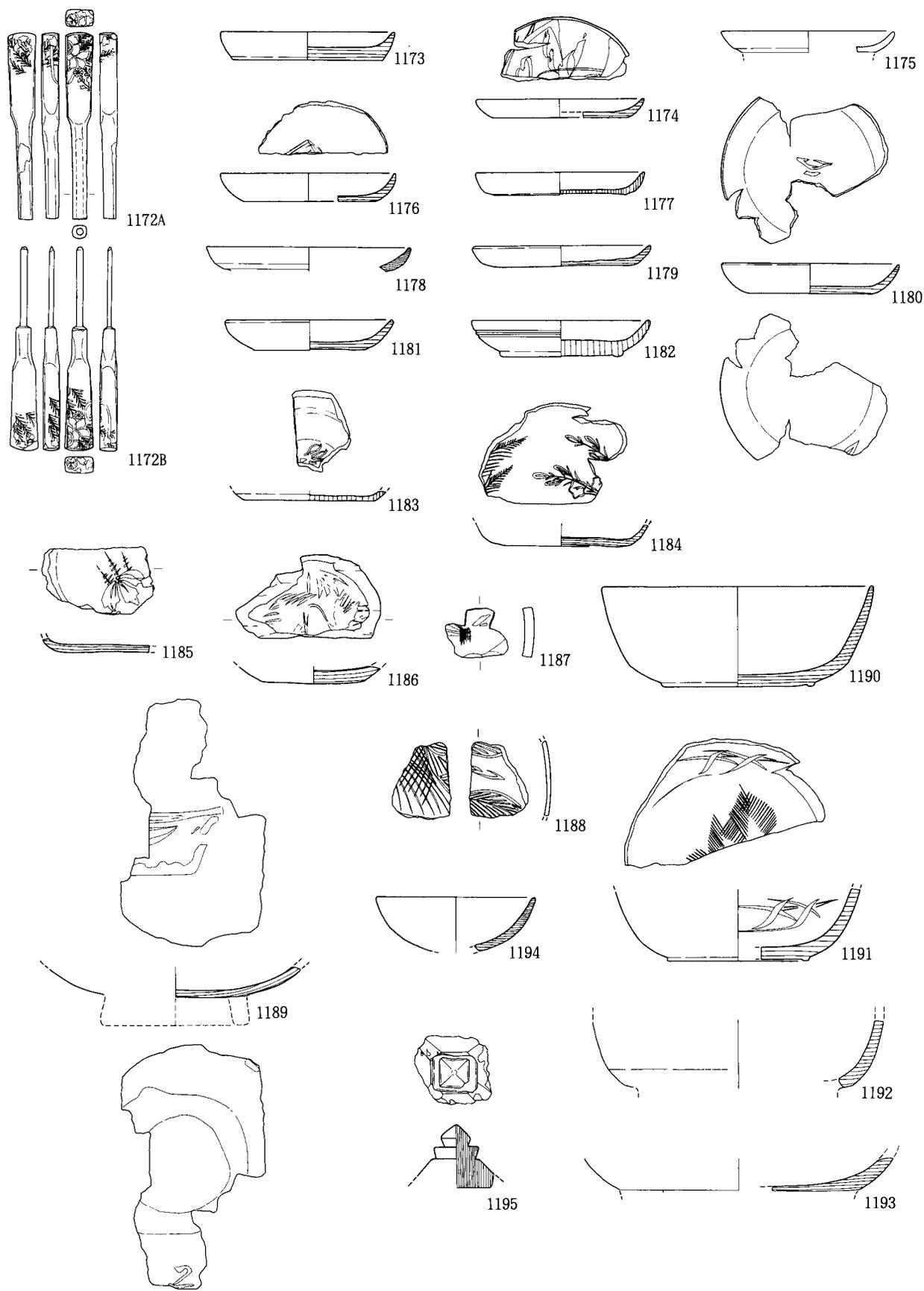
第86図 縄文土器、石器 (S=1/3)



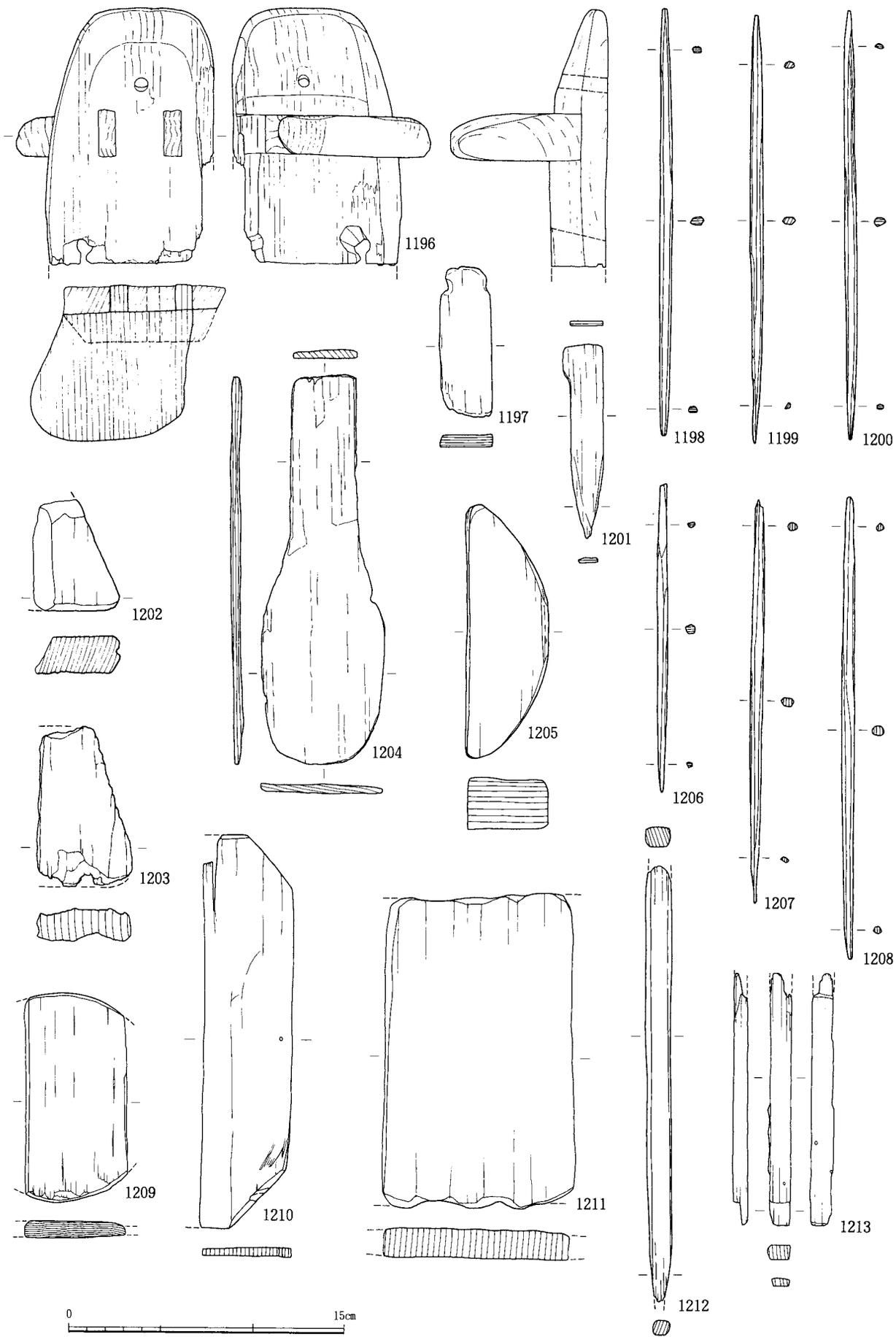
第87図 北東拡張区出土縄文土器 (S=1/3)



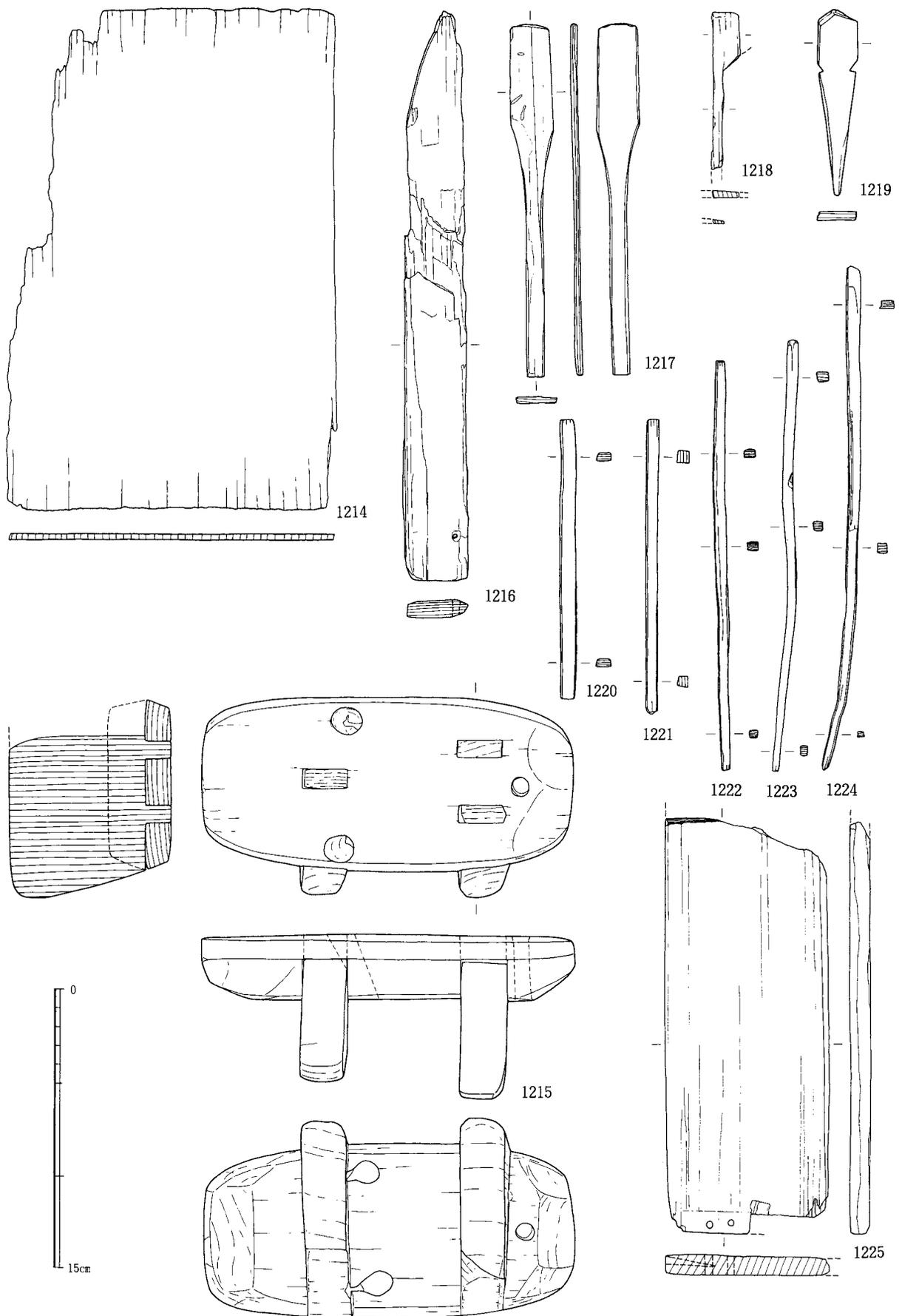
第88図 墨書木製品 (S=1/3)



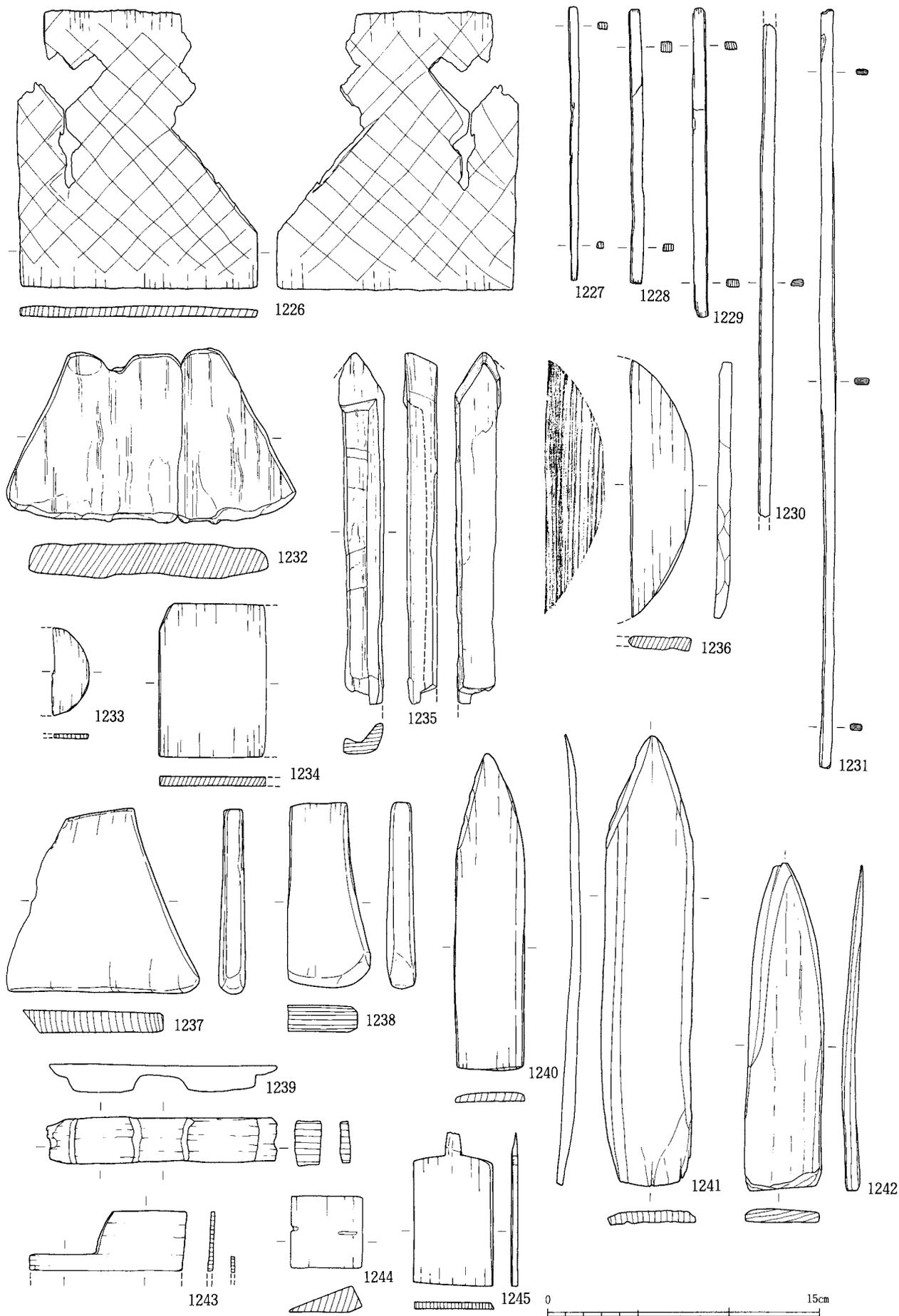
第89图 漆器 (S=1/3)



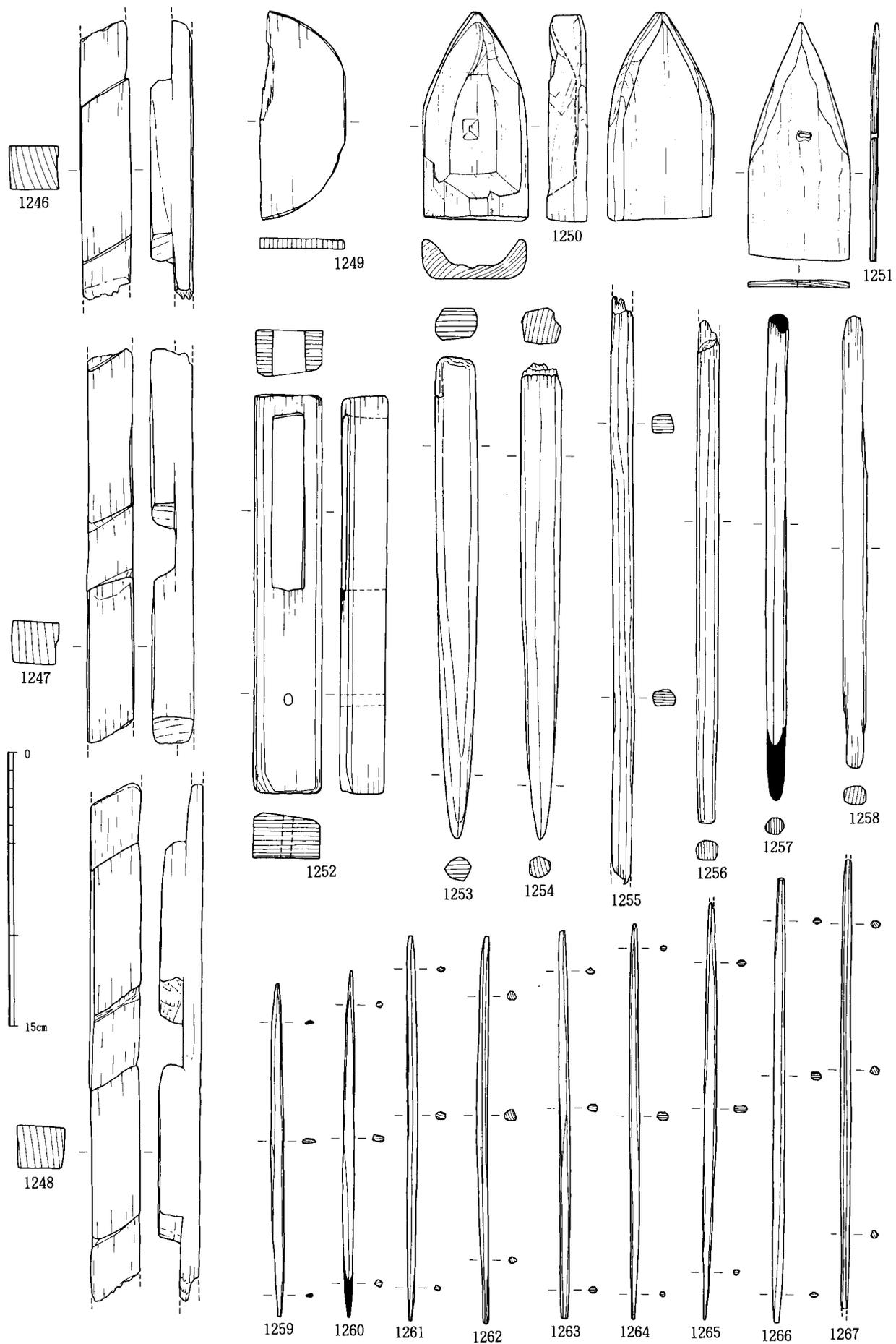
第90図 SK01、SD01 出土木製品 (S=1/3)



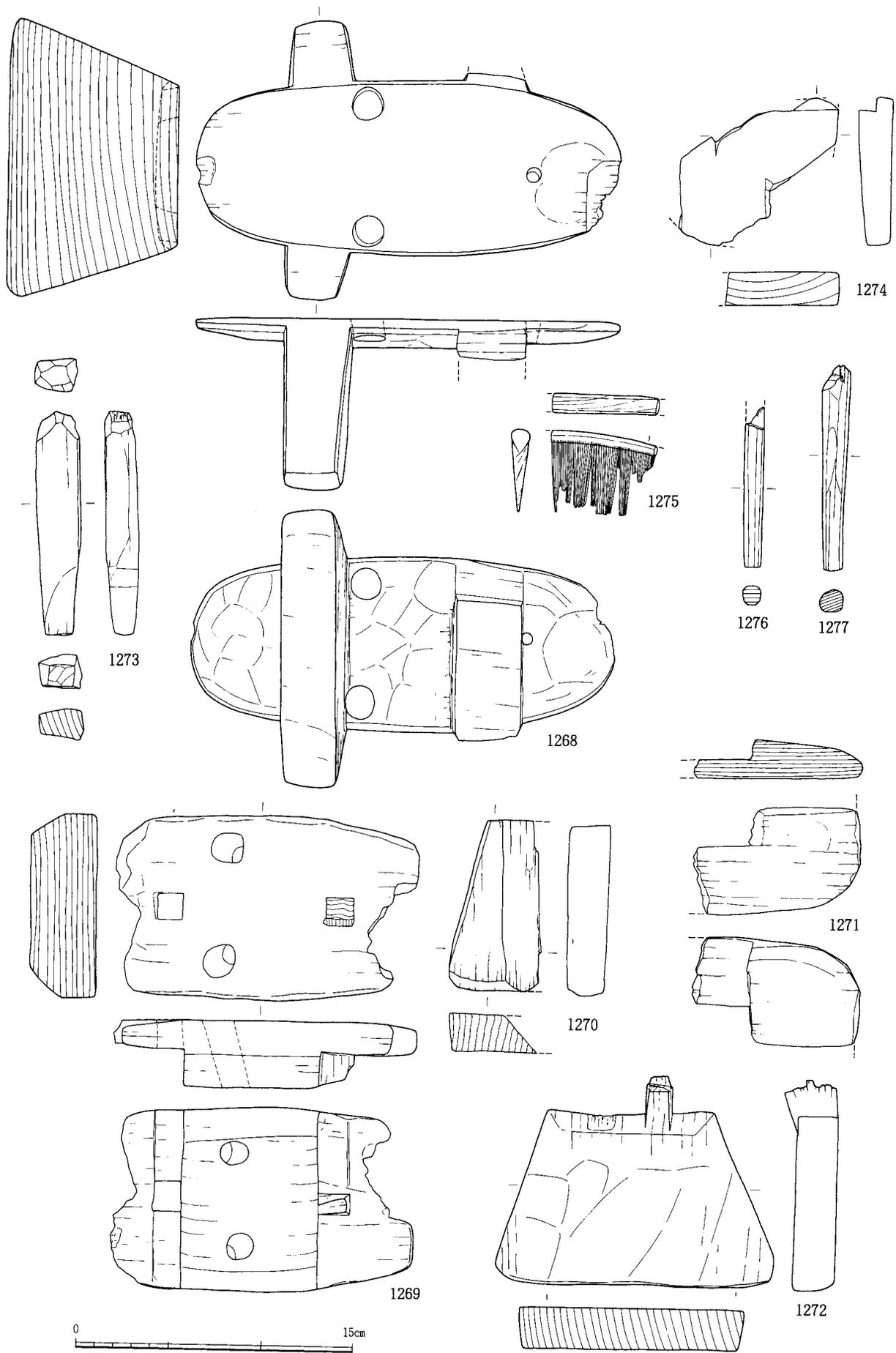
第91図 S D01、02、03、06 出土木製品 (S=1/3)



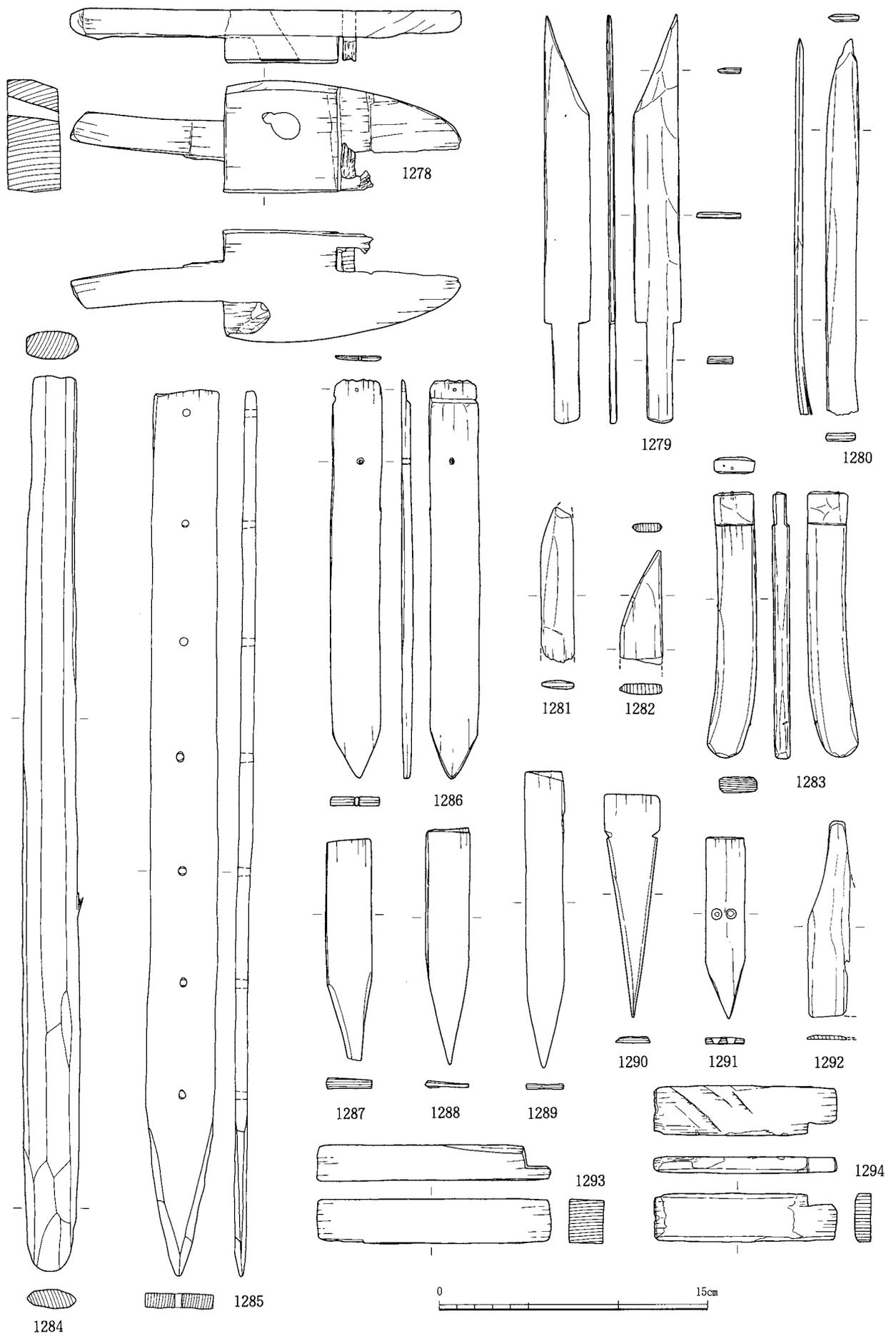
第92図 S D15、22、23、30 出土木製品 (S=1/3)



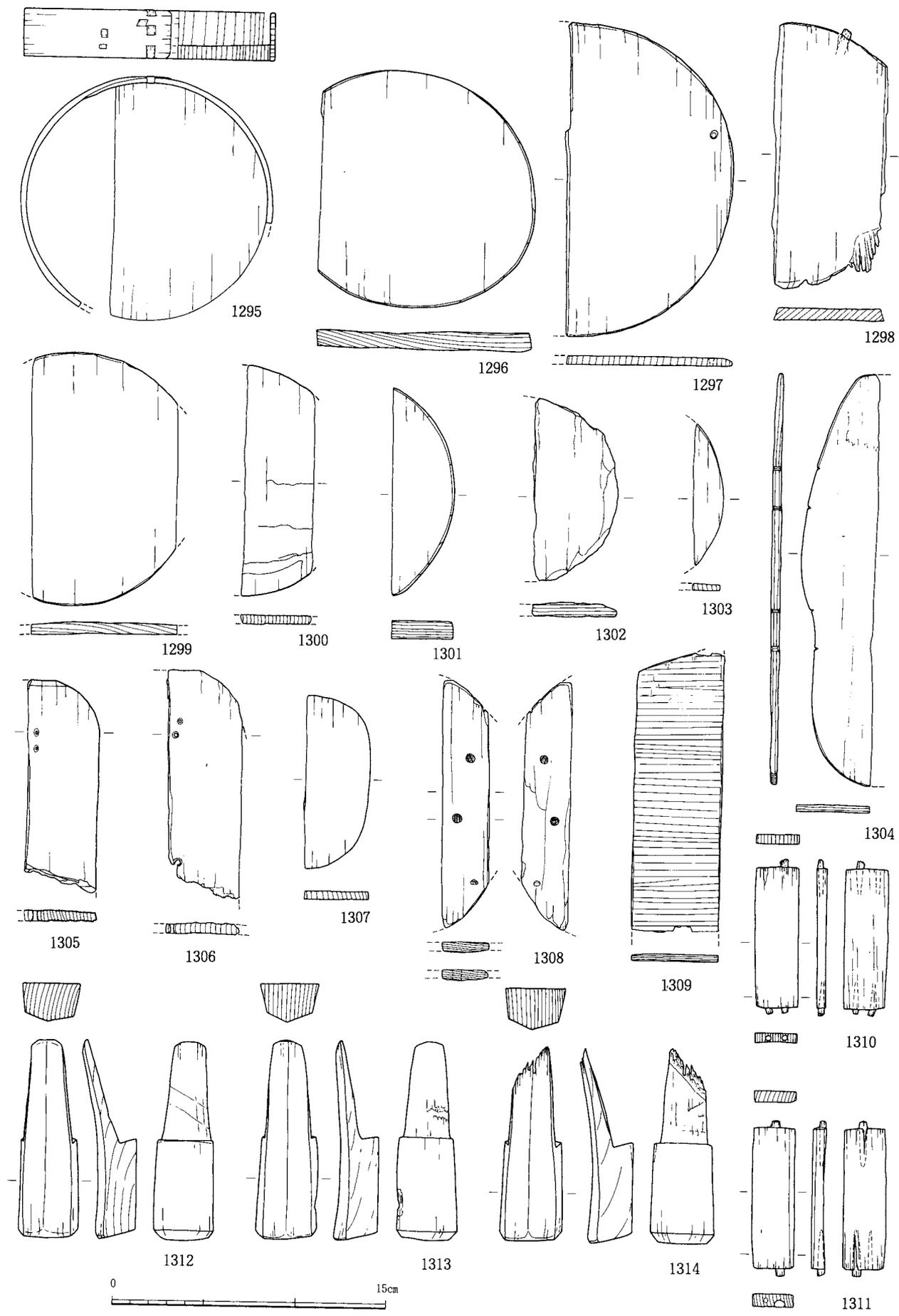
第93図 SD30 出土木製品 (S=1/3)



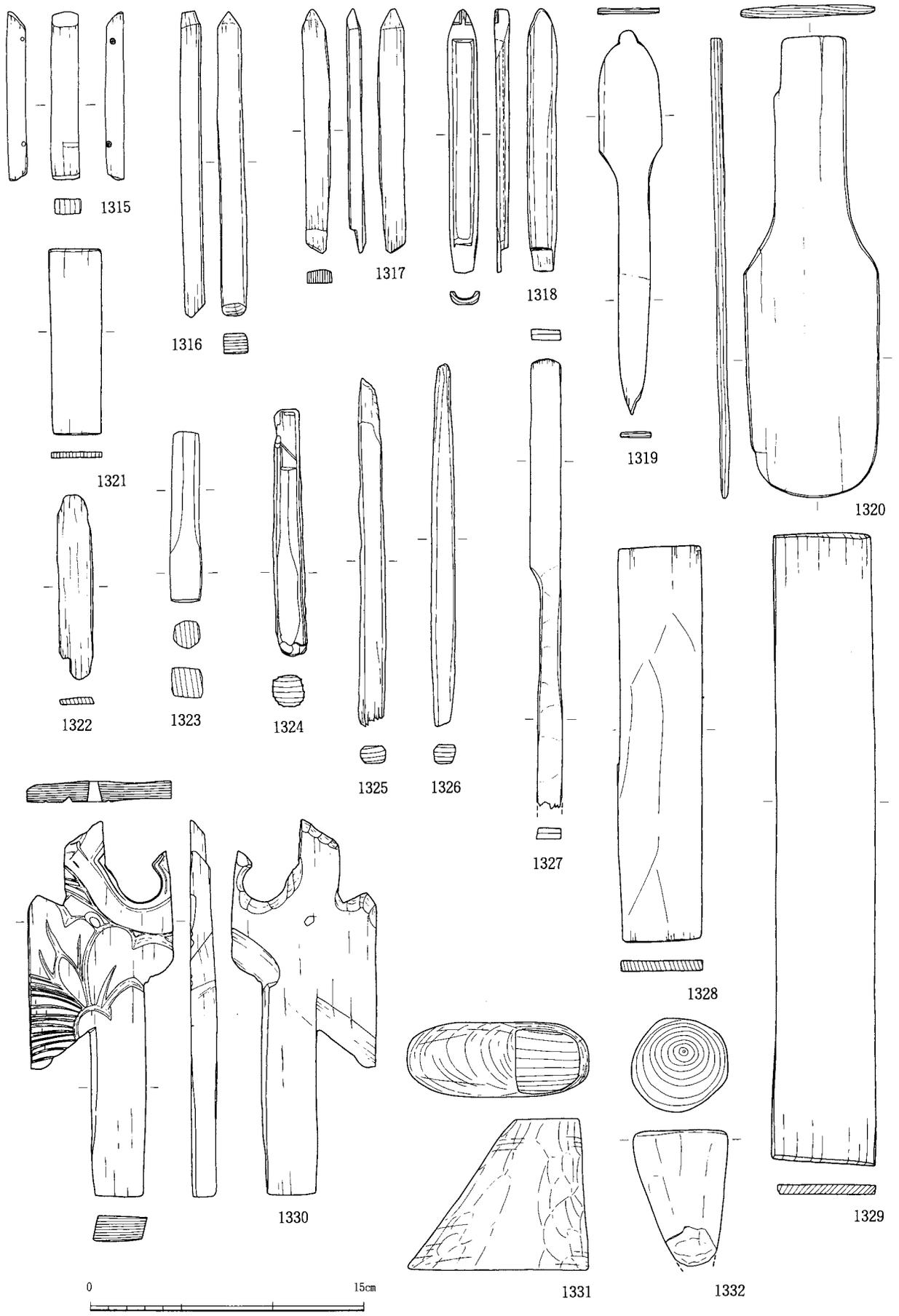
第94図 SD31 出土木製品 (S=1/3)



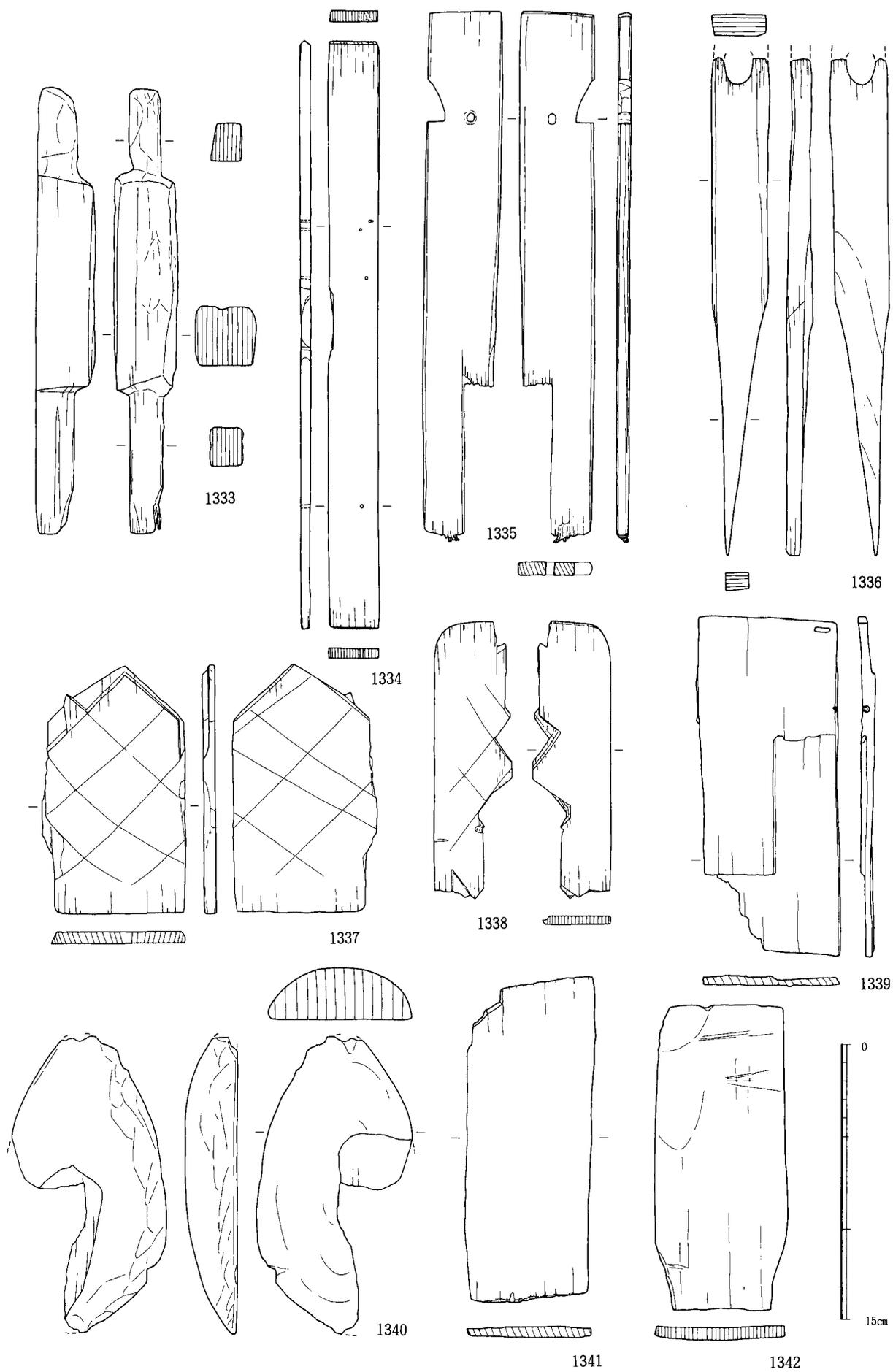
第95図 S D 31 出土木製品 (S=1/3)



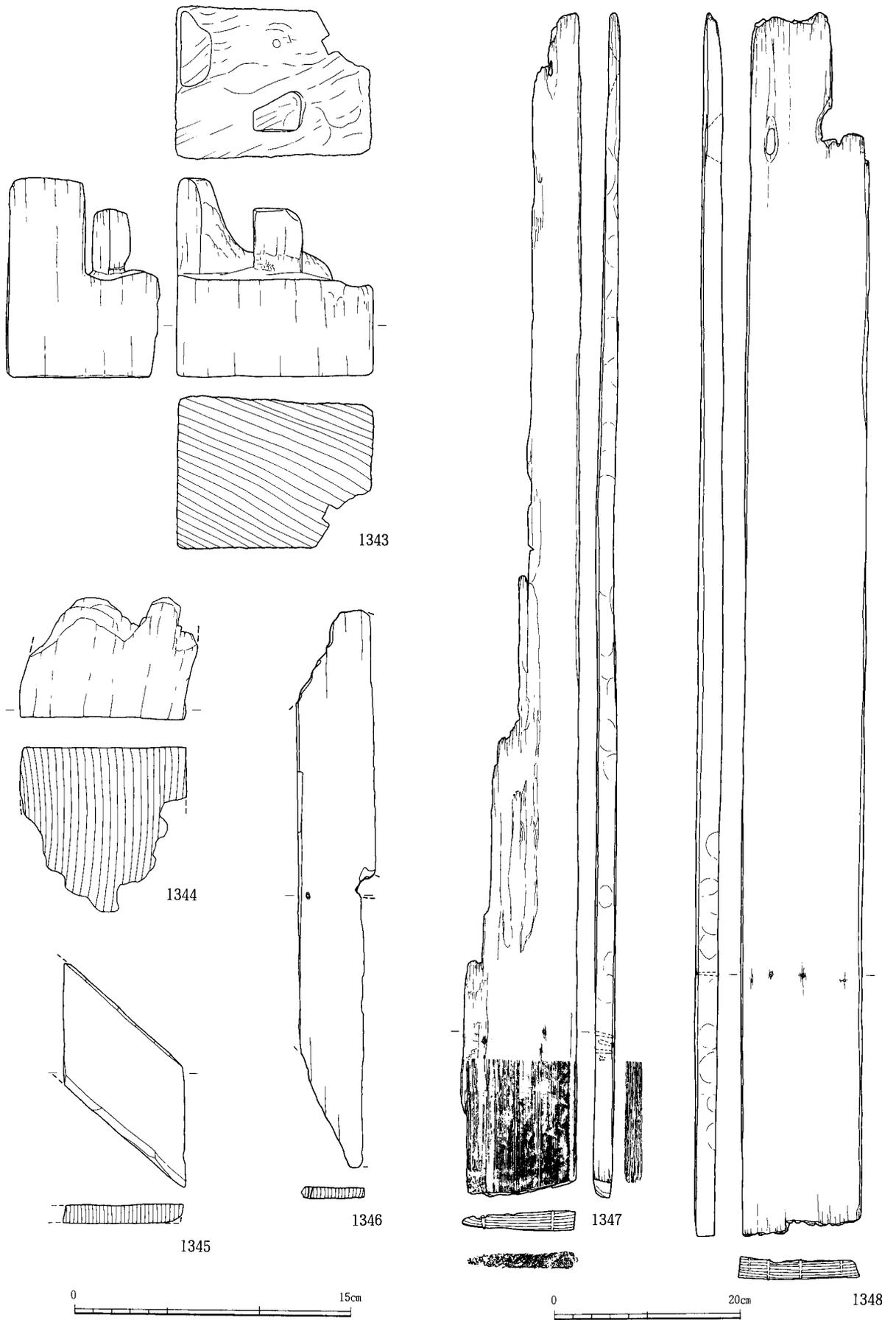
第96图 SD31 出土木製品 (S=1/3)



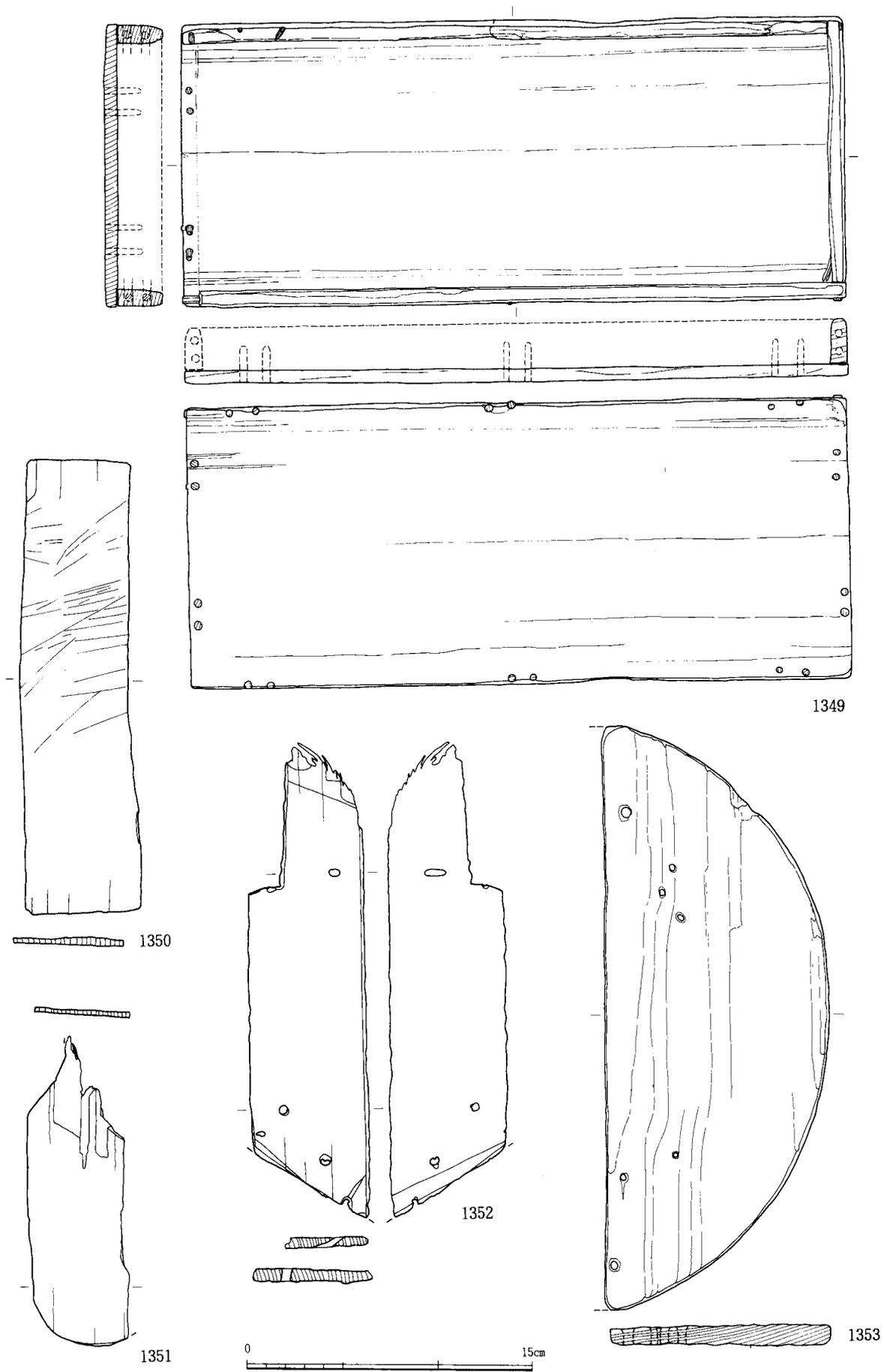
第97図 S D31 出土木製品 (S=1/3)



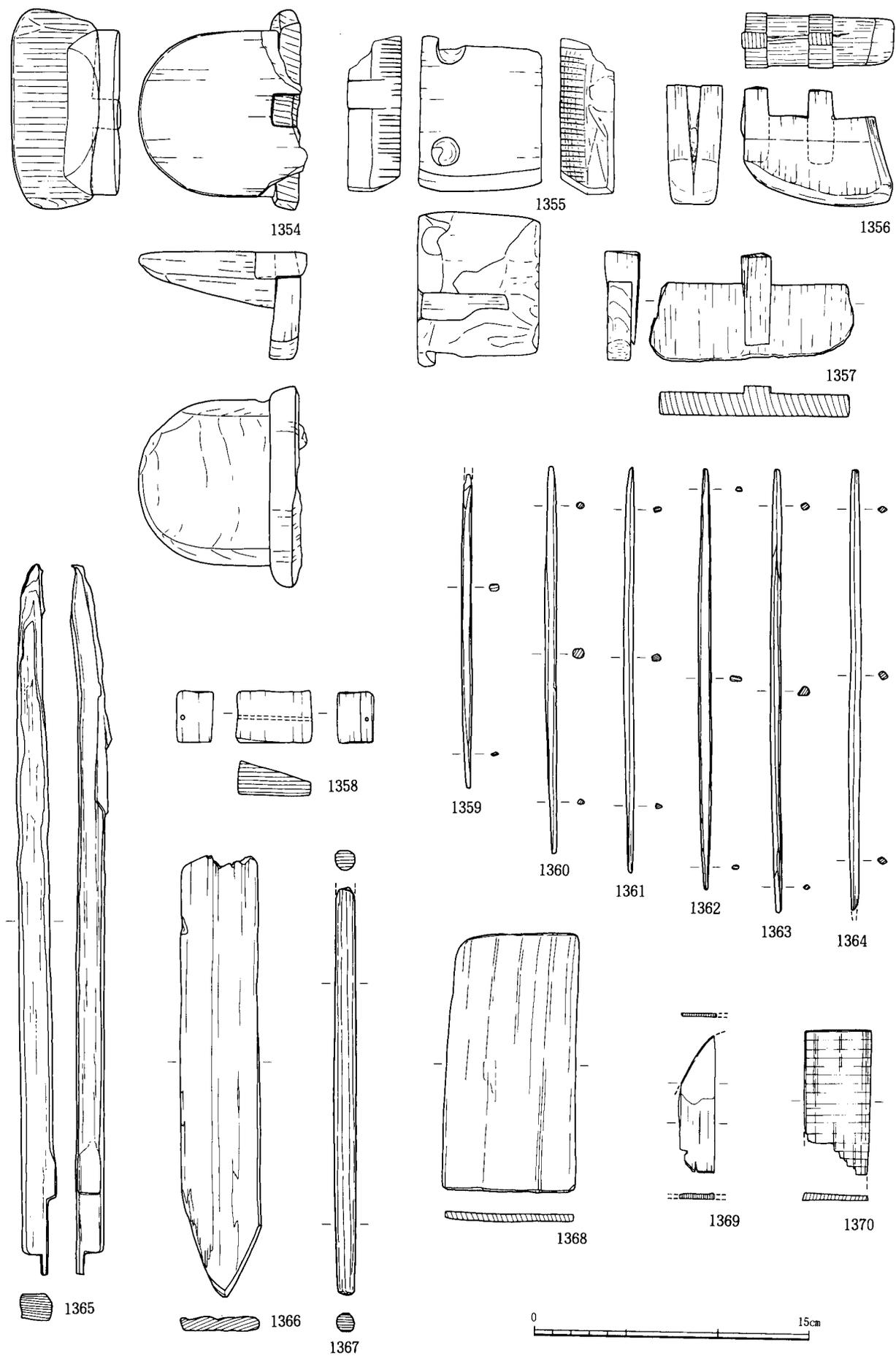
第98図 S D31 出土木製品 (S=1/3)



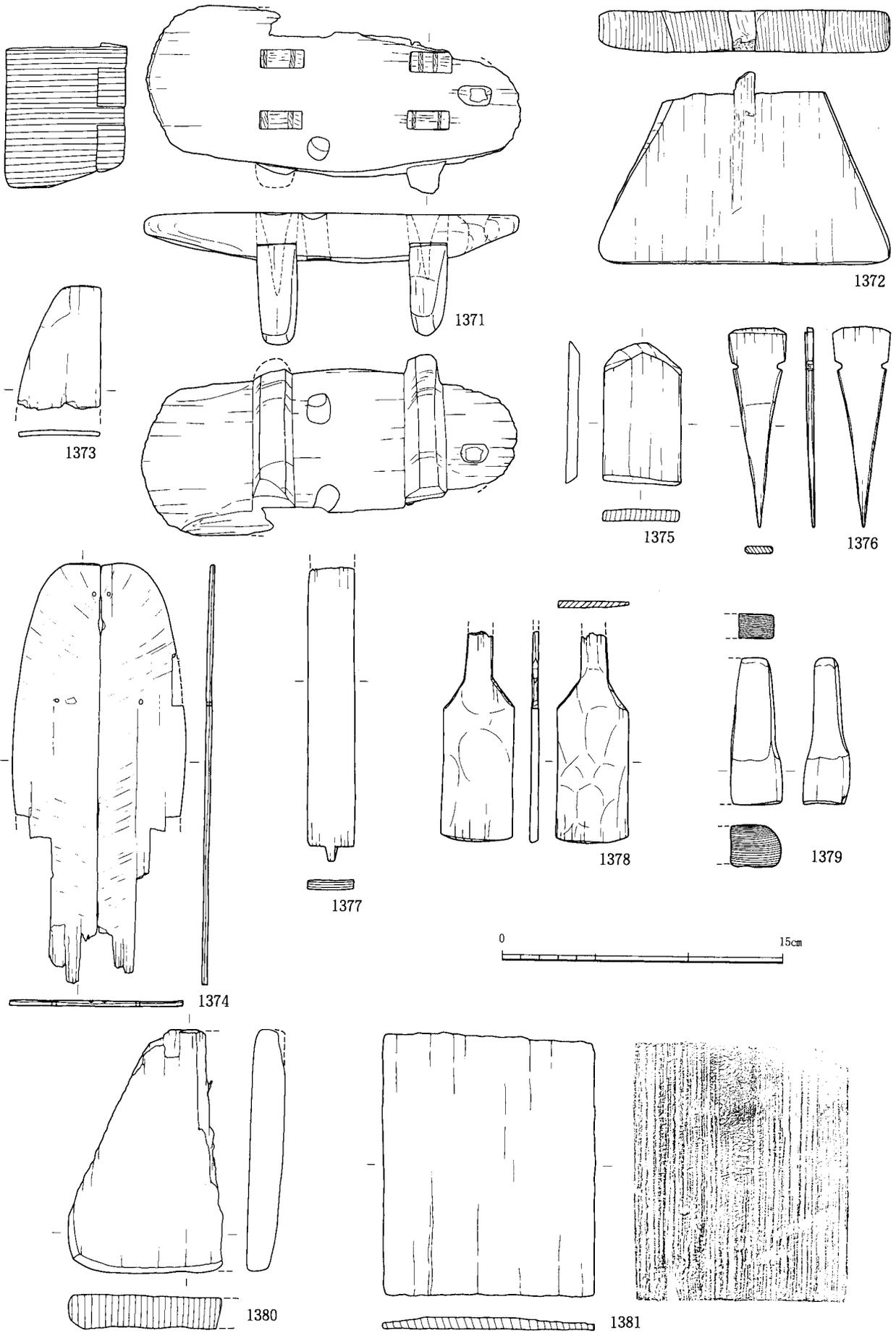
第99図 S D31 出土木製品 (S=1/3)



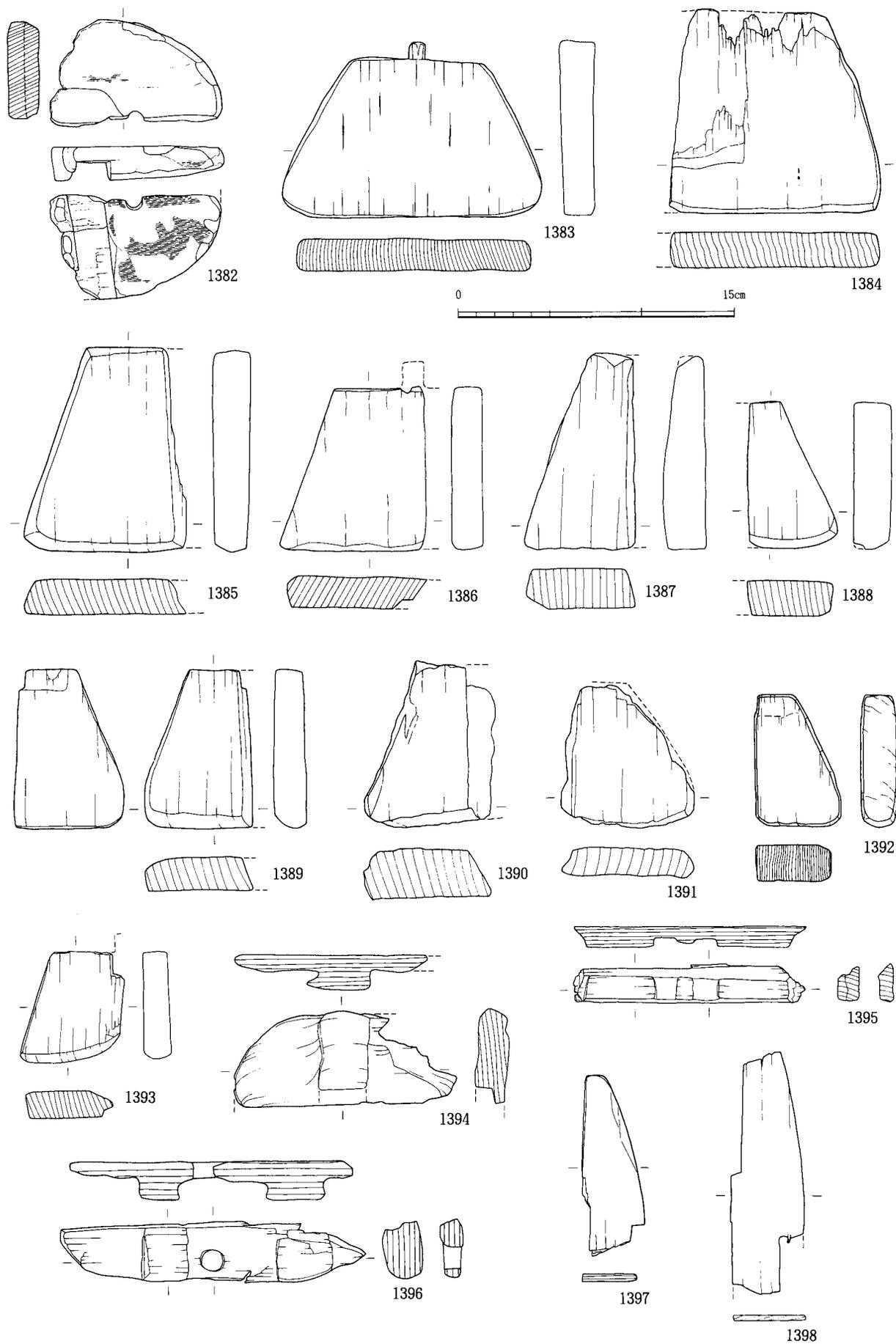
第100図 SD35 出土木製品 (S=1/3)



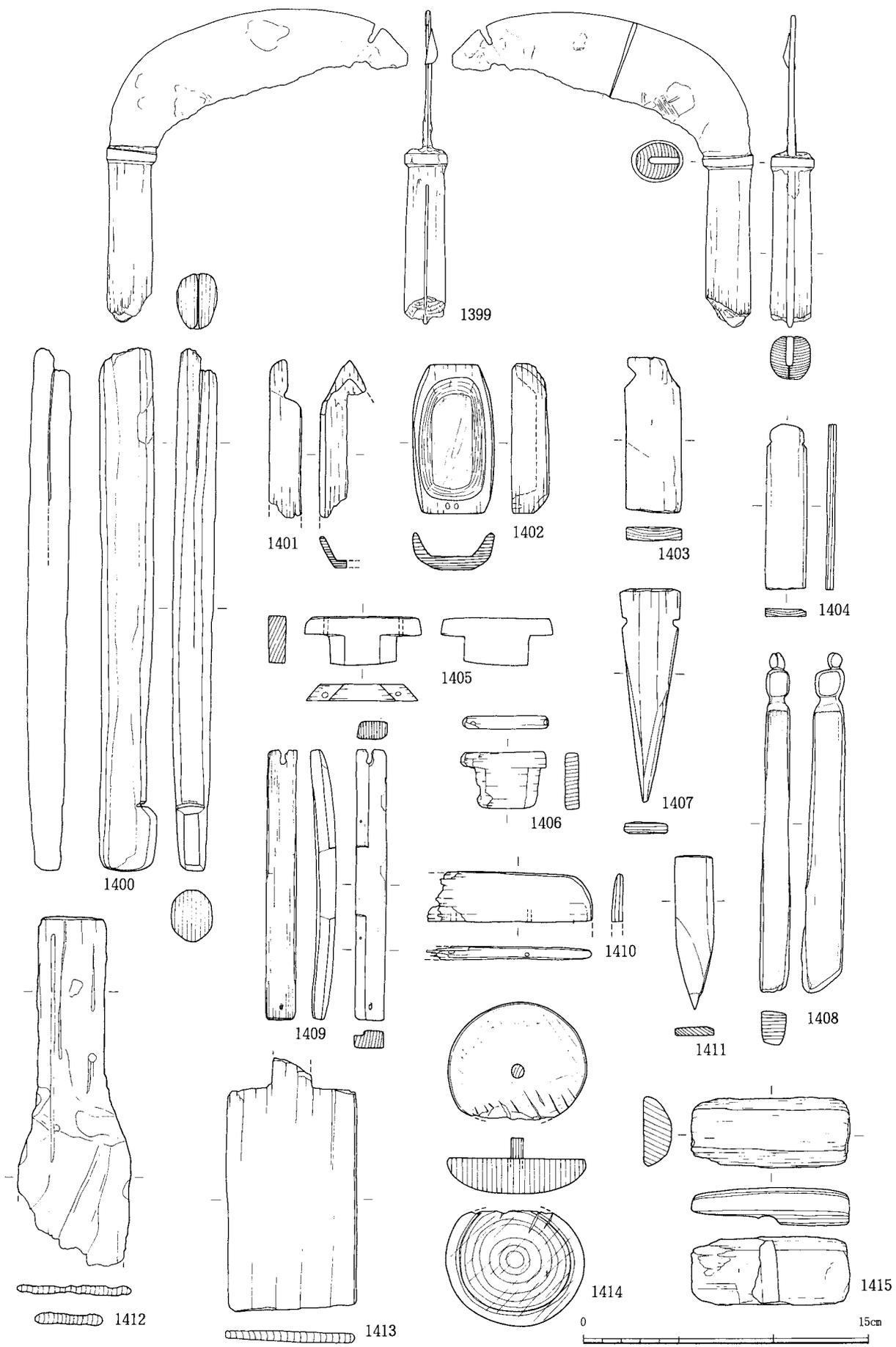
第101図 SD35 出土木製品 (S=1/3)



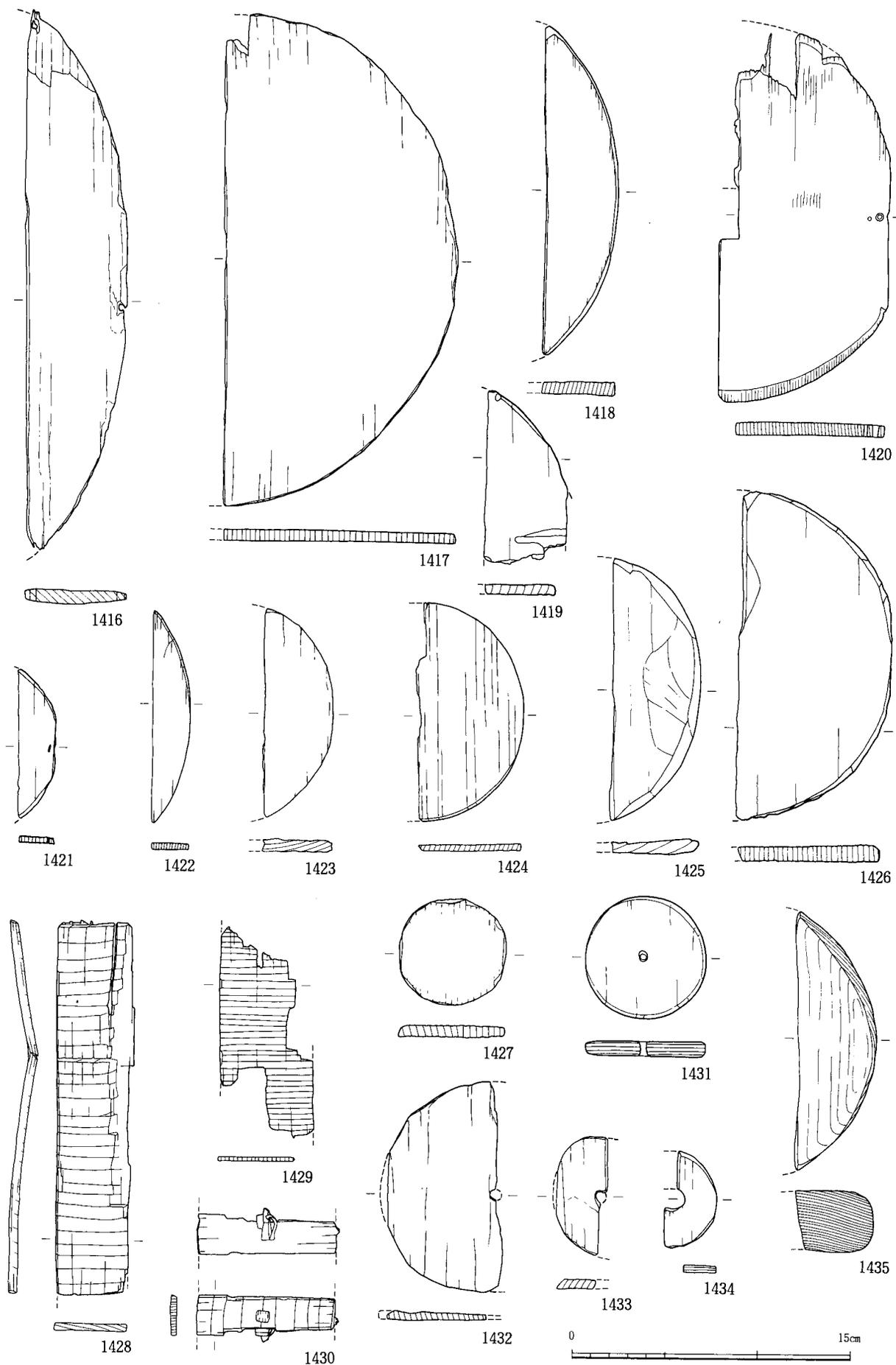
第102図 SX02、04 出土木製品 (S=1/3)



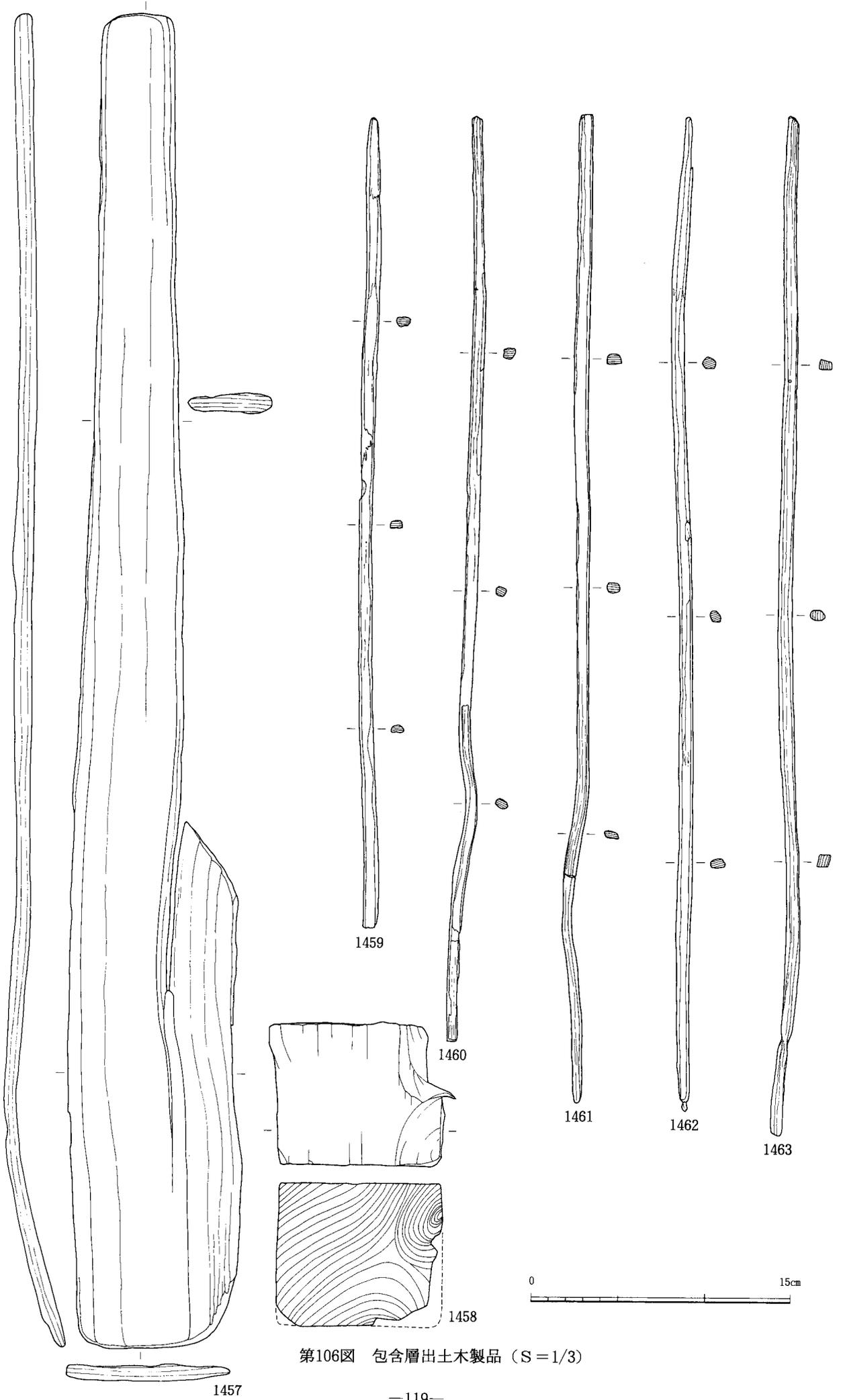
第103図 包含層出土木製品 (S=1/3)



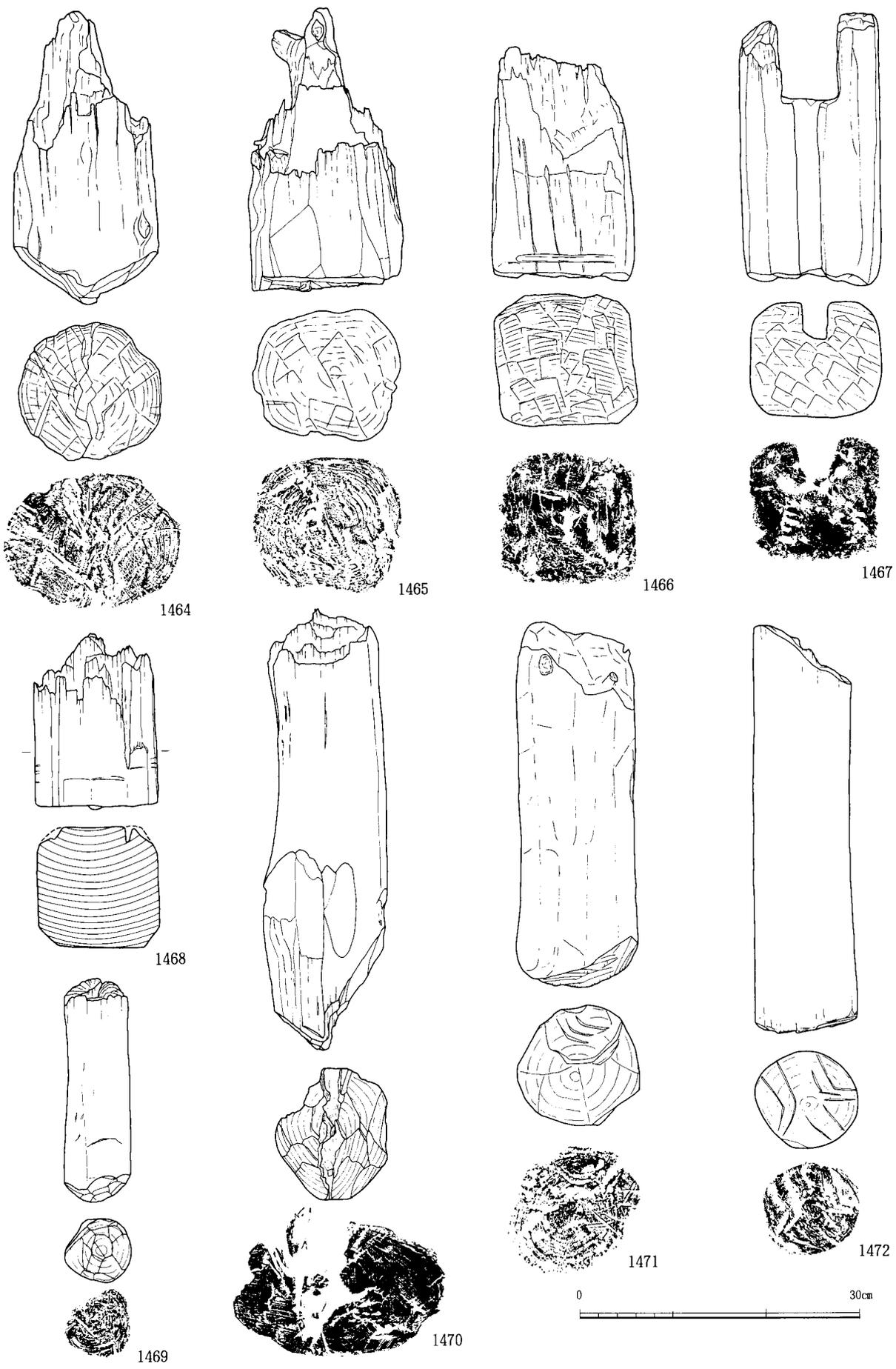
第104图 包含層出土木製品 (S=1/3)



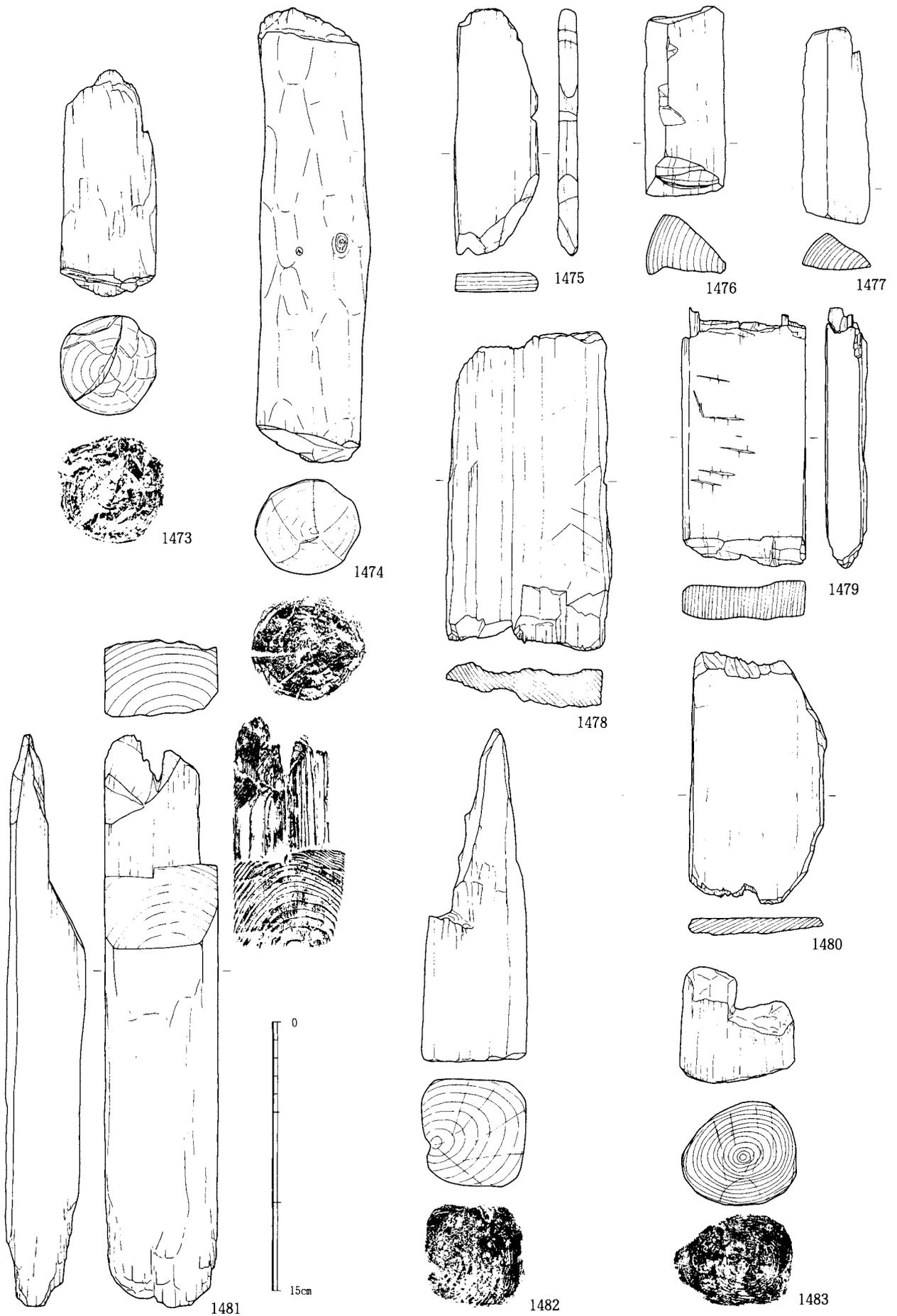
第105图 包含層出土木製品 (S=1/3)



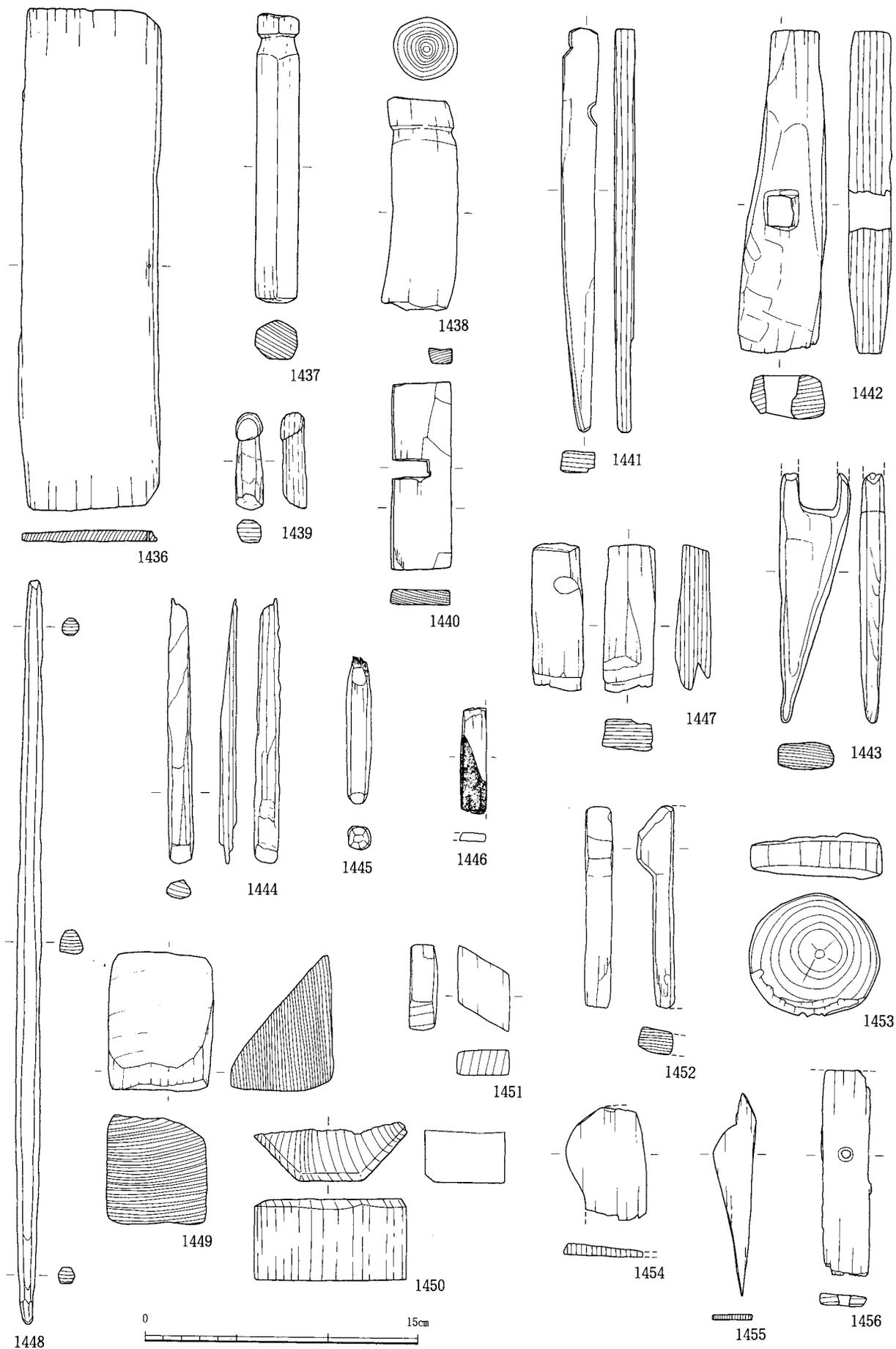
第106図 包含層出土木製品 (S=1/3)



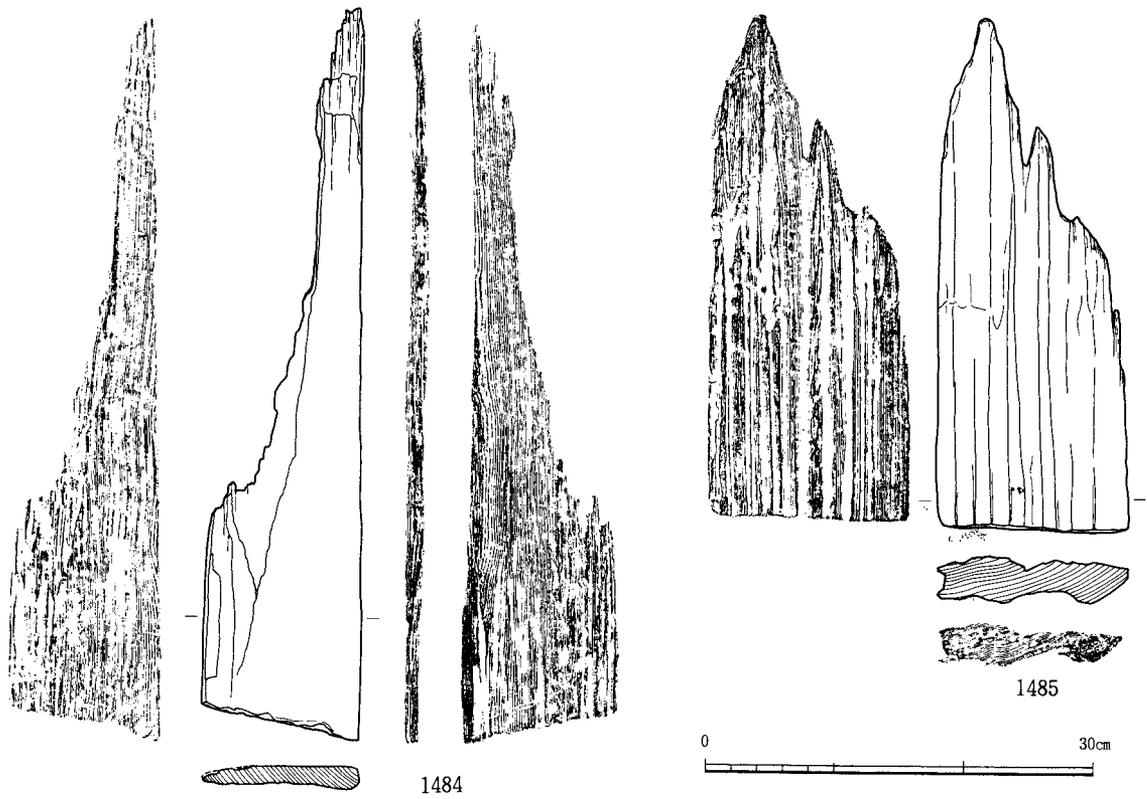
第107图 柱痕 (S=1/6)



第108図 柱痕・礎板 (S=1/3)



第109图 包含層出土木製品 (S=1/3)



第110図 土止め板 (S=1/6)



















































## 第7章 まとめにかえて

工事によって大きく地形改変された後であったため、今回の発掘調査では全面発掘ができず、地形や地層の観察にも限界があった。さらに、担当者の力量不足が追い打ちをかけてしまったが、それにも係わらず、以下のような事実が判明した。

当遺跡は、縄紋時代前期後葉・中期前葉、弥生時代中期・後期、鎌倉・室町時代にもっとも栄えたことが判明した。その他にも古墳時代中期や奈良時代、江戸時代前期などの遺物ごく少量確認されているが、遺構は確認できなかった。

縄紋時代、周辺は腐蝕土に覆われる環境にあり、崖ぎわや微高地上に土器が確認された。イルカの骨が出土していること、埋もれ木がいくつか確認されたことなどから、土器以外の遺物や遺構も周辺にはかなり良好な形で残っていると想定される。今回は下層の調査が不十分であったために十分な確認ができなかった。

弥生時代は溝が一本確認されただけであるが、カイダの谷に開発の手が入ったことは明らかであろう。近接する定林寺遺跡やオカ遺跡など複数の遺跡でも弥生時代中期以降の土器が確認されている。熊木川流域が開発された画期になる可能性が高い。

鎌倉・室町時代は当遺跡がもっとも繁栄した時期である。遺構面で厳密に分けられたわけではないが、大きく分けて以下の3つの段階が想定できる。

①鎌倉時代には、まず柵列とそれに伴う溝が作られる。

②その後、13世紀前半になると、柵列とは方向を異にし、東西南北の方向に近い溝が数多く作られ、新しい地区割り completed ことがわかる。SD30やSD31などは「コ」の字状に巡り、方形の堀になる可能性もある。この溝の内側は調査区外であるが、重要な遺構があったと想定される。出土遺物のほとんどがこの段階のものであった。

③多くの溝が埋まり、SD06などは新たに作られるようである。②の段階の地区割りは基本的に踏襲されたと推定される（ただし、この段階は土層や遺構の識別ができなかったため、②の段階まで一息に掘り下げている。そのために溝が確認できなかった可能性も高い）。この段階には幾つかの墓遺構が確認され、調査区の外にあるSX10も同様の時期に作られたと推定される。墓が作られる時期は、14世紀以降の室町時代であることが分かる。近世まで下がる墓は確認されず、出土遺物の状況からも16世紀には墓も少なくなったと思われる。

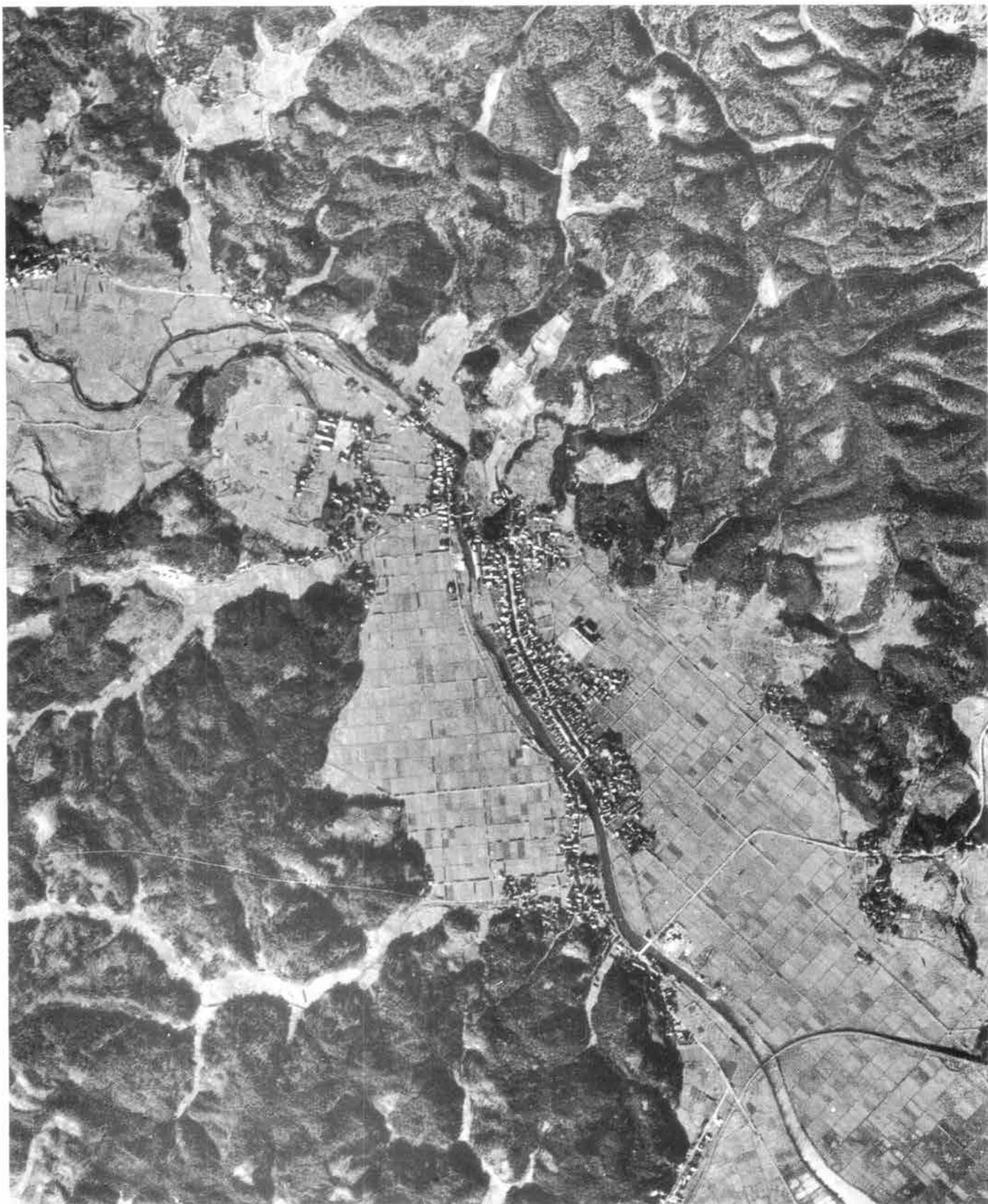
16・17世紀以降は調査当時のような水田風景が続いたと推定されるが、筭や金具などの近代の遺物が出土している。SX10などに関係する祭祀が継続していたのであろうか。

遺構については不十分な調査で終わってしまったが、鎌倉時代の土器のうち、土師器（かわらけ）の占める量比が極めて高いこと、祭祀関連の木製品が多いことは当遺跡の性格を物語る重要な証拠になるであろう。また、数多くの残りの良い木製品も重要な資料である。今後の検討を待ちたい。

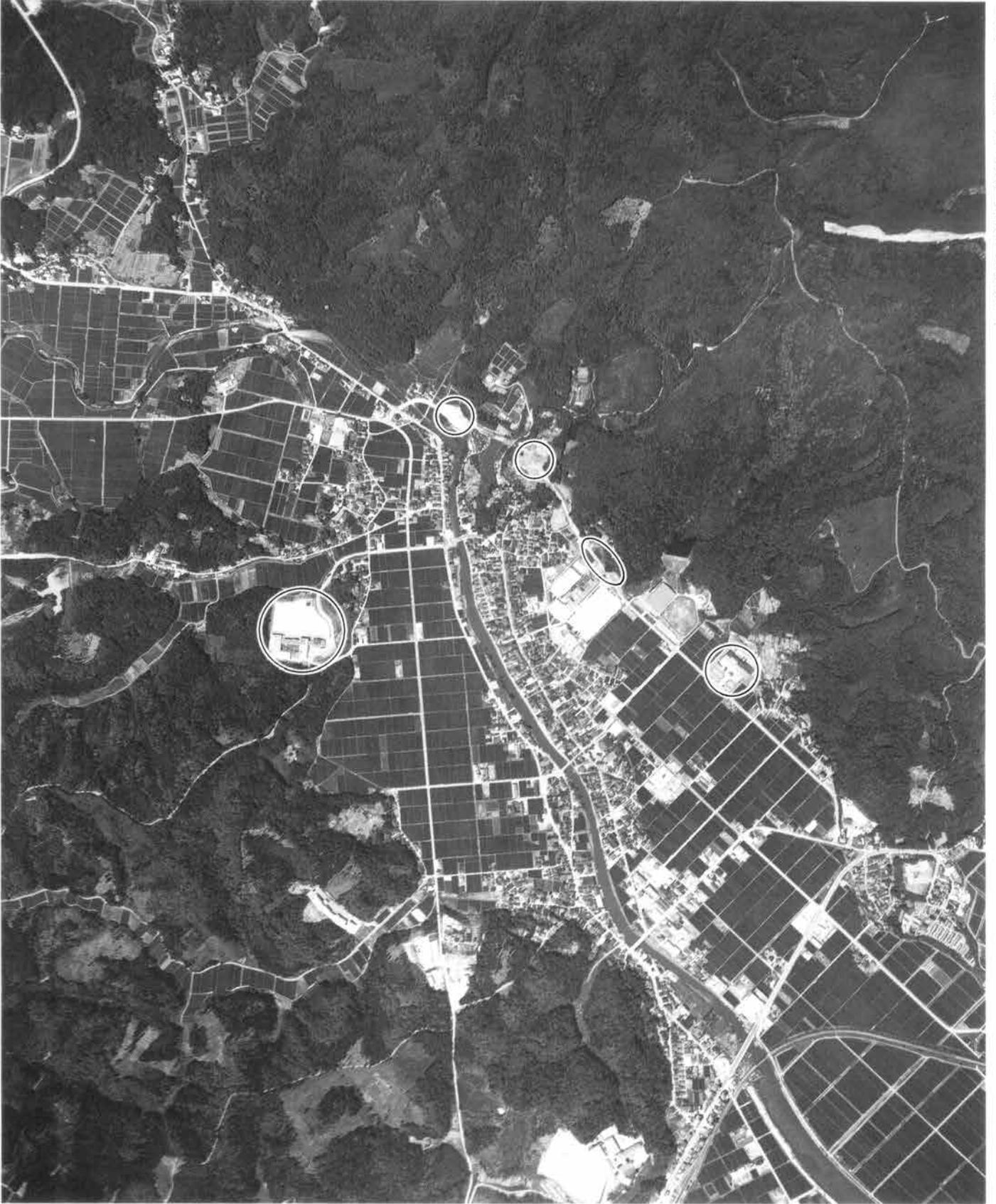


写真図版





(1947年11月13日占領軍撮影。縮尺約12,500分の1)



(1989年7月28日セントラル航業株式会社撮影。縮尺約12,500分の1)



大字中島上空より北西を望む



熊木小学校上空から北東を望む



(南から)



(北西から)



航空写真（東から）



上町カイダ遺跡から見た熊木城跡（通称「城山」）



調査前風景（南西から。1986年12月）



調査前風景（東から）



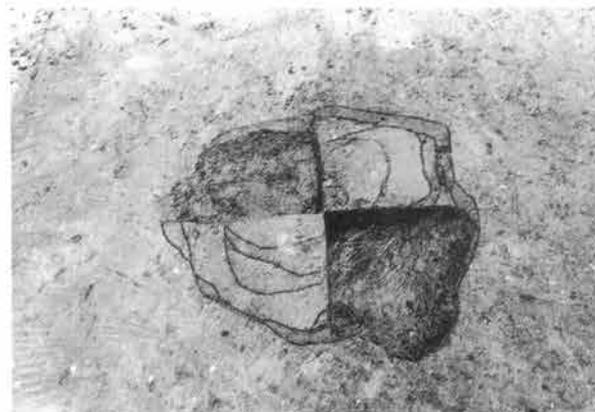
SX05 検出状況



SX05 中央部付近



SX07 石出土状況



SX07 石除去後の土坑半裁状況



SK04 検出状況（陥没のため、地面が傾斜）



SK04 半裁状況



柵列と岩陰のSX10（北西から）



SX10（手前の水たまりはSD02。西から）



SX10 平坦面の石積み



H-17区 石造遺物出土状況（1124）



E-15区 人骨出土状況



E-15区 人骨出土状況の拡大



K-18区 SX06（西から）



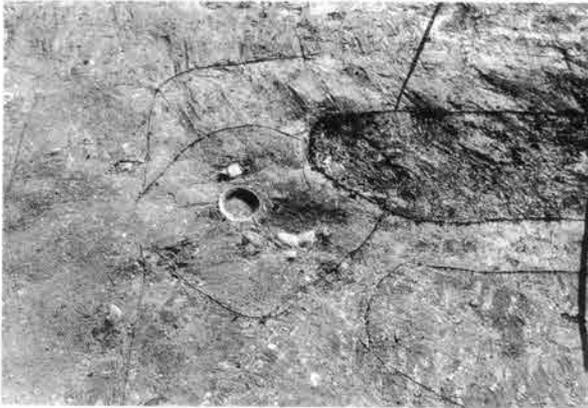
K-18区 SX06（真上から）



E-17区 SK01 完掘状況



D-11・12区 SK05 完掘状況(西から)



H-11区 SK08 検出状況(北から)



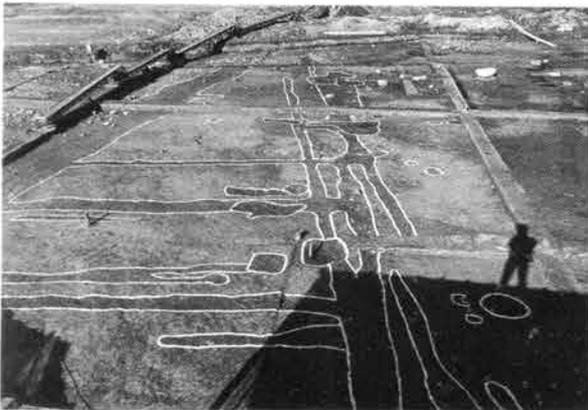
SK08 土器出土状況(東から)



E-5・6区 掘立柱建物(南から)



E-6区 Pit52 柱痕出土状況



E~J-9~11区 溝群検出状況(南から)



溝群および棚列完掘状況(南から)



H~K-13~18区 SD02、SD30、SD31等遠景（東から）



同左の拡大



H・I-15・16区 SD02石組みとSD31の土留め板（西北から）



H・I-15区 SD02石組（陥没のため左側が下がる。西から）



J・K-16区 SD31杭列（南から）



K-19区 SD06木製品出土状況（溝掘削で埋れ木切断。南から）



D~F-15区 SD02石組み検出状況（南から）



同左 完掘状況（左側肩部は掘りすぎ）



C-14区 SD02検出状況（南から）



C-14区 SD02セクション（北から）



D~F-15区 SD02石組（手前肩部を除去後。西から）



E-16区 SD35木箱出土状況



F~I-8-9区 SD22-1~3検出状況（南から）



G-13区 溝土留め板検出状況（1485、溝は図化できず）



E-16区 板等出土状況（東から、SD01の土留め板か）



同左（南から）



F-7区 縄文土器出土状況 (1129、東から)



完掘風景 (東から)

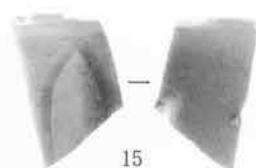
(陥没穴やその南側は一部たちわりを入れただけで発掘を断念している)



7



12



15



36



38



39



40



41



43



44



46



52



54



57



58



59



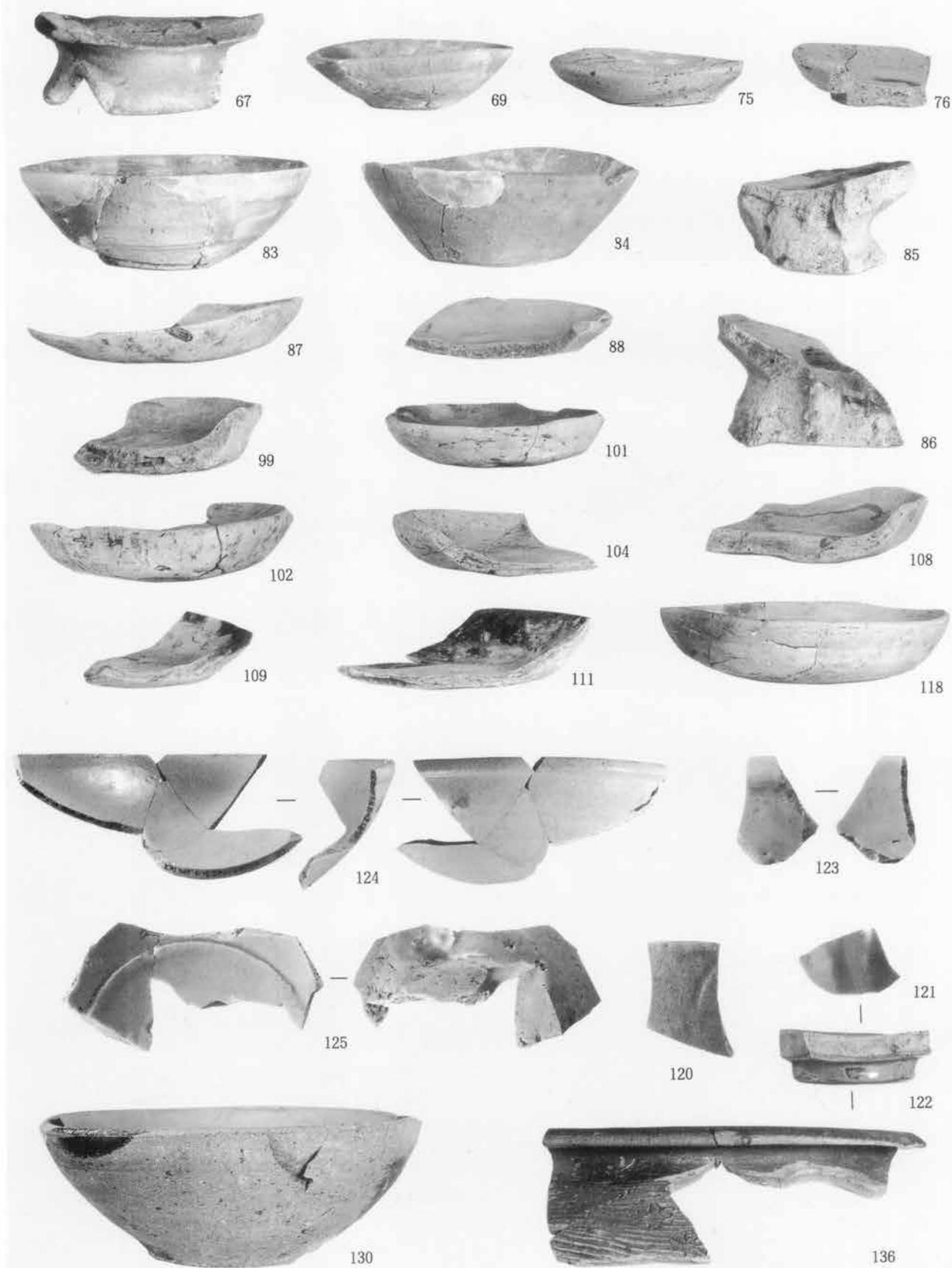
60



62



63





139



140



144



147



148



150



151



152



155



157



158



162



164



165



166



167



171



183



172



174



193



179



180



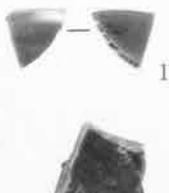
193



182



184



194



185



186



195



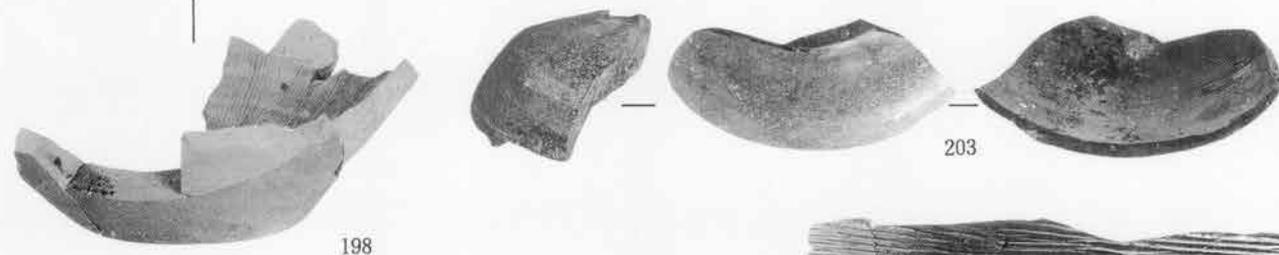
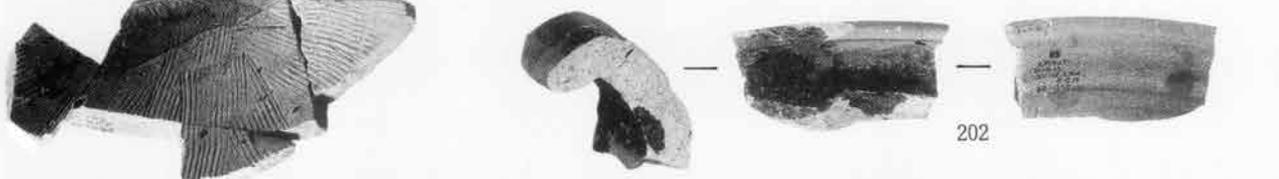
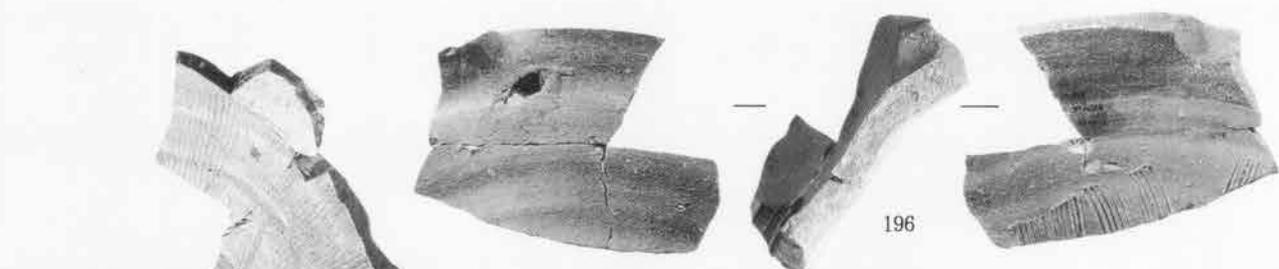
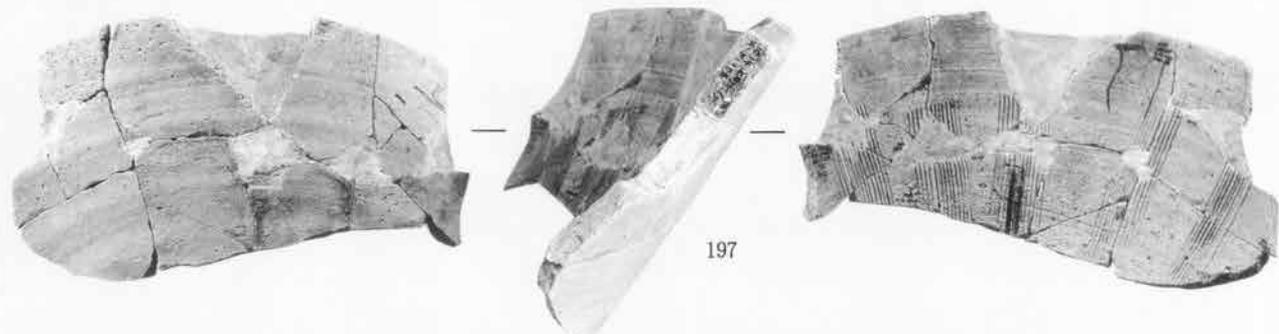
188

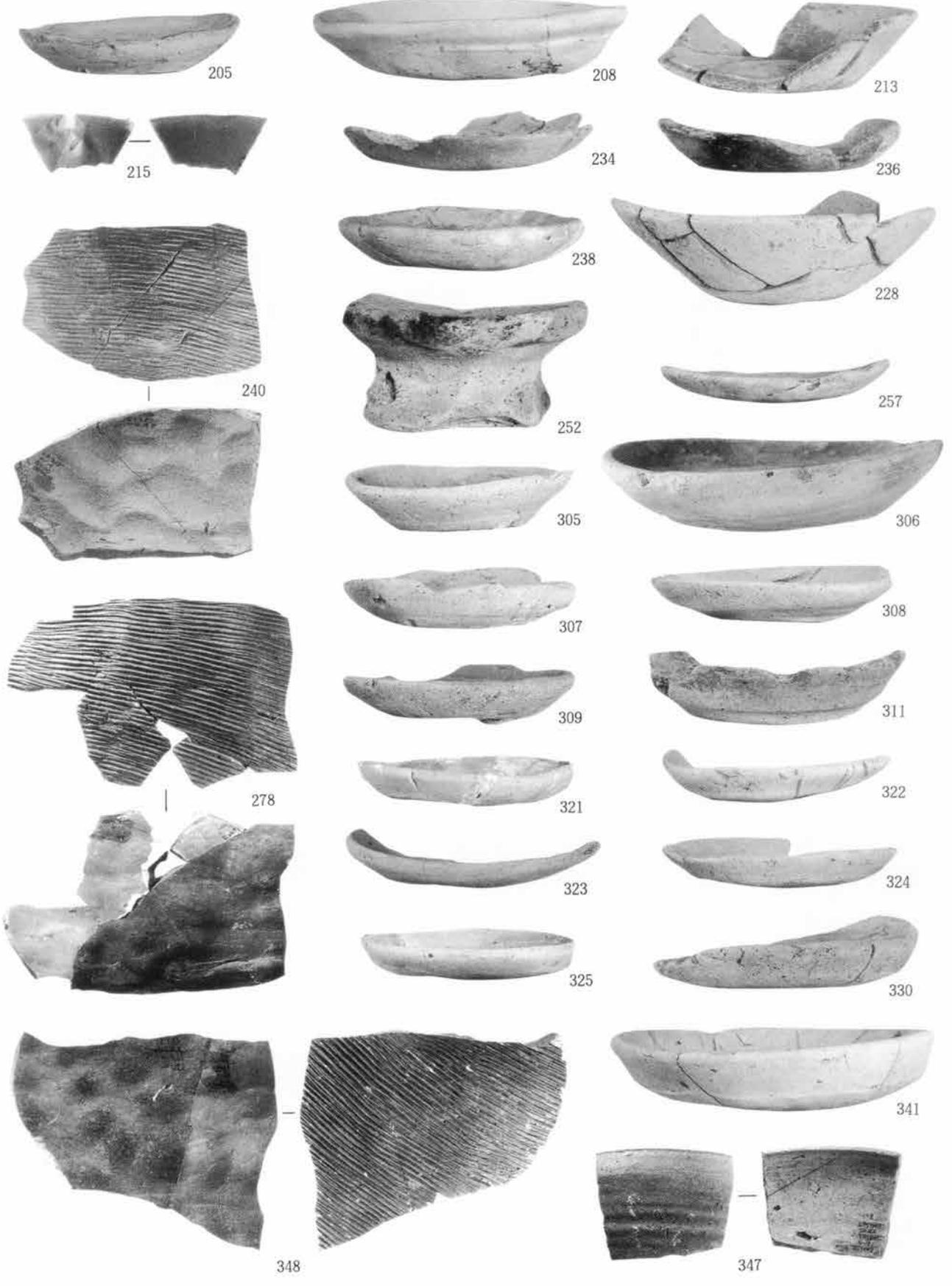


192



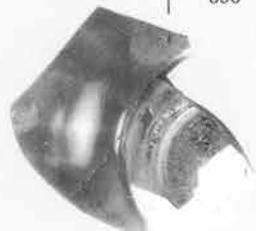
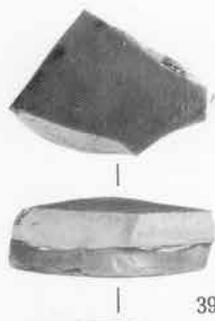
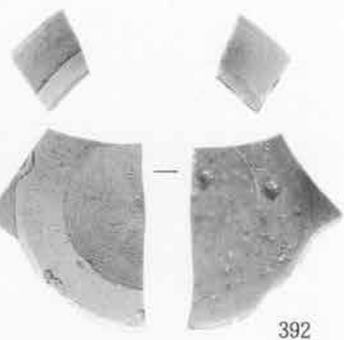
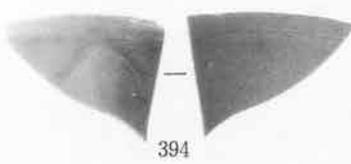
195





348

347







471



473



474



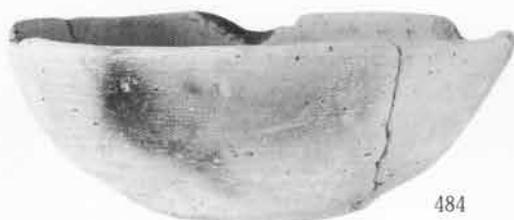
475



479



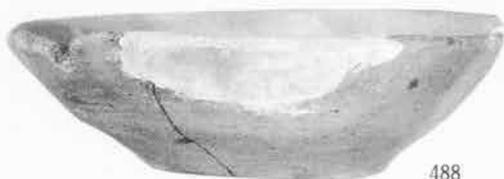
481



484



486



488



493



502



503



504



507



514



515



523



526



532



531



538



543



541



547



550



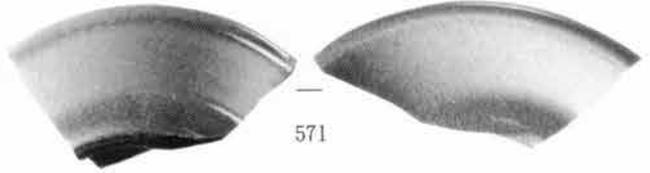
555



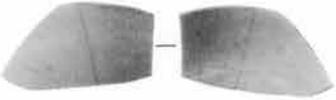
559



558



571



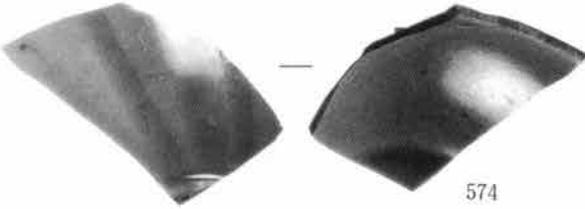
569



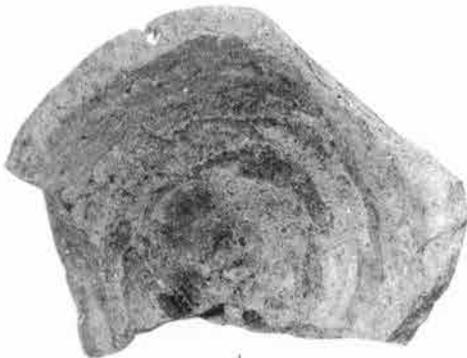
570



573



574



576



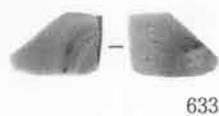
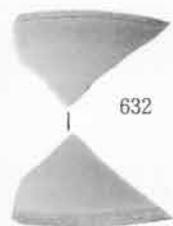
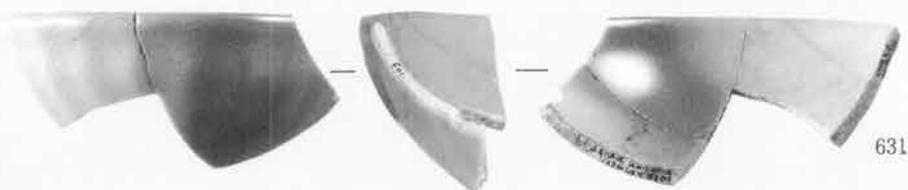
581

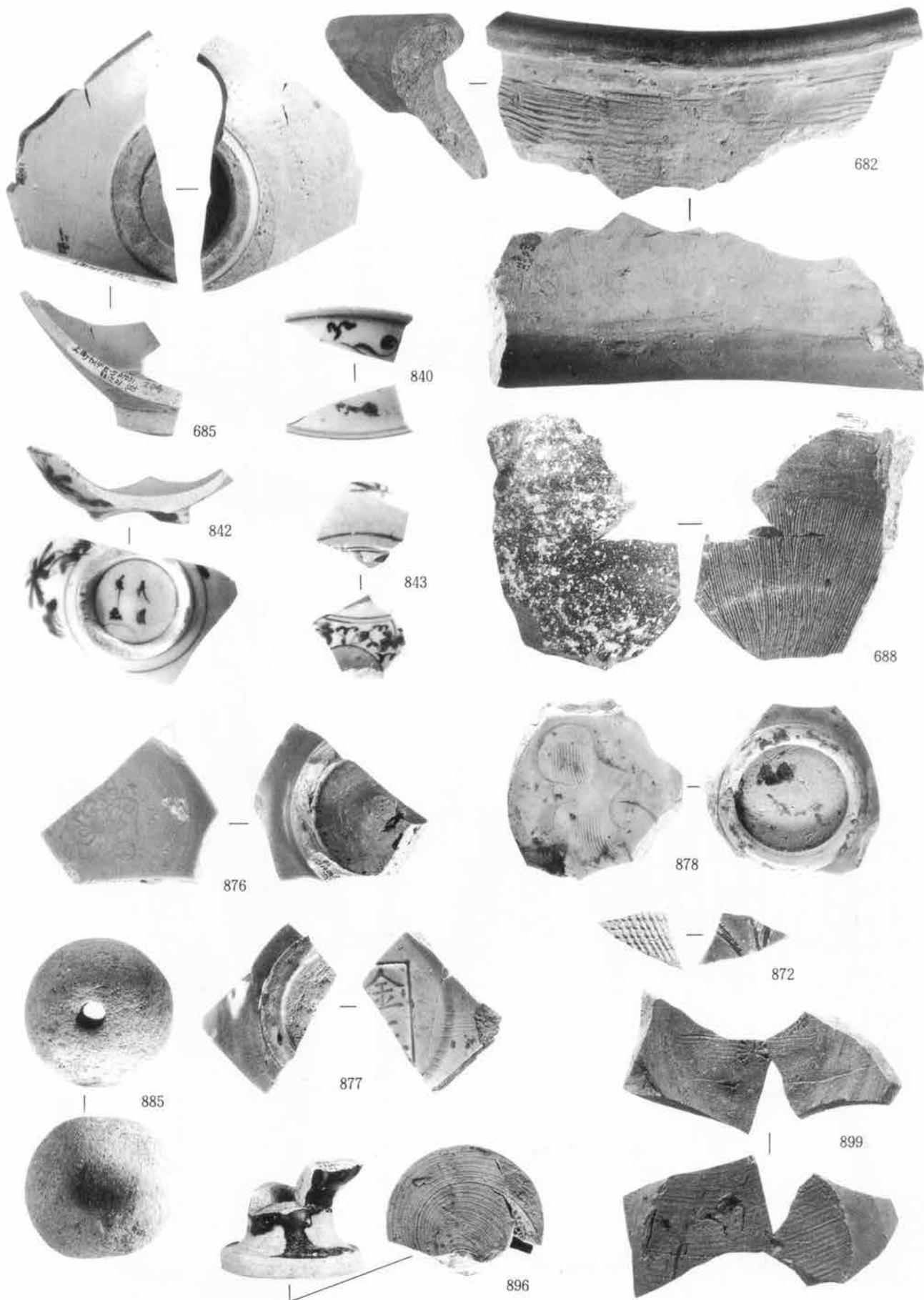


577

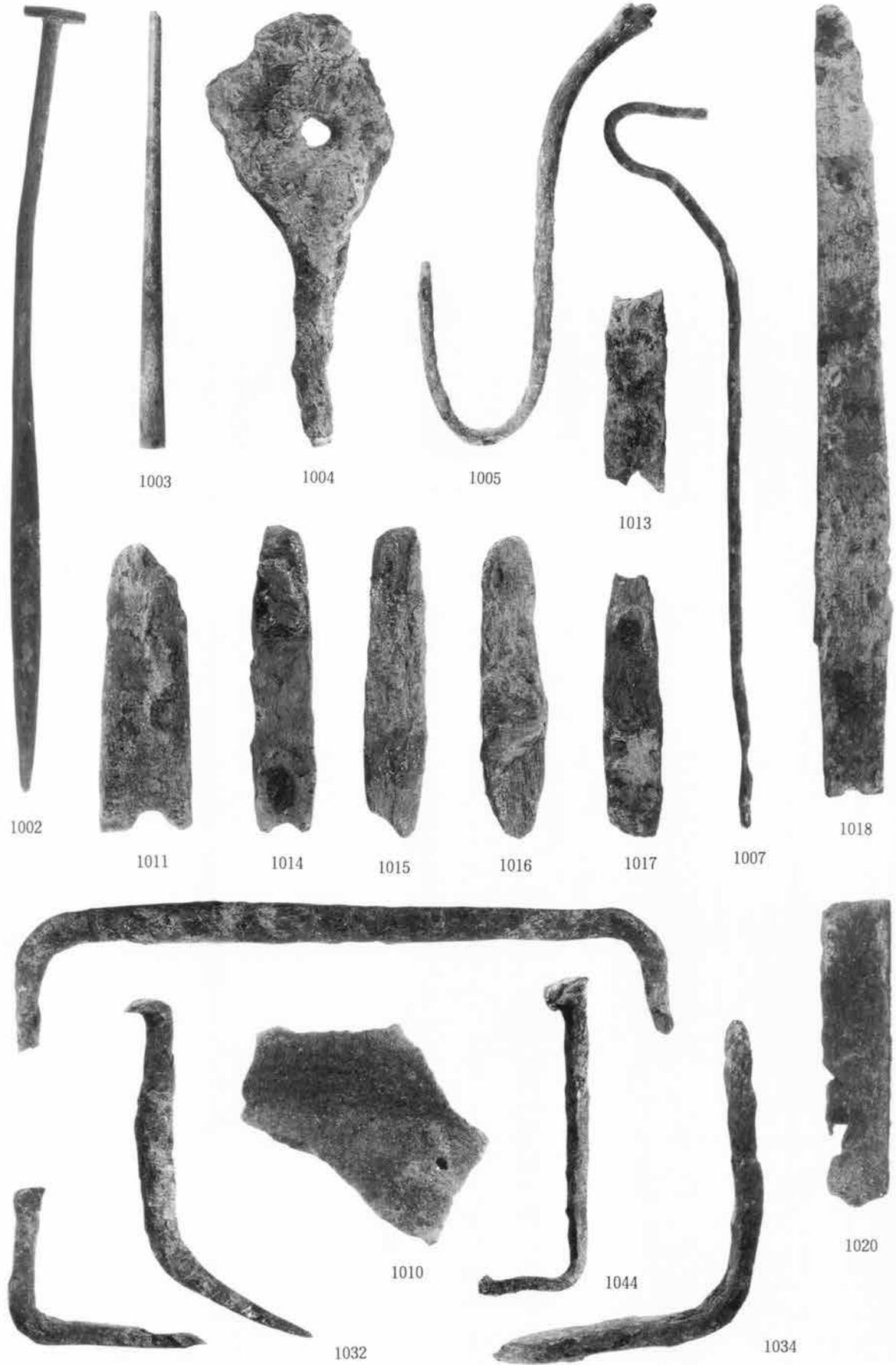


585











1026



1027



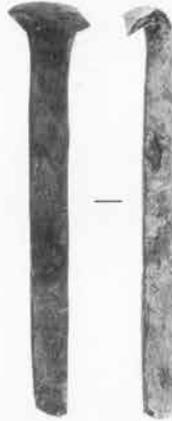
1028



1030



1045



1041



1047



1040



1029



1050



1051



1052



1053



1054



1055



1056



1057



1058



1059



1060



1061



1062



1063



1064



1065



1066



1067



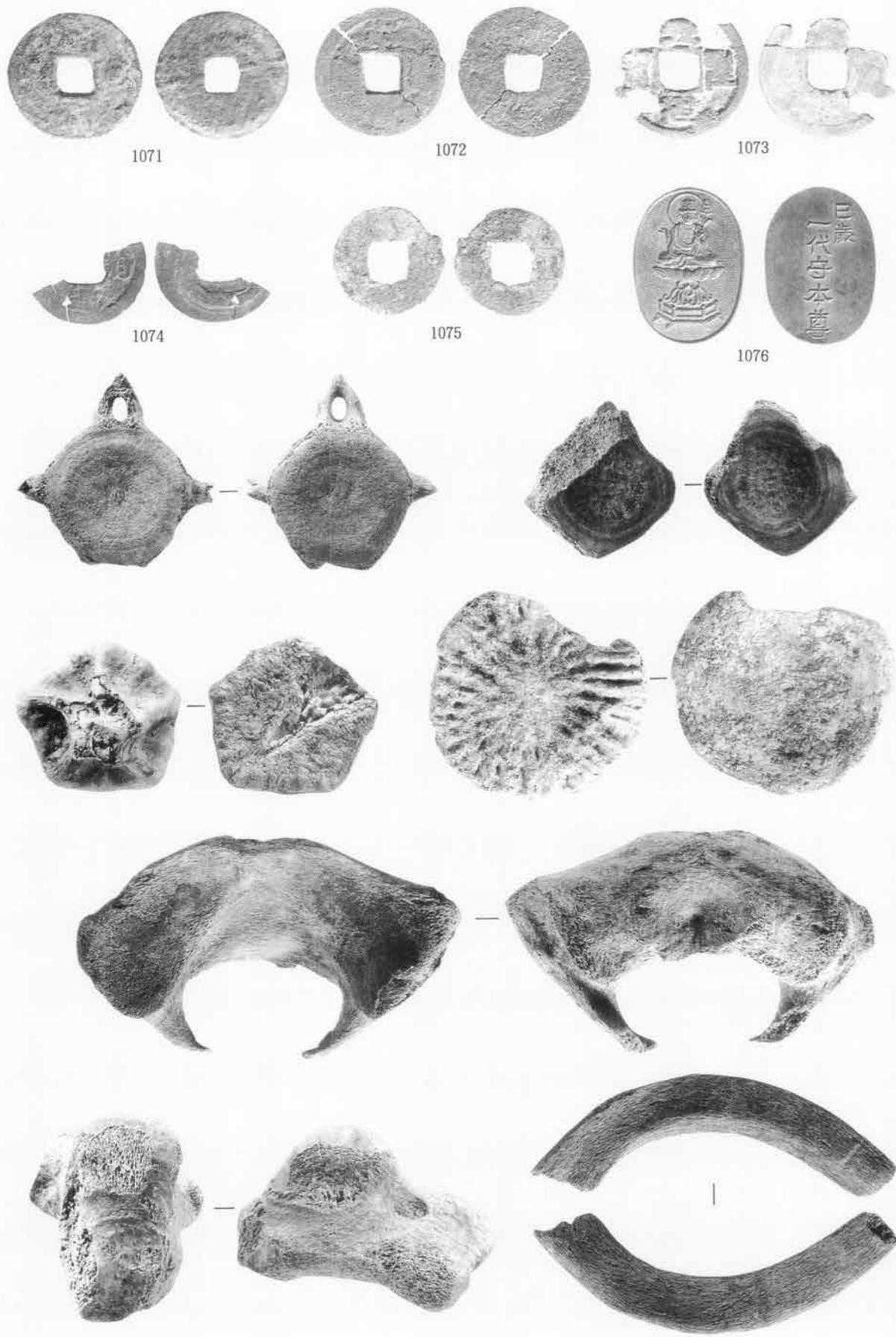
1068



1069



1070





1129



1130



1131



1134



1132



1136



1133



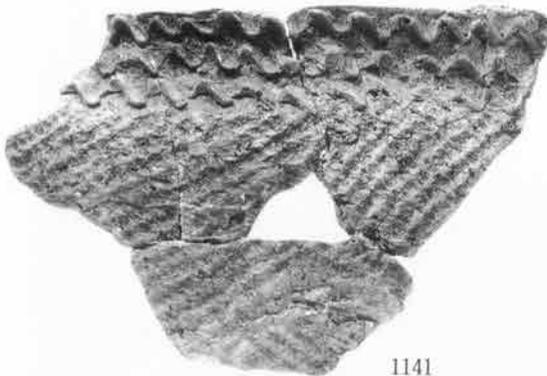
1137



1138



1139



1141



1140



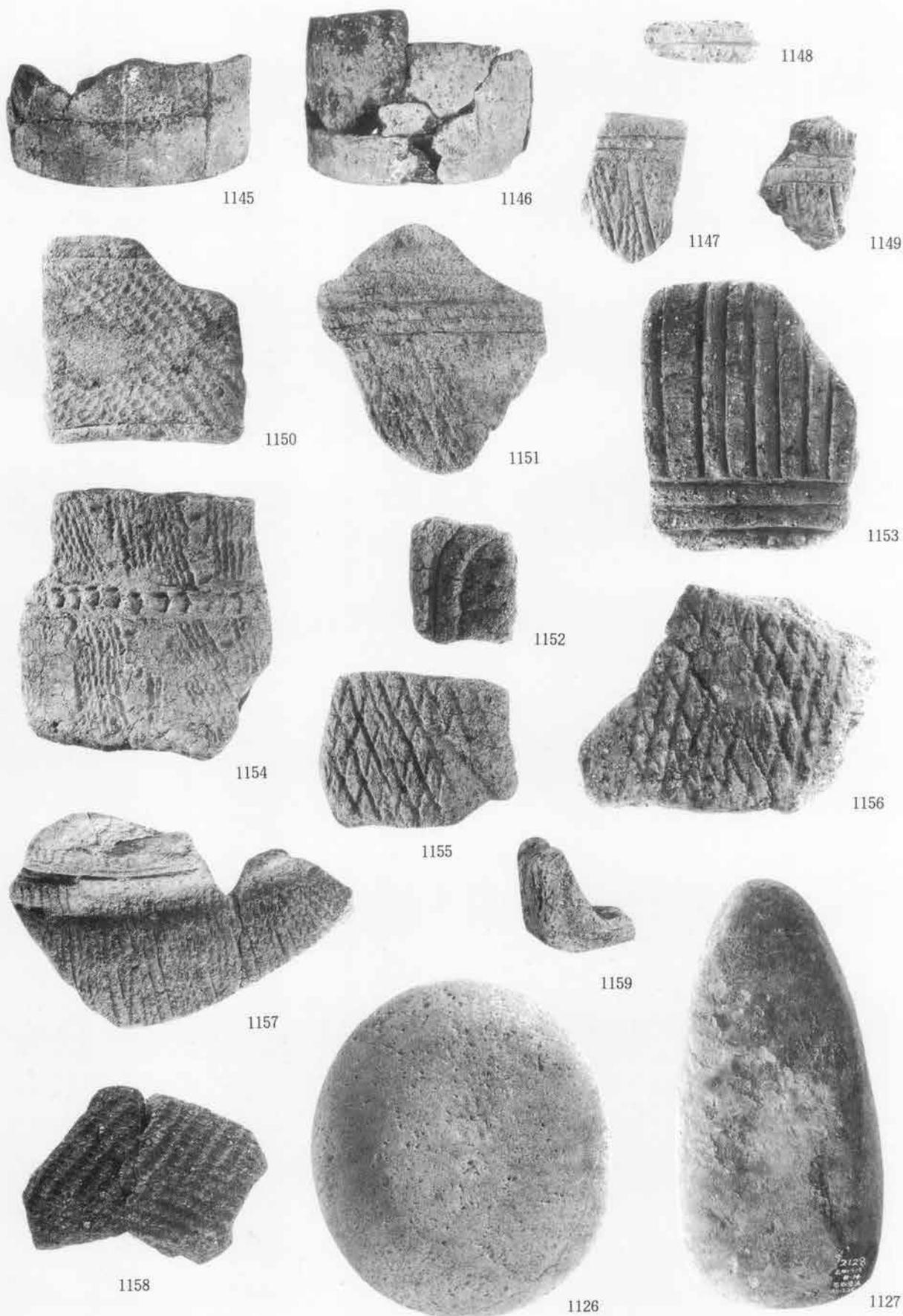
1142

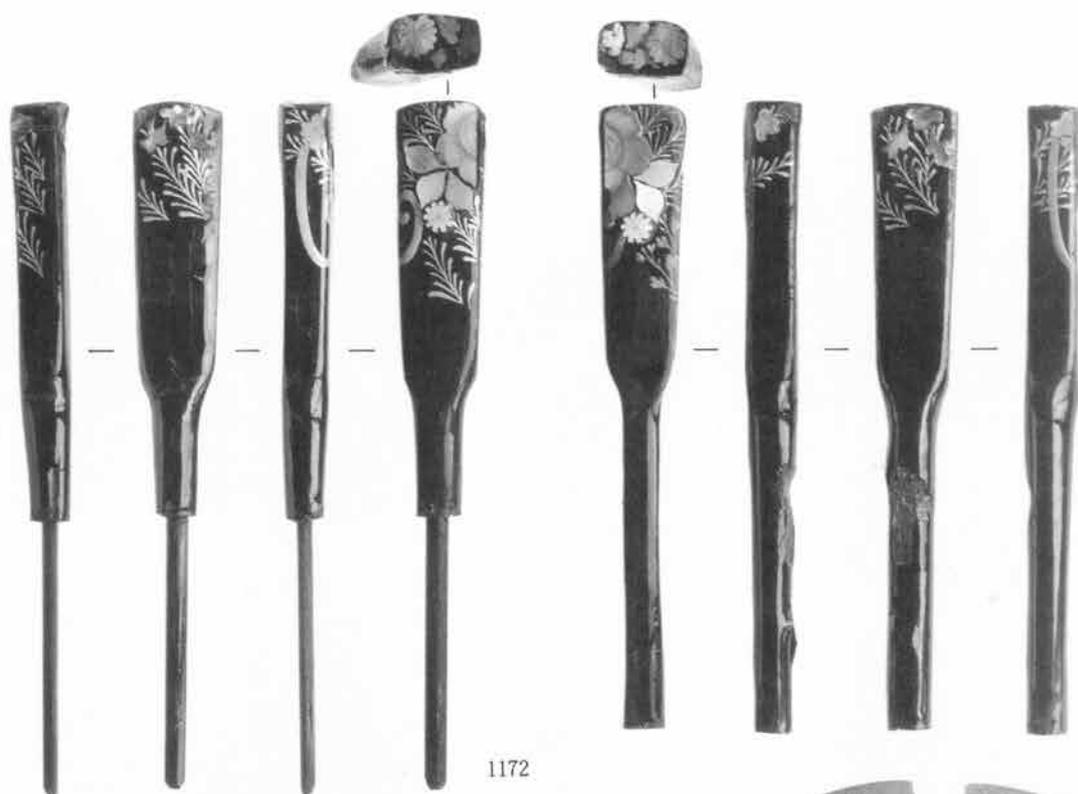


1144

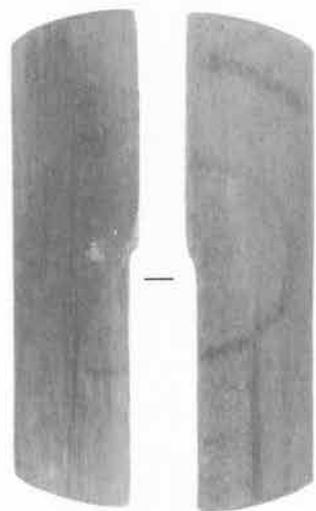


1143





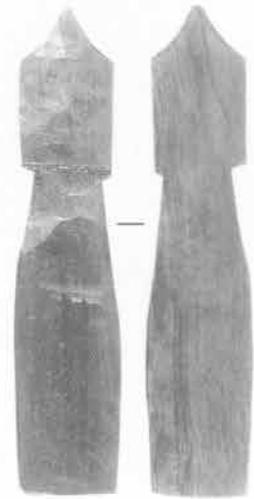
1172



1170



1171





1160



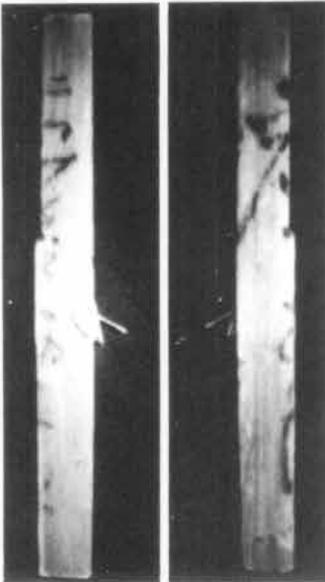
1161



1164



1167



1162

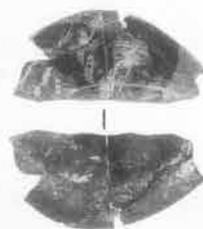
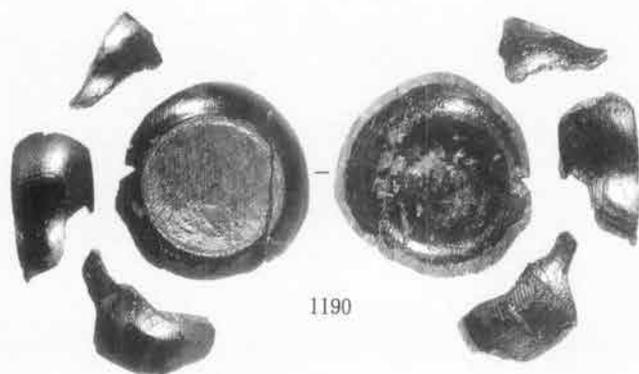
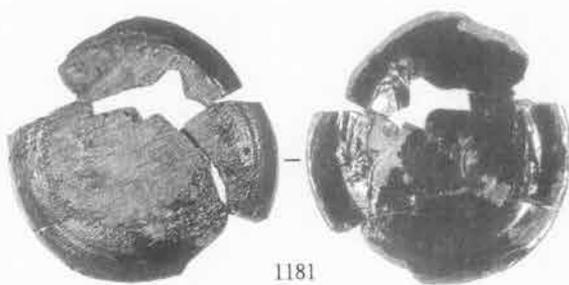
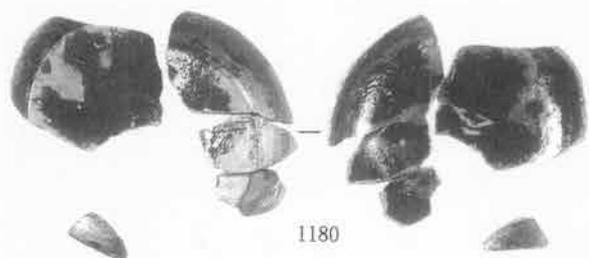
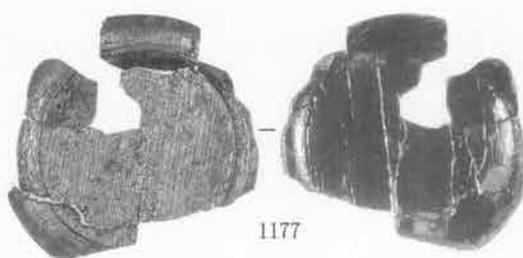


1166



1169

1168

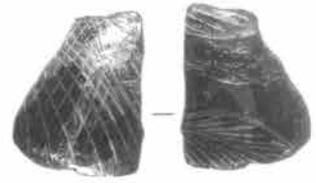




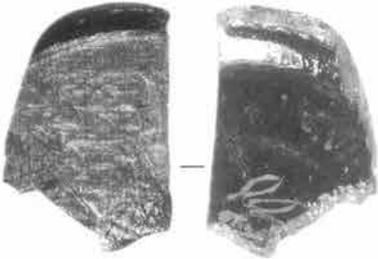
1195



1176



1188



1183



1216



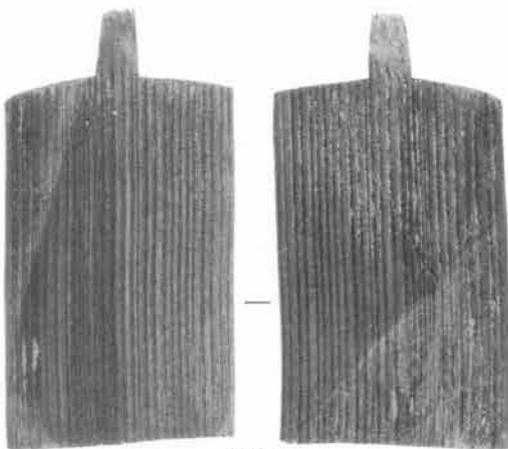
1204



1212



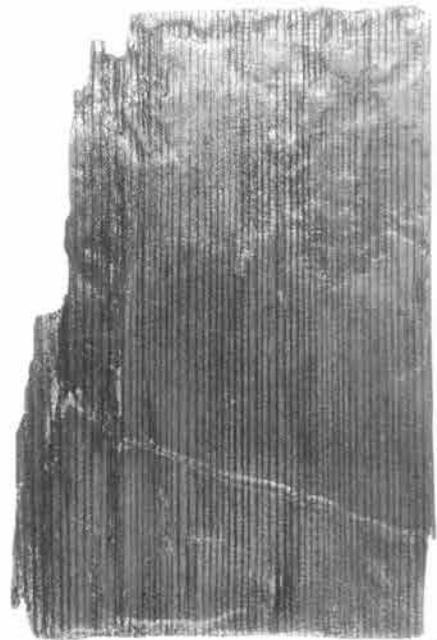
1205



1245



1198



1214



1240



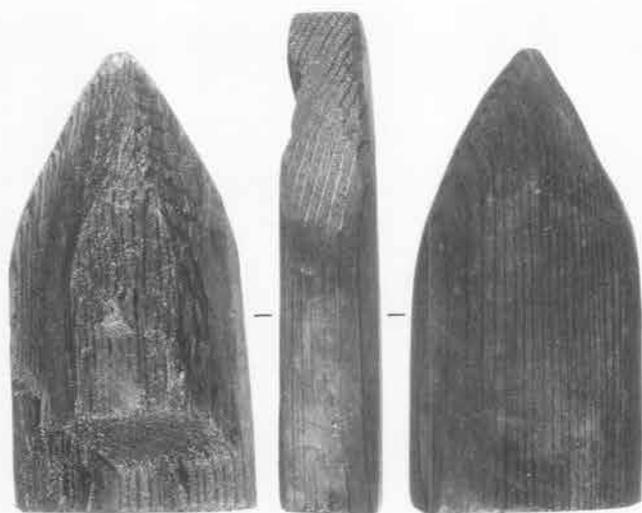
1242



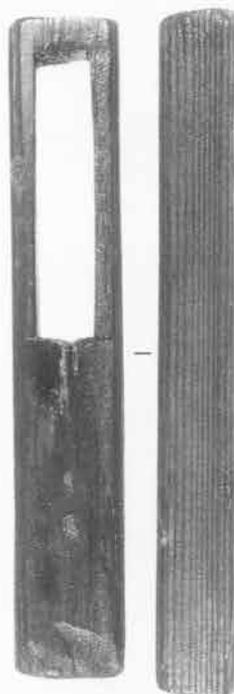
1251



1246



1250



1252



1247



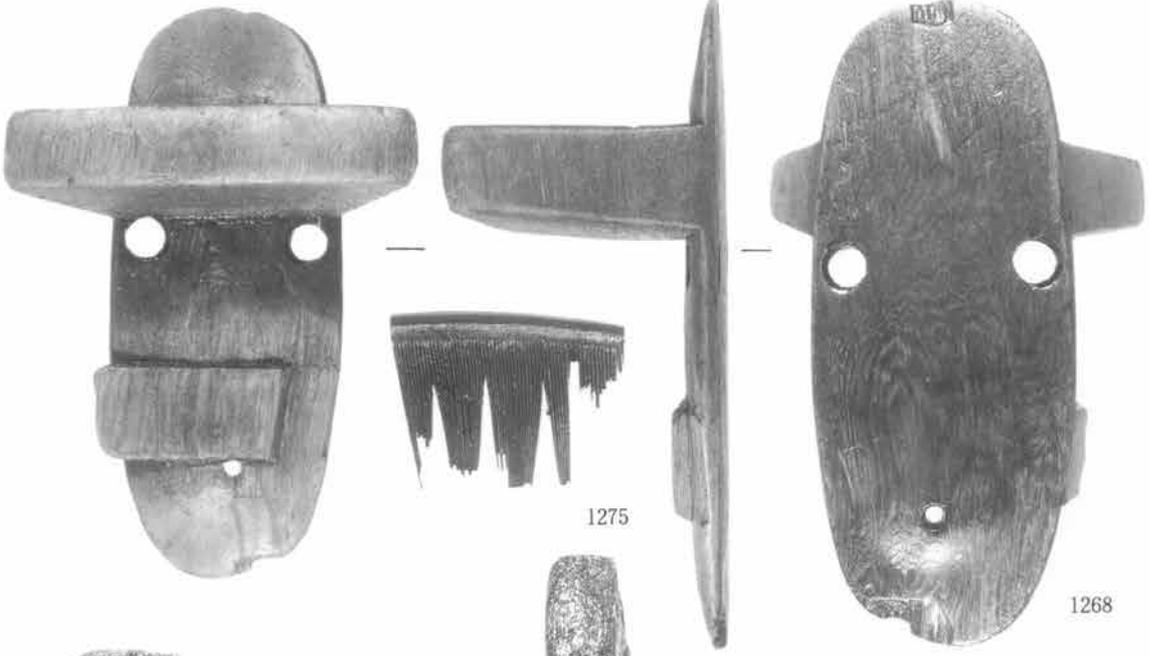
1272



1274



1248



1275

1268



1269

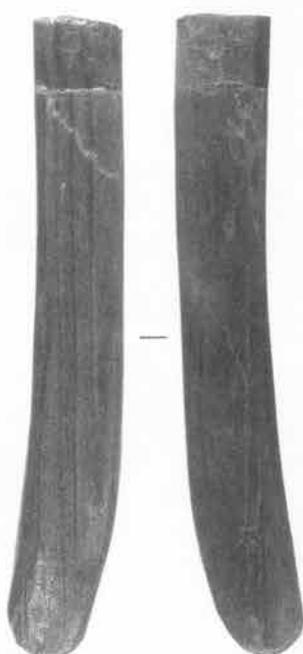
1278



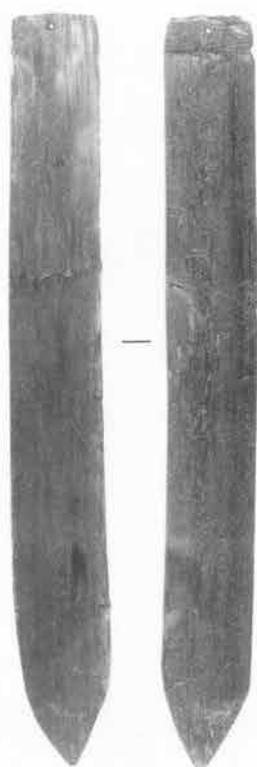
1279



1280



1283



1286



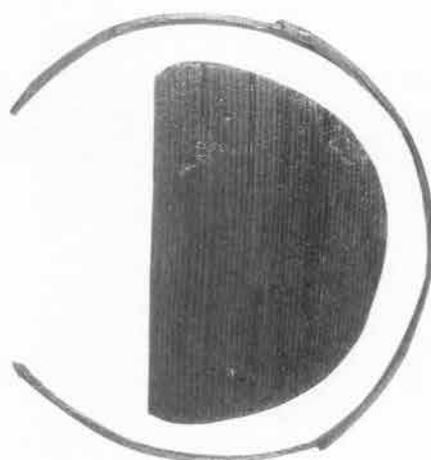
1288



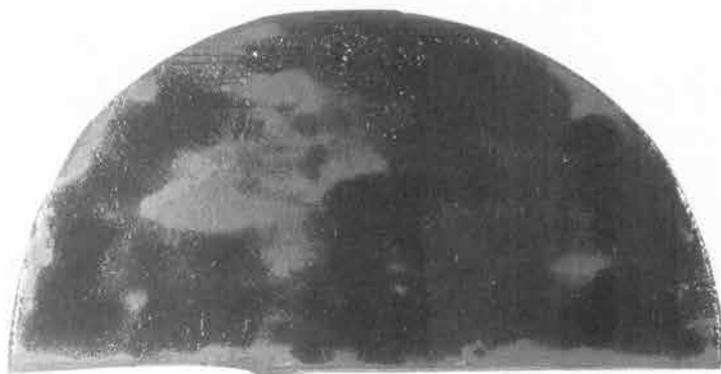
1289



1291



1295



1297



1299



1301



1298



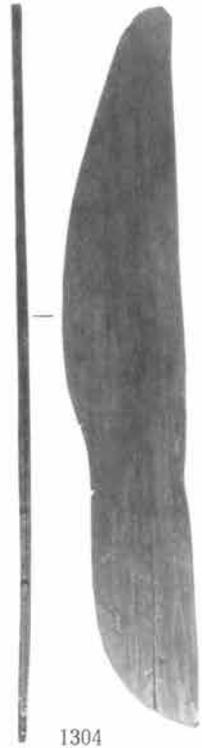
1307



1312



1313



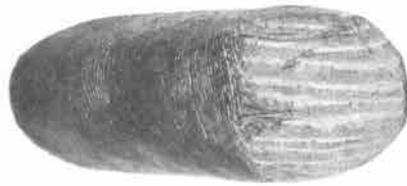
1304



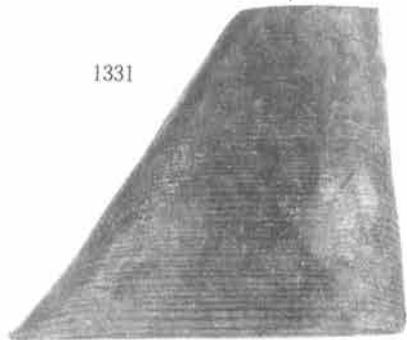
1310



1311



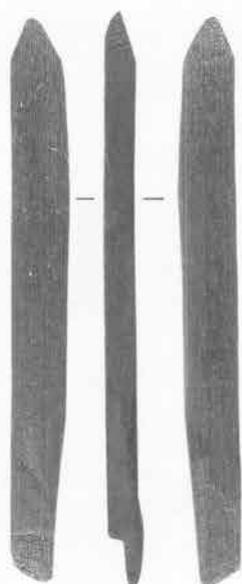
1331



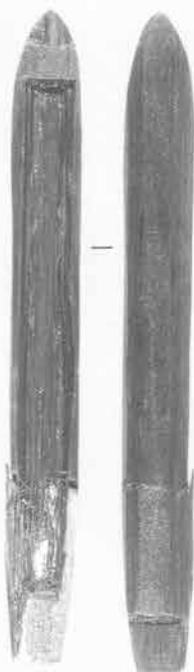
1332



1316



1317



1318



1319



1320



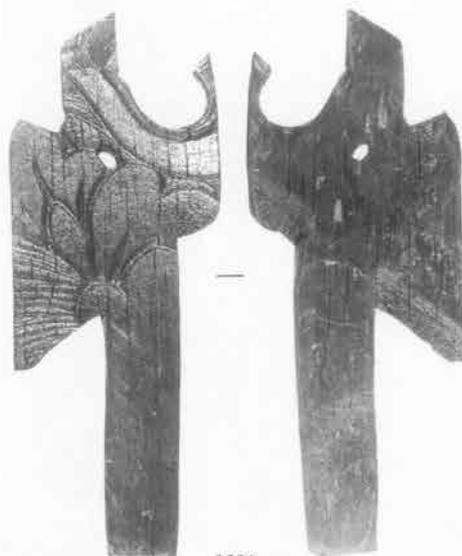
1328



1329



1321

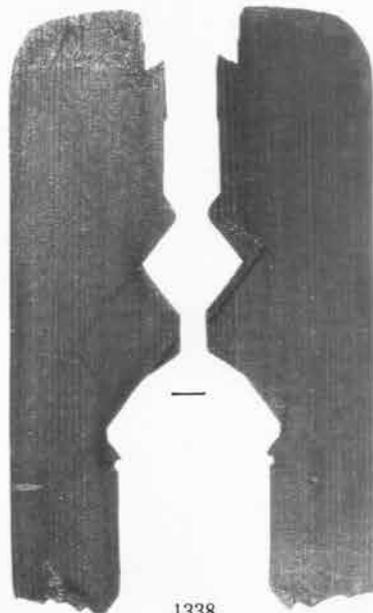
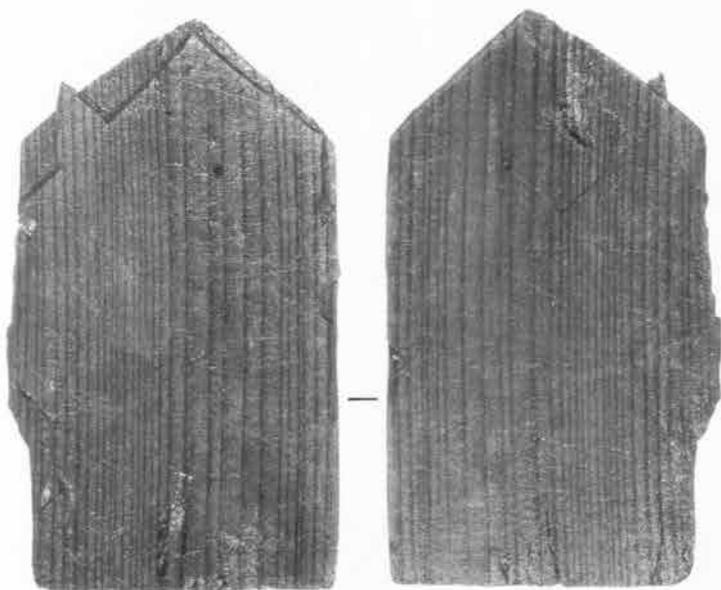
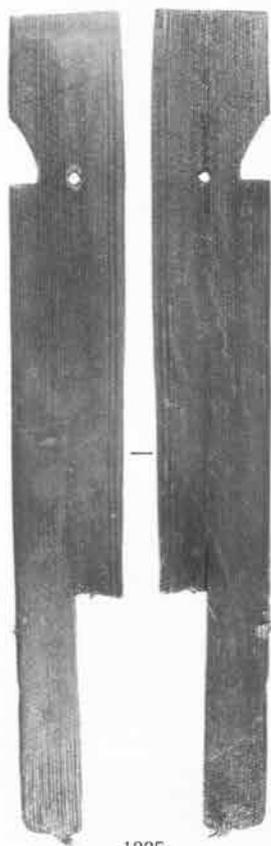
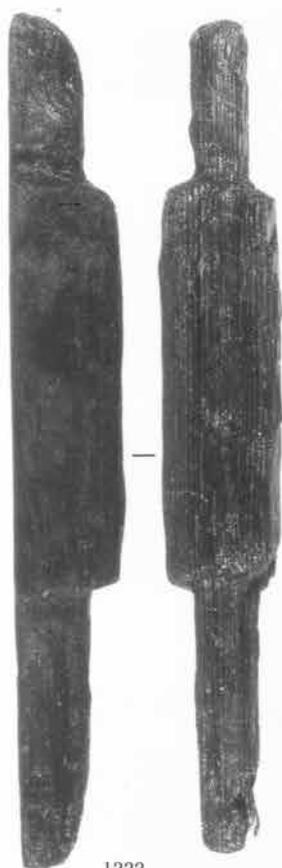


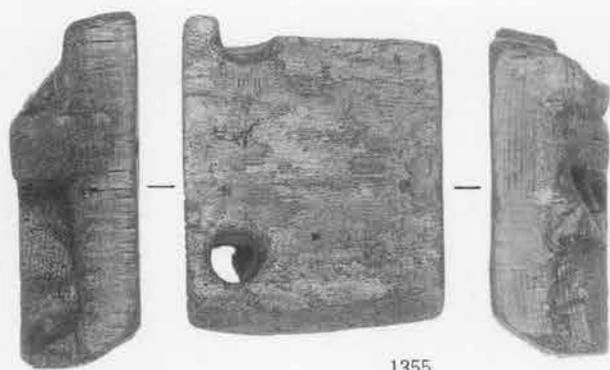
1330



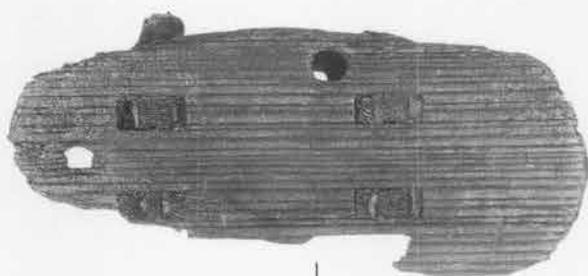
1343







1355



1371



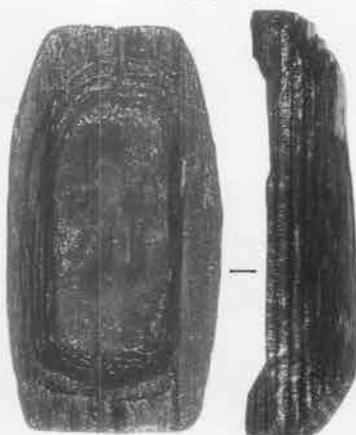
1372



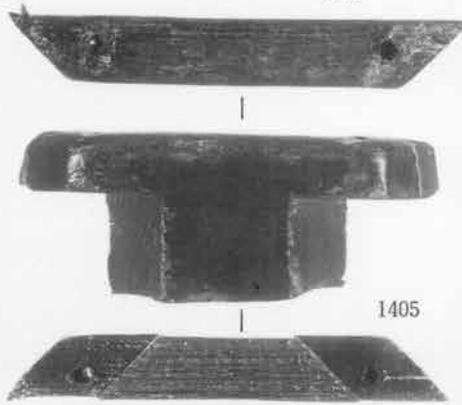
1383



1401

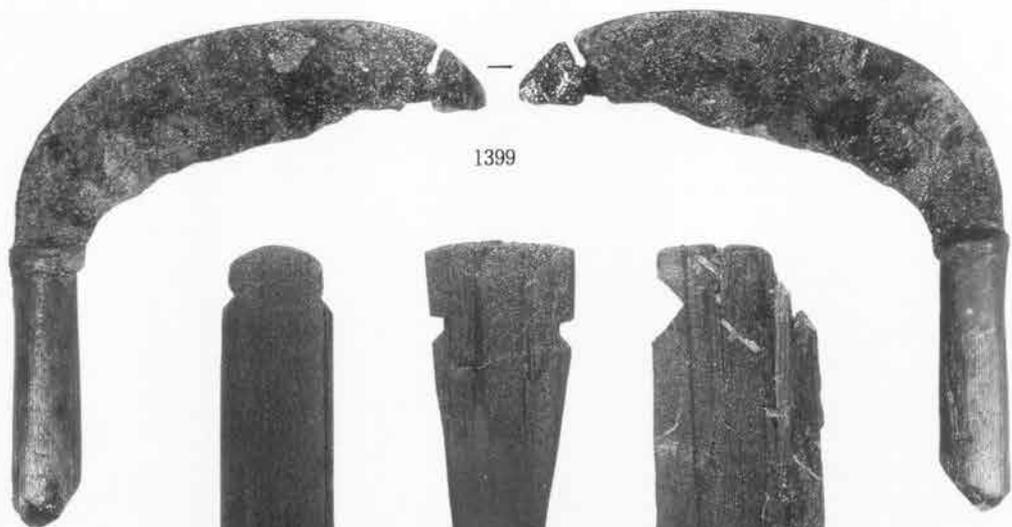


1402



1405





1399



1404



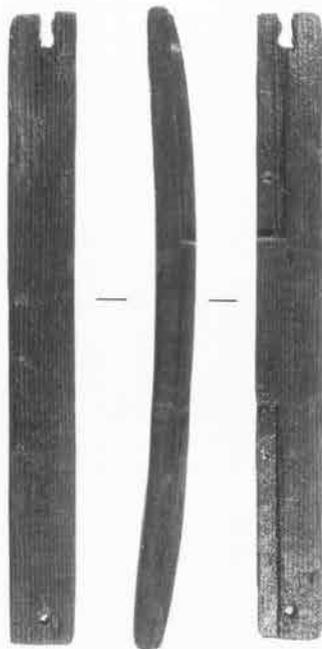
1407



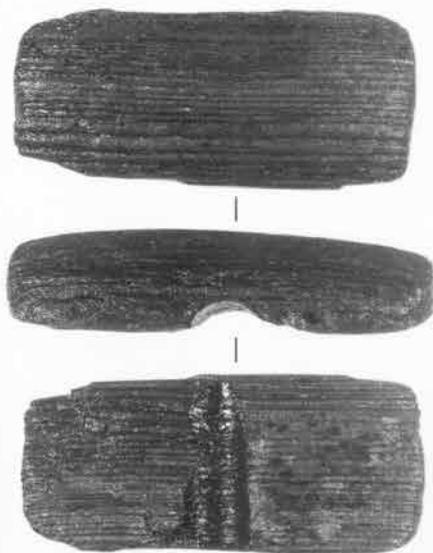
1403



1400



1409



1415



1431



1414



1450





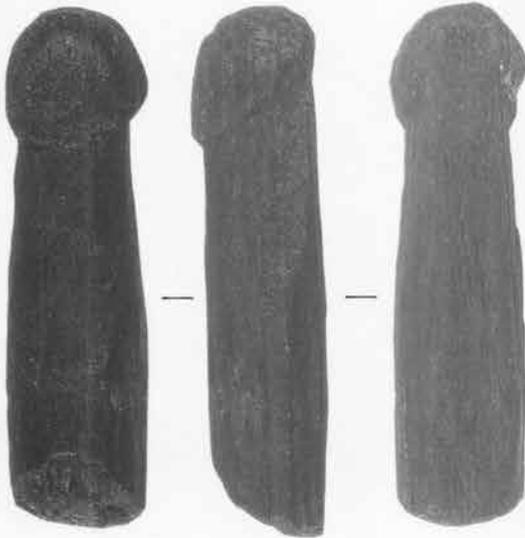
1417



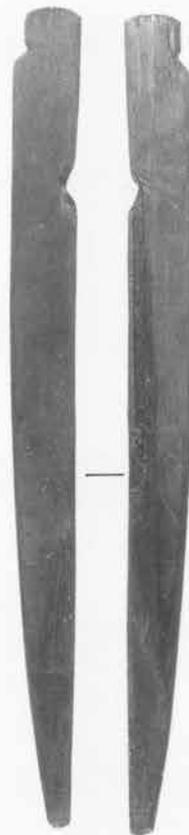
1436



1437



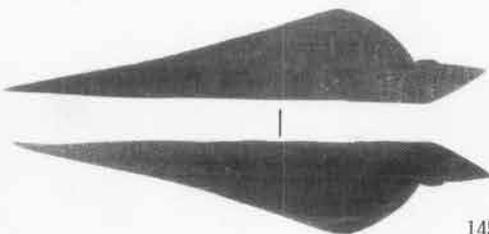
1439



1441



1443



1455

# 上町カイダ遺跡

農免農道整備事業(中島北部地区)  
に係る緊急発掘調査報告書

発行日 1991年3月30日

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター

〒921 石川県金沢市米泉町4丁目133番地

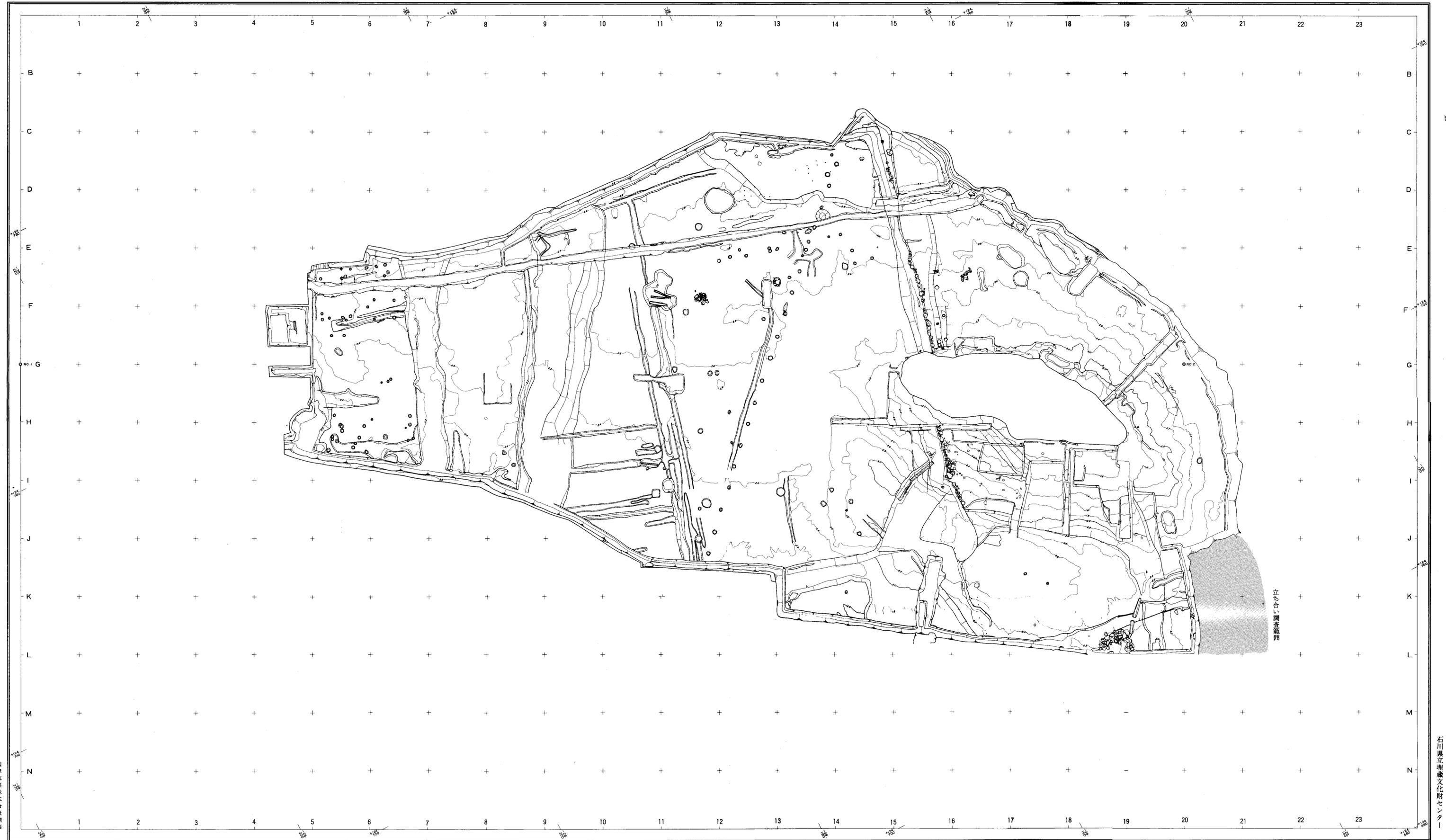
電話 (0762)43-7692

印刷 北國書籍印刷株式会社





# 上町カイダ遺跡平面図 縮尺 1:200



国際航業株式会社調製

石川県立埋蔵文化財センター

撮影 昭和63年12月20日 尺1:200 縮尺 1:200  
測図 平成元年3月ステレオプロッターA8、メトログラフG  
縮尺 20cm

1:200

